
零崎宗識の人間考察

烏妣 揺

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

零崎宗識の人間考察

【Nコード】

N6216M

【作者名】

烏妣 揺

【あらすじ】

『零崎』でありながら請負人の零崎宗識は、『時間ゼロザキムナシキに嫌われた少年』五月サツキヤミ間 命と共に、戯言遣いや人間失格、吸血鬼モドキの高校生をはじめ、様々なヒトと出会い、関わり、様々な依頼を通じて『人間』について考察してゆく…。。

宗識&命&阿良々木君が、夜の直江津高校を駆け巡る！『学校の怪談編』スタート！

皆様のおかげでいつの間にかPV100000アクセス突破！？
ありがとうございます

第零話 零崎の請負人

ここはとある地方都市。

街の中心から二キロほど進めば田畑があるような何処にでもある地方都市。

さて、この街にあるとある四階建ての「普通のビル」。

この2階にある事務所に珍しくひとりの客が来ていた。

その客である二十代前半の割と綺麗な女性は、所長に依頼内容を話しながら、少しここに来たことを後悔し始めていた。

ここまできて、自分が抱える悩みがとも他人に解決出来る代物には思えなくなってきたというのもあるが、一番の理由は『目の前にいるいかにも怪しい請負人』にある。

『ボサボサの白髪頭に青みがかつた瞳。ただし右目に眼帯。さらに両手に作業用のグローブを付けている二十歳そここの青年』。そう彼こそがこの『裏柳請負人事務所』所長の請負人、裏柳数奇ウラヤナギスウキなのである。

『裏柳請負人事務所』。

ここは、この街では割と有名な場所。

・・・ただし、都市伝説として。

『そこに辿りつけるのは極一部の人間のみ。だがもし辿りつき、価値の代償を差し出せばどんな願いも叶う』という内容の都市伝説である『裏柳請負人事務所』の場所を見つけてしまった彼女は、藁にも縋るおもいで『裏柳請負人事務所』の扉を叩いた。

しかし彼女が見たのは、こじんまりとした内装の個人経営のただの事務所と、黒淵眼鏡以外は何も特徴のない普通の少年。

そのバイトらしき少年に連れられてきた応接間にいたのは、とても怪しい外見の請負人だったとくれば、後悔し始めるだろう。

「……以上。こんな生活を一ヶ月以上していて気が狂いそうなんです。助けてくださいッ！」

最後の方は半ば自棄になって言った彼女は、へまた、鼻で笑われるのでしょねーと思った。今まで警察や私立探偵に相談したがまともに取り合ってくれなかったのだから。

彼女自身、自分に降り懸からなければ一切信じなかっただろう。なんせ

『死んだ人間が自分をストーキングしてくる』

なんて内容なのだから…。

しかし請負人は

「わかりました。その依頼を受けましょう。料金は五万六千円ほどを後払いでいいですか？」

と簡単に承諾したのだ。

「!? そんな簡単に承諾していいの?! 相手は幽霊なのよ!」

「ええ、全然大丈夫ですよ?ただし、三つの条件があります。」

先程まで浮かべていた笑顔（業務用）から一転、真剣な顔で彼はこういった。

「1・我々がどのような方法で依頼を解決したかは聞かないこと

2・裏柳数奇が関わったことを他言しないこと

3・『裏柳請負人事務所』の場所も他言しないこと」

「………わかりました。………おねがいします。」

こうして裏柳数奇は、彼女の依頼を受けた。

数分後（依頼人帰宅後） 『裏柳請負人事務所』

自分の机^{デスク}で読書をしていた俺（裏柳数奇）は、先程煎れてくるよう
にいておいたコーヒーを持ってきたバイトの 五月闇 命^{サンキヤミミコト}から、
今さらながらこんな事を聞かれた。

「今回の依頼。受けてよかったんですか？」

「あん？ 何んで？」

「だって幽霊ですよ？ 幽霊相手に何するんすか？ まさか除霊？」

「はあ？ それこそまさかだ。 そもそも幽霊なんざいるわけねえだろ？ 依頼人の話した感じからだ」と『呪い名』が絡んでそうなんだよね。……まあ、たとえ幽霊だろうと『呪い名』の魔法使い共だろうが俺のやることはただひとつ、

相手が『死ぬ』まで殺す

ただそれだけだ。」

「……………やっぱり『零崎』の名は伊達じゃありませんね？ 宗識さん？」

そして俺、零崎 ゼロザキムナシキ 宗識は命の煎れたコーヒーに口をつけた。

0 . E N D

第弐話 非常識な来客（前書き）

誤字修正版です。

第貳話 非常識な来客

本日は五月十三日。

この街の桜は全て散り終わり、俺は『あの事件』での騒がしさが嘘の様な穏やかな日々を過ごしている。

………というか、穏やかすぎだ！

先日（二週間前）の『幽霊退治』以来、仕事の依頼が全くない。今までの貯金があるから飢え死にもしないし、命のバイト代も出せるが、そんなのは得に問題じゃない。1番の問題は…。

「あゝ暇だ。」

退屈は人をも殺す。

現在時刻は午後五時5分前。そろそろ命が来る時間帯だ。アイツがいればチエスでもして暇潰しが出来るだろう。そして

「こんにちは。」

五月闇 命が事務所に入ってきた。

日本人に有りがちな髪色に、これまた有りがちな身長と顔立ちをした『普通』を具現化したようなこの少年は俺の姿を見つけると続けてこういった。

「あ、それとむなs…じゃなくて数奇さんにお客です」

「は？ 俺に？」

俺は瞬時に様々な憶測をたてるがこんな時期のこの時間帯に来る奴に心当たりはなかった。

そして命の後ろから、

赤い悪魔が現れた

さて、これは一体どういうことなのだろうか？

白髪、長身に青みがかった瞳（ただし右目に眼帯）をもつ、二十歳そこそこの青年。つまり僕の雇い主「裏柳数奇」さんこと本名・零崎宗識さんは、僕が連れて来た女性を見た途端、いきなり青ざめてビルの2階にあるこの事務所の窓から逃亡を謀り（！）、それを、あの赤い女性が指一本で阻止（?!）。

その後の宗識さんによる必死の抵抗も虚しく、現在状況はというと

……

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
いごめんなさいごめんなさいごめんなさい

と、土下座した状態でまるで呪詛を唱えるように謝罪の言葉を述べる殺人鬼の姿と

「ほほ。『零崎』の分際であたしの商売敵になったつうく度胸のある奴のことを子唄の奴から聞いたから”ついで”に来てみれば、てめえだつたか宗識。面白いこともあるもんだな。そうだろシヨ・ウ・バ・イ・ガ・タ・キ」

などと言いながら、土下座した殺人鬼をヒールを履いた足でゲシゲシと踏み付け、満面の笑みを浮かべる真つ赤な女性。その姿からは圧倒的強さと恐怖しか感じられない。

なんだこの状況？

「よう、その少年！」

「ははははい?!」

いきなり彼女から声をかけられた。僕の中では、最早恐怖の塊である赤い女性に話し掛けられたことで、情けなくもビビりまくる僕。

「ここまで案内ありがと。あたしの名前は、哀川潤だ。よろしく」

こう言つて右手を差し出す赤い女性改めて哀川潤さん。その態度は、

とてもフレンドリーだ。

「さ、五月闇 命です。こっ、こちらこそ宜しくお願いします。哀川さん」

という訳で、僕は左手を差し出し、哀川さんと友好の握手をかWつて痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い！！！！

「五月闇くん？ 一言いつていいかな？

あたしのことを苗字で呼ぶのは敵だけだ。

いいね？ サ・ツ・キ・ヤ・ミ・ク・ン？」

「わっわかりました『潤さん』！！」

「よろしい」

そう言ってやっとな手を話してくれた。あゝ痛かった。左手を潰されるかと思った。

「ほら、てめえもさっさと起きろ！」

「げふッ！」

潤さんは、相変わらず土下座していた宗識さんの頭を、こともあるうに蹴り飛ばした（！）。案の定、宗識さんは、潰れた蛙の様な声を出して事務所の壁まで吹っ飛んだ。何かもう情け容赦ないな。

「いやいや、五月闇くん？それでも手加減してんだぜ？」

「！」

な、何！！心を読まれただつ！

「あいk・・・潤さんに嘘は通じないぜ？ 読心術の達人だからな。それと手加減しているのも本当だ。本気なら今の一撃で俺は死んでいる。」

「流石にそれは……」

……いや、有り得る。

それくらいのことはこの人にはできそうだ。ただ、そうだとすると……

「潤さん。あなたは何者ですか？」

そこで哀川潤はニヤリとニヒルに笑いこつ言った。

「『人類最強』の『赤い請負人』だ」

「『赤笑虎』『鬼殺し』『死色の真紅』『赤き征裁』^{オーバーキルレッド}『嵐の前の暴風』『砂漠の鷹』^{デザートイーグル}等の数々の異名を持ち、どんな魑魅魍魎も震え上がらせ、全ての世界に精通する『人類最強の請負人』。それが哀川潤だ」

と、俺は簡単な説明を命にした。

ちなみに哀川潤の容姿は、真っ赤な髪に、素材は一級品だが狂った様に赤いオーダーメイドスーツを着ていて、スタイルは百人中百人が認めるほど抜群。ただしとても目付きが悪い（俗にいう三白眼）。そもそもこんな容姿格好をした奴に無警戒に接していたらしい命の危機管理能力に、俺は全力で異議申し立てたい。

そして、俺の説明を^{レクチャー}つけた命からは全く想定外の質問が飛んできた。

「そもそも『全ての世界』って何ですか？」

「「は？」」

潤さんが俺をギロリと睨む。殺傷能力がないのが不思議な程の眼力で。

「．．．．おい宗識。自分の仕事を手伝わせている五月闇くんにこんな基礎中の基礎も教えてなかったのか？」

「え、いや、そっだっけ？ 教えてたと思ったんだけど（汗）」

潤さんに睨まれて冷や汗を滝のように流す俺。

え？ いや、別に心当たりがあるからじゃなくて、あいかw．．．．じゃなくて、ただ単純に潤さんに睨まれてるからですよ？

「はい。ただ、宗識さんの家族『零崎一族』は血族でなく、流血によつて繋がる最凶の殺人鬼集団だということだけです。」

「ん？」

すると潤さんは少し考えて俺にこう聞いた。

「なあ宗識？ 普通『それ』が1番知られたくないことじゃねえのか？ なんててめえは『それ』だけ教えてんだよ？」

うん。確かにそうだ。
だけど

「いえ、その時は『俺がどういう存在』なのかを嘘偽りなく命の奴に伝えることが大事だったので」

「へ」

俺の答えに潤さんが満足したように相槌をうつ。

「で、結局何も教えてない訳だ。」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい
ごめんなさい！」

「それで『全ての世界』って何ですか？」

途中でやや脱線してしまったけど、このまま何も説明なしだと僕は困るため、少し強引に話を元に戻した。

「ん？ そっぴやそうだったっけ？ まあいいや。面倒だからお前が説明しろ宗識」

自分が言い出したのに関わらず全てを『面倒だから』という理由で他人任せにした潤さん。普通なら宗識さんは拒否するのだが、相手が外ならぬ潤さんだから出来ずにしぶしぶ説明を始めた。

「えーと、まずこの世界は4つの安定した世界で出来ていて、その4つの世界はお互いに少し重なり合って存在している。」

「……なんかどこぞの宗教みたいな出だしだな……」

「まずはひとつめ、その4つの世界の中で1番強く広い『普通の世界』。」

日常生活を送るに相応しい平和かつ騒々しい世界。つまり、お前が生活しているところだ。そしてこれが全世界のスタンダードな基本形。ちなみに、テキサス州ヒューストンにある《ER3システム》が、

ぎり『普通の世界』だな」

「……あんなのが『普通の世界』かよ」

僕は極めて率直な感想（悪態）をついた。
そこに潤さんが

「え、なに？五月闇くんそっちの関係者？」

と触れて欲しくない過去トラウマに触れてきた。

「……ええ、僕は二年間だけ《ER3システム》に参加したことがあります。」

もうこれ以上は話したくないな。マジで。
潤さんは、『いーたんと話しがあいそうだ』とかなんとかぶつぶつ
いったつきり黙ったのでそれは幸だった。

「話を続けるぜ？『普通の世界』を表の世界だとすると、他三つ
は裏の世界になるな。次にあの絶対組織《玖渚機関》を核とする『
政治力の世界』。めちゃくちゃ横向きに広い力を持っている。そ
の次……いや正確には二番目かな？は、赤神、謂神、氏神、絵鏡、
檻神の《四神一鏡》からなる『財政力の世界』。ここが1番表の
世界に近いな。《四神一鏡》も《ER3》もだいたいやってること
は同じだし」

「確かにそうですね」

「で、最後は『暴力の世界』。俺達『零崎』を含む『殺し名』や、
『時宮』をはじめとする『呪い名』を中核に、人間外の魑魅魍魎共

が蝶々跋扈する力だけがものをいう、殺し合いの世界だ。」

ここで僕の中に疑問が湧いた。

「え、『時宮』？　じゃあ時列さんも、その世界の人なんですか？」

「え、マジ！？　お前『呪い名』と知り合い？」

今度は潤さんが僕に質問してきた。

「あ、いえ正確には僕じゃなくて宗識さんの友達です」

これはホントのことだ。

「なんだ。つまんない」

と、潤さんはトンデモナク無責任なことを呟いた。

「確かに時列は『時宮』だが、あいつはもう現役引退しているから（たぶん）大丈夫だ」

そうだったのか。でもあんな人が、昔はそんな殺伐とした世界にいただなんて少し驚いた。

「まあ、これであたしの凄さがわかったろ？」

「…はい」

ぶっちゃけよくわかんなかったが、ここは素直に頷いてみた。

「うん、うん。それならいい」

読心術すら使わずに満足そうに首を振る潤さん。……この人、自分が大好きみたいだ。

数分後・・・

例の説明の後、僕達は応接間で潤さんと雑談を交わしていた。ただ、レクチャー僕はお茶汲みだけで、潤さんと話し込んでいるのは主に宗識さんだ。端から聞いていても訳がわからない話ばかりで、しかも絶対に立ち入っちゃいけないようなダークな話が含まれている。よし、絶対に聞かないようにしよう。

その中で、ふと宗識さんがこんなこといった。

「ところで、結局あいかw・・・潤さんは何のついでにここに来たんですか？」

そういえば、潤さんはなにかの”ついで”に『裏柳請負人事務所』（こも）に来たのだった。はて、何の”ついで”だったのか？

「ああ、そっぴやそうか。仕事だよ仕事。沙咲からの依頼でさ、京都まで行く”ついで”によったんだよ。宗識、お前は覚えてるよな？」

「覚えてますよ。”佐々沙咲”さんですよ？ 刑事の。」

なんか舌噛みそうな名前の刑事だね。”さ”が四つもついてるよ。

「・・・まさか『京都連続通り魔殺人事件』の解決を依頼されたんじゃないですよね!？」

「あ、やつばわかる?」

潤さんは、宗識さんの質問をあつさりと肯定した。

……依頼人の個人情報や依頼内容までこんなに簡単に喋ってしまったていいのかな? ダメだよな? 普通は。

ただ、僕も『京都連続通り魔殺人事件』の名前だけは知っている。ただ、ちよつとうる覚えだ。

「それって確か、『京都で約一週間の間に7、8人の人間が殺されてあげく解体された』っていう事件ですよね?」

「そ。全くこんな酷いことする奴もいるんだな」

とか言いながら、その顔には、手頃な獲物を見つけた肉食獣の様な笑みが浮かんでいる。

今、宗識さんが小声で「バトルジャンキー戦闘狂」とボソツと悪態をついた。

「ん? 宗識。これはあたしの獲物だから、お前はやらないぞ?」

「誰がいるか!! そもそも『サッジンキ零崎』の前で殺人鬼の話をするなよ!？」

潤さんの心ない一言(?)に宗識さんが怒った。

「あゝ悪かった。悪かった。謝るから許してくれ」

などと言いながら潤さんは、席をたった。

「潤さん。もう帰るんですか？」

「ああ。今日のうちに京都まで行きたいし。

あ、最後に一言。」

潤さんはいきなり真剣な顔になり、宗識さんにむかってこういった。

「その眼帯。全然似合ってないぞ？」

「ほっとけ!!」

哀川潤 が京都に行った数分後・・・
『裏柳請負人事務所』

「はゝ、ヤバいな。どうしよう」

潤さんが帰った後、宗識さんはずっと何かを悩んでいた。ずうんという効果音がついていそうなほど暗い雰囲気を醸し出している。

「は」

[illegible]

よし、万を侍して聞いて見よう。

「宗識さん。何を悩んでいるんですか？」

「どうしよう。人識が殺される」

「は？」

え、
今なんて？

人識？ 誰それ？ 食べれるの？

「『京都連続通り魔殺人事件』の犯人は『零崎人識』だ。おそらく」

「はあ！」

……マズい？

「あくまで おそらく だ。
・ ・ ・ ・ ・ たぶん当たってい
るだろうが」

「ど、どうしてですか」

「推理したんだよ。」

まず、約一週間で六人も殺すなんてただ者じゃない。それこそプロだな。

次に、俺達プロのプレイヤーはこんな無意味で無価値な殺しはしない。それこそ『零崎』でも人識ぐらいしかしないだろう。

さらに、犯人の得物はナイフらしい。ナイフは人識の得意とする得物だ。

．．．．．おまけに、あいつは現在行方不明。双識の兄貴が目下搜索中。」

「……………」

僕は言葉を失った。

「それってマズくないですか？」

「……………ああ、めちゃくちゃマズい……………。最悪、哀川さんを相手にすることになるだろうな……………俺達が」

零崎一族の掟で、『家族にあだなしたものは一族全員皆殺し』というものがあるそうだ。

もしも、その人識カタキつて人が潤さんに遭遇し、被害を受けた場合、宗識さん達が敵カタキをうたなければならない。

あの 哀川潤 相手に。

どんよりとした雰囲気は僕にも伝染した。

「とりあえず、双識の兄貴にそれとなく情報を流して、哀川さんよ

第弐話 非常識な来客（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは（何時読んでくれているかわからないので全部いつてみた）。

烏妣 揺 です。

今回は、もしかしたら化物語&p・力語ファンの皆さんも見ているかもしれないので、戯言&p・人間シリーズの世界感の説明を入れました。

戯言&p・人間シリーズのファンの人達は気付いたかも知れませんが、今回の日付は原作でいーちゃんと人識のファーストコンタクトの日です。

過去編などを除いた場合、これからもなるべく時系列順に物語を進めたいと思います。

第貳話 災難な日 零崎宗識の場合

哀川さんを京都へ送り出し、『かわいい弟^{ヒトシキ}』を見捨てた数日後の月曜日、ようやく待ちに待った依頼がやってきた。
しかし、それはとんでもなく普通で、かつ大変な依頼であつた。

今日、『裏柳請負人事務所』に珍しい客が来ていた。

それが、今俺の目の前にいる馬の尻尾の様に結んだ髪を揺らしながら緑茶を飲んでいる、俺と同年の女である。

「・・・・なあ、もう一度聞くけど何でここに来たんだ？」

俺は、本日二度目の溜息と共に目の前の女に話しかける

「『暇だから』ってさつきから言ってるじゃん。それとも、そんなちんけな脳みそじゃそんなことも覚えられないの？」

堪える！ 堪えるんだ俺！今キレたってなんの解決もしないじゃないか！！

（ちっ営業妨害が）

「へー。このビルのオーナーに向かってそんな口がよく言えたものだわね。」

「ガッ、ちよつちよつちよつとまで！！ 人間の肘はそんな角度に曲がらないいいいい痛てえ！」

今、俺の腕を肘から真つ二つにしようと技をかけているのは、時宮トキミヤジレツ時列。かの悪名高き『呪い名』序列第一位『時宮』の一人だ。ただし、現在は現役を引退してりる。しかし、このビルのオーナーであるから何もなくても毎月数十万の収入があるのだから羨ましいことこの上ない。

ちッ

「ガッ、なつ何故力を強くするんだ！？」

「え？ なんか馬鹿にされたような気がしたから」

こいつは、エスパーか！

ま、まで！ 何か視界が白く染まりつつあるぞ！？
たっ頼むからもう勘弁してくださ

ガチャン

依頼人（仮）が事務所の扉をあけた音

.....

数秒の沈黙

ガチャン

依頼人（仮）が俺達を見た瞬間に扉を閉めた音

「ちょっと待って！？ 誤解だから、誤解だからさ。だから話だけでも聞かせてくれ！！」

そんな俺の必死の叫びは天には届かなかった・・・

ガチャン

依頼人（仮）が扉を開いて中に入ってきた音

・・・思ったら届いた！？

「・・・・・・・・えっと、うちに依頼がある・・・ん・・・だよね？」

「・・・・・・・・はい」

と依頼人（仮）の女性は申し訳なさそうに答えた。

そして俺は、最高の笑顔（営業用）を浮かべて

「それなら、そのソファに座ってください。詳しくお話をおうかがいします。」

と、応接間のソファに座るように促した。

まだ関節技をかけられた状態です。

「．．．あの、わ、私の名前は櫻井 紫と言います。実は、あの、
う、裏柳さん？ に依頼し．．．たいことがあ、ありまして．．．
．．．」

依頼人（仮）改めて依頼人 櫻井 紫さんは、まるで奥歯に物の挟
まった言い方をした。

やはり、先程の格好（関節技をかけられていた姿）を見られたのが
きつかったか？

「で？ その依頼とは？」

「．．．．．もんちゃんを探して欲しいんです」

「「はい？」」

「もんちゃん」？ 誰だそれ？ というか人間か？
思わず、俺の隣に座って何故か依頼人の話を一緒に聞いている時列
と声が重なる。

「．．．えっと、もんちゃんは、私が飼っているニホンザルの名前です」

「まさかですけど、『家出したニホンザルを捕まえて連れ戻すこと』が依頼ですか？」

「一部の間では、都市伝説扱いされている『裏柳請負人事務所』に、まさかペット搜索なんて普通の依頼をする訳が．．．」

「はい!!」

あった。

こうして、俺は人生初の『ペットの搜索』などという普通極まりない依頼を遂行することとなった。

「ねえ、本当にこの辺にいるの？」

「おそらくは。なんせこんな依頼初めてだし？絶対には言えん」

現在地・住宅街

ここで俺達は、雑談をかわしながら例の猿の搜索をしている。

櫻井依頼人の話によると一昨日に脱走し、各家々に侵入して食料を

盗んでいるという二ホンザル（もんちゃん）。

その逃走経路と最新の窃盜被害場所から、現在潜伏しているであろうエリアを特定し、搜索にあたっている。

それと、頼んでもいないのに時列も搜索を手伝っている。

まあ、こういう仕事は人手が多ければ多いほど助かるのだからいいが……。

ちなみに、本日は平日なので、この仕事に命は参加していない。

流石に平日の真昼間に学業を放り出してまでの参加はマズイからな。

「へー。請負人ってペットの搜索が主な仕事かと思ってた」

！？

なんと失礼な！！

「そもそも、うちは都市伝説になってるLEVELなんだぜ？　こ
ういった普通の依頼なんざ来ないって」

そうだ。今でも今回の依頼内容が信じられない。

「じゃあ、いつもはどんなことをしているの？」

「そんなの十人十色で一概に言えないが？　……
まあ、強いていえば　普通の精神状態ならばまともに扱われないよ
うなオカルトじみた事件だな。この前は、『拭森』がかかわった
しよ」

例の『幽霊退治』のときはやばかったな。

命の能力がなければ死んでいたかもしれない。

すると、時列は急にしおらしくなって

「・・・・・・・・・・・・・・・・あんまり無茶なことしないでよ」

と言った。

・・・・・・・・ヤバい何だこれは。これじゃまるで、俺の身を案じている様ではないか？「余り危ないことしないで」て感じか？？
何だろうこの胸の奥から湧きだしてくる気持ち。

ああ、この感情は！

気持ち悪い

ボキリ

「いゝっだあああ！」

か、肩の骨が奇妙な音を起てているう！？

「またなんか、失礼なことを思ったでしょう？」

「だから貴様はエスパーか！？」

「へへ。ホントに思ってたんだ」

はっ。しまった！俺としたことが墓穴を掘った！

ぼっきん

「ぎゃあああゝ！」

ああ、視界がどんどん暗くなつてゆく．．．。

そして空から光が降ってきて、そこからゆつくりと天使が舞い降りてきて．．．．．

．．．あれ？ この天使、妙に猿に似ているな？

いや、むしろそのまま猿．．．．．ああ！！

「猿だああゝゝ」

「ウキツ？」

いつの間にか、俺の目線と同じ位置にある塀の上に赤い首輪をつけたニホンザルが。

よく見ると、その首輪についてるプレートに「MON」と名前がほつてある。

間違いない。もんちゃんだ！

何と言うご都合主義的展開！？

「捕まえたっ、つておうわああッ?!」

早速捕獲しようとした俺は飛び掛かったが、猿は俺の頭を踏み台に

空高くジャンプ！

反対側の塀に見事に着地した。

俺はというと、空ぶった挙げ句、頭を踏まれて塀に顔面強打した。

「痛っ！？」

その隙に逃げる猿。

「ちょっと待ちなさい！」

それを追いかける時列。

そして、顔を抑えて悶絶する俺。

格好悪っ！

いい加減、ダメージから立ち上がった俺は、すぐさま猿を追う。
生憎、足腰は鍛えてるんでそこそこ足は早い。

その為、あっという間に二人（正確には一人と二匹）に追いついた。

さて、第二ラウンドだ！

ベチャッ

顔面にウ　コを投げつけられた音

ベチャベチャベチャッ

顔面に　ンコを複数投げられた音

隣で時列が哀れみの視線を送って来る。

・・・・・・・・・・・・・・・・

エテ公、ぶっ殺す。

「零崎一族がひとり、アンラッキーアンドデッド『終死不幸』零崎宗識。
いて・・・・」
零崎の名にお

「ちょっとストップ！？何普通の猿にキレてんのさ！？」

もう許さん。徹底して『零崎』してやる。

人識風に言うなら、殺して解して並べて揃えて晒してやんよ！！

今更、時列なんぞの制止など聞か！

そして、俺はエテ公に向かって渾身の飛び蹴りを・・・

「得物まで使ってマジで殺そうとすな！？」

・・・繰り出そうとしたら、時列に羽交い締めにされた。
そこから流れるような連続技で・・・

「え？ちよっ、タンマ！ストップ！　ここでそれをやったら洒落に

ならないって！！ やあゝめえゝてええゝ！？」

．．バックドロップを決められた。

地面はコンクリートです。

その後も、何故かエテ公は俺にばかり集中攻撃を続けた。

ある時はトマトを顔面に投げつけられ（無論、他人の家から盗んだトマトをだ）、またある時はベランダに干してあった下着を投げつけられ（この時は何故か時列に殴られた）、そしてさっきはゴミ袋（コンビニ袋サイズ）を投げつけられた。これはやはり俺を馬鹿にしているのか？
そう感じた俺は殺す気で奴の捕獲にあたった。

その果てに、ようやく空き地の木の上に追い詰めたのだった。

「もんちゃゝん！下りてきてゝ。家へ帰ろつよゝ」

時列はそんな生易しいことをぬかしてエテ公を誘い出そうとしているが、そんなやり方で奴が下りてくるはずがない！

実力行使だ！

「くたばりやがれ！」

渾身の蹴りをエテ公の上った木にぶつける。

ズドン　とかなり大きな音が空き地に響く。

そしてメキメキメキツという音と共に木が倒れた。

「どうだエテ公。これが俺の実力だ！！」

「何猿相手に本気だしてんのよ。」

時列は額に手を当てて呆れたように言うけれど、そんなことはもうどうでもいい。

プライド？　誇り？　何それ？食べれるの？

「さあゝエテ公。大人しく捕まりやがれえゝ！」

しかしこの猿、これだけでは終わらなかった。
俺が飛び掛かった瞬間に顔面に飛びつき、思いつ切り引つ掻きやがったのだ。

もう　ガリガリと。

「いつだあああゝ！？」

そしてその隙にまたもや逃走を計る猿！！

くそ、また振り出しに戻るのか？

しかしその時、

「ウ、ウキ……………」

猿がぶつ倒れた。

そして動かなくなった。返事がない。まるで屍のようだ……。

「ふう。 やつと効いてくれたのね」

「え？ お前、何かしたの？」

猿は依然として動かない。が、微かに胸に上下している。
つくことは、

「『想操術』を使ったのか？」

『想操術』……それは、「暴力の世界」で絶対的な”非戦闘能力”をもつ『呪い名』の序列第一位『時宮』、通称『時宮病院』の専売特許。

対象の意識と無意識に干渉する技。

まあ、平たく言えば催眠術だ。

「うん。流石にあたしも猿相手に使ったことがなかったから思ったより時間がかかったやつだ。」

「まさか猿に使えるとは知らなかったぜ？」

流石は腐っても『時宮』だ。

「何はともあれ、これで依頼完了？　終わったら何かおごってもらわよ」

そう言って時列は、動けないエテ公もんちゃんを抱き抱え、このくそ大変な依頼は終了した。

「ただいま！　って命！？　てめえどうした！？」

依頼人の家にもんちゃんを届けた後、時列と共に事務所に帰宅した俺を待ち受けていたのは、何故か　クタクタに疲れ果ててボロ雑巾の様になっ たうちのバイト　五月闇　命の姿と、

仕立てのいいダークスーツに身を包んで、優雅に紅茶を嗜む”殺し屋”の姿があった。

「てめえ、”紅梅”！！
うちのバイトに何しやがった！？」

そう啖呵を切った俺に対し、『殺し名』序列第一位『勾宮』の分家『紅梅』の一人、紅梅 月屑コウバイツキクスは落ち着いた声色でこう答えた。

「お前と時列に話がある。『勾宮』分家『早蕨』についてだ。」

2・END

第式話 災難な日 零崎宗識の場合（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

少し現実の都合で更新が遅くなってしまいましたが、ようやく第式話を更新することができました。

今回、新しいオリキャラで 『時宮』の時宮時列と『匂宮』の分家紅梅月屑を出しました。

案外、この小説はしばらくオリキャラばかり出てくる様な気がします。

とりあえず、次の次あたりから、原作『零崎双識の人間試験』の裏側を書く『人間試験編』を書くように思います。

じゃんじゃんバトるシーンを書く予定ですが、文章力ないので余り期待しないでくださいね？

第撒話 災難な日 五月闇命の場合（前書き）

この話の後半辺りから『人間試験』編が始まります。

まあ、『人間試験』編でいってもめっちゃくちゃ短いんですけどね？

第撒話 災難な日 五月闇命の場合

潤さんを京都へ送り出し、ムナシキサンノオトウト『零崎人識』を見捨てた、数日後の月曜日。僕は、あるとんでもない人と一緒に留守番をすることになった。

僕はクラスの副委員長だったため高校の文化祭の打ち合わせに参加していた。

出店するのはどんなのがいいか、けどお化け屋敷は三年生がやるらしいので無理だからそれ以外でないかとか、そんな感じで約40分。

そして大体の方向性が決まった所で解散。

そのまま、僕がバイトをしている『裏柳請負人事務所』に直行した。

「ん？ あれ？ 鍵がかかってる。」

『裏柳請負人事務所』には鍵がかかっていた。ということは、宗識さんは留守なのかな？

そう思いつつ、以前貰った合鍵で中に入る。

やはり事務所の中には誰もいなかった。

応接間のテーブルの上に紙が一枚おいてあった。

「え」と。『依頼があつたから出掛けてくる。割と簡単な依頼だからすぐに戻れるだろうから待ってる。客がきたら、俺が帰るまで引き止めといて。』
『By 零崎宗識』

要するに、これは書き置きか。

内容から察するに、やはり宗識さんは留守なのだろう。

.....。

特にすることがない。

「そうだな。お茶でもするか」

そんなことを言つて僕はお茶の支度を始めたのだが.....。

「邪魔をする」

事務所にお客さんが来たようだ。

僕は手を止めてお客さんの方を見る

そこにいたのは、スラッとした高そうなダークスーツを着た黒髪長身の青年だった。

その人は、僕の姿を見つけると

「成程、君が時列の言っていた”バイトくん”か。君の雇い主である零崎宗識はいるか？」

「へ？ あ、ええ、今は留守にしていますが、貴方は宗識さんの知り合いですか？」

ふだん、宗識さんは”裏柳数奇”と言う偽名を使っている。その偽名ではなく本名で宗識さんと呼ぶこの人は、もしかしたらお客さんではなく、宗識さんの知り合いなのか？

「ああ、そうだ。私は零崎宗識の”トモダチ”だ。」

やっぱり。

宗識さんってあんまり普通な友達っていなさそうだし。

「ところで、私は君の名前を知らないのだが教えてくれ無いだろうか？」

どうやらこの人は、時列さんから僕の名前を聞いていないらしい。

「僕の名前は五月闇 命です。貴方の名前は？」

「私の名は、紅梅 月屑だ。よろしく頼む、五月雨君。」

.....ん？

この人、今サラッと名前を間違ったよね？

「あの、月屑さん。僕の名前は”五月闇命”です。五月雨ではありません。」

「そうか、すまなかつた五月晴君。」

.....
.....は？

「いや、だから僕の名前はサツキヤミミコトですって！」

わざと間違っているのかこの人！？

「叫ばなくても聞こえているよ五月風君？」

イマコノヒトハナントイツタ？！

「だから サ・ツ・キ・ヤ・ミ です！？」

「君は私を馬鹿にしているのか？ 先程からしつかり『四月闇』君
といっているではないか。」

至極真面目な表情で冗談の様な間違いを繰り返す月屑さん。
最早疑う余地はない。
この人は正真正銘の

「バカだ！」

バコン！？

「痛い！？」

月屑さんは何処からともなくハリセン（全長約？？）を取り出し、僕を思いっ切り叩いた。

いや、むしろ”叩きつけた”という感じだった。

「君は、私に喧嘩を売っているのか？」

面と向かって私に馬鹿といったのは君以外に宗識しかないのだよ。ふむ、やはり『ペットは飼い主に似る』というコトワザは本当の様な」

「誰がペットですか（怒）」

「

というか本当に何処から出したんだよ、このハリセン。鞆などは一切持ってないから、スーツの中に仕込んでいたのか？」

「少しここで宗識が帰ってくるまで待たせて欲しい。彼と早急に、直接話がしたいのでね。」

「あ、はい。わかりました。お茶を持って来ますのでそちらの応接間で待っていてください」

「さて、私は紅茶が好きだ。」

「わかりました。では、紅茶を持って来ます」

「だからまでといっているだろう？　だが、所詮ここにはティーバックの紅茶しかないだろう？」

一体この人は、何を言いたいのだろうか？

普通、こういうところではティーバックが当たり前だろうに。

まさか、ふん、所詮ティーバックの紅茶などに興味はない。そんなゲスなモノ、飲まぬ方がマシだ。ゝとか贅沢思考を言う気なのか？

．．．．．この人ならありえそうだ。

「ええ、そうですが」

「ならこれを使いたまえ。」

月屑さんは、何処からともなく上等そうな茶葉の入った小箱と英国式ティーセットを取り出す．．．．

「って何処から出したんですか！？」

どうやったって隠し持つには不可能な大きさでしょう？！

これが噂に聞く、何でもアリの『ギャグ補正』なのかッ！！

「ふむ。これか？　これは『紅梅流暗器術』だ。もともとは、私の祖先が普通に隠し持つことが出来ない大きさの得物を隠し、暗殺する為に編み出した暗器術なのだ。まあ、【殺し屋】『勾宮』の分家としては【暗殺】等と言うことは褒められたことでは無いため、余り知られてはいないのだがな。」

あれ？　今、何か物騒な単語が聞こえてきたぞ？

暗殺？ 殺し屋？

『匂宮』??

「え〜と。もしかして、今更ですがお聞きします。 貴方は”あつち側”の人ですか？」

この場合の”あつち側”とは、先日聞いた世界の話に出て来た『暴力の世界』のことだが、この人には通じたのかな？

「如何にも。私は”『殺し名七名』序列第一位『匂宮』の分家『紅梅』、【紅梅 月屑】」。

皐月闇君の雇い主である零崎宗識と同じ世界の住民だ。」

「『殺し名』とは、『暴力の世界』で圧倒的な”戦闘能力”を誇る七名の組織のことだ。

私の所属する『匂宮』は『殺し名』の中での序列第一位である。まあ、所詮私は分家なのだからそんなに威張れたものではないのだがな。」

月屑さんは、僕が『殺し名』に関して何も知らなかったから、『殺

し名』について簡単にレクチャーしてくれた。

今、僕は月屑さんの話を聞きながら英国式ティーセットで紅茶を煎れている。

煎れ方は偶然先程、高校で委員長に聞かされていたため手間取らなかった。

「……………何故、そんなことを聞かされていたかは聞かないでいてほしい。」

「どうぞ。紅茶です」

「うむ。ありがとう。」

そういつて、たった今、月屑さんは僕が煎れた紅茶に口をつける。そして少し驚いた様な顔をして、

「……………驚いた。睦月闇君、君は以前にこういうやり方で紅茶を煎れたことがあるのか？ とても、初めてとは、思えないのだが？」

と言った。

「いえ、初めてですよ。紅茶はいつもティーバックでしたから」
まあ、煎れ方は知識として知っていて手間取らなかったのが幸なのだろう。

「うむ。どうやら水無月闇君は、”こういうこと”にトシュツした才能がある様だ。」

素晴らしい。そのティーセットは君に譲ることにしよう。また、私がここに来た時に紅茶を煎れて欲しいのね。」

”才能がある”とまで言われると僕も嬉しくなる。

・・・相変わらず、名前を間違えられているけど。

というか【水無月闇】って、もはや文字数すら違うし。

どうやったらこの人に、僕の名前をちゃんと呼ばせることが出来るのだろうか・・・。

「おや。どうしたのかね、四月一日君？何か悩み事でも？」

「つてもはや別人になっちゃったし!？」

僕は【五月闇】ですって何回言ったら解るんですか!！」

月屑さんの中で僕は、”アヤカシが見えて料理が得意な眼鏡の人”と一緒にたにされてしまったらしい。

これは、早急に何とかしなければッ・・・。

あ、そうだ！

試しに月屑さんの名前も間違えてみよう。

そうすれば、もしかしたら僕の名前も間違えている事に気づくかもしれない。

「それにしても、宗識は何時になったら帰ってくるのだろうか？私も決して暇ではないというのに」

「僕も詳しく聞いていないんですよ。ただ、『すぐに帰って来る』
としか……。すいません”オガクス”さん」

パンッ！

.....

「薩摩閻君。君にもう一度チャンスをあげよう。君は今、私の事を
何と呼んだのかね？」

月屑さんの左手にはオートマチックタイプの拳銃が握られていた。
何故かその銃口は僕に向けられていて、微かに火薬の臭いがする。
そして、先程まで僕の頭があつた場所には見慣れない穴が空いてい
た。

無論、その穴からは香ばしい煙がたっている。

そして月屑さんは一言こう言った。

「次は外さないよ。」

ゾッ

この人撃ちやがった！？

『次は外さないよ』といつておきながら一発目も明かに僕を殺そう
として撃つたものだ。

ああ、据わった目がとても恐ろしい。

「【名前】とは、自分の存在を表すものであり、自分の人生や生き様そのものだ。

人は、この世に生まれたその時に名前を貰って自分の存在をこの世界に置き、未来へと歩んでいくのだよ。

故に、『名前を間違える』ということは人間に対しての最大の侮辱なのだ。

偶然、名前を間違えてしまったのなら仕方ない。

許そう。

だが、故意に、意図的に間違えたのならばその罪は万死に値する。」

ヤバイ！？

地雷踏んじやった？！

「そうだ、この際だ。君にじっくりと教えよう。

その罪深さを。」

「・・・・・・・・そんなことが俺のいぬまに」

どうやら、命は紅梅の地雷に振れてしまったそうだ。

俺は、事務所の片隅でボロ雑巾の様な成れの果てをした命に対し、しばし黙祷を捧げた。

「で、紅梅。てめえは俺に何の样だ？」

そして俺は振り返り、紅梅に問い掛ける。

「『早蕨』に関する事だと言っただろう。」

「で、その『早蕨』が何をしたんだよ？」

先程紅梅は、当然俺も知っているかのような言い方をしたのだが、そんな話は全く知らない。

『早蕨』といったら『勾宮』の分家だとしか・・・。

「『早蕨』が時宮と手を組んだ。」

「「うそ〜!？」」

うそ〜 うそ〜 うそ〜（エコー）。

こればかりには俺だけでなく時列も驚いた。

『勾宮』は『時宮』を徹底的に嫌っている。

それはもう、体に【時宮を見たら薙ぎ払え】とインプットされている程に。

ましては、分家であろうと『時宮』と組むなんてことはありえない。

紅梅と時列が友人関係を保っているだけで最早奇跡と言えよう。

「しかも、零崎人識を狙って手を組んでいるのだ。」

「何してんだよあの野郎!!」

哀川さんの次はそいつらに狙われてんのかよ（怒）

「そして零崎人識を狙う早蕨に零崎双識が応戦している。」

「……………」

何でばってきてんだよ兄貴（涙）

「成る程、ようするにあれか？」

『早蕨の始末』を俺達に手伝ってほしいのか？」

『勾宮』の分家の中で警察の様な役割をしている『紅梅』らしいことだ。

分家がただ問題を起こしただけならさっさと始末出来たが、そこに『零崎』と『時宮』が関わってきたため、”バランス”をとる必要が出てきて、俺と時列の協力がいるのか。

「いや、ちがう。始末して欲しいのは、『早蕨』ではなく『夕霧』だ。」

「ヴォイ！今までの会話の意味はどこ行っただ？」

会話の流れるには、『早蕨』だろうが!!
誰だよ『夕霧』って(怒)

「『夕霧』って確か『匂宮』の分家のひとつよね? 以前、本家とトラブルがあったとかいう?」

今まで若干影の薄かった時列が紅梅に質問。
スツカリ忘れてたよ。時列がいること。

ヤバいすつげえ睨まれた。

「それはそうと。何故、『早蕨』ではなく『夕霧』なんだ?」

「今回の事件の黒幕だからだ。」

は?

「夕霧は、『早蕨』の長女【早蕨弓矢】を殺害し、その罪を零崎人識になすりつけ、【時宮時計】と共謀し『早蕨』をたきつけたことがわかってる。

『早蕨』に零崎人識を殺害させ、『匂宮』本家と『零崎』の間で戦争を起こし相打ちさせ、本家を潰そうとした疑いがある。」

「わかった。けど『早蕨』はどうすんだよ?」

「心配するな。もう決着はついている。」

早っ!!

「早蕨は全滅し、零崎はふたりとも無事だ。」

これで、一応一安心だな。

ん？ でもそれなら・・・

「俺の付き合う義理は無いじゃん？」

家族を守る以外で何故こんな奴に手を貸さなきゃいけないんだ。

「そういっただろうと思い報酬を用意した。」

「「報酬？（！！）」」

やはり、時列の方が報酬という単語に食いつきがいい。
守銭奴の悲しい性だ。

「時列には現金を。そして貴様には、『刀鍛治』フルヤリズキン三代目古槍頭巾の
晩年の作品【梅辻】を用意した。」

なっなんだと！！

【梅辻】といえば、三代目古槍頭巾の制作した刀の中で一・二を争う程の傑作ではないか？！その年に三代目古槍頭巾が庭に咲いた梅の花をイメージして・・・（中略）、刃には、紅色のラインが白刃にそって（中略）し、（中略）したとても貴重な一振りではないか！！！！

「その依頼。承諾した！」

「了解した。早速だが詳しい話は・・・。」

「相変わらずの日本刀オタクね？宗識は。」

俺の隣で時列が、やや呆れた様に溜息をついた。

「廃工場」

月も出ない新月の夜。

誰も居ないはずの廃工場では、若い女の話し声がこだまする。

「で、早蕨は結局しくじったけどこれからどうするの、ねえさん？」

この廃工場の暗闇には似つかわしくない巫女装束を着た若い女、
【^{ユウギリコノエ}宵霧 今宵】は、自身の姉に電話越しに今後の指示を仰いだ。

『そうね。彼等がやった事にして零崎人識と『^{マインドレンデル}自殺志願』を殺す事もありだけど、リスクは高いでしょうね。あの『自殺志願』相手に私達三人が揃って生き残る事は、あまり想像しにくいですしね。ほとぼりが冷めるまで何処かに身を隠しましょうか。』

「……………ゴメンねえさん。なんか、それ所じゃ無くなったみ

たいだ」

そう言つて夕霧今宵は、通話をやめて懷に携帯をしまう。

そして廃工場の暗闇に向かつてこう言つた。

「そこに居るのは分かつてんのよ？ いい加減出て来たらどう？」

いつの間にか、そこには、ここの暗闇より黒いスーツに身を包んだ青年が立っていた。

「貴様が【夕霧今宵】だな。貴様を始末しにきた。」

黒いスーツの青年、【紅梅月屑】は夕霧今宵にそう告げた。

く某ホテル内駐車場く

「誰？ そのねえちゃん？」

高校の制服を着た少年【夕霧 ユウギリアスム 明日夢】は、自分の目の前にいる女性に問い掛けた。

Tシャツにジーンズという服装。茶髪のポニテという髪型からして

も、「普通」の二文字から外れない女性は、とてつもない事を平然と行っていた。彼がこのホテル一帯に張った『結界』を”全てすり抜けて”ここまで来ていたのだ。

数千、数万、数億の肉眼では捉えられない程細い糸の結界を全て避けて、今その結界を張った彼の目の前にその身を晒しているのだ。

「さあね？ でもまあ、ひとつ教えてあげるわ。私は貴方の敵よ。それだけわかれば十分でしょ？」

「同ホテル屋上」

「私の妹の所にいるのも貴方の仲間かしら？」

烏のような黒髪を夜風になびかせ、連絡の途絶えた携帯を見つめるシスター服の女性は軽く溜息をつき、後ろにいる男に話し掛ける。

女性と対称的な、色素の抜けきった白髪で眼帯をしたその男は、彼女の問いには答えず、逆に彼女に質問をした。

「てめえが【夕霧^{ユウギリサクヤ}昨夜】か？」

「そうですね？ 何か？」

夕霧昨夜は平然と答えた。

「俺はお前を殺しに来た」

「そうですか。」

「だから死んでくれ」

「それはいやですね。貴方が死んで下さい。」

そこで、白髪青年は身構える。
そして夕霧昨夜にこう告げた。

「『殺し名』序列第三位『零崎一族』の一人、『終死不幸』零崎宗
識。

『殺し名』序列第一位『匂宮雑技団』分家【夕霧昨夜】に対し、
『零崎を開始する』。」

3・END

第撒話 災難な日 五月闇命の場合（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

次話からバトルに突入しますが、温かい目で見守ってください。

夏休み終了までに、あと一回は投稿したいな。

出来るかな？

第死話 蒼い銃師 暗い術師（前書き）

初のバトル描写！！

私は、今。自分の文章力の無さに打ちひしがれています・・・。
（T―T）

第死話 蒼い銃師 暗い術師

（廃工場）

「貴様が【夕霧今宵】だな。貴様を始末しにきた。」

黒スーツの青年は、夕霧今宵に向かってそう告げた。

「あんた何者？ なんであたしを始末すんの？」

「私は、紅梅月屑。」

貴様は本家に弓を引いた。 故に始末する。」

青年、【紅梅月屑】は淡々と答える。

「『紅梅』？ ああ、分家か。 ということは、どっかにあんたの兄弟がいるの？ それとも、あたしの姉か弟の方にでもいつているのかしらあ？」

今宵は、ズルズルと意味の無い質問をする。

会話で意識をそらしながら、彼女は裏で着々と武器を組み立てる。

「いや、違う。貴様達と相性が悪いから妹は置いてきた。

ちなみに、ついて来られない様に、両手足を固定して富士の樹海に放置した。」

「あんたは鬼か？！」

思わず叫ぶ今宵。

ここはツッコまずにはいられないところだった。

「私は、シスコンだ。」

「は？」

話が微妙に噛み合わない。

「これも、我が愛しき妹の為のことだ。妹が、相性が悪い輩と戦って傷でもついたら大変だ。

故に、その様な輩と戦う際は、私だけが赴く。

ただ、彼女はどうしてもついて来てしまう。

だから、いつも

台風の直撃している無人島に置き去りにしたり、東京タワーのてっぺんに括り付けたり、

アフリカのどこかの原住民の生け贄に捧げたり、

怪しげな女主人と黒い謎の生命体のいるミセの倉庫に監禁したりしている。」

「あんたの血は何色だ！！ それと最後のは明らかに嘘だ！？」

柄にもなく、彼女は全力でツッコんだ。

何気ないネタも丁寧に拾ってくれたところから、彼女は以外とイイヒトかも知れない。

最初は、自分のペースに巻き込むつもりだったのが、いつの間にか自分が巻き込まれているのにまだ彼女は気づかない。

「いや、確かに愛しているぞ。某『おっきいニャンコ』が某『おっきいわんこ』を愛するのと同じくらいに。」

「それは違う。それは違うぞ！　その愛は違う！！　あと、あんた、
以外と漫画読むだろ？」

主に、CLAMP作品を。

「うむ。紳士の嗜みだ。」

「紳士とは真逆の嗜みだ」

ふたりの間に、これから殺し合うものとは思えない空気が立ち込める。

「……………あゝもう！殺す（怒）！」

自分がペースに巻き込まれているのに気づいた今宵がようやく動き出した。

やっと組み立て終わった自身の得物、和槍を不意打ち気味に突き出した。

速い。正しく弾丸の様な速さの刃が月屑の心臓を狙う。

もしも、彼女の相手が月屑でなければここで勝負は決していただろう。

だが、月屑はその程度ではなかった。

ガキイッ

金属同士がぶつかり合う音と共に和槍の軌道が反らされる。

その手にあるのは、蒼に染まった二丁の拳銃。

右手にリボルバー。

左手にオートマチック。

へな、何だ?!」

それに驚き、バックステップで距離をとる。

「ああ、忘れるところだった。そういえば、貴様を殺そうとしていたのだった。それでは、予定より若干遅れたが、仕事に戻ろう。」

そこで、二丁拳銃を構え直した月屑の目に光りが宿る。

冷徹で、難く、鋭い光りを纏った視線が静かに、夕霧^{ターゲット}今宵を見据えた。

「貴様の命を突き崩す。」

（某ホテル駐車場）

この場所では、制服を着た少年・夕霧明日夢と、茶髪ポニテの女・時宮時列の戦闘が行われていた。

だが、この戦闘は他のものと比べ、常軌を逸する。

両者、共に静止。

無音。
無動。

何故なら、その戦いはふたりが向かい合い、視線を交わした瞬間に決着していたのだから・・・。

時宮時列の身体に巻き付く、細い糸、糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸糸。

糸糸糸糸糸糸。

それは、『曲絃師』の『曲絃系』。

それは、室内戦闘では最強の技術。

暗器としての利用に長け、センサーや拘束等の数々の応用が可能な技。

そして無論、殺人術でもある。

彼女の身体に巻き付く糸で絞め殺すことも、輪切りにすることも可能。

『曲絃師』である彼が指先を2・3?動かせば、彼女の命を奪うことができる。

しかし、ふたりは動かない。

静まり返った駐車場では、明日夢の荒い息遣いのみが響く・・・。

「くそッ。何でだ！何故指が動かないんだ!？」

チェックメイトされたのは彼の方だった。

「もう。騒がしいな。

『口を綴じろ』」

「!?!」

時列の発した言葉通りに彼の口は強制的に綴じられた。

「?!ッ　!!?!」

明日夢は言葉を奪われた。

「それと、『私に絡み付いている糸を外せ』。」

シュルリと彼女の身体に巻き付いていた糸が解かれる。

「手が！ 指が！ 勝手に動く！？」

明日夢は身体の主動権を奪われた。

「『首に糸を巻け』。」

彼の首に糸が緩く巻き付けられる。

「何がどうなっているんだ！？」

自分の意識とは無関係に動く身体。

着々と自分のモノが奪われていく恐怖。

じわじわと追い詰められる恐怖。

恐怖が頭の中を支配する。

そして、その中で彼が導き出したこの状況を説明できる答えが、

「『想操術』だと？！」

『想操術』。それは、『勾宮』の対極の対極の対極の存在である『時宮』の技術。

対象の意識と無意識に干渉する最悪の術。

だが、それでもおかしい。

『勾宮』の本家、分家は『想操術』が効きにくい。幼少の頃からそんな訓練を積んできたからだ。

そんな自分に、こんな短時間で、こんなに強力なものをかけられるは

ずがない。彼はそう考えた。

しかし、『想操術』以外では、説明のしようがなかった。

「あ、そうだ！ 最期だからあたしの名前教えてあげる。あたしの名前は、

【時宮時列】よ」

「【時宮時列】？ それは”先代の【時宮時刻】”じゃないか！？」

【時宮時刻】

それは、代々『時宮』を追われた追放者に付けられる名前。

異端の称号にして恐怖の象徴。

最恐で最高の『時宮』。

彼女の声を聞き、彼女の眼を見た瞬間に戦いは終わっていたのだ。その後に残るのは、処刑のみ。

「じゃあ、『死んで』。」

首に巻かれた糸が絞まる。

「あ、ああああ。」

明日夢の視界が暗転する。

「あ、そういえば名前聞いてなかったっけ？
まあ、どうでもいいか」

「確か、先代の時刻は、確か殺されたんじゃないかなかったっけ？」

彼は最期にふとそれを思い出して、堕ちた。

「廃工場」

バン！バン！

暗い工場の中に銃声が響き渡る。

月屑が、左手に持ったオートマチックで敵の頭を狙う。
心臓ではなく、頭を狙うところは流石殺し屋といえよう。

一方、その敵である今宵は防戦にまわっていた。
ただ、それは様子見の為だ。

「こいつ、何を狙っているの？」

『プロのプレイヤーに銃では勝てない。』

これが、この世界の鉄則。

普通の世界と違い、極めて高い身体能力をもつ『勾宮』本家や、銃弾を避ける訓練を積んだ分家を始めとする『殺し名』やプロプレイヤーに銃による攻撃は一切通用しない（『零崎』は例外として殺気を感じ取って避けるのだが）。

故にこの世界で銃を使うプレイヤーはほぼいない。

稀にいる銃を使うプレイヤーは、敵を誘導したりして本命の攻撃を当てる為にいるのが関の山だ。

だから、彼も何が『本命』を隠しているのではないのか。そう彼女は疑っているのだ。

そして、今彼女が注意しているのは右手に持ったりリボルバー。

月屑が、今まで撃ってきたのは全て左手のオートマチックからのみ。

リボルバーに何かある。

それが、彼女が感じたことだ。

「うむ。やはり埒があかない。」

月屑がそいつって構えるのはリボルバー。

そして、事もなげに引き金を引く。

銃口から発射される。弾丸。

「なッ?!」

そしてそれは、普通では考えられないほど広範囲に降り注ぐ。
一つ一つはかなり小さいが、量を食らえば命にかかわる。

咄嗟に横に跳んで避ける。

だが間に合わない。

ダダダダダダダダッ

よもや、銃声からは掛け離れた音が響く。

そのたった一発で、大量の土煙が舞い上がる・・・。

「うむ。何も見えん。」

舞い上がる土煙のせいで彼は広範囲の視野を奪われた。

「うおおおおお！！！」

一線。

夕霧今宵は、彼の死角から起死回生の一撃を繰り出した。

先程の弾丸を無数に浴び、身体中から血を撒き散らしながら、自らの限界を超えた速さで、突く。突き穿つ！！

ダン。ダン。ダン。

銃声が響く。

和槍は彼の頬を掠め、

弾丸は彼女の脇腹をえぐった。

「うぐっ」

今宵は膝を付き、血を吐く。

和槍を振るう力は、もう残っていない。

「夕霧今宵。貴様の实力は高かった。運が悪ければ、君の刃が私を

終わらせていただろう。」

その労いの言葉は、夕霧今宵の耳には最早届かない。

そしてゆっくり彼の左手が、左手に握られたオートマチックが今宵の眉間の前に据えられる。

「これで終わりだ。」

紅梅月屑は、引き金を引いた。

乾いた音が、彼女の人生の幕を下ろした。

4・END

第死話 蒼い銃師 暗い術師（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

バトルだけで書いたら、何か今までに無いくらい短くなっちゃったな。

そして、皆！

今回のふたりは、チートじゃないよ？

これは相性が極端に良かったからこうなっただけで、いつもいつでもこんな感じじゃないからね？

次回は、

零崎宗識VS夕霧昨夜。

無い知恵搾ってがんばりますのでよろしく願います。

他の作者さんの作品を見て思った。
PVとかユニークって何？

第悟話 虚無の殺人鬼（前書き）

．．．．．今回の話は、かなり強引な展開になってる様な
気がします。

ごめんなさい。

第悟話 虚無の殺人鬼

-

- 俺は、【彼女】を守れなかった。

- 俺は、【彼女】を救えなかった。

- 俺は、【彼】に守られてしまった。

- 俺は、【彼】に救われてしまった。

- 懺悔すら無意味。

- 懇願すら無価値。

- 逃避すら無意義

- 救済すら 罪

- あの日。あの時。

-
は死んだ。

- その日。その時。

- 零崎 宗識は死んだ。

- 今の俺は搾りかす。

- 【彼】と【彼女】の残りかす。

↓ ホテル屋上

『終死不幸』 零崎宗識と『夕霧』 長女 夕霧昨夜の戦闘は、苛烈を極めた。

「『断頭台』 『最も残酷な零崎』 と噂される貴方の實力は、この程度なのですか 『終死不幸』？」
アンラッキーアンドデッド

夜風に美しい黒髪をなびかせ、シスター服の女性【夕霧昨夜】はザデイスティックに微笑む。

それは、彼女の得物である鞭とあいまってとても似合っていた。

一方、彼女の射程外に佇む、白髪で右目に眼帯をしている男【零崎宗識】は、明かに苦戦していた。

ジーパンの裾は破け、手の作業用グローブはずりむけ、右の頬は切れて出血していた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

正直、相性は最悪。

夕霧昨夜の得物は鞭。

鞭は銃を除く全ての武器の中で最も攻撃をかわしにくい。

他の武器にはない『しなる』という動きが、不規則な軌道と攻撃を可能とするためだ。

さらに、中距離を専門とする武器の中でも一際広い攻撃範囲も厄介なこと極まりない。

対して彼の得物は、今彼の履いている真黒の靴『終死不幸』。靴底に鉄板を仕込み、靴全体にも炭素繊維を混ぜ込んで硬度を極端に上げた一品。

ただ固いだけなら武器はおろか防具にすらならないが、『殺し名』の中でも取り分け高い身体能力をもつ宗識が使用すれば、蹴りのたった一撃で勝負を決する威力を発揮する。

だが、

「『終死不幸』さん？

そんなに離れていては何も出来ませんよ？」

実際はこれだ。

蹴りを当てる射程まで近づけない。

所詮は近距離技。その間合いは驚くほど狭く、攻撃で近づこうとも

鞭による攻撃の壁に阻まれて進めない。

先程から宗識が攻撃を仕掛けようと接近するたび、鞭による斬撃で勢いを殺され、更には追加の斬撃が自身を襲う前に射程外へ．．．。

この様なヒット&アウエー戦法をとってはいるものの、彼の体力は着実に削られ、傷も増えてゆく。

「．．．．．」

零崎宗識は、先程の『零崎』宣言以降一言も言葉を発しない。

「はあ、少しは私と話してくれませんか？
私は貴方と会話を楽しみたいのですが？」

反対に彼女は饒舌になっている。

いつもの彼女ならば、決してこの様に慢心したりしなかったのだろうが、『断頭台』の異名を持ち『最も残酷な零崎』と呼ばれる『零崎宗識』をこうも簡単に追い詰めているという現実が、ザデイストな彼女の感情を高ぶらせる。

「．．．．．もういいか？【ミコト】？」

突然、宗識が訳のわからない事を呟いた。

「？ 貴方は何を言っているのですか？」

昨夜は、何が理解できなかった。
が、彼女はすぐに気付くこととなる。

彼の右耳に通信機が付いていることに・・・。

『ええ、しっかりと《観え》ますよ宗識さん。』

その通信機から聞こえるのは、宗識の元で働く少年の声。

そして、宗識の手には・・・

「…………貴方、どこからそれを出したの？」

純白の鉄スコップが握られていた。

「『紅梅流暗器術（仮）』でだ」

そして彼は、例のスコップの銘を告げる。

「『バットエンド最終決定』」

そう告げると、その手に持った『最終決定』の先端を彼女に向けて、宗識はこう言った。

「俺は『零崎』の中で唯一、得物を二つ持つ殺人鬼だ！」

- 数時間前

「『裏柳請負人事務所』」

「うむ。相性を考えて【夕霧明日夢】には時列に相手をしてもらうのは決定した。だが、残りふたりはどうする。」

現在、誰が夕霧某の相手をするかという相談が行われている。

『曲絃師』 つつゝ七面倒くさい相手は、同じくらい七面倒くさい『想操術師』の時列に押し付けることが決定。

だから、他のふたり。

鞭使い 夕霧昨夜
槍使い 夕霧今宵

「私は【夕霧昨夜】の相手が望ましい。私の得物ならば、彼女の射程外から有利に攻撃を仕掛けらる。宗識は【夕霧今宵】の相手をすれば実力を十二分に発揮できるだろう。この組み合わせが理想的だが、異論はあるか。」

異論は無い。

この組み合わせが最高だろう。

俺が【夕霧昨夜】を相手取ったとしても勝てる可能性は高くないだろう。

だが、それは無理だ。

「いや、俺が夕霧昨夜を相手する。」

そう言った途端、時列と紅梅は怪訝な顔をした。

まあ、当然だろうな。

「貴様正気じゃないだろう。かなり早い夏バテか、若干遅い五月病か。」

「・・・・・・・・察してくれ」

シスター服を着ている女・・・・もしかしたらこいつかもしれない。

『キリスト教の関係者』

まさかと思うが、手懸かりになるかもしれない。

俺の『敵』の。

「．．．．．わかった。夕霧昨夜の相手は貴様に任命しよう。」

「ありがとう。恩に着る」

「でもどうするのよ？ 勝てるの？ 相性最悪でしょ？」

確かに時列の言う通り、今のところ勝算がない。

鞭独特の攻撃の軌道を正確によんで懐に入り込めれば．．．．．
．．．あ。

「あ！ 命！ お前がいたあ！」

「へ？ 僕ですか？」

今の今までずっと空気だった命が、いきなり話をふられたせいでマヌケな返事をする。

「命、不規則に素早く動く物も《観れる》か？」

「あ、はい。《観て》完璧に慣れるまでに時間はかかりますが大丈夫です」

「ちょ、ちよつと何なの？ 何よ《観る》って?!」

ああ、そっぴやまだ時列にすら話していなかったっけ？

「命には、”未来”が《観える》んだよ」

くホテル屋上へ

「さあ、仕切直した。決着をつけよう！」

零崎宗識はそう言い放つと夕霧昨夜に向かって冗談の様な速度で走る。

「!?!」

そのスピードに驚いたものの昨夜は、今までどつりに鞭を振るう。

『斜め右』

宗識は、別のビルから双眼鏡越しにここを《観る》命の指示に従い、斜め右方向に跳ぶ。

そして、先程まで彼がいた場所に鞭による斬撃が降り、指示した場所には攻撃の死角が現れる。

その死角をすり抜け走る。

『背後から攻撃。『最終決定』で防げる』

その隙に”しなつた”鞭が彼の背後に斬撃が放たれる。が、『最終決定』の腹で弾き飛ばし更に走る。

そして彼は、夕霧昨夜に『最終決定』を走りながら投擲する。

「ふッ！」

しかし彼女は、『最終決定』を身体を捻りかわす。

彼女はそれをかわしてしまった。

かわしてしまった故に態勢を崩した。

そこに容赦無く叩きつけられるのは一発の蹴り。

一撃必殺の『終死不幸』の蹴りが彼女を捕らえた。

ドン という普段あまり聞き慣れない音が響く。

腹部に的中したその蹴りは、内蔵を破裂させ、背骨を粉碎した。

彼女の口から、ごぼりとかかなりの量の血液が吐き出される。

そうして地面に倒れた彼女は、最早戦える状態ではなかった。

こうして、この戦いは終わった。

「さて、これで終わりだからさっさと帰れ命。」

『え？ あ、ええ、わかりました』

俺の声がどこか変だったのか、命は微妙な返事をした。

命が通信機のスイッチを切った。

そして俺は、自分の通信機を耳から外し、足で踏み付けて破壊する。これで万が一にも命はこれからおこなわれる会話を聞くことはできない。

「おい、夕霧昨夜。お前に聞きたいことがある。答える。」

俺はこいつに質問したいことがある。だから心臓と肺は狙わなかった。

どちらにしろ、致命傷には変わり無いだろうが、まだ話は出来るだろう。

「げふっ．．．な．．．にかしら．．．？」

「『クロザクロ黒柘榴』という名に心当たりはあるか？」

「な．．．いわ．．．聞い．．．たことすら．．．」

やはり無いか．．．。

駄目元だったんだがな。

「それじゃ最後に・・・」

『キリスト教関係者』

もしや、こいつが

こいつが

こいつが！！

「五年前の12月14日、何をしていた？」

12月14日、朱い雪の夜。

「・・・なに・・・も・・・し・・・てないわ・・・本家・・・に・・・よば・・・
れてた・・・から・・・」

「・・・そうか、ありがとう」

もう用済みだ。

「ふ・・・ふふふ。殺・・・人鬼は・・・もっ・・・と・・・た・・・
のしそ・・・うに・・・人殺し・・・をするか・・・とおもっ・・・
たら・・・ずいぶ・・・んつまら」

まず、『最終決定』で首を切り落とした。

次に四肢を切り潰し、胸をえぐり穿つ。

これが俺の殺人だ。

毎度のことだがこの、人を肉片に変える作業はとてもじゃないが他人に見せられるものじゃないな。

そういえば、彼女。死に際になんか言ってたよな？

『殺人鬼はもつと楽しそうに人殺しをするかと思ったら随分つまらなさそう』
だっけか？

何を言っているのだろうか？

「人殺しが楽しい訳が無いだろ」

俺は、生まれてから一度も人殺しに快樂したことはない。

俺は、がらんどうだから

俺は、空洞だから

俺は、空虚だから

俺は、死んでいるから

俺は、殺人に何も感じない。

「さて、帰るか。後始末は紅梅にでもまかせて」

そして俺は帰路につく。

こうして、ひっそりと、このホテルを後にした。

- 救われてはいけない

- 報われてはいけない

- 許されてはいけない

- 何故なら【彼】も【彼女】も決して救われなく、報われないからだ。

- 俺は、残骸だ。

- 【彼】の希望と【彼女】の夢の成れの果て。

5・END

第悟話 虚無の殺人鬼（後書き）

おはよう。こんにちは。 こんにちは。 烏妣 揺です。

あゝ暗っ！？

最初と最後が特に。

自分で設定を作った段階で、こんな暗いやつを書かなきゃいけないのは眼に見えていましたが、実際に書くとこんなに陰気になるんですね…（涙）。

感想とかをお待ちしています。

第録話 嫌われた少年（前書き）

後日談です。

第録話 嫌われた少年

「ふう。やっぱ綺麗だ【梅辻】」

自分のデスクに座ったまま宗識さんは、報酬の刀を嬉しそうに眺める。

五月も終りに差し掛かったこの日。ソファーに座って僕の煎れた紅茶を味わっている月屑さんと、

月屑さんの向かい側のソファーで緑茶を啜っている時列さんを含めた先日の仕事に参加した人達が勢揃いしていた。

月屑さんは仕事の報酬である【梅辻】を渡す為に、時列さんは詳しい説明を聞くためにここを訪れたのだ。
無論、その説明の対象はこの僕だろう。

「刀を眺めるのはもう十分でしょ？ 早く説明してくれないかしら、五月闇君のことを？」

時列さんがやや棘のある言い方で宗識さんをせめる。

ぶつちやけ、その眼光はかなり鋭い。潤さんと同じレベルだ。

「ん？ 説明もなにも『五月闇 命は未来が観える』以上」

「説明になってないし、そのことを詳しく知りたいのよあたしは！
」

宗識さんのかなり適当な説明（最早説明にすらなっていないよな？）
に対して怒鳴る時列さん。

「あたしが知りたいのは　な・ん・で　そんなものが五月闇君に観えるのかってこと!!」

バキッ

「ちょ、手を出すのは反則じゃ「煩い!」うぎゃ」

時列さんは一方的に宗識さんをフルボッコにしている。

これは止めたほうがいいのか・・・?

だけど、すっさまじい気迫で宗識さんを殴り続ける時列さんを僕は止められるのだろうか?

いや、無理だ。絶対に。

ここは、このふたりと同じ世界の住人である月屑さんに止めても
．．駄目だ。この人が乱入したら更に力オスな状況に陥りそうだ。

仕方がない、と覚悟をきめる。

玉砕覚悟だ!

粉碎! 玉砕! 大喝采!!

「時列さん、やめて下さい!　これ以上やったら死んじゃいますよ!
!　これは僕のことですから、僕が説明しますから!」?

「わかった」

そう言って　フッ　と暴行をやめる時列さん。

배터리 と宗識さんは倒れる。鼻、多分折れてるな。

時列さんが暴力を振るうのは宗識さんだけだから、これは一種の愛情表現なのか？

これが、ツンデレ？？

いや、違うのだろう。

こんなのがツンデレならば、全ラブコメ作品の主人公は例外なく殺されている。

「さあ、さつさと教えて。『未来が観える』って何？ 何の比喻？」

. まあ、普通に考えて言葉どおり未来が観えるとは思わないだろうな。

だけど、僕のは違う。

「いえ、そのままの意味ですよ。僕には『未来が観える』んですよ」

「.」

妙な顔をしないで欲しいが、まあ仕方ない。真実なのだから。

「僕は小さい頃に事故に遭って、生死の境をさ迷いました。そして眼が覚めると、後遺症と共に奇妙なモノが観えるようになりました。」

「奇妙なモノ？」

「『数秒先の未来』と『他人の記憶』です。『未来』は僕の意味で観ることができます。が、『記憶』は時々突然観えます」

「突然に？」

「はい。突然に『他人の記憶』が断片的に映像のみが頭の中に流れこんでくるんです。」

『他人の記憶』が観えるのは、当時の僕にはとても辛かった。知りたくないもの、見たくないものが強制的に脳に叩き込まれるのだから。

そのせいで、一時期対人恐怖症と人間不信に陥ったりもした。

正直、今でもその時の悪夢にうなされる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・信じられない」

「でしょうね」

僕は、苦笑した。

こんな眉唾モノの話は、誰だって信じてくれない。

信じてくれるのは、

同じく眉唾モノの体験をした人か、

アタマがおかしい人か、

よっばどのお人よしだけだろう。

そう、まるで宗識さんの様な・・・。

「だけど、あたしは信じる。五月闇君が嘘つくとは思えないし、あの馬鹿が信じてるから。」

「…………っ。ありがとうございます」

やばい。不覚にも泣きそうになってしまった。

ポーカーフェイスの苦手な僕のことだ。

きっと今のこの感情が顔に出ているに違いない。

だからだろう。

時列さんが僕の顔を見て優しく微笑んでいるのは……。

あゝ痛かった（特に鼻！）。

しばらく俺は床に倒れて気絶していた。

理由は単純明快。

今、俺の目の前で命に微笑んでいるポニテの悪魔のせいだ。

どうやら命の能力について説明し終え、時列が信じてくれた様だ。

何故かつて？そりゃあ、命が涙目になって満面の笑みを浮かべているからに決まっている。

今まで誰にも理解されずに苦しんでいた様だから、あいつには少しでも救われて欲しい。

あれ？ そっぴゃ『後遺症』な話したのかな？

「おい命、『後遺症』のこともついでに話したら？」

とか言いながら、自分の鼻が折れてないか確認しつつ起き上がる。

良かった、折れてない。

「あ、そういえば事故の『後遺症』もあるって言ってたよね？」

等と言って心配そうに命を見つめる時列。

その表情はとても女性的で母性が滲み出てる。

俺がいつも知っている、嬉々として俺を殺^ヤりにくる鬼神のごとき笑顔からは真逆の表情だ・・・。

「あゝ。そんなたいしたモノじゃ無いですが、『時間を認識出来ない』という後遺症があります・・・」

と少し恥ずかしそうに命は答えた。

「『時間を認識出来ない』？」

怪訝な顔をする時列。

．．．まあ、良くわからないだろうな。

さてと、今までずっと寝ていたから俺が説明しようか。

「『時間を認識出来ない』ってのはようするに、時計を見ても今が何時かわからないということだ」

「はい？」

「俺達は普段、時計を見て現在時刻を知るだろう？ これは、眼で見た時計の映像を脳で『認識』して時間を知るということだ。 命の場合は、時計等の『現在時刻』を示すモノだけが『認識』出来ないんだよ。ただし、体内時計は正常だし、タイマーで計ったりした時間は認識出来る。とても簡単にいうと、時計の見方だけが絶対にわからないって症状だ」

「．．．．．」

急に黙り込む時列。まさかとは思うが、いまの説明でも理解出来ないのか？

「どうした？」

「あんたってこんなに頭良かったんだ．．．」

．．．．．（――＃）

「でもそれじゃあ、日常生活で支障が出まくるよね？」

「その辺は大丈夫です。
大量のタイマーで代用してますから」

と言った命の学ランの袖やポケットからうじゃうじゃと大量のキツチンタイマーやストップウォッチが溢れ出す。

時計が使えない命にとってはこれくらいの数が必要不可欠なのだろうが、異様な量のタイマーが袖やポケットから溢れ出す様子は正直、何度見ても引く。

時列も若干引いていた。

『未来』や『他人の記憶』が観えることに苦しみ、『時間を認識出来ない』症状を抱えるこいつは、『時間』に徹底的に嫌われている。

それはもう、残酷なまでに・・・。

だが、俺が出会った頃のような暗さは今の命にはない。
ある意味で、俺が唯一救えたヒトかもしれない。

「つゝ訳で説明終了。
もう二度としないからな」

面倒だから。

これで紅梅や時列も命について何の疑問も抱かないだろうな。

そういえば、さつきから妙に紅梅が大人しい。

いくら紅茶を飲んでいるとは言え、一言もしゃべらないのはおかしい。

そもそも、こいつは無表情だがけして無口ではないのだ。むしろおしゃべりだ（全ての声に抑揚がないがだ！）。

何故だ？　と思いついてみると・・・

「ZZZZZZ」

「紅茶を飲みながら寝ているだ！？」

あ、ありえねえ！

「もしかして、月屑さんが起きたらまた説明しなきゃいけないですかね・・・。しかも一から」

命も面倒くさいのか、顔を歪める。

「うむ。それで、後月闇君の『未来を観る』というのはどういったものかね。」

「『うわっ！　ビックリした！？』」

話したそばからいきなり唐突に目覚めやがった！

しかも、最初から話聞いてないし・・・。

溜息をついた俺は、命と共にもう一度説明をすることになってしまった。

しかも、紅梅の理解力は時列以下だった為に、以前の三倍の時間と労力がかかったとさ・・・。

6・END

第録話 嫌われた少年（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

これで、とてもとてもとても短かった『人間試験』編も終了です。

そして、この作品の季節では五月がこの話で終了し、第質話からは六月に突入します。

月屑の妹を始め重要な新キャラが登場し、皆さんがご存知の『あの』原作キャラも登場します。

さて、頑張るか！

原作キャラの口調が若干心配だ・・・（・・・）

第質話 雨と変態と日常

「・・・雨降りそうだな。傘、持って行こう」

鉛色の空を見上げ僕はそう呟いた。

六月四日（火）。

暦は六月に突入し、テレビで昨日、例年より早い梅雨入りが発表された。

僕は、雨の日がそんなに嫌いではない。が、白髪眼帯の請負人（殺人鬼）である宗識さんは毛嫌いしている。

何故かと聞くと、「湿気が多くてジメジメしていて辛気臭いからだそうだ。雨の日は、雨の日なりの趣があるのにわからないのかな？あの人には意外と短気で直情型の思考の持ち主だからその理由はもつともなのだろうが。」

というわけで、僕は傘を持って学校へ向かう。

ちなみに徒歩通学だ。

理由は単純明快。

近いからだ。

テクテクと歩いて行くと廃墟同然の屋敷の前を通る。

まるで東京大空襲をも乗り越えました！とでもいったげなこのボロボロの屋敷は、僕の通う高校の生徒からは「幽霊屋敷」の愛称で呼ばれている。

だが、

「オッハヨ」 ミ・コ・トくん 「ちよつとちよつと、無視しないでくれへんか?! 悲しくなっちゃうやん?」「あ、やつと眼え合わせてくれたああ!! (<|>)」「きゃー! その瞳にシ・ビ・レ・ル」

「.....相変わらず朝っぱらからテンション高いですね?」

「いやいや、何を他人行儀に敬語使ってんやアホ! 二人の間にそないな距離感など不要や!？」

「とゆうか、朝っぱらなんですからあんまり活発化しないでくださいよ。」

幽霊キンムジカンの夜は終わりましたよ」

「何ゆうてんねん!

ワイは、年中無休の24時間フル稼働や。「そして敬語やめゆうとろうが(怒)。このふたりの熱く・深く・濃密な関係にそれは不必要や!!!」

「僕とあなたにそのような気色悪い関係はありませんし、今はあなたが僕の友達であることに激しく後悔していますよ」

「だから敬語やめろおお(血涙)!!」そんなにワイの硝子のハートを痛め続けて楽しいのか!?「プレイ?! ソッチ方面のプレイなのか!!」「あゝ、いくら『年がら年中発情期』の二つ名を持つワイこと唯ちゃんですが流石にそのプレイは.....凄くゾクゾクする(喜)。「あつ、そ、その軽蔑の視線がタマラナイ」

「ああ、殺したい。」

このボロ屋敷に本物の幽霊がいることは、僕以外誰も知らないだろう……。

僕の目の前にいる変態は 【坂巻 唯】サカマキ ユイ。正真正銘現役バリバリの浮遊霊だ。

大きな瞳に小柄な体格、さっぱりとしたショウトヘアのこの少女は、”見た目だけ”なら間違いなく美少女にカテゴライズされるだろう。

だが、黙っていれば美少女だろうが、かなりおしゃべりでうるさく下ネタ大好きなDMという救いようのない変態だ。

何故、僕が幽霊と友達になったのかというと、

普段なら幽霊なんて一切見えないはずの僕が、何故か彼女だけハッキリ見え、声も聞こえ、幽霊だと気づかないまま話し掛けたのが原因だ。

彼女は僕が自分を見えると知ってしまったことから、毎日毎日つくづく「友達になろう」と話し掛けられ、なし崩し的に友達になった。

……今ではそのことを後悔しない日はない。

「で、どうしたのさ？」

僕、何かしたっけ？」

「いやいや、ただの挨拶やで？ そんなじゃ、まあ、今日も学生生活楽しめや〜」

そう言って幽霊なのにすたすた歩いてどこかに行ってしまった。

僕は、フツと軽い溜息をつく。

唯との会話も毎朝の恒例事項と成りつつあることに少し嘆きながら、僕は学校へ急ぐのであった。

）『裏柳請負人事務所』（

「くうああ」。・・・眠い」

朝の眠気を欠伸と共に噛み締め、俺は事務所を開く。

本日、六月四日（火）。

ニュースで梅雨入りが発表された翌日である。

事務所の窓から眺めた空は、曇天。
じめじめしていて嫌な天気だ。

そういや、あの普通の擬人化の様な外見の少年 命は雨の日が好きだそうだ。何故かと聞くと、「雨の日の町並みはいつもと違う趣があつて面白いから」だそうだ。なんと前向きで好感度が上がりそうな理由だろう。

無論、そんなスバラシイ思考回路を俺は持ち合わせていない。

だから、こんな日はただただ憂鬱になるだけだ。

ぐきゅるううゝ

「腹減ったゝ」

まだ朝飯くつてねえや。

よし、近くのローンにお握りでも買いに行こう。

ん？ お前は料理出来ないのか って？

当たり前だ。全く、どこの誰が「一人暮らしの奴は料理が作れる」
つつゝことを常識化させたのか？

全く、迷惑極まりない。

とか考えていると、

）　　）　　）

携帯の着信音が鳴り出した。

この音からすると電話だな。

俺はジープンのポケットから携帯を取り出し、開いて相手の名前を見る。

『零崎 双識』

ピッ

ツーツーツー……………。

……………。

咄嗟に電話を切ってしまった。

いや、別に双識の兄貴が嫌いではないんだよ？

『零崎』になったばかりの時に、随分お世話になったし感謝もしている。

善悪でいったら、100%善人だし。

ただな。何と無く近寄り難いというか、関わりたくないというか？

変態だからか？

でも、流石に次に掛かってきたら電話にしよう。一応大切な家族だから

）

『零崎 双識』

ピッ

ツーツーツー……。

何故だろう？俺が意識する前に、親指がソッコーで切りやがった。俺の中の本能が、「こいつにだけは関わるな！変態だから！？」とでもシャウトしているのか？

）

あ、メール。

『【零崎双識】

うふふふふふ

次に切ったら犯しちゃうぞ？』

）
）

ピッ

「もしもし、おはようございます。お久しぶりです、双識の兄貴。」

『うふふふふふ。おはよう、そして久しぶりだね宗識くん？』

携帯から聞こえるこの声は、間違いなくあの”変態の中の変態”
キングオブ変態”である我が兄、零崎 双識のものであった。

く直江津高校く

昼時。

4時限目が終り、昼休みに差し掛かると

「ミコト、俺達と飯を食わないか？」

と、我が親友【秋沼 彰】アキヌマアキラが声を掛けてきた。その後ろには委員長もいる。

「もちろん」

この高校へ進学してから約二ヶ月。

昼飯を彼等と食べることが定番になっていた。

ふたりは、適当に空いている席を寄せて、僕の机にくっつける。

そして、僕や彰も委員長も各自で弁当を取り出す。

．．．．．三人で弁当を食べる時にいつも不思議に思うことがある。運動部所属で、僕よりもガタイのいい彰より、女の子で何の部活やバイトもしていない委員長の弁当がデカイのだろうか？

彰の量だって、僕の弁当の1．5倍はあるのに、彼女のは彰の2倍程度もある。それなのに、彼女は僕以上に小柄だ。どこにその大量のカロリーが消えているんだ？

「そっぴゃ、ミコトは知ってつか？ ああ、噂」

弁当を食いながら、彰が僕にこう聞いてくる。

所謂、雑談の種みたいなものである。

「噂？」

僕のリアクションに「そんなことも知らないのか？」という表情をつくる彰。

その彰の代わりに、委員長が言葉をつぐ。

「ミコトくん知らないの？ あれだよ、女子バスケの先輩の引退の噂。まだ二年生の夏なのに？ 不自然でしょ？」

ああ、その噂か。

その噂なら、いくら”その手”の情報に疎い僕も知っている。

県下一の進学校であるウチの弱小女子バスケットに入った、正真正銘前代未聞のバケモノプレイヤー。

彼女たったひとりのおかげで、昨年の大会はいいとこまで行ったそうだ。

そんな人が、こんな時期に突如引退をするという噂だ。

「というか、本当のことなの？」

あくまで噂。

偽の情報の可能性もある。

むしろ、そっちの方がしっくりくるし？

「その点の信憑性は高いぜ？ 何せファンクラブの連中が騒いでんだからよ」

委員長の代わりに彰が僕の問いに答えた。

ん？ ”ファンクラブ”？

「ファンクラブって？」

「その先輩の非公式ファンクラブで、犯罪スレスレのこともしているらしい（会員は全て女子）。俺も詳しくは知らないが、委員長は知ってんじゃないのか？」 そっち系”だし？」

確かに、委員長の趣味は”あれ”だが、決して”そっち系”ではない。なぜなら・・・。

「違う。私は、現実リアルな女に興味は無い！ 私が萌えるのは非現実ニジゲンの美少女だけだ！！」

出た！ 名ゼリフ！

そう、委員長は所謂腐女子だ。それも筋金入りの。

興味があるのは、二次元美少女と二次元イケメン。そして、三次元のイケメン執事。あとBL

「・・・何でそんな趣向をそこまで大声で主張出来るのか、俺には理解できん」

「僕も彰の意見に同意」

普通そこまで、声高に宣言できるものか？

「あ、そうだ。

例の文化祭でやるイベント、クラスアンケートで通ったよ。」

委員長のその言葉を聞いた瞬間、彰の顔からサアツと血の気が引いた。

恐らく僕の顔からも引いた。

「「嘘だ！僕（俺）は信じない！？」」

「嘘じゃないって

これでウチのクラスの出し物は…………ふふふ」

最悪だ。これで僕は文化祭で”あんな格好”をしなければならなくなってしまった。

……………せめて、知り合いに出会わないことを祈ろう。

そう思って、僕は彰とマリアナ海峡の様に深い溜息をついたのであった。

）『裏柳請負人事務所』）

『……うふふ　それで伊織ちゃんがね（中略）で、かわいく
て（割愛）』

ぐぎゅるるうゝ

「あのゝ双識の兄貴？」

『なんだい？』

「その『伊織ちゃん』という新しく出来た妹が可愛いのは十二分に
わかった。

だから、もう電話を切っていいか？

もうかれこれ５時間は通話中なんだから！！」

今朝かかってきてから、朝食を摂る暇も与えられず、『伊織ちゃん』
とかいう新しい妹の自慢話を延々と続けられ、もはや昼飯を摂るべ
き時間になってしまった。

早く、早くこの生産性ゼロの不毛な会話を終わらせたい！！

腹の虫が鳴くどころか、魂の叫びを響かせている。

『もう、たったら時間じゃないか？まだまだ』

「……………切ります」

そういつて、俺は電話を切ろうとする。
すると

『あゝ、そういえば、宗識くんに依頼があつたんだつた！』

…………依頼？

『実は、人識くんが伊織ちゃんと一緒に行方不明になっちゃったから、探して連れ戻して欲しいんだ。頼める？』

あの人識が？

重度の放浪癖があつて、あまり他人に干渉したからない人識が？

新しく出来た妹を連れていなくなる??

「絶対に連れ戻せるかどうかはわかりませんが、やるだけやってみます。」

『そう。よろしく頼む。』

あ、そうそう、それで伊織ちゃん』

自慢話が続きそうだった為に切りました。

さて、人識を探すといつてもアイツの行動パターンなんざ知らねえ
いし、ぶっちゃけ探し当てる自信がない。
はてさて、アイツは今どこにいるのか？

熊本でいきなり団子を食ってんのか、それとも北海道で生キャラメ
ルに舌鼓をうってんのか？

ぐぎゅるるうゝゝ

．．．．．そんなもん後回しにして飯だ、飯！

さて、今からローソ に行つてく．．．．．

「邪魔をする。宗識は居るか。」

「．．．．．紅梅、てめえはこのタイミングで何しに来た？ 双
識の兄貴と手を組んで俺の食事を徹底して邪魔するつもりなのか？

(ー ー #) 「

「むしろ、私が零崎双識などという大物とあつてみたいのだから。」

このクソ悪いタイミングで、我が事務所を訪れたのは、『KY変人
鉄面皮』こと紅梅月屑だ。

いつもと同じ暗い色のスーツに、いつもと同じ無表情なこの男。
だが、少しいつもと違う所がある。

「外、雨降ってんのか？」

「ああ、降っている。」

「傘もささずに走って来たのか？」

「ああ、そうだ。」

紅梅のスーツの前面が濡れているのだ。

自身の身嗜みに対しては、常に気をつけている紅梅らしくもない。
「それより、どこかへ行くのではなかったのか。」

「あ？ まあ、近くのコンビニに行こうかと……。」

「ならば、すぐに行け。その間、私が留守番しておくのでな。」

おいおいおいおいおいおい！！

どういう風の吹き回しだ？

コイツが、なんでこう協力的なんだ？

以前俺が留守番を頼んだ時なんて、「貴様の都合を私に押し付けるな。」って言っていたのに？！

怪しい、怪し過ぎる……。

「む。どうした。行かないのか。」

「ん？ あ、いや、じゃあ行くよ。留守番頼む」

「うむ。確かに頼まれた。」

いつもと違う紅梅の態度に若干の不安を感じながらも、俺はーソンにむかった。

事務所のあるビルから出ると、紅梅の言った通り雨が降っていた。傘を広げてビルを出る。

ぶっちゃけこのビル、立地条件が異様に良い。徒歩5分先に駅があり、ビルの隣の隣に例のロソンがある。更に、図書館と本屋も近い。こんな立地条件のいいところにあるビルに事務所を入れたのはやはり、ビルのオーナーである時列のお陰だ。本人には言えないが内心感謝している。

相変わらず雨は割と激しく降り続く……。

そつえば、今、紅梅は走って来たんだよな？傘を忘れてしまったのか？

いや違う。手ぶらだったけど、『紅梅流暗器術』があるから傘を常備していたはずだ。それなのに、傘をささずに走るか？

むしろ、走るのに邪魔だから傘をささなかったのか？これならしくりくる。

だが、何故走らなければいけなかったのか？

うーん。そつだな。

例えば、

「……………何かから逃げていた」とか？」

な〜んて考えていたら、ロースンに到着した。

ここからは、一回思考をリセットしよう。
じゃないと、お握りの具を選ぶのに支障をきたす。

くくく

お決まりのチャイムと共に中へ入ると、

「いらつしゃいませ」（棒読み）

何とも誠意の籠ってない店員の挨拶が聞こえてきた。

全く、やる気がないなら仕事をするなよ？

「ん？」

あれ？おかしいな？聞き違いか？

そのレジに立っていて、さっき「いらつしゃいませ」（棒読み）
「つつた店員の声が」とある知り合い”にそっくりだ。

まさかアイツがここにいるわけないだろう。あのニートが、あの縦
縞の制服を着て働いているはずがないだろう。本当ならまさかのご
都合主義だろう。とか思いながら、近付いてそいつの顔を真正面か
ら見る。

その店員の容姿は、
斑に染めた髪、
右耳に三連ピアス、

左耳にストラップ、

160?程度の小柄な体格、

そして、顔面刺青。

その店員は、どっからどう見ても間違いないく……

「……人識!」

「げっ!? 宗識にーちゃん!?」

”とある知り合い”その人であった。

俺はこう思った。

事実は小説より都合主義なり。

ザザザザザザ

昼頃から降り出した雨は、僕が下校する時までには止まなかった。

今朝、直感で持ってきた傘がとても役に立った。

こうして僕は、バイト先である『裏柳請負人事務所』に向かう。

雨の降りしきる歩道を傘をさして歩いて行くと、前から傘もささずに歩いてくる人影があった。

おかしいな、こんなに雨が降ってるのに傘もさしてないし、急いでいる様子もないなんて？

じよじよに近付いてくるその人影の正体は、

「あ ミコトくんやん 奇遇やね」

「……………残念なことに奇遇ですね。」

変態の擬人化、坂巻唯だった。

幽霊だから傘をささなくてもよかった様だ。

「うふふふ。こんなロマンチックな雨の日に偶然街角で出会ってるんで、きつと、ワイとミコトくんは運命の赤い糸で結ばれているんじゃない」

「その意図はここで切れますよ」

この前に宗識さんが言っていた『シグナルイエロー危険信号』というらしい人物の決めゼリフを使ってみた。

何故かって？

だって、『あなたの意図は、ここで切れます』なんてカッコイイじゃない？

「うー。ミコトくんともつと話したかったんやけどワイは友達と約束があつて行かなきゃならんのや」

「え？ 友達なんているの？」

この変態に友達がいるなんてびっくりだ。

「同じ浮遊霊仲間や。そゆわけで、さいなら」

とか言つて、さつさと唯はいつてしまった。一体、僕には何で話しかけたんだろう？

あ、唯が戻ってきた。

「あー、言い忘れるとこだった。あともう少し行った先に、”かわいいそう”な女の子がいるから助けたって？」

と言に残して、今度こそ唯はいなくなった。

”かわいいそう”な女の子？

唯が”かわいそう”って言っているのだから、普通の意味ではないだろう。

じゃあ、どんな意味だ？

そう考えながら、少し道を進むと唯の言ってた意味がようやくわかった。

長い髪の（僕より年上の）女性が、雨の降る中、傘もささずにずぶ濡れになりながら、地面にしゃがんで泣いている…………。

「うえっ、ええっ、ひっく、ううっ、えっく」

「……………」

どうやって助ければいいんだ！！

難易度高すぎるだろ！？

とりあえず、話しかけるか？

だが、それでもかゝなりの勇氣が必要だ。だってこんな余りにも悲しげな女性になんて話しかければいいんだよ？

あるいは、見捨ててしまおうか？

ただどなんというか、もし見捨てたら罪悪感で心を粉々にされてしまう様な光景だ…………。

どうしよう。どうしよう。どうしよう。

[illegible]

ええい、話しかけてしまえ！！

「あの、どうしたんですか？」

「うえっ、ううゝ、道に、まよ、ってしまっ、てえゝ」

顔を上げたその女性は、凄い美人だった。

「僕でよければ力になりますよ？」

「うえっ、ひっく、じゃあ、

裏柳請負人事務所

「って、どこにあるんですか？」

・
・
・
・
・
・
僕のバイト先じゃん。

7
·
E
N
D

第質話 雨と変態と日常（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

えーと、今回の話でミコトの周辺関係を明らかにしようと思って書きました。

タイトルに、『変態』ってついてますが、

『ついに、双識さんがでるのか！』

と、期待した双識ファンの皆様どうもスイマセンでした。電話だけです。

第8話 雨と例外と日常

「うえ、ひつく、じゃあ、『裏柳請負人事務所』ってどこに、あるんですか？」

「．．．．．あの、そこは僕のバイト先なんです。よかったら案内しますよ？」

「はへっ??？」

僕の言葉に、彼女は一瞬ポカンとした表情をした。

そして僕の顔をまじまじと凝視する。

「．．．．．あの、そんなに見られると困るんですが？」

「あ、ああ、いえ、ご、ごめんなさい。あ、あの本当に案内して下さいませんか？」

彼女は、怯えた羊の様な、いや違う、疑う様な視線を僕に向ける。

そりゃ、『都市伝説』でバイトしている一般高校生なんて普通居ないだろうし。

「はい。大丈夫ですよ。

でも、貴女はあそこに何を依頼するんですか？内容によってはお連れ出来ないのですが．．．」
「（；）」

先日、宗識さんは僕にこう言ったのだ。

『お前が依頼人を連れて来るのはいいが、依頼内容だけは確認しろ。その内容が、行方不明のペットを探せ、とかだったら即刻断れ。特に猿は！』』

そのことに關して、月屑さんは知らないそうだし、時列さんにかぎっては笑いを堪えるのに精一杯で教えてくれない。

無論、宗識さんは頑として口を割らなかった。

宗識さんに一体何があったのだろうか？

「あの、えと、その．．．行方不明の兄を探す為に．．．」

「ペットじゃないから大丈夫ですね」

「はえ？ ペット？」

おっと、口が滑った！

「いいえ、なんでもないです。」

とりあえず、こうして僕は彼女を事務所まで連れていくことになった。

．．．．．それにしても、彼女、凄い美人なんだけど誰かに似ているような．．．．．？

「裏柳請負人事務所」

「・・・・・・・・・・。」

「ん？ どうしたんだ、紅梅？」

「宗識よ。私は今、青少年拉致誘拐事件を目撃している。」

「いや、どこにそんな奴がいるんだ？」

「・・・・・・ならば聞くが、貴様が背負っているその”ロープでがんじがらめに拘束され、更にはガムテープで口封じされている少年”は一体何だ。」

「ああ、コイツは俺の弟だから大丈夫。」

「うむ。そうか。確かに身内ならば合法的だ。」

「ふごつ、フゴフゴ、フゴ、ふがつ、フンガー！！（いや、いくら身内でもこれは明らかに非合法の犯罪行為だって！！）」

現在『裏柳請負人事務所』で、バイトをしていたところを無理矢理取っ捕まえた人識を、俺と紅梅がからかっていた。

ついさつき、某全国チェーン店のコンビニでは、人識が素直に捕まらないため、結構な大捕物が繰り広げられた。

そして、店長さん（39歳・独身）が俺が思いつ切りぶん投げた『盲導犬の育成のために』と書かれた募金箱（小銭が予想外にいっぱい入っていた。）をくらい昏倒。平日の昼間であつた為、他にもサラリーマン風の男性と、頃合いを見て強盗をする予定だったらしい包丁を隠し持った中年オヤジが尊い犠牲となった。

無事に人識を捕獲した頃には、コンビニ店内は惨々たる有様になった。

まあ、その後全部の責任を強盗未遂のオツチャンになすりつけて警察に引き渡したのだが……

「ふが、フンガー、ふが（俺はバイトクビだな）」

……人識は確実にクビだろうな。

縦縞の制服をきたままの人識を、とりあえず応接間のソファーにぶん投げとく。無論、拘束した状態で。

「さて、これで双識の兄貴からの依頼は完了だな」

「ふがー！　ふごつフゴ、フンガー！！！！（あ、兄貴の依頼だと．．．！　い、嫌だあの変態のところへは行きたくない！！！！）」

聞き取り辛え。

そう思つてガムテを思いつ切り剥がす。

「いつてえ！！」

まあ、当然だろうな。

「人識、二・三お前に聞きたいことがあるから答えろ」

「拒否権は？」

「あるわけないだろ」

「ちっ」

舌打ちした人識に、若干イラついたがそれぐらいは我慢する。

まず、１番聞きたいことといえば．．．

「お前、良く哀川さんに狙われて生きてるな？
実際、どうしたんだ？」

人識は、先月京都でおこなわれた『京都連続通り魔殺人事件』の犯人（まあ、人識本人から聞いた訳ではないからあくまで”恐らく”だが）で、”この事件を終わらせる”という依頼を、”あの”天下無敵の請負人 哀川潤が受けた。

それなのに人識は、哀川さんとの追いかけつこの傍ら『早蕨事件』にも首を突っ込んだ挙げ句、今もこうして生きている。

いくら、哀川さんは『人類最強の請負人』の謳い文句であるにもかかわらずに、依頼の達成率が著しく低いとはいえ、十人以上も殺したコイツをのうのうと生かしておく義理はない。

「は？　なんで哀川潤が俺を狙ってることを宗識のにーちゃんが知ってんのさ？」

「だって、哀川さんが京都に殺人鬼を狩りにいくっていったから」

「ちょっとまで、俺が京都の通り魔だって宗識のにーちゃんには一言も言っていないよな？」

だとすると、あんまり考えたく無かったがもしかして『哀川潤が京都に通り魔を狩りに行くのを、その通り魔が可愛い自分の弟なのを知っているが止めなかった』のか？」

「違う」

「そ、そうだよなやっぱり。」

人識はほっとしたように胸を撫で下ろす。

「お前は可愛くない」

「見捨てやがったなてめえ!!」

「馬鹿野郎！」

あの人に喧嘩ふっかけて勝てるわけねえだろ!!
てめえの為になんて命かけられるか!!？」

「そうか！それならやってやろうじゃねえか!!表に出ろ、殺して
解して並べて揃えて晒してやんよ!!!!」

「おう、ぶつとばしてやらあ!!？」

くお見苦しいシーンが流れているので、しばらくお待ちくださいく

「はゝはゝ。なあ、人識」

「ぜゝはゝ。なんだよ？」

「もうやめにしようぜ？」

お互いの古傷やトラウマを逆なでしあうの。」

「あゝ、うん。こっちこそごめん」

「いや、お前が謝る必要ねえよ」

・・・実際にやったのは、『お互いの嫌な思い出を引っ張り出し

て、それを元にして悪口を言い合う』ということだった。

だってさ、人識がぐるぐるに拘束されてるから、暴力を奮うのはフエアじゃないじゃん？

新たに開拓した俺の新境地

『フエアな殺人鬼』

まあ、戯言だな。

というか、もう次の質問をする気が失せた。

だから、今まで空気だった紅梅に話を振ってみる。

「なあ、紅梅？さっきから何やってんだ？」

紅梅は自身の得物の二丁拳銃の内のひとつのリボルバーの弾丸を取り替えていた。

「必要があるからだ。」

「必要？」

紅梅にとってリボルバーに装填する弾丸には重大な意味がある。

オートマチックに装填されているのはごく普通の弾丸だが、リボルバーに装填されているのは罪口製の特殊弾だ。

射出した瞬間に無数の小さな弾丸に分裂し、あたり一帯をねこそぎ

にする《SPREAD》の弾丸や、殺傷能力を犠牲に貫通力を極限にまで高めた《PENETRATION》の弾丸等がある。

紅梅の戦法は、オートマチックで基本攻撃、そしてリボルバーで奇を狙う。

時にリボルバーを匔にオートマチックで敵を仕留め、時にオートマチックを匔にリボルバーで敵を仕留める。

フェイクの中に本命を仕込み、本命の中にフェイクを仕込む虚実一体の銃撃が紅梅月屑の戦闘スタイルだ。

その中で、リボルバーには相手との相性や多彩な戦況に対応するために様々な種類の弾丸を装填しておかなければならない。

だが、今紅梅は、全ての弾丸を《I》のインシヤルが入った弾丸に取り替えているのだ。

特殊弾には、ひとつひとつにインシヤルが彫られている。《PENETRATION》には《P》、《SPREAD》には《S》という具合に。

そして俺が知っている限り、《I》のインシヤルの弾丸は《IMPACT》しかない。

《IMPACT》の弾丸は、貫通力が皆無だが、着弾時の衝撃が尋常ではない。

銃弾の貫通力を完全に捨て、衝撃を極限まで大きくしたのだ。

その威力は、一撃で三？の鉄筋コンクリの壁に直径一？の円をぶち抜く程。

威力が高すぎる為に、紅梅は”対物用兵器”として主に仕様している。

「……だが、俺は知っている。対物用兵器」というのは本当の使い方ではないことを。」

「そもそも、紅梅がこの弾丸を罪口に注文した本当の用途目的は、

对
”
妹
”
用
兵
器

「……紅梅、まさか陽埃から逃げているんじゃないよな？」

俺は恐る恐る紅梅に質問する。

1
 2
 3
 4
 5
 6
 7
 8
 9
 10
 11
 12
 13
 14
 15
 16
 17
 18
 19
 20
 21
 22
 23
 24
 25
 26
 27
 28
 29
 30
 31
 32
 33
 34
 35
 36
 37
 38
 39
 40
 41
 42
 43
 44
 45
 46
 47
 48
 49
 50
 51
 52
 53
 54
 55
 56
 57
 58
 59
 60
 61
 62
 63
 64
 65
 66
 67
 68
 69
 70
 71
 72
 73
 74
 75
 76
 77
 78
 79
 80
 81
 82
 83
 84
 85
 86
 87
 88
 89
 90
 91
 92
 93
 94
 95
 96
 97
 98
 99
 100
 101
 102
 103
 104
 105
 106
 107
 108
 109
 110
 111
 112
 113
 114
 115
 116
 117
 118
 119
 120
 121
 122
 123
 124
 125
 126
 127
 128
 129
 130
 131
 132
 133
 134
 135
 136
 137
 138
 139
 140
 141
 142
 143
 144
 145
 146
 147
 148
 149
 150
 151
 152
 153
 154
 155
 156
 157
 158
 159
 160
 161
 162
 163
 164
 165
 166
 167
 168
 169
 170
 171
 172
 173
 174
 175
 176
 177
 178
 179
 180
 181
 182
 183
 184
 185
 186
 187
 188
 189
 190
 191
 192
 193
 194
 195
 196
 197
 198
 199
 200
 201
 202
 203
 204
 205
 206
 207
 208
 209
 210
 211
 212
 213
 214
 215
 216
 217
 218
 219
 220
 221
 222
 223
 224
 225
 226
 227
 228
 229
 230
 231
 232
 233
 234
 235
 236
 237
 238
 239
 240
 241
 242
 243
 244
 245
 246
 247
 248
 249
 250
 251
 252
 253
 254
 255
 256
 257
 258
 259
 260
 261
 262
 263
 264
 265
 266
 267
 268
 269
 270
 271
 272
 273
 274
 275
 276
 277
 278
 279
 280
 281
 282
 283
 284
 285
 286
 287
 288
 289
 290
 291
 292
 293
 294
 295
 296
 297
 298
 299
 300
 301
 302
 303
 304
 305
 306
 307
 308
 309
 310
 311
 312
 313
 314
 315
 316
 317
 318
 319
 320
 321
 322
 323
 324
 325
 326
 327
 328
 329
 330
 331
 332
 333
 334
 335
 336
 337
 338
 339
 340
 341
 342
 343
 344
 345
 346
 347
 348
 349
 350
 351
 352
 353
 354
 355
 356
 357
 358
 359
 360
 361
 362
 363
 364
 365
 366
 367
 368
 369
 370
 371
 372
 373
 374
 375
 376
 377
 378
 379
 380
 381
 382
 383
 384
 385
 386
 387
 388
 389
 390
 391
 392
 393
 394
 395
 396
 397
 398
 399
 400
 401
 402
 403
 404
 405
 406
 407
 408
 409
 410
 411
 412
 413
 414
 415
 416
 417
 418
 419
 420
 421
 422
 423
 424
 425
 426
 427
 428
 429
 430
 431
 432
 433
 434
 435
 436
 437
 438
 439
 440
 441
 442
 443
 444
 445
 446
 447
 448
 449
 450
 451
 452
 453
 454
 455
 456
 457
 458
 459
 460
 461
 462
 463
 464
 465
 466
 467
 468
 469
 470
 471
 472
 473
 474
 475
 476
 477
 478
 479
 480
 481
 482
 483
 484
 485
 486
 487
 488
 489
 490
 491
 492
 493
 494
 495
 496
 497
 498
 499
 500
 501
 502
 503
 504
 505
 506
 507
 508
 509
 510
 511
 512
 513
 514
 515
 516
 517
 518
 519
 520
 521
 522
 523
 524
 525

紅梅は沈黙する。

・
・
・
・
滝のような冷汗をかきながら。

「その沈黙は肯定と受けとった！！ さっさと出て行け！！！！」

「貴様、友人を見捨てるのか。」

「そんな場合じゃねえだろ！！」

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイ！！

あ、アイツがこんな場所に來たら間違いないく……

「この事務所がスクラップになっちまう!？」

突然騒ぎ出す俺達の空気について行けない人識は困惑しているが、そんなことに構っている暇はねえ!

紅梅バケモノ妹が来る前に紅梅兄ワザワイノゲンキョウを追放しなければ!!

ガチャ

「むな．．．じゃなくて数奇さん、依頼人を連れて来ました」

あ、もうそんな時間か。

ちょうどよかった。命にも紅梅兄を外に放り出す手伝いをさせよう。

俺はそう思っ、命の方を見る。

．．．．そして、時間が止まった。

命の隣にいる女性を見て、普段は表情の変化に乏しい紅梅ですら
サー　と顔から血の気が引いていくのがわかった。

ん？　どうしてかって？

そりゃあ、決まっているだろう。
そこにいる女性は・・・

「・・・紅梅コウバイカゲチリ陽埃・・・」

僕は依頼人（仮）の女性を連れて、『裏柳請負人事務所』の前まで
来た。

『貴様、友人を見捨てるのか。』

『そんな場合じゃねえだろ!!』

『この事務所がスクラップになっちまう!?!』

．．．．何故だろう。事務所の中が騒がしいな？

声からすると、月屑さんもいるらしい。

とりあえず、中に入って見よう。

ガチャ

「むな．．．じゃなくて数奇さん、依頼人を連れて来ました」

といって、僕と女性が中に入った。

何故か言い争っていた宗識さんと月屑さんが、僕の連れて来た女性を見た瞬間。

．．．．そして、時間が止まった。

．．．いや、実際に止まったわけじゃないよ？
止まった様に感じただけで。

目に見えて宗識さんと月屑さんから血の気が引いていく．．．。

「……………紅梅　陽埃……………」

へ？『紅梅』？

そして次の瞬間。

ドゴンッ

と日常生活では到底聞かない様な音が響いた。

一体何の音だろうと思い、音のした方に目を向けると……………

事務所の中にクレーターが出来ていた。

そのクレーターの中心にいるのは、長い柄のスマートな大槌を突き立てた、僕の連れて来た女性だった。

「「は？」」

状況についていけない僕と、何故かロープでぐるぐるに拘束されている顔面刺青の少年の声が被る。

そして、そのクレーターの場所に先程までいたのは……………月屑さん。

「月屑さん！？」

僕は焦る。

まさか、月屑さんは……。

「うむ。大丈夫だ。」

月屑さんは、上手く避けたようだ。少し安心した。

「……………やっと見つけたよ、”兄貴”。よくも私をあんなところ置き去りにしてくれたなあああ！！」

女性は、先程までの弱々しいキャラからは想像出来ない雄々しい叫びを響かせ、クレーターから引き抜いた鉛色の大槌を月屑さんに向かって横一文字に薙ぎ払う。

月屑さんはバックステップでそれを避けるが、その大槌を振った付近の物は、風圧によってネコソギになった。

……………何だこれは？

あまりにも”例外”だ。

例外過ぎる強さだ。

以前、一度だけ会ったことのある潤さんも本気を出したらこのぐらいなのだろうか？

潤さんは、何をしていかなくとも身体から”強さ”（？）みたいなモノが滲み出ていた。なんか”臭い”みたいなのが。

だけど彼女は違う。

彼女が先程まで纏っていたのは”弱さ”だ。

とても弱々しい雰囲気が月屑さんを見た途端、どうしようもなく獐
猛な”強さ”に変わったのだ。

例えるならば、いきなり雀が鷲に変化した様なものだ。

「話を聞く気はないようだな。
ならば仕方ない実力行使だ。」

大槌を振り切って隙の出来た彼女に、月屑さんが蒼い拳銃を向ける。
色は同じだが、以前僕に向けられた物とは違うリボルバータイプの
拳銃だ。

そして、何の躊躇もなく月屑さんは引き金を引いた。

ドゴンッ

これまたおよそ日常では聴くことの出来ない様な音とともに、月屑
さんに撃たれた彼女は”壁際まで吹っ飛んだ”？！

そこに月屑さんは、更に容赦なく弾丸を叩き込む！！

だが、彼女も初撃のダメージから即座に立ち直り、次弾はその手に
持った大槌で弾き返す。

彼女によって弾かれた弾は、床や壁に着弾するなりー？級のひびや
クレーターをつくりだし、事務所の中はどんどん壊れていく。

先程の顔面刺青の少年は逃げる為に必死に縄抜けを試み、一方、この事務所の持ち主である宗識さんは・・・

「てめえらしい加減にしろおおおおおおおおおおお！！！！」

・・・キレた。

『バットエンド最終決定』を振りかぶり、彼女と月屑さんを思いつ切りぶん殴り、気絶させた・・・。

とりあえず、こうして後に『裏柳請負人事務所内紅梅兄妹事件』と呼ばれるこの出来事は、一旦幕を閉じた。

嵐が過ぎ去った後の事務所は、もはや廃墟の様な有様になっていた。

その廃墟じみた事務所の中で、俺は紅梅兄妹を説教していた。

「……そもそも、人の職場でこつも盛大にバトってくれるっつのはどういっ了見だ？ ああ？」

「あゝいや、えゝと、”兄さん”の姿を見たら……………」
「つい？」

「陽埃の姿を見たらうつかり引き金を引いてしまつて。」

「ほほう。ついつい、うつかりうちの事務所を廃墟にしてくれやがつたと？」

「「ごめんなさい」「

即座に兄妹そろつて土下座した。

……とても綺麗な土下座だった。

さて、この二人をどう料理してくれようか（^ー^＃）。

「あのゝ。宗識さん、おとり混み中すいませんが、その女性はいっ
たい？」

俺の思考が、残酷な方向へ走り始めた時に、都合よく命が俺に疑問をぶつけてきた。

どうやら、命はコイツを案内してきただけで、詳しいことは知らなかったらしい。

「コイツの名前は、紅梅 陽埃。紅梅月屑の妹だ。」

良く見れば、顔も似ている。

「で、ついでに紹介するが、そこにいる顔面刺青の不審者の少年は、俺の弟の人識。あんな身長でも命より年上だからな？」

「おい、宗識のーちゃん？ 今なんつったこら（怒）」

あゝ、やっぱり気にしてたのか”身長”。

よし、ここは・・・

「人識、男の価値を決めるのは身長だけじゃないぞ？」

「そうなのか！」

「嘘に決まってるんだろ？男の価値は身長で決まるんだよ！」

「このヤロウ！？」

その傷に塩を塗り込んでやった。

毎度、とてもいいリアクションを返してくれるから、人識はからか

いがいがあつて面白い

そして、何気に気がついたが命は陽埃に疑念の視線を送っていた。

．．．．．まあ、理由は想像出来るが。

「命。紅梅妹は、戦闘時とそれ以外の時とで性格をスイッチみたく切り替えてるんだ。だからそんな不審な視線を向けるな。紅梅妹が怯えてる」

「へう！？ あう、い、いや、おお怯えてなんかいませんよ??」

おゝ、見事に怯えまくってんな。

戦闘時は哀川さん並に好戦的なのに、平時は異様に気弱なんだよな。

「あ、そついや紅梅妹？」

「ひえ、うう、な、何ですかあゝ」

「何が原因でお前ら喧嘩したんだ？」

そもそも、この気弱な妹は余程のことがないと喧嘩なんてしないのに．．．。

まあ、その”余程のこと”をよくしかすのが紅梅兄なのだな。

「ああ、それは以前に『夕霧』を始末した事件があつただらう。」

妹の代わりに兄が答える。

「ああ、そうだな」

「その時に、”相性が悪いから今回は留守番している”と私が言ったにも関わらず無理矢理戦いに行こうとしていたから．．．「していたから？」．．．両手両足を固定して富士の樹海に放置してきたのが原因だろう。」

「何してんだよ馬鹿野郎！！」

どんな拷問だ！！

「ううゝ、夜になるとあちこちからお経や声が聞こえてきたりして、本当に怖かったんですよ（涙）。」

そりゃ怖かっただろうな。

あまりにかわいそうだ。

「とりあえず、紅梅兄は紅梅妹に謝っておけ。今回も明らかにお前が悪い」

「うむ。そうだな。」

陽埃、すまなかった。」

「え、あ、うん。」

こっちこそ、ごめん」

これで、とりあえずは、兄妹喧嘩はおしまいだな。

この一件に懲りて紅梅兄も、あんな酷いことはなくなるだろ．．．

「だが、必要に迫られれば私は、また陽埃を樹海に放置するぞ。」

「てめえは、もっとしっかり反省しやがれ!!」

こうして、俺のささやかな日常は過ぎていったとさ・・・。

無論、事務所の修理費は紅梅に全額請求しました。
当然だよな？

く???く

「・・・・・・・・ただいま」

「おやおや、お帰りなさい、人識くん」

「・・・・・・・・メシ、買ってきたぞ」

「おお、今回は賞味期限が大丈夫なモノですね！」

「・・・・・・・・そうだな」

「あれ、人識くん？」

「どうしたんですか？」

「いつもより暗いですよ？」

「・・・・・・・・今日、宗識のにーちゃんにあった」

「あゝ、確か前に人識くんが、『妙に普通の零崎』と言ってた人ですよね？」

「その人にあつたんですか。よかつたじゃないですか？」

「・・・・・・・・それで、バイトクビになった」

「・・・・・・・・。。。」

「ちなみに、そのメシが退職金代わり。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・・・人識くん？」

「・・・・・・・・・・何だい、伊織ちゃん？」

「歯を食いしばって下さい」

「ごめんなさい!-!-」

8・END

第8話 雨と例外と日常（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。妖怪みたいな名前の作者です（笑）。

今回出した、人識の口調があっているか気になります。

ところで、紅梅月屑初登場時から【名無し三等兵】さんから『紅梅の兄弟』について質問を受けていたのですが、今回になりようやく登場です。

いかがだったでしょうか？

それと、本日から月屑の使用している罪口製の特殊弾のアイデアを皆様に募集したいと思います。

アイディアは、感想に書いて送ってください。

無論、面白いものがあれば作中で出したいと思しますので、よろしくお願いします。

第求話 お宝争奪戦(前) (前書き)

期末試験の関係で投稿が少し遅れました。 すいません。

あと、あとがきで募集したアイデアの募集期間は無期限なので何とぞよろしくお願いします。

第求話 お宝争奪戦(前)

く紅梅宅く

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

「あれ？兄さん、家計簿なんて見てどうしたの？」

「金がない。」

「兄さん、それはおかしいよ？ いくら零崎さんの事務所の修理費を請求されたからって、昨日百万単位のお金が振り込まれたばかりだよな？」

「・・・・・・・・ちよつとその家計簿見せて」

「見ないほうがいいぞ。」

「なんでさ？ ・・・・・・・・（確認中） ・・・・・・・・
・・・・・・・・兄さん！！」

「何だ。」

「水道代が 万ておかしいよね？！ まさか、また家計を使い込んだの！？」

「まさか。私が家計を使い込んで、とある 術の禁 目録の新巻を買ったり、偶然YouTubeで見たx xHOLiCというアニメに興味をもって漫画と小説とDVDを全巻大人買いしたとか思っ

「ているのか。」

「・・・・・・・・・・とても具体的な話だね、兄さん？」

「・・・・・・・・・・。」「

「・・・・・・・・・・。」「

「・・・・・・・・・・。」「

「・・・・・・・・・・。」「

「・・・・・・・・・・ふう。金がないな。都合良く大金を稼げないものか。」

「話をそらすな、”兄貴”」

9月7日（土）。

直江津高校文化祭がちょうど一週間後に迫った本日の朝。僕は、バイト先に向かっていた。

月屑さん達の被害に遭った事務所は、僅か数日の間に奇跡的に修復が完了し、今日から営業再開である。

今も梅雨だけれど、今朝はカラッと晴れていい天気だ。

そう思いながら、事務所の入っているビルの階段を上がる。

だんだん事務所が近づいてくると、

『……マジで！そんな好条件でバイトくれんのか！？』

『やったじゃないですか人識くん』

とつい先日知り合ったばかりの声と、全く知らない声が聞こえてきた。

「おはようございます。宗識さん、人識さん」

そこにいたのは、白髪眼帯の殺人鬼にして請負人で僕の雇い主・零崎宗識さんと、その弟の顔面刺青少年・零崎人識。

そして、少し袖の長いパーカーを着た見知らぬ女子高生がひとり。

「よう　ちょうどいいところに來たな命。」

「あゝ、この人が宗識さんの言っていた”ミコトくん”ですか。ども、はじめまして、わたしは人識ちゃんと宗識さんの妹の【無桐伊織】ちゃんです。」

といって女子高生改め、伊織さんは手を差し出す。

あれ、なんでふたりの妹なのに【零崎】じゃなくて【無桐】なんだろう、とか思いながらも僕は彼女とは逆の手を差し出す。

だけど僕はそこでふと気付いた。

彼女の着ているパーカーの袖が少し長いと思っていたが、違う。パーカーのサイズは一般的なもので、全体的に見ても特に袖が長くは感じない。

では何故、パーカーの袖が長いと感じたのか。

不自然に”彼女の腕が短い”のだ。

「・・・・・・・・・・。」

僕は、手を差し出すポーズで固まる。

「・・・・・・・・・・？　あ、そゝでした。そういえば、両手が無かったんだ。」

フリーズした僕を見た伊織さんは、一瞬何かわからない様なそぶりを見せたが、すぐにその理由に気付いた。

「「「「「・・・・・・・・・・」」」」」

そして、とても気まずい沈黙が流れる・・・。

「・・・ッ　そ、そうだ命！

かなりイイ額の依頼が入ったんだぜ！！」

「そ、そうなんですかッ！よかったですね！！」

この空気を打開するために宗識さんは僕に話を振る。僕もこの気まずい沈黙を破るためにノる。

「なんと１０万跳んで１００万単位の依頼だ！！」

「マジですか！？」

素で驚いた。

うちの依頼料は、基本宗識さんが決める。その値段が内容に合わなかった場合、依頼人と交渉するのがうちのルールとなっている。

そのお陰で、常に依頼料はリーズナブルなのが・・・。

「・・・・・・・・まさか、使うとキモチヨクナル白い粉を運ぶんじやないですよね？」

稀に、依頼人の側がボンと大金をよこす場合がある。

僕はまだ経験したことはないが、大抵はヤバい仕事らしい。

「大丈夫。依頼人はイイとこのお嬢様だから

嘘だろ??

「依頼人は、大富豪の唯一の親族である孫娘【弐鏑 イチサビイッパ 一羽】さん。

ある日、カネモチの祖父【弐鏑 イチサビイッパ 紅葉】が老衰で亡くなり、その莫大な全財産と広大な屋敷が一羽さんに譲渡されたそう。

しかし、まだ大学生の一羽さんはそんなただぴろい屋敷にひとりで住むのが嫌で、屋敷を取り壊して敷地を売ろうとしたそう。

だが、取り壊している途中に屋敷の地下に何か大きな空間を見つけた。そして入口を発見し、中を覗けば、なぐんか『古代遺跡』的な感じだったそう。

亡くなったじいさんは、重度の考古学マニアだったそうで、その遺跡が見つかったのはきつと偶然じゃないはず、と思った一羽さんは、その遺跡をプロに調査させようと決意。何か宝が発見されたら祖父の墓前に供えたいそう。

だけど、プロなんてどこで雇えばいいかわからない一羽さんは、偶然見つけた『裏柳請負人事務所』にその件を依頼することにしたそう。

うわ、リアクションに困るな。

その依頼人、じいさん思いなのか、馬鹿なのか？
請負人っていつでもプロじゃないの？

「えっと、それ安全なんですか？

こう、罠とかが仕掛けられていたりとかは？」

「おいおい、伊織ちゃん？ そんな映画みたいなことあるわけないじゃないか」

確かに、いくら遺跡といってもあの世界的に有名な某冒険映画の様

な罫はないだろう。

というか、絶対にない！！

「さて、そんな訳で謎の超古代遺跡を探検しなきゃならない訳だが
- -」

．．あれ、さっき聞いた時より遺跡のランクが上がってるような？

「- - 無論、そんな依頼は俺もはじめてだ。」

はじめてじゃない方がおかしいだろう？

「だから、人数が多い方がいいと思って、人識や伊織ちゃんに手伝
って貰うことにしたのだ」

．．今気付いた。この人、めちゃくちゃ楽しそうだ。
眼が凄くキラッキラしている。

「なあ、宗識のにーちゃん。俺、帰っていいか？
なんか下らなさそうだし．．．」

人識さんは、僕達に呆れた様に背中を向けて帰ろうとした。

しかし．．．

「人識くん、どこに行くんですか？」

がつしりと首を伊織さんにホールドされて、人識さんは動けなくな
った。

「一体、誰のせいで私までバイトをしなきゃいけなくなったと思っ

「ているんですか？」

「そ、それはむなしk・・・誰のせいですか？」・・・お、俺のせいです」

伊織さんは、ヒマワリのような笑顔を顔に張り付け、人識さんを脅迫する。

「わ、わかった！やるよ、やりやあいんだろ！？」

人識さんは、半ば自棄になって、バイトをすることを正式に承諾した。

「よし、本当ならあとふたり程仲間がいればいいんだが、仕方ないからこの人数で行こう」

「その話、聞かせてもらった。」

「「「「！！！！」」」」

事務所の窓から入ってきたのは、先日の事件の元凶 紅梅兄妹。

「・・・あれ、おかしいな？」

「一応ここ、ビルの2階という設定なんだけど？」

いつも道理の無表情の月屑さんと、僕等と同じく状況が掴めていないらしい”通常モード”の陽埃さんが、堂々と侵入し、宗識さんの真正面でこう宣言した。

「その依頼、我々も手伝おう。」

早朝、僕、宗識さん、人識さん、伊織さん、月屑さん、陽埃さんの6人は依頼人の式鏑さんの屋敷跡地に集合していた。

月屑さん達は、今回の依頼になんとただで協力してくれるそうだな。なんでも、前回のお詫びらしい。

彼らが帰ったあとに、宗識さんは『何か企んでいるっぽいから気をつける』と僕達に注意を促した。

理由も尤もらしいから大丈夫じゃないんですか？ と僕が言うと、

『尤もらしいから怪しいんだよ』
と即答した。

そして今日、約束の時間に全員が集合した。

僕や人識さん、伊織さんは大きめのリュックを背負っていたが、他の三人は手ぶらだった。

きっと、紅梅流暗器術でも使っているのだろう。

「さて、そろそろ行くぞ」

そう言つて宗識さんは、式鑄邸跡地の地面にある場違いな金属の扉を開けた。

「「「「「おお〜!」「」「」」」」

と、どこからともなく感嘆の言葉が出る。

その扉の下にあったのは、地下の暗闇へ続く黄ばんだ石の階段。

宗識さんはニヤリと笑い、僕達に向かってこう言った。

「一番最初に入るのは誰だ？」

．．．．．ここから、僕等の冒険は始まった。

結局のところ、一番最初に入ったのは月屑さんだった。

遺跡内の通路は暗いが意外に広く、圧迫感はない。

その通路の中を、紅梅兄妹を先頭にして、宗識さん、僕、人識さん、伊織さんの順で並んで進んでいる。

現在、遺跡の中を進み始めて（僕の体内時計で）約一時間。何事もなく、分かれ道すらなく、ただの一本道をずっと歩き続けていた。

それで集中力が切れかけたのかもしれない。

「あゝ、つまんねえゝな」

僕達の中で1番やる気のない人識さんがしゃべり始めた。

「こんなもんだろゝよ？お前は何を期待してたんだよ」

それにノって宗識さんもしゃべりだす。

「いやさゝ、せめて大昔の髑髏やら不気味な祭壇とかを期待してたんだけどなゝ」

「い、嫌ですよゝそんな気持ち悪いものゝ」

更に伊織さんも話し出す。

確かに、僕もそんなモノは見たくないな。

「そんなものを見るくらいなら色んな罨が張り巡らされている方がマシです!!」

「伊織さん、僕はそっちの方が嫌ですよ!」

僕も退屈だったし会話に参加する。

「かにはははは、心配する必要なんてねえよ?
ジョーンズ先生みたいなメには絶対にあわな...」

ガコンッ

「...あれ?

人識くん、その足元どうしたんですか?」

「.....」

現状を説明。

人識さんの右足元の床が正方形に沈んでいる。

「.....」

まるで罨のスイッチが入ったかのように...。

次の瞬間!

バコンッ

と大きな音とともに宗識さんと僕、人識さん、伊織さんのいた場所から床が消えた！

「うわっ！」

「キヤーー！！！」

「嘘ー！？！」

「うおい？！」

四者四様の反応で自由落下しようとする僕達は、助かろうと互いに手を伸ばす。
その結果、

「ちよっ、て、てめえら重い・・・ッ！」

唯一岸に手の届いた宗像識さんの足に僕が、僕の足に人識さんが捕まり、人識さんが足で伊織さんが落ちない様に懸命に支えるという格好になった。

「お、おい、紅梅、は、早く助けるッ！！！」

1番先頭にいた紅梅兄妹はこの落とし穴に引っ掛からなかったため、宗識さんは月屑さんに助けを求める。

岸に捕まっている宗識さんは四人分の体重をひとりで支えているためかなり苦しそうだ。

すると月屑さんは宗識さんの側に寄り、こう言った。

「落ちろ。」

「え??? ちょっと兄さん!??」

陽埃さんが気付いた時にはもう遅い。

「貴様等に宝はわたさん。」

月屑さんが宗識さんの手を踏み付けた。

「紅梅!!」

覚えていやがれ!!??」

そして、再度自由落下が始まった。

……こうして、僕等の冒険は早々と終了した。

「兄さん！どういふつもりですか！！零崎さん達を突き落として！！？」

「焦るな陽埃。この程度でアイツらが死ぬ訳がない。生きているからセーフだ。」

「何がセーフですか！私は何故こんなことをしたのかを聞いているんです！！」

「宝を奪うするためだ。今の家は家計が厳しい。故に、宝を見つけ、て売り払えば家計の穴が埋まる。」

「それは兄さんがあけたあな……」

「さて、奴らの犠牲を無駄にしない様に進むぞ。」

「に、兄さん！　ちよっ、ちよっと待ってください！？」

「・・・・・・・・おい、おい、伊織ちゃん、起きろ」

「ん・・・・・・・・あ、人識くんですか？　どうですか、私は綺麗な川

をしつかり渡れましたか？」

「まだ死んでねえよ！」

「おお、ホントに死んでません（感涙）！」

「それより、あそこに通路があるからさっさと行くぞ」

「え？ 宗像識さんやミコトくんは起こさなくていいんですか？
……まさか、もう」

「生きてるよ！ さっき確認した」

「では、どうしておいて行くんですか？」

「宝を狙う」

「え？ あるんですか？」

「こんな罠が仕掛けられてんだからきつとある。だからあの連中も裏切ったんだろ？」

「あゝなるほど。でも、私が裏切ったらバイト代が貰えませんか？」

「バイト代より宝の方が金になるだろ？」

「確かにそうですね。」

「宗識のにーちゃん達といったら宝は見つかっても依頼人に届けることになる。」

だから俺達も裏切って宝奪って売ってその金で伊織ちゃんの義手を

買う。今回のバイトだけじゃ到底足りないだろうが、宝があれば・
・・・・」

「人識くんは私の為にこんなこともしてくれるんですね（うるうる）」

「厄介事から早く解放されたいだけだ」

「こゝいうのを”ツンデレ”っていうんですよね（ボソッ）」

「なんか言ったかてめえ!!」

「ささ、それではそんなことは気にせず行きましようか人識くん」

「おい、まで、ひとりでさっさと行くな!!」

「ん．．あ、あれ？ここはどこだ？」

僕は、知らない場所で目覚めた。

何故か身体中が痛い。

そして僕の隣には．．。

「宗識さん！？」

宗識さんが倒れていた。

そういえば、僕達は落とし穴に落ちたのだった。

僕は、宗識さんを揺する。

「起きてください！宗識さん！！」

「うゝ、うるせゝ．．．．．ってどこだここ？」

よかった。死んでなかった様だ。

「多分、落とし穴の中だと思います。」

「やっぱそうか。ったくあの野郎、あとで覚えていやがれ（怒）」

と宗像識さんは月屑さんに対して恨み言を言った。

でも、落とし穴に落ちた僕達はこれから何をすればいいのだろうか？

「．．．．．おい命、あそこを見る。道がある」

「え？」

なんでさ？　　と思い、宗識さんの指差したところを見ると、通路があった。

「ここに居ても仕方ない。とりあえず先へ進もう」

そういつて立ち上がった宗識さんは僕にこう言った。

「人識達はどこに行った？」

「え？　．．．．．あ！」

そういえば、僕達と一緒に落ちた人識さんと伊織さんの姿がない。

「．．．．．アイツ等も裏切ったな」

「いや、そう判断するのは早くないですか？」

「第一、こんな罠が仕掛けられていたんだから宝があると思えるのが普通だ。」

紅梅が裏切ったならアイツも裏切って宝をぶん取ろうとするだろうよ」

「でも、根拠ないですよね？」

「『勘』だ！！」

勘で判断していいんだろうか？

いや、でも実際勘以外じゃ判断しにくいし．．．。

「命、こうなりや俺達のやることは一つだけだ」

やること？　ああ、脱出することね。

「そうですね。さつさと脱出しちゃいましょう」

僕がそう答えると宗識さんは呆れた様に溜息をつく。

「違う。ただ脱出したら依頼がはたせねえだろ？」

あ、そうか。

これは依頼なんだ。

このままじゃ、僕達を信用してくれた依頼人に顔向けできない！

ということは・・・

「人識達や紅梅兄妹を出し抜いて俺達が先に宝を手に入れる！！」

・・・こうして、三者三様の思惑を胸に抱き、壮絶なお宝争奪戦が幕をあげた。

9
·
E
N
D

第什話 お宝争奪戦（後）

くチーム・零崎く

「人識君く、そろそろ休憩しませんかあ？」

「は？ まだ一時間ちよつとしかたってねえだろ、まだ早い。」

「はく、何でもこう無駄にパワフルなんですか。私の方が足が長くて歩幅は広いから疲れないと思うんですけどねく」

「足の長さは関係ねえよ（怒）！」

「ところで人識君？」

「何だよ伊織ちゃん？」

「”宗識さんはナニモノ”なんですか？」

「あん？ どういうことだ？」

「あの人は、本当に零崎なんですかという意味です。」

私達、零崎は何の理由も意味も意義も信念も無しに人を殺す”殺人鬼”です。」

宗識さんの友人らしい『紅梅』という人は普通の人ではありませんよね。何か雰囲気がこの前の『早蕨』に似ているので多分殺し名です。

「…………でも、ミコトくんは一般人ですよね？」

「詳しくは俺も知らねえけど、十中八九一般人だな」

「何故、宗識さんはミコトくんを殺さないんですか？」

「そんなの知る訳ねえじゃん」

「人識君も案外、役に立ちませんね」

「だいたい俺が零崎の内部事情全部把握していると思うなよ！！宗識のにーちゃんが零崎になった頃は出夢のことで忙しくて兄貴から詳しく聞かなかったし、そもそも繰識の兄貴の件以前は話したとすらなく……………」

「…………あれ、どうしたんですか？」

「……………」

「…………あれ、目の錯覚でしょうか？」

人識君の右足の下下の床が沈んでいる様に見えるのですが？」

「……………」

「まるでナニカの罫のスイッチを入れたかの様に陥没しているので
すが？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「それと、通路の奥の方から冒険物でお馴染みのアレが転がってくる様な音が近付いて来ているのは気の性でしょうか？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「あはは、まさかですよ。冒険物でお馴染みのアレが転がってくるなんてベタ中のベタがあるわけないですもんね？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・えっと、人識君？」

「・・・・・・・・伊織ちゃん」

「はい。なんでしょうか？」

「全力で走れ!!」

「ちょ、なにいきなり走り出してるんですか・・・・・・・・って、ウワァ『冒険物でお馴染みのアレ』がマジで転がって来た!!」

「うおおおおオオオ!!」

「こんなところで死にたくねえ!!?」

「うぎゃああ!!」

「ま、ま、待ってください! かわいい妹を見捨てないで下さい!!!」

「チーム・請負人」

「おい、命。」

「何ですか宗識さん？」

「これって何だと思う？」

「．．．．．畏だと思えます。たぶん、槍が炎が口から出ますね」

「俺も同感だ．．．．．あからさま過ぎねえか？」

「・・・・・・・・同感です。」

紅梅の策略（？）によって落とし穴に落とされた俺達。

その落とされた場所から続く通路を見つけ、そこを進み始めて数十分。

いくつかの分かれ道を右に左に進んだ挙げ句、俺達の目の前にあからさまな罠が現れた。

通路の両側の壁にトーテムポールの様な顔の彫像が左右に四つづつ、計八つおいてある。

ちなみにその口には穴が空いており、かつその彫像の前の床のみその他の床の色と違っていた。

「どうします？ 一旦引き返して別な道を行いますか？」

我が『裏柳請負人事務所』の頼れるバイト・五月闇 命は俺にこう進言した。だが、それではダメだ。

「却下。ここに罠が仕掛けられているということは、この先に守らなきゃいけない」何か”がある”ということだ。だから前進しかねえだろ」

「じゃあ、どうやってこのあからさまな罠を突破するんですか？」

さて、罠なのはわかるのだがその口から何が出るのかは以前として不明だ。

火が吹き出すのか、槍が突き出るのか、矢が飛び出すのか、それとも想像を絶するナニカか。

だが、天才的にも俺はいともたやすく突破する方法を思い付いた。

着目すべきは、トーテムの口が地面より割と高い位置にあること。

「ほふく前進すればいいじゃん」

そついった瞬間、命は微妙な表情をした。

「あそこの明らかに重量に反応するっぽい床をほふく前進で進むんですか？」

もし、あの口がフェイントであそこの床を踏んだ途端に別の予期せぬ罠が作動したらどうするんですか！？」

「心配症だな。じゃあ、試しに何かあそこの床に投げてみるよ」

すると命は渋々懐からタイマーをひとつ取り出した。

コイツはちよつとした諸事情で常に大量のタイマーを体中に仕込んでいる。そりゃもうキモいくらい大量に。

”体はタイマーで出来ている。血潮はタイマーで心もタイマー” . . .
みたいな？

で、そのタイマーを例の床へ投げた。

すると . . .

バキイイイイン

．．．巨大な斧状の刃が落ちてきた。
それも四つも。

無論、タイマーは粉々。

で、その刃は床に減り込んでびくともしない。

「．．．．．あのまま行ったら輪切りに成ってましたね？」

「．．．．．。」「

恥っ！？

さっき『うわゝ俺、天才？』とか思った自分が恥っ！！

何が『天才』だよ！

思いつ切り敵の思惑に嵌まっちまってよ？！

「そ、そ、そ、そんなこと気にすんな！

おら、紅梅達に負けられねえんだからさっさと進むぞ！！」

やや強引に話を反らして先に進む。

そう、今回の依頼はただ冒険していれば完了するというものではない。
い。

成り行きで図らずも、

零崎 人識 無桐 伊織達 チーム・零崎（仮）と、

紅梅 月屑 紅梅 陽埃達 チーム・紅梅（仮）との競争になった
のである。

彼等は、各々の事情この遺跡にある（かもしれない）宝を狙っている。

普通なら俺も、そんな奴らに混じってお宝を狙うのだが、今回の依頼内容の一部に『もし宝があつたら提出しやがれ』的なものもあつたから依頼をしっかりと遂行するためにアイツ等より先に宝を取って帰らなければならない。無論、そのお宝は依頼人に（泣く泣く）差し出す。

え？ 『何故、そこまで依頼達成に気をつけているのか』って？
そりゃ、請負人だからに決まってるだろ！

いくら実力が高くて依頼達成率が低いなんてのは本末転倒！
そんなのは、きつと請負人失格だ！！

「・・・・・・・・・・（ゾクッ）！」

「？」

どうしたんですか？」

「・・・・・・・・・・あゝ、いや何でもない」

・・・・・・・・何故だろう。

今、まるで脊椎に液体窒素を流し込まれたかの様なとてつもない悪寒がした。

そして、一瞬アノ深紅の最強の姿が脳裏をよぎったのはいったい・・・・・・・・・・。

くチーム・紅梅く

「うむ。陽埃、これを見る。」

「ん、兄さん何ですかこれ？」

「文字だ。おそらくはこの遺跡を作った文明の古代文字だろう。読め。」

「読める訳ないでしょう!？」

「毎週、世界 しぎ発見見ているのに読めないとは情けない。」

「世界ふし 発見はそんな番組じゃない!

だいたい、昨日は兄さんも世界ふしぎ発見見たから解るでしょ!？」

「昨日は、『鎌倉幕府。悲劇のヒーロー義経の謎を追え!』だったから参考にならん。」

「……………そうだった」

「ところでひとつ疑問に思ったのだが、ダウジングとかで宝を早期発見出来ないのだろうか。」

「えゝ、どうだろう? 私は、石の壁でここ地下だし出来ないのと思うけど……………」

「……………出来た。」

「え、うそ?」

「ほら見る。」

「あ、ホントだ。でもこれ、直線でしか表されないから役に立たないと思うんだけど……………」

「その為にお前がいる。」

「……………???」

くチーム・請負人く

あれから様々な罟を俺達はくぐり抜けてきた。

あるときは天井から毒蛇が振ってきたり、
またあるときは床から剣が突き出たりと
散々な目にあつた。

だが、それをなんとか乗り越えて漸く何か拓けた場所にたどり着いた。

え？ 『冒険物でお馴染みのアレ』には合わなかったのかって？
そんなもんあるわけねえじゃん

あれは映画スタッフの創作だって！

もし、マジで『冒険物でお馴染みのアレ』を喰らった奴がいたら教えてほしいもんだね。

．．．．．一瞬、人識の顔が脳裏をよぎったが、気にしたらダメだと俺は思った。

まあ、とりあえず今までの通路の様なところから、かなりの広さがある場所にたどり着いたのだ。

その広い空間の中心には何か祭壇の様な割とデカイ建造物が鎮座していた。

そのピラミッド状の祭壇（仮）のちょうどてっぺん。正三角形の頂点の部分に何かがある。

だが、遠すぎて肉眼では何かがわからない。

「あゝ．．．．．無理、見えねえ。命、お前は見えるか？」

「眼鏡かけてる僕がかけてない宗識さんより目がいいわけないじゃないですか。もちろん見えませんよ。」

そりゃそうか。

何気に忘れがちな設定だが、命は眼鏡をかけてるんだよね。

無論、別に”魔眼殺しの眼鏡”とかいうわけでなくただの視力矯正眼鏡なので命は地味に目が悪い。

「じゃ双眼鏡は持ってる？」

「持ってますよ。はい」

といってバックの中から双眼鏡今日を取り出して俺に手渡す。

「サンキュー」

といって命から双眼鏡を受け取る。

どことなく立派な双眼鏡だな。明らかに百均の物じゃなくて2000円くらいしそうなやつ。

バードウォッチングとかの趣味でもあるのか？

そしてその双眼鏡でてっぺんを見る。

そしてそこには……………

「……王冠？」

キラッと輝く金色の王冠的な物があった。

つゝことは。

「よっしゃ！

アイツ等より先にたどり着いたぞー！」

「え、お宝ですか！？」

「宝だよ！宝ですよ！宝なんですよー！」

「やったー！！」

命も喜んでいる。

「このお宝争奪戦は俺達の勝利だ……」

「あれ、どうしたんですか？」

．．．．．。

「何か変な音聞こえねえか？」

．．．．．。

「音ですか？」

．．．．．ン。

「ほら、また聞こえた。

何かこうさ、地響きみたいな」

．．．．．ズン。

「あ、今度のは僕にも聞こえました。．．．．でもこれ．．．」

．．．．．ズドン。

「そっいやこの音、段々．．．」

．．．ズドン。

「「近付いて来てる!？」」

ズドン!!!!!!

ド派手な音と盛大な土煙を上げて俺達のすぐ近く、大体3、4メートルほど先の壁が崩壊した。

そこには見知った顔が二人。

「げほ、げほ、げほ！」

あゝ、疲れた。」

「うむ。よくやった陽埃。宝はここにあるようだ。」

紅梅　月屑 & a m p ; 紅梅　陽埃。

俺達にとっての最大の弊害。

紅梅兄妹が現れた・・・。

なんと驚くことに、この紅梅バカドモ兄妹は迷路の様な通路を進まず、壁をぶち壊して進んできたのだ。

何という常識外れ。

何という力技。

何という大雑把さ。

というか空気読め！

「てめえらには、冒険の、宝探しの醍醐味つつのがわからねえのか！！」

「ない。」

あの野郎ッ、即答しやがった（怒）。
道に迷って、仲間を庇って、罫を越えて、助け合ってこそのお宝だ
ろ！

それをたった二文字で全否定しやがった（怒）！

「今回、私は金の為に動いている。そんなくだらないセオリーに興
じる意味はない。」

「「「うわゝ、ひでえ。」」」

命はおろか、紅梅妹すら引いた。
だが、紅梅兄は鉄の意思で自らの目的を達成しようとする。

「陽埃、あの二人を足止めしろ。その隙に宝を私が盗る。」

「うゝん。あまり気は乗らないなゝ」

やっぱり、通常モードの紅梅妹はある程度常識人。あまりにも”悪
役”を地で行く兄の命令に対して難色を示す。

「ならば、来週末は富士の樹海で合宿しよう。」

「全力で足止めさせてもらいます！」

ちっ、コントロールされやがった。

紅梅妹が承諾するやいなや、紅梅兄はピラミッド状の祭壇（仮）に向かって走り始めた。

「ちっ、させて成るものか！追うぞ、命！」

「わかりました！」

その紅梅兄を俺達は追いかけ様としたとたん、

ズドン！

と目の前に大槌が突き刺さる。

「零崎さん。ダメっすよ、一応”兄貴”に通さない様にいわれてんすから」

スイッチが入ったな。

紅梅妹は、日常生活用と戦闘用に二種類の人格を使い分けている。日常生活用では、どこにでも居そうな女の子なのだが、

戦闘用の人格は、三度の飯より血を見るのが大好きというバーサーカーになってしまう。

バーサーカー状態の紅梅妹の戦闘能力は、俺や紅梅兄よりも高い。哀川さんに一矢報いれるレベルだ。

「……………宗識さん、いって下さい。一分だけなら時間を稼げます。」

「馬鹿かお前は！！死ぬ気か？」

命は、覚悟の炎の燈った目で俺を見る。

「未来視を限界まで使えばなんとか一分は堪えます！ その隙に早く！！」

「おもしれえ！ たかが一般人が殺し屋に一分もつなんて粹がりやがって。

上等だこの野郎！！」

バーサーカー化して単純思考しかできない紅梅妹が命に襲い掛かる。それを命はかなり際どいところでかわす。

「オラ！！」

さらに続く紅梅妹の嵐の様な猛攻を、命は紙一重で見切りかわす。

だが、一般人と殺し名とではやはり身体が違う。

あの状態では、一般人の命では確かに一分が限界だろう。

.....。

ここは、命に任せて先に進む！！

命に気を取られている紅梅妹の横をすり抜け、祭壇の頂上のお宝目

指し駆け上がる！！

実は、零崎一賊の中で一番足の早い俺。

紅梅兄との差をどんどん縮める！

それに気付いた紅梅兄は、俺にリボルバーを向け引き金を引いた。
しかもよりにもよって拡散弾。

俺は、純白のスコップ『最終決定』バットエンを取り出し、足、頭、胴に当たり
りそうな小さな弾を薙ぎ払う。

こうして回避したついでに、走りながらで安定しないが、俺は『最終決定』を紅梅兄に向けて投擲した。

流石にアレを喰らうのはマズイと感じたらしい紅梅兄は、一瞬立ち止まり罪口製でかなりの強度のある二丁拳銃で『最終決定』の軌道を僅かに反らして回避した。

だが、例え一瞬だろうと立ち止まったのが決定的な敗因となる！

その僅かな一瞬の隙に俺は紅梅兄を抜き去った。

紅梅は、しまったという様な顔をし、俺を追い掛けるがもう遅い！！

俺ののばした右手が、お宝の王冠に触れた。

その瞬間！！！！

『コングラッチュレーション ゲームクリア』

「「「は?」「」」」

とかいうちゃちい電子音が鳴り響いた・・・。

そしてその場に居た全員が、固まった。

「．．．．．どうやら、例の遺跡は、依頼人の祖父が資産を注ぎ込み、秘密りに制作していたアトラクションだったそうだ。」

いきなり知人達に見せて驚かせようとして、完成するまで誰にも話さないでいたらしく、依頼人も知らなかったそうだ。

その後の調査で完成したのは亡くなる前日だったそうで、誰にも話すことなく逝ってしまった様だ。

そのことを俺達が遺跡に入った後に見つけた遺書で知った依頼人は、「ごめんなさい。ごめんなさい。」と俺達に何度も頭を下げてくれた。

「．．．．．全く、死んだ後に遺族にも俺達他人にも迷惑をかける爺さんのことを少し恨んだぞ。」

．
．
．

と、いうわけで今回の俺達は、

「．．．．．なあ、紅梅？」

「．．．何だ、宗識。」

「．．．．．空しいな。」

「．．．．．同感だ。」

かわいそうな道化だったということだ。

ちなみに、そんな依頼人の祖父の作ったアトラクションを壊しまくった紅梅兄妹は当然の如く修理費を請求され、彼らの家計は更なる氷河期へと突入していったのは、また別なお話。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
あれ、何か大切なことを忘れているような？

くチーム・零崎く

「ひ、人識君？」

「かは、なんだ伊織ちゃん？」

「こ、これで何回目ですか落とし穴に嵌まるの？」

「・・・・・・・・七回目だ」

「『冒険物でお馴染みのアレ』に掛かった回数はい？」

「三回。」

「・・・これ全部人識君がスイッチ押したんですよ！
いい加減にしてください！」

「わざとじゃねえんだから仕方ないだろ！」

「そんなこといってどうするんですか!？」

進めば進む程取り返しのつかない状態に陥ってるみたいなんですけど!」

「違う!　こんなに罠があるんだ、きっとこの先に宝があるはずなんだ!」

いくぞ!」

「え〜」

「え〜」、じゃねえ!」

．．四日後、彼らは漸く思い出した零崎宗識によって無事保護されましたとさ．．。

1
0
·
E
N
D

第什話 お宝争奪戦(後) (後書き)

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

そんなこんなで『お宝争奪戦』終了です。

今回は前後編だったのがきは一本にしてみました。

ちなみに、この話は私なりに”ベタ”をテーマに作りました。

世間一般では、”ベタ”な展開を鼻で笑って斬新さを求めています
が、ベタはベタだからこそその笑いや、涙や、感動やがあるんですよ。

だから皆様もベタを馬鹿にせず、型にはまった王道的な作品を楽しんでほしいですね(なんの話や!。

．．．まあ、この話に涙と感動がないのは突っ込まないでほしい。

あと、皆様に謝らなければならないことがあります。

本来、この作品は十日置きに更新していたのですが、このタイムリミットを三日もオーバーしてしまいました。ごめんなさい。

あゝ、いや、言い訳ですが、現実では文化祭の準備が始まって忙しかっただけですよ？

私が今いる旧校舎が今年度いっぱい取り壊されて来年から新校舎に移転するんで、『旧校舎最期の文化祭だ！皆のもの全身全霊でやりやガレ！』的な空気なんですよね。で、私もその空気に染められて進まなかったんです。

はい、言い訳終了。

ごめんなさい、許してください。

そして次話は、遂に『直江津高校文化祭』開幕！

ミコトが恐れていた委員長の趣味爆発！

更に、あの赤い人も乱入！

こうご期待！！

ぶっちゃけ、リアルと時期が被りまくってるけどがんばります！

什逸話 執事と文化祭

「よし。さゝ行くか」

俺こと零崎宗識は、事務所の前に『本日、臨時休業』の札を出し、出掛けようとしようとしたところで、

「あれ、どっか行くの？」

この事務所どころか事務所の入っているこのビル自体のオーナーであり、俺の友達・時宮 時列に偶然遭遇した。

「今日は暇だからあんたんとこの事務所で暇を潰そうとしたんだけどなあゝ．．．」

．．．いや、彼女の言い分だと偶然でなく必然か。

「そりゃ残念だったな。見てのとおり『本日、臨時休業』だ。」

といって札を指差す。

「でもあんたが事務所を休むなんて珍しいわね？」

そう、俺が仕事を休むなんてそうそうない。

この事務所を開いて二年、臨時休業になったのは計2回のみ。ほぼ年に一度だ。

今回の理由は単純、命が今日はいないからだ。

「あ、そうだ。 暇なら一緒に行かねえか？」

ひとりで行くのもやや心細かったし。

「ん？ どこに？」

「命の文化祭に。」

「お帰りなさいませ。旦那様、お嬢様。」

6月15日（土）

直江津高校文化祭初日。

僕こと五月闇命は、クラスの模擬店で働いている。

．．．．．執事服を着て。

「はあゝ、最・高」

「はあゝ、最・悪（怒）」

僕の二人の友人は、

前者は歡喜に満ち足りた声で、

後者は不満に満ち足りた声で、同時に喋る。

その前者は、この『執事きつさ』の発案者にして災いの元凶・委員長。

後者は、勿論僕の親友にして僕とともに最大の犠牲者である・秋沼彰だ。

さて、何故僕と彰が最大の犠牲者かというと、ここで執事役をしているのが、男子では僕達二人だけだからである。

実のところ、この喫茶店をやるにあたってクラスの中で全員参加の

オーディションが行われた。

．．．．．そこで、このクラスにいる男子生徒は僕達以外全員落とされた。

．．．執事喫茶なのに！

．．．執事喫茶なのに！！

僕達以外は全員”見た目の問題”で失格になったのだ。

その時の、失格になった男子達の空気は凄まじく暗くなった。

『ブサイク』とダイレクトに委員長に言われた彼らの心の傷の深さは計り知れないだろう．．．。

僕なら一生消えないトラウマになる。

その中の例外、彰はその口調からは想像しにくいだろうが、相当の美形である。

筋肉はあるが、そんなに太くなく割とスマートだし。

対する僕は、外見上は『普通』なのだが、委員長の『彼はたぶん執事服が異常に似合うぞ』発言でまさかの大抜擢された。

オーディションは女子にも例外なく行われた結果、女子からは五人が執事役として選ばれた。

．
．
．

そして、文化祭当日。

僕と彰と男装の女子による執事喫茶がオープンし、想定外の大盛況を記録している。

「それにしても、ここまで委員長の悪趣味が人気になるとは．．．」

「まだてめえはいいじゃんかよ。オレなんてさつきお袋と姉貴が来たぞ？」

あゝ畜生！もうしばらくはこのネタてからかわれ続けられるゝ（涙）！」

ご愁傷様、彰。

「む！悪趣味とは失礼な。ここまで人気なんだからイイ趣味でしょうが！」

「いや、悪趣味だ。」

「ちよつ、ひどい！？」

それにしてもよかった。

僕は彰と違って見にくる家族がないから誰が来ようと大丈夫だ．．．

「!!!!!!?!!」

直江津高校正面玄関の上当りにあるこの教室の窓からふと視線を窓の外に向けると、人混みの中に知り合いがいたのを見つけた。

何故だ！

この姿を見られたくないから文化祭の存在じたい知らせてないはずなのに！？

．．．．．え？　なんで人混みの中の知り合いがそんなにあつさり見付かったのかって？

だって、ここは日本なんですよ？

日本人の黒髪の中に白髪眼帯の青年がいりゃあ誰だって解るでしょう？

「うおっ、ビックリした！」

直江津高校正面玄関から入ってすぐ目の前にあった馬鹿でかい螺旋階段を昇ったところの廊下を少し進んだ時にスッゲゝのが見えた。

でかいフランケンの顔！！

お化け屋敷かこれ？

「あ、そのカップルのお二人さん
私達のクラスのお化け屋敷に入りませんか？
怖いですよゝ」

「かつ？！ か、か、か、か、カップル！！？！」

「おい時列？ 何顔を赤くしてんだ？
あゝ、そこのお嬢ちゃん、俺達はそんな関係な訳ねえ「ふんっ！！」
痛つてえゝ！！」

時列が何故かいきなり腹を殴ってきた！

「誤解を解いただけだろ！」

「・・・・・・・・ふん。」

何、怒ってんだか？

あ、そうだ。ついでにこの子に聞いて見よう。

「なあ、一年生の教室はどこにあるんだ？」

見た限り、この階にあるのは三年生の教室だけのようだった。

「あゝ、2階です。ここの下の下の階。」

「そっか。サンキュー。おい、行くぞ！」

こうして俺は時列を連れてこの階をあとにする。

はぁ、何でコイツはいきなり不機嫌になったんだ？

「委員長！」

「えっ！ な、何！？」

「ちょっと早いけど休憩します。 じゃ！」

と僕は言っ て教室を飛び出し、全力で走り出した。

後ろの方で委員長の制止が聞こえたが無視した。

このクラスの喫茶店の執事役は、各自重なら無いように自由時間をとることになっている。

昼時に僕の自由時間が入っているはずだから、今からだと数分早い自由時間になるけど、それくらい許してくれるだろう。

そんなこんなで教室どころか校舎すら脱出し、近隣の高校では珍しい中庭に到着した。

ここ中庭には、様々な近隣住民の方々の屋台や、イベント用のステージなんかがある。

そして現在はお昼時。

屋台の料理と、これからステージでおこなわれるカラオケ大会のおかげでいい感じに人混みになっている。
これなら上手く隠れられるだろう。

「さて、とりあえず隠れることは出来たから、昼だし何か食べよう」

そう思って周りの屋台を順番に見ていく。

タコ焼きやイカ焼、クレープとか色々な屋台が目に入るが、

「・・・まあ、文化祭といったらヤキソバだろう。」

というわけで早速見つけたヤキソバの屋台に向かう。

「すみません。ヤキソバ一つください」

「了解した。少し待て。」

「・・・ん？」

あれ？　どっかで聞いたことのある声だな？

なんかこう、『？』や『！』を使わない感じの話し方もすごくキシ感がある・・・。

屋台の屋根の影で顔が良く見えない。

よし、試してみるか。

「ヤキソバのおじさん、僕の名前をいつて見てください。僕の名前は五月闇です」

「ふむ。貴様がまだ22歳の私をおじさんということにも、十分異議申し立てしたいのだが仕方ない。先に貴様の願いを聞いてやろう。．．．．．五月病くん。」

「そんなネガティブな名前じゃねえよ!!」

「やっぱりだ！」

「やっぱりこの人だ!!」

「．．．．．何してんですか月屑さん？」

「見ての通り、ヤキソバを焼いている。」

僕の目の前でヤキソバを焼いていたのは、宗識さんの友人・紅梅月屑さんだった。

「理由としては、宗識のせいだと言えるだろうな。」

「いや、あれとあれは明らかに貴方のせいです。」

「貴様らのせいで、我が家の家計簿が火の車どころか炎上タンクローリレベルの大惨事になったのだが。」

「100%自業自得です」

だけど、本当に殺し屋が屋台でヤキソバを焼かなきゃいけないほど
追い詰められていたのか・・・。

明らかに自業自得だけれども、少し憐れに思えてきたな。
宗識さんも情けぐらいかけてあげればいいのに・・・。

「・・・完成したぞ。ほら、ヤキソバだ。一つ一万円。」

「ぼったくりだ!？」

前言撤回。

情けなんてかける価値なし!

「ところで、何故に九月闇はそんな執事服なんて着ているのだ。」

「!?!?!」

し、しまった!

着替え忘れた〜!

咄嗟に逃げてきたから控室で着替えるのを忘れた!

これじゃこの校内であっただけでアウトじゃん!!

よし、今から戻って着替えよう!

そう思い、中庭から2階にあるうちの喫茶店を見上げる。

しかし・・・

「う、嘘だろ？」

うちの喫茶店の中に、宗識さんと時列さんがたった今入っていったのが見えた。

．．．控室つてあそこの隣なんだよね〜。

．．．．．どうしよう（汗）。

さて、一年生フロアに到着したが結局のところ何処にいるのかわからない？

という訳でしらみ潰しに探すことにした。

まずは1年Aクラス。

典型的なフリーマーケットだった。

なんか掘り出し物っぽいものがちらほら。

日本刀があれば買うが、無論、そんなものがあるはずない。そもそもあった方が問題だ。

うむ。ここも命のクラスじゃないようだ。

するところまで、

「・・・ねえ、何でミコトくんの文化祭に行こうと思ったの？」

時列が今更なことを聞いてきた。

「ああ、それはだな。あいつ、俺になんか隠し事してたんだよ」

「隠し事？」

「そう、この文化祭のことを丸々隠していたんだ。で、調べてみたら直江津高校で文化祭やるってわかったんだ。

そこで俺はこう考えた。

命が俺に文化祭のことを隠したのはなんか見られたくないことをするんじゃないかと・・・。

という訳で、ひやかし半分悪意半分の気持ちで命を探すために。」

と俺が説明を終えた頃には時列は俺のことを『冷蔵庫の奥でデロデ

口に溶けたナスを見る』様な目で見る。

「性格悪い!」

酷っ!

という訳で続いてBクラス。

ここは手作りドーナツを販売していた。

別にドーナツが特に好きな訳でない俺から見てもつまそうだ。

.....そのドーナツをガン見している金髪の少女は見
なかったことにしよう。

あれはきつと見てはいけない、かわつてはものだろう。双識の兄
貴がここにいないくてよかった。

本ツ当によかった!!

とりあえず、さっさと記憶の中から削除しよう。

続いてCクラス。

このクラスは喫茶店の様だ。

看板には大きくこの店の名前が書かれている。

『執事きつさ』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

さて次のクラスは・・・

「なんでこのクラスを無視すんのよ？」

「男の俺に執事喫茶に入れと！？」

それを世間一般では『拷問』と呼ぶんだ！

双識の兄貴は喜びそうだが・・・・・・喜ぶか？

「ミコトくんがわざわざ隠すんだから執事服を着るくらいの何かし

らはあると思うけど？」

うぐっ！？

そ、その可能が割と高そうだ。

「仕方ねえ、入るか！」

そういつて仕方なく執事喫茶の中に入る。
すると、

「お帰りなさいませ。旦那様。お嬢様。」

うっわ．．．．．って良く見れば男じゃなくて女の子だ。

しかも、割と美人。

『かわいい』系じゃなくて『カッコイイ』系の美人。

．．．．．男装の麗人か？

これは確実に双識の兄貴大喜びだ。

俺達はその男装の麗人に空席まで案内される。

そこでメニューを渡され、

「お決まりになりましたらお呼びください。」

と綺麗な笑顔で彼女は言った。

あゝ、成る程、わかったよ双識の兄貴。
これが”萌え”か．．．。

「（ムカツ！）」

何故か、傍らの時列の怒りゲージが一つ上昇した。

席に着いて、改めて店内を良く見ると、この店の執事達の大半は女子。男子は僅か一人だけだった。

よし、この男子に聞いてみよう。

「おい、その男！ 五月闇って奴知らないか？」

「！ え、ミコトならさつきでk「キヤー！！」……………な、なんだ！？」

「「！？」」

突然、中庭の方から悲鳴が聞こえてきた！

その悲鳴に俺達は即座に反応する。

どんなことが起こっているかはわからないが、まずは状況を把握しなければ次の行動が定まらない。

故に、すぐに喫茶店を出て廊下の窓から中庭を見下ろす。

するとそこには……………！！

「む。どうした、季節闇くん。窓なんぞを凝視して。」

「いや．．．別に好きで窓なんぞを凝視してないんですけどね？」

ヤバい。あんなとこに籠られたら、いずれ自由時間が終わって戻ったときに鉢合わせになる。

どうすればいいんだ？

まるつきり帰らないなんて選択肢もあるけどそんなことやったら委員長になにされるかわかったもんじゃない。下手すると明日はメイドのコスプレになるかも．．．これは却下だな。宗識さんが僕の姿をみるまえに殴って気絶させる．．．．．却下だ。んなの出来るはずがない。

じゃあ、いつそのことここでぬg．．．．．それをやったら人として終わるな。坂巻 唯と同類になることだけは絶対に避けたい。

こうして僕は思考の海で確実に溺死へと向かっていた時に、月屑さんがステージを指差して僕にこういった。

「五月間くん。何故かあそこで人がもめている様だぞ。」

目を向けるとそこには・・・

『いや、ですから今から始まるカラオケ大会には事前エントリーしなければ出られないって言っていますよね?』

必死に目の前の女性を説得しようとする生徒会の男子生徒と、

『別にいいじゃん飛び入り参加も。大丈夫、ちゃんと優勝するから』

見覚えのある赤い女性が

『ですからそういう問題じゃないんですって!』

口論していた。

『しつこい!!--!』

ボカッ!

「うむ。殴った様だな。」

「ちょっとおおお！ 何してんですか潤さん！！？！」

余りのことに咄嗟に赤い女性改め、哀川潤さんのもとへ駆け寄る。

「あ、ミコトくんじゃん。ヤッホー」

「ヤッホーじゃないですよ！ なんで最強の請負人が高校の文化祭に遊びに来てるんですか！！」

「そんなことは、今はどうでもいい！ このカラオケ大会ってペアじゃなきゃ出れないらしいから一緒にでよう！！」

「彼の話し聞いていませんね完全に！！」

命を掛けて潤さんを説得しようとした彼が報われねえ！

「いいから歌うぞ！」

「ちよっ、僕はやるっていつてn「拒否権はない！！」酷い（涙）」

僕の腕をひっ掴んでステージまで引っ張ってく潤さん。

「お前、邪魔」

ボコッ！

「きゃー！！！」

「校長センセー!？」

これから始まるカラオケ大会の審査委員長として開幕の挨拶をしていた校長先生を潤さんは殴り飛ばす。

そして校長先生の甲高い叫び声が全校に響いた。

校長先生の悲鳴を聞き付けてうちのクラスから出て来た宗識さんと時列さんが、僕（と潤さん）を見た。

執事服姿の僕を。

．．．．．ああ、終わったな。
いろいろな意味で。

．．．．．

ちなみにその後、今回の事件は『赤い悪魔と執事（笑）事件』として直江津高校に代々語り継がれることとなる。その原因の一部は、潤さんがアニソンのみを連続十三曲も歌い続けたことにもある様な気がした。

11・END

什逸話 執事と文化祭（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

ここで、重大発表があります。

なんと『零崎宗識の人間考察』の総合PVが20000アクセス突破しましたあゝ！！！！

これもこの作品を支持して下さる皆様のおかげです。これから日々精進し、より良い作品を生み出したいと思います！

そして、次話から新章突入します。

漸く、原作主人公クラスの人物がこの物語に登場しますよ！

それが誰で、いったい『何』編なのかはお楽しみに

什仁話 こよみブレイド（前書き）

それでは今回より、

化物語編 スタートです。

什仁話 こよみブレイド

001

今まで僕はいろいろな人の話をしてきた。

あるときはキスショットの、あるときは羽川の、あるときは戦場ヶ原の、あるときは八九寺の、あるときは神原の、あるときは千石の話しをすることで避けてきたのかもしれないが、今回ばかりはそうはいかなくなつた。

いやいやながら僕は僕について語るとしよう。

阿良々木 暦 17歳。

直江津高校三年生で落ちこぼれ。数学以外は全て赤点。妹がふたりいる。

性格は、

キスショット曰く『面白い奴』

羽川曰く『弱くて薄い』

戦場ヶ原曰く『ゴミの様な人間』

八九寺曰く『変態』

神原曰く『神の如き存在』

千石曰く『やさしい』

……まあ、こんなものだろう。

以上が、僕の表向きのプロフィールだ。

そう表向きは。

裏を語れば、僕は春休みに一度人間を辞めている。鉄血にして熱血で冷血の吸血鬼キスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードに、のちの忍野忍によって襲われ血を根こそぎ吸い付くさ

れて、僕は死に、吸血鬼になった。今時、一周まわって古臭い概念である吸血鬼に襲われて吸血鬼になった。そしてその後に待ち受けていた地獄の春休みを乗り越え、漸く人間に帰ることができた。実のところ後遺症が残っているが、それだって本当に微かなものだと思っている。いや、”思っていた”。

そう、思っていたんだ。

ゴールデンウィーク後から企画していた文化祭が、多少の伝説が生まれたらしいが無事に終了し、大切な命の恩人・忍野メメがこの町からいなくなつた数日後。

僕は早速、新たな怪異に襲われた。

この事件は前述の春休みと密接に関わっていて、それはある意味まだあの春休みの事件は終わっていなかったということだろう。もしくは、春休みの事件は永遠に終わらないかもしれない。

今回の被害者は僕自身と忍で、怪異に”一方的に襲われた”。

それは、ただ一方的で感情なんて挟む余地などまるでなく、圧倒的な殺意と狂気をもつてただ僕と忍だけが付け狙われて切り刻まれた。

それは今までのどの怪異より厄介で、どんな怪異を相手するより恐ろしいものだった。

そしてその僕達を助けたのは、忍野ではなかった。

というか、忍野の様な専門家ですらない、怪異に対しては僕以下の全くの素人だったのだ。

さらに僕達を助けた彼等との出会いで、僕は今さらながら気づくこととなる。

春休みからの様々な出来事を通じて、吸血鬼や猫や蟹や蝸牛や猿や

蛇を通じて、僕は少なからず優越感の様なモノに浸っていたらしいことに。普通の人知らないことを少しばかり知っていただけで、この世の裏を全て知った気になっていたことに。

この世界は、コインの裏表の様に単純でなく、この世の裏は”いくつもある”ことに今更気づかされたのだ。

こうして僕は、怪異とは違う魑魅魍魎の住まう”暴力の世界”をのぞきみることとなった。

002

-やはり、忍野は居なかった。

文化祭が終了し、文化祭の後片付けをした今日。

学校が終わった後に忍野の暮らしていた廃墟に行ってみたが、忍野は居なかった。

あの日から僕の影の中にいる忍に何を聞いても何も答えてはくれなかった。

おそらく、忍野は本当にこの町を去ったのだろう。

そして僕はたぶん一生忍野に会えないと思う。

あの忍野が姿を暗ますのだからきつとそれくらいやってのける。

僕はしばらくの間廃墟の中で考え込み、そして帰ることにした。

通学用のママチャリにまたがり、すっかり暗くなってしまった夜道を進む。

今は六月で、実のところまだ梅雨が明けてない。

その梅雨の時期独特の暗さの空を見て、僕はこう呟く。

「……五月間、か」

以前、羽川が言っていた。梅雨の時期独特のこんな暗さの夜のことを『五月闇』というそうだ。

おそらく、高校教師ですら知らないだろう。

羽川が知っていること自体がかなり特殊なのだと僕は思う。

そんなことを考えながら、自転車を走らせていると人気のない住宅地へ入ったところで奇妙な物を見つけた。

道路の真ん中に抜き身の日本刀が一本、刺さっていた。

「は？」

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや

一瞬で思考が漂白される。

今まで感じたモノとは明らかに違う殺意。

神原のときの敵意や嫉妬の入り混じったものとは違う、他人に心臓を握られる様な気味の悪い殺意だ。

だけど僕が振り返ると、そこにはその刀はなかった。

「．．．どういうことだ？」

刀が刺さっていたあとも、さっきまで感じていた気味の悪い殺意すら嘘の様に消えていた。

それはもう綺麗さっぱり。

あれは幻だったのだろうか？

「なああ忍、どう思う？」

街灯に照らされて出来た僕の影に向かって話し掛けるも反応はやはり無い。

いつもと同じ反応だが、誰も今の僕の問いに答えてくれないことに原因不明の不安が募り、焦らせる。

．．．．．早く、早く家に帰らなければッ！

いつもなら面倒事ばかり引き起こすから余りかわりたくない火憐ちゃんや月火ちゃんに会いたい！

そう思い、必死に自転車を漕ぐ。

人気の無い道をひたすら走り続け、そして僕は立ち止まった。
立ち止まってしまった。

「おい、嘘だろ・・・」

僕の目の前、10?程先にある街灯。

その真下には、

先程の日本刀が地面に突き刺さっていた。

狙われている・・・のか?

だとしたら、近づかない方がいい。

というか、もう近づきたくない。

そう思い、僕は道を引き返そうと自転車の向きを変える。

この道を通らなければ家に帰れない訳じゃないのだから、少し遠回りになるが別な道で帰れることしよう。

そして僕は自転車に跨がった。

不覚にもアレに背を向けて・・・。

「馬鹿者がッ!!」

「うわっ・・・え？ 忍？」

いきなり僕は怒鳴り声と共に脇腹を思いっきり蹴り飛ばされた。

しかも、僕を罵倒し蹴り飛ばしたのは春休み以来一切口を聞いてくれなかった忍だったのだ。

そのことはとても嬉しかった。

だが、今は喜びを噛み締めている場合では無かった。

ひやり と僕の右頬をとても鋭利なナニ力が掠めた。

それは言うまでもなく、あの日本刀だった。

「・・・ッ!？」

後ろから飛んできた刀はそのまま放物線を描いて僕の目の前の地面に刺さる。

コンクリの地面に深々と・・・。

「どんな切れ味してんだよ！」

そして思う。

もし、忍が僕を蹴り飛ばさなければ今頃・・・。

「あ、ありがとう忍」

「そんなことを儼に言っている暇があるなら前を見る！まだ終わっていないぞ！！」

忍は僕にそういったが、その視線は目の前の日本刀から一切離さない。

まるで僕など眼中にないと言わんばかりの、いや、実際にこの場では眼中になんて収まっていけないのだろう。

あの忍が、

忍野が百回も負けたブラック羽川を一瞬で倒した忍が、キスショット時代ですら一度も見たことの無いほどの敵意を刀に向けていた。

そして、日本刀自体もゆっくりと”ひとりでに”コンクリから抜けてきた。

誰も触れていないにも関わらずだ。

その日本刀が完全に抜けきった途端、今度は忍に向かって飛んで行った！

それをあっさりと忍はかわしたが、そこでその日本刀は不自然な動きをした。

刀は、”何もない空中で直角に向きを変えた”のだ。

その標的は………僕。

目の前に無機質な刃が迫る。

「うわっ！」

僕も、忍の様にはいかなかったが、少し体制を崩し倒れながらも何とか避けることに成功した。

さつきといい、今といい一撃で首を切り落とそうとする斬戟にどつと汗が吹き出る。

右頬を流れる生温かい汗を手の甲で拭う。

拭った手の甲は赤く染まっていた。

どうやら汗と血を間違えたらしい。

さつき刀が頬を掠めたときに傷が出来ていて、そこから出血したのか？

咄嗟に手の平で触れてみると、確かにパツクリと斬り傷が付いていた。

縫う程深くは無いが鋭利な傷だ。

逃げ切れたら後で消毒しておこう。

と、そこまで考えて僕は気づく。

再生能力が発動していないことに……………。

おかしいぞ、どういうことだ!!

腕が千切れても結果なんかあったレベルの自己治癒能力が僕には備わっている。それは春休みの後遺症で残っていた吸血鬼の再生能力なのだが、その力があればこの程度の傷は一瞬で治る。

だけど、その能力が発動しない。発動しない!発動しないだって!!

「お前様、気を抜くな!!」

「!?!」

再び目の前に迫る白刃。

崩れた体制で、しかも動揺して反応が遅れた。

避けられない!

ガキイイインッ

僕が死を覚悟した瞬間、刀が弾け飛ぶ。

日本刀はそのまま飛ばされ、夜闇の中へ F a d e o u t した。

そしてその刃から僕を守ったのは・・・

「白い・・・・・・・・スコップ？」

地面に穴を掘ったりするときに使うー？くらいの奴。

これが、いきなり凄い勢いで飛んできてあの日本刀を弾き飛ばした。

それはもう矢の様な精度で。

あれが僕に向けられていたら確実に串刺しになってたんじゃないのか？

スコップの先端は別に尖ってないけど、そうなりそうな程の威力を感じるには十分だった。

といつかどっから飛んできたんだこれ？

「おい！ 大丈夫か！？」

「先輩、大丈夫ですか？！」

少し遠くの方から二人組がこちらに向かってきた。

一人は、僕より10？以上身長が高い白髪の男。

もう一人は、僕と同じ白いワイシャツを着て黒縁眼鏡をかけた少年。

「……………っとマズイ！」

「忍！ 早く僕の影に入れ！」

「言われずともわかっておる。」

そういつて忍は素直に影の中に入って行っただ。

「……………終始僕のことをものすごく睨んでいたが。」

そこでふと、先程かけられた言葉を思い出す。

『先輩、大丈夫ですか?!』

「……僕は、今まで神原からしか先輩と呼ばれたことは無いんだけど、あの少年は誰だろう? 全く記憶にない。」

そして徐々に近付いて来た二人組。

そして僕のすぐ側まで来て、少年の方が、

「大丈夫ですか?」

と僕に手を伸ばし、

白髪の男が落ちている白スコープを拾った。

どうやらこのスコープはこの人の持ち物らしい。ということは、僕を助けてくれたのはこの人なのか?

「ん? ああ、お前を助けたのは俺だけど?」

やっぱりそうだったのか。

「それより、あの日本刀はいつたい何なんだ? 遠目では独りでに動いてるみたいだったけど?」

白髪の男は僕にこう質問する。その顔に浮かんでいるのは純粹な疑問だった。

「そんなの、僕にもわかねえよ」

僕は、僕のことを先輩と呼ぶ謎の少年の手を使って身を起こしながらこう答える。

良く見ると、この少年は随分地味な顔立ちをしていた。ゲームならモブキャラDの様な感じ。

AやBでないところがミソだ。

そして、僕の答えを白髪の子は「ふうん」とつまらなさそうに受け流し……

「俺の名前は、ゼー……じゃなくて裏柳 数奇。請負人だ。」

「僕は、数奇さんのところでバイトしている 五月闇 命です。」

……と、改めて自己紹介をした。

五月闇？

奇しくも、それは今夜と同じ名前だった。

もしかするとこの出会いは、ある意味運命であり、そしてとことん必然的だったのだろう。

これが、『吸血鬼モドキ』の僕と『請負人で殺人鬼な男』と『時間に嫌われた少年』の出会いであった……。

「早速だが、俺達はある事情でお前を探していたんだ」

と、白髪の男改めて裏柳さんが僕にそういった。

．．事情？

なんだそれは？

「え〜とですね。先輩に少し聞きたいことがあるんですよ？」

今度は、地味な少年改めて五月闇がそう言った。

僕は『請負人』とかいう変な職種の人に価値のあることなんて知らないと思うんだけど．．？

「『忍野メメ』とかいう胡散臭い男のことについて聞かせてくれ。」

1
2
·
E
N
D

什仁話 こよみブレイド（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回より始まってしまいました 化物語編。

時系列的には化物語の『つばさキャット』の直後に当たります。故に、この段階では阿良々木君はまだカイキや影縫さんにはであっていません。

そこは頭の隅の方においておいて下さい。

というか、阿良々木君のキャラに自信が持てない。ソレっぽくやろうと思っても中々上手くいきません。難しいですね？

さて、次話では零崎宗識 & amp・五月闇命の視点で書きます。何故文化祭に哀川さんが来た理由もそこで氷解しますのであしからず。量が多くなるかも知れないので投稿はいつもより遅くなります。

P S・ 化物語編の間は特に皆様の感想やアドバイス等、お待ちしています。

ちなみに今なら返信率100%ですよ。

什箋話 『忍野メメ』 (前書き)

すいません。長い間お待たせしました。

什戔話 『忍野メメ』

「はあ、ところで哀k・・・潤さんは何故に命の文化祭にいたんですか？」

ここは『裏柳請負人事務所』。俺の職場である。

さて、本来の予定では、今日はうちのバイトである命の文化祭に遊びにいつて命をからかったりするつもりだったのだが、突如発生した緊急事態のせいで急いで事務所まで帰らなければならなくなった。

その緊急事態とは、俺の目の前にいる深紅の女性。言わずとした人類最強 哀川潤が文化祭のカラオケ大会に校長先生をぶっ飛ばして乱入したのだ。

そして強制的に舞台にあげられた、残念な格好をした命と共にアニソンを何曲も熱唱。

一曲歌うごとに哀川さんのテンションは上がり、観客の空気はシラケるという悪夢の様な反比例を見せ付けられ、『もう見てらんないつか命が可哀相！』だとか思っただけの頃合いを見て哀川さんを掻っ攫い、一気にここまで担いで走ってきた。

・・・あ、よくここまであの人類最強を担いでこれたな。良く頑張ったよな、俺。

「ん？ ああそついや、お前に用があつて来たんだよ。なのにお前はいないし、仕方なく近くでやってた文化祭で遊んでたんだよ」

「用？ 俺にですか？」

はて、心当たりがない。

哀川さんに迷惑かけてないし、何かいわれる筋合いはない．．．．
．はず。

「お前、小唄の奴になんか頼み事してただろ？」

「！？」

天下の大泥棒 石丸小唄。

彼女と俺は．．．まあ、知り合いである。彼女に言わせると『お友
達』フレンドなんだけどね。

「えーと、まさかとは思いますが潤さんは石丸小唄と友達なんです
か？」

それこそ驚きだ。

石丸小唄と哀川潤では。性格上相性が悪い。

しいていうなら、悪戯好きの猿と好戦的な犬を同じ檻にいておく
のと同じことだと俺は思う。

「けっ、ちげーよ。小唄の奴が一方的にそういつてるだけだ」

そして哀川さんは俺の問いに対して予想通りの答えを返す。

「だけど小唄の奴は今忙しいらしいんで、あたしが小唄の代わりに
来たんだよ」 - 勿論、請負人の仕事として - と哀川さんは付け足し
た。

いや、それぐらいの頼みならただで聞いてあげればいいじゃん．．
．とか思ったけど、口に出した瞬間にミンチにされそうだから言わ

なかった。

「で、ほらこれだ」

そこで哀川さんは俺にA4サイズの茶封筒を差し出した。

「ありがとうございます」

といって俺はそれを受け取る。

．．．．．失礼だが、まさか本当にこれだけの資料が集まるとは思わなかった。1?くらいの厚さはあんじゃん。

この件を、軋識の兄貴に頼んでも名前くらいしかわからなかったのに。

軋識の兄貴は【式岸軋騎^{シキギシキギ}】の名前でとあるサイバーテログループの一員として活動していた(この事実を当人は隠しているつもりらしいが、実際は一賊全員しっている)。

で、そのテログループのリーダーが玖渚機関の人間らしい。テログループとしては解散したものの、軋識の兄貴は今でも玖渚機関にソレ相応のパイプがある。その軋識の兄貴に頼んでも名前くらいしかわからなかったということは、天下無敵の玖渚機関ですらそれくらいしか調べられなかったということで、この人物がどれ程『異常』な存在なのかを表している。

ある意味駄目元で、渋々小唄さんに頼んでみたらこんなに情報を集めてくれるとは思わなかった。

そしてさっそく封筒を開封してみる。

そこにあつたのは

．．．．．週刊少年ジャプ。ちなみにセンターカラーはNAR
TO。

．．．．．え〜と、どういうことだ？

「．．．あの、哀川さん？」

「．．．．．ごめん、間違えた」

哀川さんのことを苗字で言ったのに『あたしを苗字で呼ぶのは敵だ
けだ』とか突っ込まなかったし、本当に反省している様だった。

「ちよつと本物取りに行つて来るから待つてろ！」

そう哀川さんは言い残し、凄い早さで事務所を出ていく。

．．．何か階段の方で色々な破壊音が聞こえたが気にしたらダメな
気がする。

ちなみに、本物の資料が届いたのは二日後のことであった・・・。

本日は月曜日。文化祭終了した翌日である。

土日を使った文化祭は、終わった後に殆どの学校で二日間の振り返り休日を与えられる。

そしてこれまた大抵の高校は振り返り休日は、月火の二日間ではなく、火水の二日間になっている。その理由は単純明快。月曜日は半日かけて文化祭の後片付けをするのだ。

と、いうわけで僕こと直江津高校一年の五月闇命は文化祭の後片付

けに勤しんでいる。

さっきまでクラスの装飾を剥がしたり、箒で床を掃いたりしていた。そして現在、僕は文化祭の執事喫茶の最高責任者であった委員長の命令で、喫茶店で使ったテーブルクロス数枚を返しに演劇部の部室に向かっていた。

そもそもこのテーブルクロスは演劇部の小道具で、それを文化祭期間中貸してもらっていたのだ。まあ、普通に考えて、入学したての一年生の予算でテーブルクロスを何枚も買える訳がないしね。

ちなみに今の僕のテンションは超低い。海から上がったばかりのイグアナの姿を想像して欲しい。あのけだるげな姿が、今の僕の様子を的確に表現していると思う。

理由は文化祭の後片付けが死ぬほど面倒臭いとか、このテーブルクロスが予想外にかさ張って持ち運びにくいとか、月屑さんに一万円をばったくられたからとかではない。……まあ、一万円をばったくられたのも相当堪えているけど……。

今、僕のすぐ横を二人組の女子が通り過ぎる。

ちなみにその二人組は、僕を見てクスクスと笑っていた……。

……そう、これだ。これなんです。これなんですよ!!

僕は、文化祭初日に突如現れた潤さんによって半強制的にカラオケ大会に（執事服を着た状態で）出場させられたのだ。

……出場？ いや、アレは正確に言えば乱入だ。

潤さんと共にカラオケ大会に乱入し、アニソンのみを強制的に熱唱させられた。

そのインパクトが原因で、最早直江津高校ではそのカラオケ大会は

伝説と化している。

その伝説が原因で、僕はほぼサラシモノ状態であり、時々道行く人達が僕のことを笑うのだ。

あゝ、恥ずかしい（／／／／／）

時々すれ違う人々の視線に羞恥心を刺激されながら、僕は廊下を進んでいく。

そして漸く演劇部の部室に辿り着いた。

基本的に、進学校である直江津高校は部活動にはあまり積極的ではない。

故に、運動部には着替える為の更衣室は存在するが、文化部に部室なんてものは与えられない。

だから文化部は、その日にたまたま空いている教室を、教師に許可を貰って毎度使用している。

そして目の前の部屋を僕は『演劇部の部室』とよんだが、それはある種の比喻であり、実際は少し違う。

正式には『演劇部の部室』と僕がよんだ部屋は、体育館に隣接し、跳び箱やらバスケットボールやらの備品が置かれている体育館倉庫だ。

演劇部は演劇のリハーサル等に割と頻繁に体育館のステージを使い、体育館のすぐ近くにある放送室の放送機材も良く使うそうで、その両方を使う上でちょうどいい位置にあるこの体育館倉庫を半私物化しているのである。

そしてそれを何故か教師陣が黙認しているのだ。

そのため、我々生徒一同はこの体育館倉庫を若干皮肉混じりで『演劇部の部室』と呼んでいるのだ。

それで僕が『演劇部の部室』たる体育倉庫の中に入ろうと扉の前に立ったその時、その扉が突然開き、中から人が出てきた。

僕に未来視の能力があるからといって、ソレが常時フル稼働しているわけではなく普通はずっとOffにしている。いくらなんでもそんなに数秒先を何時間も見ていても、ただ眼と頭が痛くなるだけだ。

・要するに僕が何をいいたいのかということ、僕がその人と思いつ切りぶつかってしまったということだ。

思いつ切りぶつかったといってもお互い、少しバランスを崩した程度で転びはしなかった。

僕にぶつかった人（男子生徒。雰囲気的にはたぶん上級生）は、

「あ、ごめん。」

と一言僕に謝ってそそくさといなくなってしまった・・・。

彼には僕が大したことがなかった様に見えたらしい。実際、ぶつかって転びもしてないし勿論怪我もしていない。

だけど、その時の僕は全然大したことのない状況などではなかった。

はたから見れば、驚いてただその場に固まっているだけの様に見えるだろう。

だが、実際は全然違う。

彼とぶつかった瞬間、僕の頭の中に懐かしいノイズが走った・・・。

懐かしいモノは、全てが全部イイモノであるとは限らない。ソレは、記憶の奥底に沈めた一種のトラウマだ。

そしてソレは、僕が未来視と同時に持っている能力。
．．．．．とても忌ま忌ましい呪いの如きチカラ。

他人の記憶と想いを覗き見るサイコメトリー。未来視とは違い、決して制御できないチカラ。

．．．．．ここしばらくは一切出なかったのに、とうとう出てしまった。

昔、苦しめられた不快なノイズが頭の中に響く．．．。
そしてそのノイズが終わる時、記憶が”観える”。

そしてノイズは途絶え、記憶の映像が走馬灯の様に僕の眼に写りだす。

．．．街灯の明かり．．．四肢を切断された金髪の美女．．．火の
付いていない煙草を加えたアロハの中年．．．長い白髪のネコミミ
少女．．．口腔内にカッターとホチキスをつ込む少女．．．泣き
顔で空き地に飛び込む幼女．．．線路沿いでこちらを凝視する長靴
と合羽を着た得体のしれないモノ．．．スク水の少女を絞める二匹
の蛇．．．金髪幼女に噛み付かれた白髪ネコミミ少女．．．
．．．
．．．

ーッッッ!!?!

な、何なんだこの記憶はッ!

ありえない、ありえない、ありえない!!

四肢切断された金髪美女も口の中に文房具とは名ばかりの凶器を突っ込まれるのも雨合羽のバケモノと遭遇するのも見えない蛇が女の子に巻き付く姿を見るのもネコミミと殺し合うのも日常生活ではありえないッて?!

しかも今のは映画とかの記憶じゃなくて確実に体験の記憶だった。
フィクション マジモノ

僕の日常もかなり異常だけど、この人の日常は更にハイレベルにデ
ンジャラスだ。

いったいどうしたら一塊の高校生があんな記憶を所有するんだろう
か?

ん?

ちょっとまってよ?

昔、宗識さんがなんかいつてたような...

”つか、なんでこの刑事達は毎度部外者である探偵に事件の情報を教えてるわけ? 情報漏洩だぜこれ? 実際にやったら軽くても謹慎処分だな。”

.....違う。これは違う。これは宗識さんの某推理漫画の感

想だ。

これじゃなくて・・・

”でもって何で組織である警察より先に、個人である探偵が事件を解決するんだろ？そして、毎度刑事達がその探偵が有名だからって期待しちゃってさ。それってさ、如何に警察が無能かを世間に宣伝している様なもんじゃん？メンツが丸つぶれたよな？”

・・・ってこれも違う。というかさっきの続きじゃん。これでもなくて・・・

”やっぱり『名探偵コナン』に出てくる警察はダメだな”

露骨に作品名を出すなああああああ！？

今まで既存の他作品名の名前は最低でも一部で消したりしていたのに！

そもそもさっき『某推理漫画』ってわざわざ露骨な表現を避けた僕の苦勞が水の泡じゃないか！！

・・・って違う！これじゃない！！

”時々、『普通の世界』に『暴力の世界』の住民が紛れていることがある。例でいうなら、殺し屋が極普通に高校に通っていたりするんだよな？”

．．．そうだ、これだ！もしかしたら、今ぶつかっただのは『暴力の世界』の関係者なのか？

もしそうなら．．．マズイ。

殺し名や呪い名とか呼ばれる連中がそんなに無差別に人を殺さないとは限らない。宗識さんや月屑さん、そして時列さんみたいな人ばかりでは絶対にならないのだろうから。

ここには、彰や委員長だっているんだ！

誰も殺させるものか！！

僕はそう決意し、テーブルクロスを放り出して先輩（仮）を全力で追い掛ける。

だけど、僕は今の今までずっと考え事をしていた為、タイミングを逃してしまっていた。

もうその時点で彼の姿を僕は見失ってしまっていたのだから．．．。

それから約二時間、学校中を走り回った。正直、体育会系ではない僕にはかなりキツかったが、とにかく無我夢中で走った。無論、あの先輩を探すためだ。

だが、結局見つけたことができず時間切れとなってしまった。本日は文化祭の後片付けの為に午前中しか授業がない。要するに、その先輩を見つけたす前に下校時刻になってしまったということだ。

ちなみに一旦教室に帰った時、委員長にこっぴどく怒られた。またもにテールクロスも返してないし、いつまでたっても帰って来て手伝わないし、当然といえば当然だった。

そして今、僕は学校から『裏柳請負人事務所』に向かっている。

ちなみに、委員長と彰を含む大勢の生徒は、もうとつくに下校していて校内には殆ど誰も残っていない。

大勢の人が被害に会う前に宗識さんに相談した方がいいと僕は判断し、上記の通り事務所に割と早足で向かう。

そしてその途中、偶然知り合いを見つけた。

僕の200?程前方に、僕と同じ方向に（要は僕に背中を向けて）歩いているとある人物。

．．．．．いや、少し訂正しよう。

正確には、”とある人物”ではなく”とある幽霊”だ。
つまり、迷惑極まりない超絶変態浮遊霊・坂巻 唯だ。

普段なら僕は彼女をみたら、即無視を決め込む。

下手に彼女に関わると変態的マシンガントークの被害者になってしまうからだ。

だから今回も無視を決め込もうとしたが．．．．．出来なかった。

何故なら、彼女が小学生くらいの女の子と手を繋いで歩いていたのだ。

はたから見れば、仲のいい姉妹に見えるかもしれない。

だがしかし、その姿を見た瞬間僕の取るべき行動は決まった。

その場から、アイ ールド21さながらのダッシュで彼女との距離を詰め、そして．．．

「何してんじゃボケエエエえエエー!!」

渾身のドロップキックを喰らわせた。

それも後頭部にヒットした。

幽霊だからといってすり抜けることもなかった。

そして彼女は、

「がはっ……………」

と言ったキリ地面に倒れて痙攣している。

ケツ 自業自得だ！

さてここで、何故僕がこんなことをしたのか説明しよう。

まず、上記の通り彼女は変態である。

その彼女が見ず知らずの幼女と仲良さそくに手を繋いで歩いていたのだ。

彼女は幽霊であるため、あの女の子が彼女の妹である可能性は0。ということとは

変態＋幼女＝犯罪

の方程式が弾き出されるのは当前だとは思わないか？

「……………前から危ないとは思っていたが、とうとう手を出すとはな。失望した……………いつてえ！！」

唯の奴に説教を始めようとした時に、僕が助けた女の子がいきなり僕の手を噛み付いてきた。

「わたしの友達になんてことするんですか！！」

．．．．え、友達？

「あゝいや、その、ごめん。僕としたことがはよとちりだった」

その後、僕は唯に謝った。

「いや、こちらこそごめんなさい。流石にワイもミコトくんの前でふざけすぎたかもしれない．．．」

しかし、僕より唯の方がなんか深く反省していた。

ちなみに、ふたりは正真正銘の友人同士で幽霊仲間だった。

さっき僕が勘違いをしていた原因の女の子は、【八九寺 ハチクジマヨイ 真宵】と
いう名前だそうだ。

ツインテールと大きなリュックがトレードマーク。

「真宵ちゃんもごめん。」

「いえいえ、五月闇さんがわかってくださればそれでいいです」

見た目小学生なのに、真宵ちゃんは結構ちゃんとした敬語を使っていた。

意外と賢い子だな。

現在、僕達は『裏柳請負人事務所』の方向に歩きながら話している。

「真宵ちゃんはここ最近になって浮遊霊に昇格したんや。だからワイが、こちら辺を案内してたんやで。」

「そうなんですよ。本当に坂巻さんには感謝しているんですよ？」

「へー、そうなんだ。まさかだな」

「ミコトくん！ 冗談キツイってー（涙）」

こんな雑談を繰り返している時、僕はハッと気がついた。

さっきの謎の先輩の記憶の中に真宵ちゃんがいた事に……。

「真宵ちゃん！」

「は、はい！」

僕がいきなり大きな声を出したからか、真宵ちゃんは驚いた様な声を上げた。

「真宵ちゃんに、僕以外の高校生の知り合いいない？」

真宵ちゃんは幽霊だ。

そんなに友人関係は多くないはずだ！

ならば、あの先輩のことも少なからずわかるはず！

「高校生？ ああ、阿良々木さんのことですか？」

「阿良々木さん？ それって割と小柄な人？」

「はい。高校男子としては小柄ですね。」

まあ、とりあえず僕が接触したのが【阿良々木さん】だということ
が、ほぼ確定した。

それなら、（なんか言い方が悪いが）真宵ちゃんから少し情報を引
き出してみるか。

「阿良々木さんってどんな人なの？」

「変態です。」

真宵ちゃんは間髪入れずに即答した。

．．．どんな奴だよ。

「わたしを見つける度に、後ろから抱き着いて胸とかパンツとか触
りまくって舐めまくる変態です」

「最悪だね」

「そやね。変態の風上にもおけへんな」

「あんたにそれを言う資格はないよ」

そしてその後も続く阿良々木さんの暴露話。

話しを聞く度に僕と唯の中で阿良々木さんの評価はガンガン下がって行く。

しばらく聞いてたら、僕が阿良々木さんと同じ”人間”という種族であることすら恥ずかしくなってきた。

そして僕は一番肝心なことを真宵ちゃんにきく。

「阿良々木さんって、もしかして人を殺したりする？」

「……………今思えば随分失礼で露骨な言い方だと思う。

幽霊だろうと小学生にするような質問ではなかった。

しかしそれに真宵ちゃんは、

「そんな訳ないじゃないですか！」

と何の迷いもなく怒って否定した。

その口調からは、言葉に表されない信頼と好意と自信が感じられた。

「阿良々木さんは、確かに変態ですけど、絶対にそんなことはしません。むしろ真逆です。困っている人がいればリスクも敵味方も状況も省みずに助ける様な人ですから。わたしは、あそこまでお人よしで、優しい人は一人も知りません！」

今まで、散々阿良々木さんの悪口を言っていた時なんかより何倍も生き生きとした嬉しそうな、楽しそうな顔でそんなことを言う真宵ちゃん。

．．．．．なんで阿良々木さんは、真宵ちゃんにここまで信頼されるのだろう？

僕は、ここまで他人を信じきった人を見たことがない。

僕がまだ『五月闇』の姓を名乗る前、今より大勢の人に囲まれていた実家にいた頃すらこんな人を一度も見たことがない。

それは、今までの悪印象が全て帳消しになるほどの凄いことだ。

そんな阿良々木さんに僕はとても会ってみたくなくなった。

「ふう、やはりこんなものか。．．．．いや、むしろ小唄さんだからこそこまで調べることが出来たのか？」

俺は、ついさつき郵便で送られてきた資料をみて嘆息する。

俺が小唄さんに伝えたのは”この人物”の外見的特徴と名前のみ。それが、小唄さんに依頼した当時俺の把握している情報の全てだった。

たったこれだけの情報のみを頼りに、良くここまで調べてくれたものだ。

依頼してから二ヶ月。

あの人は俺の為に、二ヶ月も頑張ってくれたんだ．．。

凄く感謝している。

ありがとう小唄さん。

そんな風に小唄さんにささやかながら感謝していた時に、

「こんにちは」

とマヌケな声と共に命が事務所の中に入ってきた。

「よう、早かったじゃん執事（笑）」

「ちょ、喧嘩売ってるんですか！」

む、いつもより冗談が通じない。

これは散々からかわれたな、学校で。

「学校でも散々馬鹿にされるし、もうその件でからかわれるのはもう懲り懲り……ッ!!」

俺に文句を言おうとした命は、何故か俺の顔を見て驚愕の表情を浮かべた。

「ん、どうした？」

「む、宗識さん！　が、眼帯はどうしたんですか!？」

あゝ、何だそのことか。

「洗濯中」

生憎、スピアの眼帯とかもってねえんだよ。

「え、いや、その、いいんですか？」

……成る程、そういうことか。

「お前、勘違いしてんだろ？　俺は別に右目が見えない訳でも特殊

能力がある訳でもないぞ？」

「え、マジで？」

キョトンとした表情になる命。

「．．．．．阿呆かお前は。まさか、右目が写輪眼だとも思ったのか？」

「いや、なんかそれ相応の理由があるんじゃない？」

「あるっちゃあるけど．．．ぶっちゃけいいたくない」

恥ずかしいから絶対に理由だけは言えない！！

「．．．．．いいたくないなら別にいいですけど。」

といったきり、命はこのことを聞くことはなかった。

だがそこで、命はふと気づいた様にこう聞いてきた。

「ん？宗識さん、何をもってるんですか？　もしかして仕事の資料？」

とかいって、命は俺がついさっきまで目を通していた書類を指差す。

惜しいっ！

残念ながら仕事のじゃないんだよ。

「違う。これはちょっと個人的に気になることがあって、そのことをについての資料だ」

「気になること・・・ですか？」

「そうだ。・・・春休みの事件を覚えているか？」

命が忘れていたはずがないが、確認をとる。

「・・・忘れる訳がありません。僕が、初めて宗識さんに会った事件ですから」

そう、春休み。中学を卒業したばかりの頃の命と偶然、俺は出会ったのだ。俺は当時、“ある事件”を調べていてその最中に命を中心とした事件に巻き込まれたのだ。

「その当時、俺がお前のは別な事件を調べていたのは知っているな？」

「はい。確かにそんなことをいつてましたね。・・・そもそも、いつたいどんな事件だったんですか？」

「・・・ぶつちやけたところ、全体的な概要というか、事件として”何がどう起こった”のかは俺もわかんねえ」

「・・・は？」

いや、ナニITTエンノイミワカンネ的な表情されても困る。俺だって十分変なのわかってんだからさ！

「明らかに事件性のある証拠がバンバン出てきているのに、それから何も連想出来ないというか、どんな事件なのか全体像が全く想像

できねえんだよ！」

自分でもホントに何が何だかわかんねえんだよ！

「で、内容はというと、まず最初は、ある日の深夜に紅梅が直江津高校の方から謎の衝突音が出たのを聞いたことからだ」

「え、直江津高校からですか？」

「そうだ。で、紅梅が直江津高校に様子を見にいこうとしたんだが、何故か道をいろいろ間違えてなかなか辿り着けなかったんだと。そして漸く辿り着いたんだが、なにも起こってなかったそうだ。紅梅曰く、『明らかに地面が陥没するくらいのデカイ音が聞こえた』らしいが、そんな痕跡がさっぱりなかったそうだ。」

「……それは月屑さんの勘違いではないんですか？」

「いや、その話を紅梅から聞いた直後に実際に直江津高校に行つたんだよ。何となく妙な予感がしてな？ で、調べてみるといろいろとおかしかったんだよな。まず、体育倉庫の扉に、”何者かが”蹴り抜いた痕跡があつた。門も綺麗に直っていたが、微妙に歪んでいたしな」

蹴り抜いた跡も、かなり綺麗に修復されていた。

そりゃ素人目には全然わからないレベルでだ。

「更に翌週。今度は時列が、直江津高校周辺に細工がされている事に気づいた。呪い名の様な技術の何かしらで、空間制作とかなんとかに似た感じで直江津高校を目立たなくするとかいう効果があつたそうだ。」

まあ、所謂結界の様なものだそうだ。

「その時は、俺も時列に呼ばれて一緒に直江津高校に向かった。しかし、案の定どこも変わったところはなかった。ぱつと見はな？」

「ということは、さっきと同じ様に何かしらの異常があったんですね？」

「ああ、そうだ。陸上用の砂場の砂が減っていた。更には花壇に『ぴいちゃんの墓』が立てられてた。」

「『ぴいちゃんの墓』のどこが変なんですか？」

「……うむ、確かにそうだ。よく小学校の校庭にはあったよな、あゝゆの。けどさ……」

「高校で鳥とかは飼わないだろ？」

「あ、そうか」

命は意外とあっさり自分のミスを認めた。

そしてぶつちやけここからが大切。

「で、怪しくてその墓を暴いてみたら……」人間の内臓”
が埋まっていた。」

「……………うつ」

その言葉を聞いた途端、命の表情が曇った。

今までは、あまり具体性のない真実味のない話だったのが、リアリティのあるグロが出てきたんだからな。その気持ちはわかるよ。うん。

「その後もいろいろ調べると（些細だが）不審な痕跡がバンバン出てくるし、こりゃなんかあるなと監視カメラを五台直江津高校付近に設置しておいたんだが．．．」

「今度は何が起こったんすか？」

「．．．五台全部電源を切られていた。」

「ホントに一体全体何があったんですか！」

いやさ、俺自身そこまでされるとはおもなかったよ、実際。

だが、このことによってこれが明らかに何らかの事件であることが確定した。

「その次の晩からは、俺自身が張り込もうと思ったんだが．．．」

「．．．．．僕の事件に介入してしまって張り込めなかったんですね」

俺はコクリと頷く。

そこから始まる俺と命のエピソードについてはここで語るまい。語るべきではない。

この話は、来るべき時に語ることにしよう。

「で結局、お前の事件が片付いた時には、その事件ももう終わっていたんだよ」

そんな訳で、真相は闇の中へ．．．．．ってなるはずだったんだがな。

「だけど、以前仕掛けたあの監視カメラの一台に不審なアロハ男が写っていた」

「アロハ男？ アロハシャツを着た男．．．ですか？」

「そうだ。この男を調べれば何かわかるかもしれないから、その映像を元に調べまくった。」

軌識の兄貴に頼んだり、小唄さんに依頼したりして。俺の考えうる全てのルートで調べた。

だが．．．

「結局、今手元にある三枚分しか情報は集まらなかった。名前、経歴、年齢、住所。この情報だけだ。しかも、”この殆どがダミーだ！”

「え、ダミーってことは偽の情報ですよな？」

「お前が来るまでにここに書いてあるあちこちに電話して確認を取ってわかったんだがな」

ああ、そうだ玖渚機関や天下の大泥棒ですら真実の情報を手に入れることができなかったんだ。

「この【忍野メメ】というアロハ男に対して、俺は完全敗北したに等しい！」

こう言つて俺は手に持っていた資料を命の方に投げる。

畜生、何なんだこの胡散臭いオッサンは！

殺し名でも呪い名でもない、表向きはただのオッサンの個人情報は何故オールダミーなんだ！！

「あッ！」

俺の渡した資料をみたたん、命は謎の大声を上げた。

「どうした執事（笑）！」

「だからその名前で呼ぶな！！……ってそうじゃなくて、このオッサン、見たことがあります！？」

と言つて資料についてる顔写真を指差す命。

「マジで！？」

「はい。実は……」

くカクカクシカジカクカクウマウマ

「成る程、お前のその能力も役に立つんだな」

「ええ、ぶつちやけ初めてですよ、この能力が役に立ったの」

命が自虐するように笑う。

そもそも、どんなものでも能力というモノに単純な善悪はない。その善悪は、使い方や使う者の意思により決定されるものだからだ。

命を苦しめ続けたあの能力も今回役に立ったのを機に、命自身のトラウマを払拭するきっかけになってくれればいいな。

「と、まあ、とりあえずその阿良々木という奴を捕まえれば忍野メモの手掛かりが掴めるわけだな」

「そうですね。僕が観れるのはその本人が覚えている記憶だけみたいですし、確実にそのオッサンのことを覚えてますよ」

まさか、こんなに命が心強いなんて思わなかった。偶然の産物ではあるがここでそんな手掛かりを手に入れたのは僥倖だ。

「よし命、明日その阿良々木とやらを取っ捕まえて連れて来い！」

「無理ですよ」

何を言っているんですか、とでもいいかげな視線を俺に投げかける。

「明日と明後日は振り返り休日で学校はありませんよ？」

「あゝ」

ああゝそうだった。

明日学校がないなら大多数の生徒は登校しない。
それじゃ阿良々木を取っ捕まえられない。
更に今日あったばかりで自宅の住所も知らない。

ちえ、しゃあねえな。

しばらく待つしかないか。

「はあ、じゃ水曜に連れて来い。あ、あ、さっさと情報搾り出したかったんだけどな」

その会話の後は、とても穏やかに時が過ぎていった・・・。
チェスをしたり、テレビみたり、今までの資料を整理したり、読みかけのミステリを読んだりした。

そんなことをしているうちに夕焼けが終わり、外には梅雨独特の湿った暗闇が広がる。

そして、事務所の窓から外の夜景を眺めながら珈琲を飲んでいた命が、いきなり珈琲を口から吹き出した。

「おい、今度は何だ執事（笑）！」

「いい加減にしないとそのうち時列さんにいろいろとチクリますよ（怒）！！」

「あ、ゴメン」

それだけは勘弁！

「で、今、うちの事務所の目の前を例の阿良々木先輩が自転車で通りました！」

「マジで？ ラッキー 今すぐ追い掛けるぞ!!」

二日待たずに会えるなんてラッキーじゃん

こうして、俺と命は謎の少年・阿良々木を追いつける為に梅雨の夜に飛び込んで行った・・・。

13・END

什箋話 『忍野メメ』（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

前回のあとがきで遅くなるっていいましたが、まさかここまで遅くなるとは……（ ; ）

当時の私も予想していませんでした。ごめんなさい。

さて、今回の話は、前回のこよみブレイドの真裏となります。

あのふたりが、どうして忍野メメについて阿良々木くんに尋ねた理由が明かされる話でしたね。

ちなみに次回は、視点を阿良々木くんに戻して書きます。

今後ともよろしく願います。

今回出てきた直江津高校演劇部の設定は、私が独自に付け足したものです。

什使話 裏と怪異の交錯

003

振り返り休日一日目（火）

今日は、土日返上して頑張った僕達に対するご褒美の様なものだ。単純に考えたなら、等価交換の原則通り休日の二日を取り戻しただけなのだけれど、平日に学校に行かなくてもいいというのは精神的には結構なアドバンテージだと僕は思う。

そしてその最たるモノは、やはり優越感だろう。

他の学生諸君がけだるげに学校に登校するのを見ているだけで『あゝ、僕は学校行かなくてもいいんだ』となんだか一人で得をしたような、他人より優位に立ってる様に感じることだ。

ちなみに『振り返り休日の日に、わざわざいつもより早く起きて、窓の外から疲れた様に登校する学生やおじさん達を見て、思いつ切り見下して優越感に浸るのが最高。』とは戦場ヶ原の言葉。

本当なら、友達全員に今のような内容のメールを送りまくって更なる優越感に浸りまくりたいらしいが、同じ高校の友人しかいない戦場ヶ原はそんなことしても意味はない。そんなもどかしいイライラを僕にぶつけて発散したいらしい戦場ヶ原は、昨晚突然電話を掛けてきて僕にいつも以上に（具体的には、当社比で3割増し）強い毒を吐き散らしてきた。

ちなみに、電話の用件は特になし。純度100%の嫌がらせ電話だった。

これだけでも、昨晚が大変だったことがわかるだろうが、実際はこ

んなものではなかった。

まず一つ目。春休みから今まで一言も口を聞いてくれなかった忍が僕にむかって喋ったことだ。

昨晚は、やっと喋ってくれた忍という話し合った。今までのこと、これからのこと、．．．．．そして僕達のことを。

結局のところ忍は僕を許した訳ではなかったし、僕も忍を許すことはない。だけど、それでも忍が自分なりに折り合いをつけて、僕に歩み寄ってきてくれたことが、すごく嬉しかった。

さらに二つ目は、その日に会った怪異の件だ。

昨晚、帰宅途中にいきなり日本刀背中をさされそうになったのだ。ここだけ聞くなり、タチの悪い通り魔かと思うだろう（いや、やっぱり思わないだろう）が、実際は違う。性格には、誰も触れていない日本刀がひとりでに動き出して、襲ってきたのだ。あまりに突然のこと、その刀が具体的にどんな特徴があったかなんて覚えてないが、とにかくスゲー刀だった。ここだけで十分異常な非常事態だけど、そこが最重要点ではない。

この話の、最も重要な点は、”その刀に切られた傷が回復しなかった”ことだ。

僕には吸血鬼時代の後遺症として、吸血鬼並の治癒能力がある。春休み以降の様々な出来事もこの能力がなかったら、平均してひとつにつき3、4回は死んでいる。

ある意味、僕の命綱だったこの能力があつた刀に切られた時には発動しなかったのだ。

羽陽曲折イロイロあつてあの刀をなんとかして帰宅し、切られた傷を確認してみるともう血が止まっていた。

更に指に針を刺したりして実験してみた結果、治癒能力はしっかりあつたのだ。

切られた傷にしたって今はもう瘡蓋になっていて、僕がちゃんとした人間だった頃と同じくらいの早さで回復していつてる。

要するに、”あの日本刀に切られた傷には、治癒能力が発動しない”ということみたいだ。

治癒能力がなくなったわけじゃなくて安心した。が、そもそも何故僕が日本刀の怪異に狙われたのかわからなくて不安だが……。

そして三つ目。

昨晚、その日本刀の怪異に襲われた時に僕は謎の二人組に助けられた。

それは、白髪頭で長身の青年・裏柳数奇と、地味な容姿の黒淵眼鏡の少年・五月闇命の二人だ。

裏柳さんは請負人とかいう職業を営んでいて、僕を探していたそうで、その探している最中に、謎の日本刀に襲われていたのを遠目で見て、その日本刀目掛けてスコップ（何故その時に土木作業でしか使わないスコップを持っていたのかは謎）を投げて、ソレを撃退したのだ。しかし、彼らも何の理由もなく僕を助けた訳ではない。

『忍野メメとかいう胡散臭いオッサンのことを教えてくれ』

彼らは、僕の命の恩人であり数日前にこの町を去った忍野の情報を欲していたのだ。

理由は僕も知らない。けれども裏柳さんは、一刻も早くその情報を知りたいらしく、僕に迫ってきた。

しかし、それを『今日はもう遅いですから明日にしましょう』と言つて五月闇が説得し、止めた。

それで、その二人に家まで送ってもらった。

だから今日、僕は謎の多い彼らの『裏柳請負人事務所』に行かなければならなかったのだ……。

さて、火憐ちゃんと月火ちゃんに叩き起こされて朝食をとり、休みではない両親と妹達はそれぞれ職場と学校に行った後、僕は暇を持て余していた。

本当なら『裏柳請負人事務所』行かなきゃならないのだろうが、しかし生憎僕は場所を知らなかった。僕が普段通る道に、『裏柳請負人事務所』なんて怪しげな場所があったらわかるのだが、僕が全く知らないということはそんな目につきやすい場所にはないのだろう。

一瞬、羽川に聞けばいいんじゃないかと思ったけどこんなことを聞いたらまた僕が何かに巻き込まれていると思われるに決まってる。

そしたらきつと羽川は僕を助けようとするのだろっ。

それはマズイ。

というより、そんなこと僕が許さない。
そんな訳で、僕は暇を持て余していた。

しかし、しばらくすると・・・

ピンポーン

・・・とチャイムが鳴った。

「阿良々木先輩、迎えに来ました」

という声も同時に聞こえた。

文字だけで見るなら、僕の後輩の神原駿河が言っている様に聞こえる台詞だが、残念ながらこの声は男のものだ。
二階にある僕の部屋からでて玄関に向かう。
そして玄関を開けると、やはり彼がいた。

黒淵眼鏡を掛けたパツとしない少年・五月闇命だ。

まあ、僕のことを『先輩』と呼ぶ男は、五月闇しかいないから玄関を開ける前にとくに誰かはわかっていたんだけど。

「阿良々木先輩は事務所の場所を知らないと思って迎えに来ました。出掛ける準備はできてます?」

「できてるよ。そういえば何でお前は僕のことを『先輩』って呼んでんの?」

「僕は直江津高校一年ですから」

「え、お前一年なの!?」

「二歳も年下なのに10?以上僕より身長がツ……………!」

「……………あれ? どうしたんですか?」

「……………死ねばいいのに(ボソツ)」

「理不尽だ!??」

「理不尽で悪いか!!!」

本当に理不尽なのは僕だよ!そもそもなんで僕は中学で成長止まっちゃって、目の前の地味男は成長し続けてんだよ!?

「阿良々木先輩。そろそ行きましょうよ? 玄関でこんなに騒いでいたらご近所にご迷惑ですし……………」

そう言って五月闇は歩き出した。むろん、僕もそれについていく。でも確かに騒いだけどさ、元はといえばお前がわる……………くないな。

うん、傍から見たって自分で考えたってどう考えても僕が悪かった。

僕が一方的に妬んだだけだった。
年長者の威厳も糞もない。

「後悔しなくても大丈夫ですよ？　そもそも最初から貴方に威厳なんて一欠けらも感じてませんから（笑）」

「酷っ！」

しかも（笑）って付けられた！

「阿良々木先輩のお噂は兼がね、真宵ちゃんから聞いてます」

よりもよって情報源は八九寺かよ！

僕が会う度セクハラしまくってる八九寺かよ！！

八九寺が、今まで僕にされたことを全部五月闇に喋ったのだとしたら、僕は破滅だ．．．。

「は、八九寺はなんて言ってたんだ．．．？」

「会う度に、　　されたり　　揉まれたり　　を

されたりしているって」

「殺せよ！　もう一思いに僕を殺してくれよ！！」

お、終わった。

そんなことも話されているならもう終わりだ．．．。

「．．．．．けど、真宵ちゃんは阿良々木先輩のことをとても信賴していましたよ？」

「え？　そ、そうなのか？」

い、意外だ。

自分がいうのも何だが、あんなにセクハラしまくってるのに。

「僕もビックリしちゃいましたよ。あんなヒドイことをされているのに、あそこまで信頼しているんですから・・・」

”ぶっちゃけ、信じられませんでしたよ。ヒトは他人をあそこまで信頼できることが”

「だから、僕は数奇さんのことがなくても阿良々木先輩に一度会って見たかったです。どんなヒトなのかとても興味があつて・・・」

そう言つて五月闇は僕に笑いかけた。

僕はその笑顔の裏に、人には言えないナニカがあるように思えた・・・。

数分後、僕達は『裏柳請負人事務所』に到着した。

そして、僕は驚いた。

．．．いや、訂正しよう。僕の感じた驚きはこんなものじゃなかった。

正確に言えば、僕は驚愕した！

『裏柳請負人事務所』って、どこぞの入り組んだ裏通りの奥とかもつとわかりにくい場所にあるのかと思ってたが、違った。

徒歩数分の所に駅が在って、かつ本屋の近くだった。

つい先日、羽川に参考書を選んでもらったり、春休みにエロ本を買いに行ったりしたあの大型書店だ。

しかも、割と綺麗なビルの2階だった。

超・予想外。

何で僕は、こんな一等地にあるのに今まで気づかなかったんだ？

．．．．．謎だな。

そして、五月闇に案内されて中に入ると．．．

「．．．．．おせえ」

白髪頭で長身の自称請負人・裏柳数奇が、来客用と思われるソファに寝そべって待ちくたびれていた。

何故か、昨日と違い右目に眼帯をしているのが気になったけど、聞いちゃいけない様な雰囲気だから無視する。

．．．．．はあ、実は裏柳さんが若干苦手なんだよな。

あの真っ白な髪を見ると、ブラック羽川を思い出すから。

寝そべったまま僕達がきたことを目で確認した裏柳さんは、ムクツと起き上がり挨拶も無しにこう切り出した。

「単刀直入にいう。”忍野メメは何者だ”？」

僕の事情等を全部考慮せず、自分の目的のみを問いただしてきた。

要するにこの人にとっては、僕の存在など眼中にないということだろう。

今、さつさと僕が知っている忍野の情報を洗いざらい話してしまえば、あっさり解放されるだろうけど……

「……………そもそもあんたらは一体何者なんだよ？何で忍野のことを聞く？」

実は、今日僕がここを訪れたのは忍野のことをこの人達に話す為じゃない。

むしろその逆で、忍野のことを知りたがる彼等が何者なのかを知るためだ。

忍野は、一応僕の恩人だ。僕の他にも羽川や戦場ヶ原や八九寺や神原や千石の恩人でもあるあの忍野のことを、得体のしれないこんな奴に教える訳にはいかない。

ここで僕が話したことが、今何処かにいる忍野の足を引っ張るかもしれないのだ。

そんなのは、嫌だ。

「それには諸々の事情があるんだよ」

「事情ってなんだよ。それも教えて貰えないと僕も話さないからな」

僕が強気のと態度をとると、裏柳さんは眉間にシワを寄せ、語気を強めてこういった。

「……………別に、今お前が話さなくても後で催眠術やらをかけたりして無理矢理情報を引き出してもいいんだぜ？」

その眼は、間違いなく本気だった。

それはここで素直に話さなければ、酷い目にあう可能性を暗示していた。

だけど・・・

「それでも話す訳にはいかない・・・・・・・・ッ！」

僕達はしばらくお互いを無言で睨み合う。

そして裏柳さんは、突然シラけた様な表情になりこう言った。

「はっつ、何だよそりゃ。 お前、ただの高校じゃねえのかよ？
しゃあないから教えてやんよ。」

こうして彼は、忍野を追っている理由を語り出した・・・。

「・・・・・・・・・・と、言うわけだ。要するに、忍野メメはその事件の容疑者で、重要参考人ということだ」

裏柳さんの話を聞き終えた時、僕は頭を抱えなくなった。

だってそれやったのほとんど僕じゃん！

倉庫の扉を蹴り開けたのも砂場の砂をぶちまけたのも僕だし、花壇に埋まっていたのは羽川の内蔵だ。

ちゃんと綺麗に直ったと思うんだけどな。
いろいろごまかせなかったということか？

というか、僕達の未熟な腕の性で忍野の存在がバレたということか。
・・・・・・・・なんか、自分が凄く情けない奴に思えてきたな。

「・・・・・・・・さて、こつちの理由は話したから忍野メメの情報を話してくれないか？」

彼等があまり危険そうな人物でないことはわかったけど、忍野のこ

とを話して大丈夫なのか？

僕が忍野のことで知っているのは、忍野が怪異の専門家ということだけだ。

けど、彼らにそのことを伝えるのなら必然的に怪異のことも伝えなければならぬ。

正直に話したとしてこの人達がまともに信じてくれるのか？

「……………ん？ どうした？ まさか、自分は話さないなんてアンフェアなこと言わないよな？」

「……………わかってる。 忍野は、その……………怪異の専門家だ」

「「怪異？？」」

目の前の裏柳さんだけでなくお茶を持ってきた五月闇までもが怪訝な声を上げた……………。

・
・
・

「……………要するにこの世界には悪魔や神様や妖怪や幽霊がいてそれらの総称を怪異という。そして忍野メメは、その怪異が原因で起こる事件に対するエキスパート……………ということではないのか？」

「……………そうです」

結局怪異のことについても全部説明した。

今まで僕が怪異について説明したのは、既に怪異に会った奴だけだったから、この人達に一体何割信じて貰えるか不安だ。

これで信じてもらえなかったら、催眠術やら拷問やらをやられたりしないよな？

「どろりで玖渚機関のバンクとかには入ってないはずだな。玖渚機関の知らないジャンルだったのなら当然か。納得だな」

「へへ、どろりで。あの記憶も全部怪異関係だったんですね。納得しました」

あれ？

なんか二人とも妙に納得している。

「そりやそうだろう。超能力とか信じてんのに化け物は信じないとかねえだろ？ その方がしっくりくる場合があるし」

裏柳さんの台詞に五月闇も頷く。

「まだ実例を見てないから半信半疑なところもあるが……………まあ、過去にその手の以来も何件かあったからな」

「え？ そうなんですか？」

意外だった。

まさかこんなに簡単に信じるなんて。あと、過去にも怪異絡みの依頼も解決したらしい。

「『呪われた廃墟を何とかしてくれ』とか『呪いの人形を除霊してくれ』とか『竹やぶに出る幽霊を退治してくれ』とか」

「で、数奇さんはどうやって解決したんですか？」

この人は、今まで怪異の存在を知らなかったらしいから、怪異本体と直接対決したりはしてないのだろう。なら、どうやって解決したんだ？

「『爆破』して『ぶっ壊して』して『焼き払った』」

「破壊工作じゃねえか！！」

今まで僕は一部の友達にしか突っ込まなかったが、今のこの人には突っ込まずにはいられなかった。これまで培ってきたツッコミ属性としての技術やプライドが今ツッコミをいれなければならないと叫んでいた！

だからツッコむ！！

廃墟を爆破し、人形をぶっ壊し、竹やぶを焼き払ったって何も考えずに破壊しつくしてたのかよ！

「『呪われた廃墟』も『呪いの人形』も『幽霊の出る竹やぶ』もなくなっただからいいじゃん。まあ、『呪われた空き地』と『不気味な残骸』と『幽霊の出る焼け跡』が新しく出来たけど」

「根本が解決出来てない!？」

新たな心霊スポットと心霊アイテムが誕生しただけだった。

「ん？　じゃあ、昨日阿良々木先輩が襲われてた刀も怪異なんですか？」

ここで五月闇がふと気づいた事を僕に質問する。

「……………たぶん、十中八九怪異だと思う」

「……………へー、あれ呪い名じゃねえんだ。アイツ等にしたら殺し方がストレートだから不自然だと思ったら、やっぱ違うのか……………」

あの日本刀が怪異だと言ったら、裏柳さんが下を向いてぶつぶつと独り言を呟いた。

声が小さくて聞き取りづらい。

そしてふっと顔を上げて僕にこう言った。

「あの日本刀、またお前を殺しにくるぜ？　俺は殺意に特に敏感だから分かるけど、尋常じゃねえよあの殺意。親の敵カタキだろうと普通あんな殺意はださないぜ」

”　いや、むしろ『出せない』”

裏柳さんは、そういつて深く考え込む様に腕を組んだ。

確かに、真じかで感じてみて異様な程の殺気を感じた。
とてもじゃないけど人は出せないレベルの濃度だ。

そんなのが僕に、正確には僕と忍に向けられていたのだ。

そして、たぶん昨日の一回で襲撃が終わるはずがない。

何故なら、あんな出鱈目な殺気を放っている奴が、相手の息の根を止めるまで攻撃してこないはずがないのだから。

さらに、あの日本刀の怪異には治癒能力が使えない。要するに、あの怪異の前では僕はただの人間になるということだ。

ただの人間が、あの出鱈目な怪異に勝てるのか・・・？

「おい、阿良々木。一つ提案があるんだがいいか？」

そこまで考えたところで、今まで考え込んでいた裏柳さんがフイに声をかけてきた。

「なんですか？」

と僕は聞き返す。

すると裏柳さんは、ニイツと笑ってこう言った。

「その怪異退治。俺達に依頼しないか？」

14・END

什使話 裏と怪異の交錯（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回は、阿良々木君視点で前々回の続きでしたが如何でしょうか？

阿良々木君視点でやると、気が付いたら文面がグダグダになってる
ことがしばしば・・・（ ; ）

以後、気をつけます！

什互話 妖刀へ鬼吊

「その怪異退治。俺達に依頼しないか？」

俺は、阿良々木にそう提案した。

そうしたら阿良々木は、怪訝な顔をして

「いいです。要りません」

と言って横に首を振った。

だが、俺としてはここで引き下がる訳にはいかない。

「なら、依頼料はタダでいいから」

「ブツ．．ゲホッ、ゲホッ、ゲホッ！」

命が飲みかけた珈琲に盛大に噎せた。

そして阿良々木は、

「依頼料の有無じゃなねえよ！ それにタダならあんたに何のメリットがあるんだよ！」

メリット？ 確かに請負人としてのメリットは無い。

だけだな・・・

「ぶっちゃけ、あの刀が欲しい」

「「はア!？」」

阿良々木と命が同時に声を上げる。

「そうだ。俺はあの日本刀が欲しい。趣味として」

「・・・あゝ、そういえば数奇さんはそんな趣味をもったね」

「え、どんな趣味？」

「数奇さんは日本刀のコレクターなんですよ、阿良々木先輩。」

命が阿良々木に説明した通り、俺は日本刀のコレクターだ。

あの日本刀。遠目でみただけだがかなりの業物だった。それで妖刀なんだろう？最高じゃん

こんな魅力的な物、見逃せる訳ねえだろ！

「あの刀は、お前を狙ってたんだろ？俺はお前を守って、お前は俺に守られる。これでいいじゃん？」

「よくない！そもそもそんな話じゃないだろ!!」

と、阿良々木が声を荒上げる。

「じゃあ、どんな話だよ！」

「怪異を知らないあんたらがいったら、死ぬかも知れないんだぞ！」

「じゃあお前はどんなんだよ？」

「うッ」

俺の一言に阿良々木はいいよどむ。

「昨日、殺されかけたのを怪異を知らないド素人の俺に助けられたのはどのどいつだったけ？」

「ううっ・・・」

俺は、さらに阿良々木の痛いところを刺激して黙らせる。

「と、いうわけで決定な？ とりあえず明日にでもお前の護衛が出来そうな奴を派遣するから、今日は暗くなる頃には家にいるようにしろよ」

「う、護衛って大袈裟な・・・」

渋々俺の提案を飲み込んだ阿良々木は続いて僕の口から出た”護衛”という言葉に反応する。

確かに、護衛という言葉は、一般人（仮）である阿良々木からすると大袈裟に聞こえるだろう。

だが、実際はそうでもない。

「生憎、俺だけじゃあの日本刀には勝てないんだよ」

確かに俺は、戦闘能力が高い。

だが、所詮俺は『零崎』だ。

零崎一賊は殺人鬼。

要するに”殺す者”だ。

そもそも具体的な”死”があるかどうかもうい無機物の怪異に、
”殺す者”が勝てるわけがないだろう。

殺せない殺人鬼なんて、一般人以下だ。

だから、護衛だ。

阿良々木を守り、一般人以下となった俺が補助にまわって戦うに値する護衛が必要なのだ。

そして、幸いなことに一つ心当たりがある。

アイツなら頼めばすぐに来てくれるだろう。

「とりあえず阿良々木、お前は今日はもう帰れ。 念のため五月間、

お前も阿良々木についていけ」

「りよ、了解しました。」

命は動揺しながら承諾した。

「ちょ、勝手に決めんなよ」

阿良々木は動揺しつつも否定する。

「ちなみにいうが、俺はこれから調べ事があるから護衛は出来ないぜ？」

「だから、そういう問題じゃねえだろ！！」

「大丈夫だつて。命はそこそ役立つから」

「だから、違っだろ！！」

チツ、しっこいな。

「おら、さつさと出て行かないとてめえを女兒性的暴行の容疑があるつつて通報すんぞ？」

「今まですいませんでした。それでは速やかに退室致します。失礼しました！」

「え、ちょ、ちょっと阿良々木先輩！」

俺の一言を聞いた瞬間、阿良々木がスゲー潔く聞き分け良く出ていった。

それに続いて、命も阿良々木の後を追う形で出ていく。

．．．．．。

あれ？

「冗談だったのに．．．」

まさかもしかするとホントに．．．．．？

「・・・・・・・・やべえな」

阿良々木達を追い出してから早6時間。
要するに、あの刀の怪異を調べ始めて6時間くらいだった。

インターネット、文献資料、であの日本刀に関する事柄を調べまくったんだが・・・・・・・・

「・・・・・・・・完全に手詰まりだ」
一行に正体が掴めずにいた。

マジで手詰まり。王手。チェックメイト。

何故かって？それはだな・・・

「該当件数が多過ぎんじゃボケエエエッ！！」

と、いって机を殴って八つ当たりを試してみた。

痛かった。

めっちゃ痛かった。

何気に当然のことだった。

・・・・・・・・。。

まず、俺が知っているあの日本刀の情報は『空を飛ぶこと』のみ。
で『空を飛ぶ妖刀』というものを調べて見たんだが、これが多いの

なんの。

優に千件は超えた。

しかも、これは割とメジャーなものだけでそのほかの地域伝承なんかもちまちま上げるとキリがねえ。

その中からどこぞの美術館に納められてたり、とつくの昔に折られたりしているやつを除外したが、かなりの量がやはり残ってしまった。

仕方がないから地域伝承のをちまちまちまちま探してんだがよ、時間が異様にかかりまくってしょうがない！

効率悪いんだよコンチクショウ（>|<＃）

「あゝ、ヤメだ。休憩だ畜生！」

思い立ったが吉日。

さっそく、気分転換に出掛けよう。
つか、昼飯食うのを忘れたしな。

そう思って俺は事務所から近所のファミレスへ向かった。

何故ファミレスに行くのかというと、いつもならロソンのおにぎりで済ますのだが、たまにはまともな食事がしたいと思ったからだ。

．．．．．まあ、ここだけの話、この前人識と一緒にめちやくちやにしちまったから行きづらいただけなんだけどな（；）

・
・
徒歩で数十分移動したところで某猫型ロボットが宣伝しているファミレスの全国チェーン店に到着し、ガツガツとハンバーグ（おい、誰だ子供っぽいと言った奴（怒））を貪り食っていたとき、ふと、店内に置かれていたテレビで入っていたローカルなニュース番組から少し気になるニュースが聞こえて来た。

『次のニュースです。昨夜、町の神社から御神体が盗まれるという事件が発生しました。』

おい、町ってここじゃん。

『昨日の夜6時頃、町神坂神社の御神体である日本刀が何者かによって盗まれていると通報があり・・・』

6時頃？

それって昨日、阿良々木がああ怪異に教われたのと同じ時間帯だよな？

そして、盗まれた御神体が日本刀だって？

・・・偶然・・・じゃねえな。

「・・・調べてみるか」

都合がいいことに神坂神社はここから割と近い。

インターネットやらで遠回りに調べるよりも直接現地へ向かった方が情報収集には効率がいいだろう。

そう思っただけで俺は席を立った。

・
・
・

「ほー、雑誌の記者のかたですか。よくまあ、うちの様な小さな神社の取材にきて下さってありがとうございます」

そう言っただけで初老の神主は、俺に向かって頭を下げた。

「いえいえ、私はこの辺りの出身です。慣れ親しんだ神坂神社の御神体が盗まれたとなると、とても心配で。是非とも記事にして、その御神体が早期に見つかる様に協力したかったもので」

と、俺は当たり前障りないどころの雑誌記者の様な台詞を吐く。

神坂神社。

この辺り一帯にある神社の中では普通程度の規模しかない神社である。

こじんまりとした、どこにでもある小規模な神社だ。

防犯に対しては南京錠（古）一つだけというセキュリティの低さだ。

ちなみに俺は雑誌記者に成り済まして（当然のことながら怪しく見える眼帯は外して、目立つ白髪は途中で買った野球帽で隠した。）この神主から情報を引き出す魂胆である。

少しは疑って来るかと思ってたらこの人の良さそうな神主さん、あっさり信じてくれてしまった。

もうちよつと人を疑うことを覚えようよ？

御神体盗まれたばっかなんだからよ？

「では、まずはじめに盗まれたという御神体の日本刀について伺いしたいのですがよろしいですか？」

「んむ。うちの神社の御神体は、戦国時代の前期にとある刀鍛冶が作ったいわく付きの刀なのです。」

よっしゃ、ビンゴ

「妖刀を御神体にできるのですか？」

俺がこう質問すると、神主さんは途端に渋い顔をした。

「………記者さん、神社に納められているものを妖刀と呼ぶのはどうかと思いますが？」

どうやら禁句の類이었다らしい。

「あ、すいません。それで、そのいわく付きの刀とは？」

「んむ。それは……」

神主さんはしばらく考え込んでこんな昔話を始めた。

その昔、とある腕の達つ刀鍛冶がいた。

その刀鍛冶は、やさしい妻と元気な子供に囲まれ幸せに暮らしていた。

ところがある日、一人の武士がその刀鍛冶のもとへやって来て、

「鬼を退治する為の刀を作ってくれ」

と頼んだそうだ。

当時、この近くの村では悪い鬼がいて、日々村人をさらっては食べていた。

そのことを知っていた刀鍛冶は快く承諾し、刀を作り始めた。

だがしかし、それを良く思わない者がひとり。

そう、その鬼である。

ある日、刀鍛冶が家に帰ると妻と子供が殺されていた。

刀鍛冶は鬼を怨んだ。

そしてその日から、刀鍛冶は何かに取り付かれた様に鉄を打ちはじめた。

食事も水も取らず、一睡もせず、七日七晩、鉄をひたすら強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く強く打ち続けた。

そして、次に武士が刀鍛冶の元を訪ねた時、既に刀鍛冶は死んでいた。

しかし、その屍の手に一本の刀が握られていた。

武士が頼んだ『鬼を退治する為の刀』である。

武士が刀鍛冶に頼んだ品であり、刀鍛冶自身の遺作。

だが、武士がその刀を手取ることはなかった。

それは何故か？

武士は、怖じけづいたのだ。

その刀の放つまがましい怨念の気に。

さらにその刀は、武士によって振るわれることはないとわかった途端、屍の手を逃れ、天高く昇って行ったのである。

そして、惨劇が始まった。

刀鍛冶を殺した鬼だけに止まらず、その刀はこの国の全ての鬼を殺し続けた。

そして、それには無数の人が巻き添えになって殺され続けた。

罪の意識に苛まれた武士は、遥々都まで行き、その都で一番の陰陽師に

「あの妖刀を止めてくれ」

と頼んだ。

そしてその陰陽師は、一本の鞘を武士に渡しこう言った。

「妖刀をその鞘に納めなさい」

そこから、その武士は戦った。

その妖刀と命をとって戦い、どうにか妖刀を鞘に納め封印した。

そしてその武士はやがて、妖刀を御神体とする神社の神主となったそうだ。

めでたしめでたし。

．．．ってことらしい。

なんか、ありがちな話だったな。

とにかく、阿良々木を襲ったのはおそらくこの刀であろうことは確定した。

盗まれた時期も、場所も、『空を飛ぶ』という能力も合致した。

．．．ただひとつ妙なことがある。

「神主さん。ひとつ質問してもよろしいでしょうか？」

「はい？　なんでしょうか？」

「その刀は決して”鬼しか襲わない”んでしょうか？」

すると神主さんはさも当然の様にこう答えた。

「ええ、巻き添えで殺された人もいましたが、狙ったのは鬼のみだったようです。なんとと言っても《鬼吊》オニヅルと呼ばれるくらいですから」

《鬼吊》。

鬼を殺す。鬼を吊す妖刀。

その鬼しか襲わない妖刀が何故、”ただの高校生”たる阿良々木を襲った？

．．．．．。

阿良々木は、やはり何かを隠している。

．．．．．それもかなり重要なことを．．．。

翌日。

振り返り休日が終わり、今日から阿良々木や命はまた学校へ行くことになった。

昨日、更に事態は深刻化してしまったらしい。

『らしい』と言うのは、その場面に直接俺がいなかったからだ。

昨晚も阿良々木は妖刀に襲われたらしい。命からの報告だ。

しかも、今回は自宅で。

その時は、何とか撃退することが出来たそうだが、ぶっちゃけヤバいな。

特に、自宅にまで乗り込んできたのがマズイ。

自宅にまで乗り込んで来たと言うことは、安全な場所がもうないということ同義だ。

．．．．．これは、どんな形であれ今日中に決着を付ける必要があるな。

更に言えば、その問題とは別に、今日の前でもうひとつ非常に厄介なことが起こってる。

それは．．．

「．．．．．なあ、何でお前がここにいるんだ？」

「お前が呼んだからだろう。」

「俺が呼んだのは、お前の妹であつてお前じゃねえ！！」

俺の目の前にいるのは、言わずと知れた殺し屋 紅梅月屑。

先程もいったが、俺はコイツを呼んでない。

俺がこの事務所に呼んだのは、コイツの妹である 紅梅陽埃だ。
何故紅梅陽埃を呼んだのかというと、阿良々木の護衛にしようと思
つたからだ。

紅梅妹は、性格素直でひとあたりもいい。

更に哀川さんを除けば、俺の知り合いの中では一番戦闘能力が高い。
その点を俺は高く買っていて、この度護衛を頼もうとメールしたの
だが、何故か来たのはその兄である月屑だった。

「残念ながら今、陽埃は、用事があつてコチラに来られない為、私
が代わりに来たのだ。」

「来んじゃねえよ、さつさと帰れ」

コイツにはなぐんの用もない。
だからさつさと帰ってくれよ。

こつちにはまだ護衛の件以外にもやらなければならないことがある
のに。

護衛を探すことの他にやらなければならないこと。それは、妖刀《
鬼吊》を盗んだ犯人探した。

目的はわからないが神坂神社から妖刀を盗み、その妖刀を使って（どう使ったかはまだ謎だが）阿良々木を襲わせた犯人だ。

怪異なんてものを使うソイツはかなりの強敵だと俺は実践んでいる。

「私はお前に依頼したいことがあつて来たのだ。」

「依頼だと・・・？ 残念だが、今持つてる依頼だけで現状手一杯なんだよ。」

「そう言わずに話だけでもきけ。貴様にとある日本刀を探して欲しいのだ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・。

日本刀だつて？

「・・・・・・・・詳しく聞かせてもらおうか？」

俺がそういうと紅梅は、微かにどや顔をしてことの顛末を語り始めた。

「まあ、これは私自身の話ではないぞ。これだけは言っておく、これは私自身の話ではないぞ。」

「しつこいな。あんまり言つと怪しいぞ？」

「一昨日の晩、ひとりの金に困った殺し屋が、金目の物を探して町を徘徊していました。」

「個人的に言わせてもらうと、それはお前以外考えられないんだが？」

「その殺し屋は、”偶然”とある神社の中に日本刀が落ちているのを見つけました。」

「そういうのは普通、”奉納されてる”つつんだよ」

「その殺し屋は、”こんな所に落ちているなんて物騒だ”と思い、その日本刀をネコババ・・・交番に届けようと思って拾いました。」

「おいお前今ネコババって言いかけたよな？ ホントはネコババだろ？ 交番に届ける気なんてさらさら無いだろ？」

「そしてその日本刀を持って走って逃が・・・河原までいき、一息いれたその時、殺し屋はその日本刀の刃を見てみたくになりました。」

「・・・・・・・・・・。」

「そして、鞘から抜いてみた途端、殺し屋は足を滑らせて川の中に日本刀を落としてしまいました。」

「・・・・・・・・・・。」

「急いで探したけれども結局、その日本刀は見つかりませんでした。」

「・・・・・・・・・・。」

「さあ、その日本刀を探してくれ」

「・・・・・・・・その前にひとつ質問していいか？」

「うむ。なんだ。」

「その神社は、神坂神社か？」

「うむ。よくわかったな。」

「てめえが元凶かああアアア！！！！！」

俺は一気に紅梅の胸倉を掴んで吊るし上げた。

「さてさて、何故貴様がそこまで怒る。私は何もしてないが。」

「窃盗！不法侵入！」

「それがどうした。」

「開き直るな！ 警察に突き出すぞボケ！」

「突き出せるものなら突き出してみろ。殺人鬼のお前も一緒に道連れにしてやる。」

「最悪だな畜生！」

「……………というわけだ」

「なるほど、つまりあの日本刀は本物の妖刀だったというわけか。」

そんなこんなで一氣に関係者になってしまった紅梅に、今回の俺の依頼内容を説明する。

え？ 何故かって？

それはコイツに手伝ってもらうからだよ、タダで。

というか、自分が撒いた種は、自分で収穫しやがれ。

「それで、お前はその鞘をどうしたんだ？」

さっきの紅梅の話を聞いてみるに、紅梅が落としたのは日本刀本体のみで、鞘は持っている風にいつていたので一応聞いてみる。

昨日神主さんから聞いた話では、あの鞘に封印の力がある様で、その鞘の有無が今回の依頼達成率（＝俺にとっての入手率）が変わる。ある意味、最も重要なキーアイテムだ。

「うむ。売った。」

「は？」

おれはみみをうたがった。

とっさにかんじをわすれるほどにおどろいた。

「だから、質屋に入れたのだ。39円で。」

「安っ!？」

「……………うつわ、どうしよう。」

今、コイツ相手に零崎したくてしょうがねえ。

「……………おい、その手に持ったスコップを仕舞え。物騒だぞ。」

「……………。。。」

「……………俺は無意識のうちに『最終決定』を手にもっていた。」

危ねえ。あやうく、紅梅をホントに殺すところだった。

「……………で、そもそも何故その阿良々木という奴がその妖刀に狙われているのだ。」

「さあな。それは俺もわからない」

盗んだ犯人は紅梅で、紅梅自身に阿良々木を襲う動機がない以上、妖刀が自分の意思で阿良々木を襲っているのだろっ。

「……………何故だ？」

「まさか、その”阿良々木が鬼”というわけでもあるまいしな。」

カチリ

と何かが噛み合う音が聞こえた様な気がした。

．．．．．そして紅梅の何気ないその言葉が、俺の心に浸透していく．．．．．。

「うむ。どうした、急に黙りこくつて。」

「なあ、紅梅。普通の人間に想操術が全く効かないってこと、あると思うか？」

実は、この前阿良々木をこの事務所に呼んで忍野メメの話聞きだそうとした時、俺はあいつの目を見て想操術を掛けようとしたのだが、しかし、阿良々木は全く掛からなかった。

いくら俺が『時宮』じゃなくとも、以前教えてもらった時列直伝の想操術が、全く掛からなかったのだ。

「そんなのあるわけがないだろう。アレは、人間なら誰でも効く様に出来ている。アレが全く効かない人間がこの世界にいるわけがない。それこそ、ソイツは．．．」

．．．正真正銘のバケモノだ。

．．．．． 思えば、阿良々木は最初に会った時から不自然だった。

何故、阿良々木は自分の傷に触れただけで、遠目でもわかるほど動揺した？

何故、阿良々木は今まで怪異なんて異常で奇妙で危険なモノに関わり続けて無傷でいられた？

何故、阿良々木は想操術が全く効かない？

何故、阿良々木は鬼しか殺さない妖刀から狙われる？

阿良々木、お前は一体何者だ？

阿良々木、お前はバケモノなのか？

1
5
·
E
N
D

什互話 妖刀へ鬼吊（後書き）

メリークリスマス

烏妣 揺です。

修学旅行にスポーツ大会と、学校行事に押されまくって過去最大の遅れ。

真に申し訳ありませんでした。

そんなこんなで奇しくもクリスマス更新になりましたが、ぶつちやけクリスマスなんて関係ないです。

彼女もいない私は空しくクリスマスを送るのですし・・・。

あゝ、リア充なんてみんな零崎されてしまえばいいのに

そんなこんなで、次回阿良々木君視点。

ついにあのヒロイン達が登場する！・・・かも？

次回更新は大晦日か元日を予定してます。

それでは、また。

什麓話 阿良々木の日常（前書き）

ひえゝ めちやくちや遅れたゝ
ゝゝゝ

什麓話 阿良々木の日常

007

僕は、『裏柳請負人事務所』から走って出た。
何故走ったかと聞かれれば、僕はこう答える。

『逃げるためだ』

と。

「うう、何で世間はこんなにも僕に厳しいんだ」

「それを自業自得というんですよ」

といつの間にか来ていた五月闇が言った。

そして僕は五月闇に食ってかかる。

「お前、いくら仕事上の上司だろうと何でもかんでも報告するのはどうかと思うぞー!」

僕と八九寺のことをチクリやがって!

あれはスキンシップであって決して女兒暴行ではないというのに!

「いってませんよ?」

．．．へ？

「いやだから、真宵ちゃんのことは一言も数奇さんにいってません」

「じゃ、じゃあさっきのは．．．」

さっきの『女兒暴行の容疑があるって通報すんぞ』っていうのは．．．？

「100%冗談ですね。むしろ、阿良々木先輩のリアクションを見てマジかと思うんじゃないんですか？」

「ウルトラミス！？」

なんてこった．．．。

僕は思いつ切り墓穴を掘ってしまったのか．．．。

「くッ、また僕の好感度が下がってしまった。」

「いえ、下がってませんよ」

「え、マジで？」

「そもそも阿良々木先輩の好感度なんてこれ以上下がりはしない底辺なんですから」

「何でお前は落ち込んでいる僕にとどめを刺す様なことを言うんだよ！」

モブキャラDみたいな顔してお前はDSか！

毒舌でDSなのは戦場ヶ原だけで十分なのに。

「で、これからどうします？」

「これからどうっていわれてもな・・・」

五月闇に言われてポケットから携帯を取り出して現在時刻を確認する。

只今正午12時ジャスト。

裏柳請負人事務所に入ったのが9時半頃だから、かれこれ2時間半も事務所の中にいたってことか・・・。そんなに長くいたとは思わなかったな。

「・・・昼飯じゃないか？」

「じゃ、僕が奢ります」

と言って五月闇が昼飯を奢ってくれと言いだした。

いや、後輩に奢って貰うとか先輩の威厳にかかわるじゃないか。

「だから、阿良々木先輩に威厳なんて端からありませんよ」

「だから何でお前はそこまで僕に厳しいんだよ！」

「阿良々木先輩が救い様のないD変態だからですよ！ あんな小さ

な真宵ちゃん相手にあんなセクハラをするなんて、人として最低です。」

「あれはセクハラじゃない！僕と八九寺のスキンシップだ！！」

「世間ではそれをセクハラって言ってますよ！！」

そしてしばらくの間、裏柳請負人事務所の入っているビルの前で不毛な争いをしていたのだけれど、喋ってばかりでは腹が減る。そんなわけで、結局五月闇を連れて家まで帰ってきた僕は、カップ麺であれば五月闇にご馳走できるかと思って買い置きのカップ麺を探したのだけれど見つからなかった。どうやら、昨日の夜に火憐ちゃんが夜食に食べていたやつが最後だったみたいだ。

冷蔵庫の中も見てみたけど、これといってロクなものなかった。

さて、じゃあ昼飯どうしよう？

やっぱり何処かに食べに行くか？

「あ、阿良々木先輩。カップ麺なかったんですか？」

僕が開けっ放しの冷蔵庫の前で腕組みをして考えていた時、2階の僕の部屋に置いてきた五月闇が下りてきた。

そして開けっ放しにしていた冷蔵庫の中を一別し、こう言った。

「あゝ、阿良々木先輩。お米あります?」

「米? ああ、それならそれなりにあるけど?」

「じゃ、ピラフ作れますね。ピラフ。」

「ぴ、ピラフ?!」

ピラフってあれだよな?
洋風チャーハン。

「阿良々木先輩、ピラフと炒飯は全くの別物ですよ」

五月闇は呆れた様にそう訂正しこいつた。

「よろしければ、僕が昼飯を作りましょうか?」

そうして五月闇は、冷蔵庫にあった残り物と米だけでピラフを作った。

・・・悔しいけど美味しかった。

「五月闇、そういえば何でお前はあんなに上手くピラフ作れたんだ？」

と、僕はモンスターをハントするゲームを五月闇としながら質問した。

「一人暮らしが長ければ誰だって上達しますって」

と、五月闇はさも当然の様に答えた。

現在時刻は午後4時過ぎ。

あれからずっと僕は部屋で五月闇とモンスターをハントするゲームに興じていた。

もう受験生だから勉強しなきゃならないんだけど、何故か五月闇が僕の部屋に居ると落ち着かなくて、つついゲームをやってしまった。

ホントにもう戦場ヶ原や羽川に合わせる顔がない。

だけど、この時間も意外と有意義だった。

五月闇のハンターランクが結構高く、手伝って貰って僕のハンターランクは飛躍的に向上した。
これで村クエも大分楽になった。

.....。

なんかもう、受験生失格だな。

だけど、それとは別に一つの疑問が生まれた。

「というかお前、何でそんなに強いんだ？」

そもそも疑問だったのがこのモンスターをハントするゲームで、五月闇が予想外につよかったことだ。

別に装備が良いわけじゃない。だけど、狩りでのヒット&アウエーがとてつもなく上手い。

だってジン　ウガを狩ってHPバーが1/3しか減少してないんだぜ？

避けるの上手過ぎだろ？

「あゝ、それは、いつも暇なとき数奇さん達とやっているからですね。最近、たまに数奇さんの友達の月屑さんって人も参加するんですけど、数奇さんと月屑さんがよくちよくPK合戦するんですよ。それで流れ弾やらを避けてるうちに、段々避けることが上手くなってきたんですよ」

といって五月闇は苦笑する。

ちなみにこの「モンスターをハントするゲーム」ではPKができる。しかも倒したプレイヤーからも剥ぎ取れるのだからタチが悪い。

「・・・・・・・・・・え？ モンハン？ ナニソレ？ だからこれは「モンスターをハントするゲーム」だって！」

「そんなに仲が悪いならそもそもやらなきゃいいのにな」

「あれは所謂『喧嘩するほど仲が良い』って奴だと思いませんか？」

「いつも僕は思っただけど、喧嘩するならそれ程仲が良い訳がないじゃないか」

「いや、男同士ではその関係がデフォルトですよ？ もしかして阿良々木先輩は友達がいらないんですか？」

「断じて違うぞ！ 僕にだって・・・・・・・・五人も友達はいるぞ！」

「・・・男友達はいないけどな。」

「・・・・・・・・・・クソ、僕より多い（ボソッ）」

「え、何かあったか？」

「な、何でもありませんって」

まあ、ここで友達の有無を論じている意味はないな。

するとそこで

『ただいまー！！』

と無駄に、本当に無駄に元気な声が玄関の方から聞こえた。

現在時刻から推測するまでもなく、この声は、というかこのLEVの元気よさはひとりしかないだろう。

無論、大きい方の妹。もとい火憐ちゃんだ。

無駄に大きな声に隠れているけど多分．．．．いや絶対に月火ちゃんも一緒だろう。

「ん？あれ、阿良々木先輩って妹さんがいるんですか？」

「ああ、いるけど。大きい方と小さい方の妹の二人がいるけど」

そう聞くとスクツと立ち上がる五月闇。

「じゃ、一応妹さんに挨拶してきます。」

「いや、いらないうて」

何で妹に挨拶なんかしなきゃならないんだよ。

「だって明日、正式な護衛が付くまでは一応僕が阿良々木先輩の護衛をしなきゃならないんですよ？ 一晩お世話になるのにご家族に

挨拶も無しじゃ失礼じゃないですか。」

「ちょっとまで、お前、うちに泊まってくつもりなのか!？」

衝撃の事実！

「うちに泊まってく」って平然と頷きやがってどういうことだ！

明日からは普通に学校だぞ！ 泊まる翌日が休日ならばともかく．．．
．．．ってそんなこと僕が言えた義理じゃないし何気にそんな問題でもないけどさ!!

「じゃあ、そもそも明日使う教科書とかはどうすんだよ？」

「僕、置き勉派なんで関係ないです」

「教科書類は毎回ちゃんともって帰れよ!!」

机の中にギチギチに教科書つめたまま帰ると、後で教室掃除してる連中が机運ぶとき重くてスゲー大変なんだぞ！

．．．．．僕も置き勉派だからまた言えた義理じゃないけど。

するとそこに．．．

バンッ

「兄ちゃんウルセエぞ！ 最近独り言が激し過ぎてアタシと月火ちやんが心配してんのがわかんねえのか!!」

と、火憐ちゃんが、いつも通り僕の部屋のドアを蹴り飛ばして（ここで注意しておくけど、火憐ちゃんは今まで一度も手を使って僕の部屋に来たことがない。したがって、ホントにこのスタイルがスタンダード。全く、兄としては将来が不安でしかたがない）僕の部屋に入ってきた。

ちなみに学校から帰ってきてすぐなせいか、いつものジャージじゃなくて制服で鞆も持っている。

そして火憐ちゃんは、硬直した。

．．．．．ん？

さて、冷静に状況を確認してみよう。

僕は携帯ゲーム機を手に持ったまま五月闇にツツコミを入れている。五月闇は妹に挨拶するといって立ち上がりうとして方膝立ち状態。かろうじて携帯ゲーム機は持ったまま。

．．．．．よし。

どこからどう見てもこれは『男友達が遊びに来て、ちょっとハメを外した兄』にしか見えないな。

何も怪しいところも不穏なところも不自然なところも犯罪の臭いがあるところもないな。

．．．．．じゃあ、何故火憐ちゃんが硬直するんだ？

しかも両目をカッと開いて、体か驚愕に震えてるだけど？

ドサリと火憐ちゃんの手から鞆が落ちるが、それにすら無反応。

明らかにただ事じゃない雰囲気火憐ちゃんに五月闇にも緊張が走る。

・・・・・・・・・・・・・・・・。

「・・・・・・・・に」

「に？」

「に、兄ちゃんに友達がいる・・・・・・・・ッ」

火憐ちゃんは、ワナワナと震えながらそういった。

え、おい何冗談抜きにそんなに驚いてんだよ。

「に、兄ちゃんが男友達を家に連れてきている……………」

まるで幽霊でも見たかの様に首をふる火憐ちゃん。

いや、そこまで過剰に反応するなよ！

スゲーキモい。

そして次の瞬間。

パンツと火憐ちゃんは自分で自分の顔面を殴りつけた。

お遊びでとか、気合いを入れる為に叩くとかじゃなくて、顔面をガチ殴り。

客観的に見ても相当痛そう。

「……………痛い。じゃあ夢じゃねえんだ」

「そこまでして信じられないのかよ！ お前は僕を何だと思って見てたんだよ……！」

とうとう我慢出来ずにツツコミをいれる。

しかし火憐ちゃんにこのツツコミは届かなかった。

「つゝきゝひゝちゃん…… にゝちゃんが友達を連れてきてる……！！ しかも男……！！……！」

「何故”男”というところを強調するんだ!？」

それにツツコミを無視されたのも微妙に傷付くんだけど！

「火憐ちゃん、そんなわけないよ？ あのお兄ちゃんが友達を連れて来る訳が・・・」

そこに月火ちゃんも登場。

「な・・・・・・ッ！」

そして硬直。

・・・いや、なんだよこのやり取り。さっきから五月闇もめちゃくちゃ引きまくってんじゃないか。

「・・・えーと、その、貴方は本当にお兄ちゃんの友達ですか・・・？」

月火ちゃん、そんなに僕に友達がいることが信じられないのか？

「『友達を作ると人間強度が弱くなる』ってイタいことを三ヶ月前にいった兄ちゃんに友達が出来たとかしんじられねえよ。」

ぐう、そうきたか。

確かに春休み前に羽川にそんなことを言っただけ、今の僕はそうじゃない。

そう考えると、この三ヶ月で僕自身や僕の周りはとても変わった。もちろん、良い意味でだ。

三ヶ月か．．．長かった様な短かった様な．．．。

ふと横目で質問責めを喰らっている五月闇を見て、さっきから感じていた妙に落ち着かない感じの正体がやっと掴めた。

．．．．．そうか、男友達をこの部屋に連れてきたことって今まで一回も無かったんだっけ？

僕がトイレから帰ってくると五月闇がボロ雑巾になっていた。

「・・・・・・・・・・。」

いや、もちろん比喻だからね？

「あ、あ、阿良々木先輩、何ですかあの子達！ 矢継ぎ早に割とキツイ質問をしてくるし、テンション高いし！ それに助けを求めようにも途中から阿良々木先輩どこに行っちゃうし、・・・・・・・・・・。怨みますよ？」

「いや、それくらいで怨むなよ！」

あと睨むな！

だけど気持ちは少しわかる。

何故かハイになった火憐ちゃんと月火ちゃんについていくとかなり疲れるんだよ。精神的に。

「というか、あの二人、どんだけブラコンなんですか？」

「ブラコン？ 誰と誰が？」

「・・・・・・・・・・。いえ、なんでもありません」

「？」

それはともかく、これからどうするんだ？
ホントに泊まってくのか？

「まさか、さっきのは冗談ですよ？」

「だよな！」

「ええ、本当は阿良々木家の前で野宿します。」

「冗談だと言ってくれ！」

そっちの方がまずいだろ！

見た目、純朴な好青年なお前を家の前で野宿させるとかどんな鬼畜だよ！

流石にそれはいろいろとマズすぎる。

「五月闇、マジでそれはやめてくれ。最近、ご近所で評判悪いんだよ阿良々木家は」

具体的には、ファイヤーシスターズの警察沙汰事件とか、あと僕が色んな女の子に手を出しているって良からぬ噂とかで。

「うーん、じゃあどうしましょう？」

「……仕方ない。両親が帰ってきたら何とか泊めて貰える様に頼んでみるよ」

仕方ないか、阿良々木家汚名返上計画（基本的にやってるのは僕ひとり）の為だ。

「……あ、そっか、そっいうことか。」

僕がひとりで決意を固めていると、五月闇が何か納得した様な声を上げた。

「何、どうしたんだ？」

「いや、何か最初に会った時から阿良々木先輩に初めて会った気がしなかったんですよ。で、何でかな」と思ったら・・・」

「思ったら？」

「いゝ先輩に似てるんすよ阿良々木先輩が」

「・・・いゝ先輩？」

「誰だよ!？」

「僕が昔お世話になった先輩ですよ。まあ、阿良々木先輩と比べて性格も雰囲気も見た目も全然違うんですけどね」

「じゃあ全然似てねえじゃねえか!？」

性格も雰囲気も見た目も違うんならどこが似てんだよ!!

「あ、いゝ先輩にもアホ毛がありました」

「アホ毛だけかよ!」

というか、アホ毛ってアニメで追加された設定なんだよな。いろいろ生き物みたいに動いてたけど、あれ、どうやって動かすんだよ？

「．．．．．それに、なんて言うんですかね。『もしも、いゝ先輩の心が壊れていなければ』、もしくは『もしも、『友』とかいう人に出会わなければ』阿良々木先輩の様になつてた様な気がするんですよ」

「．．．．．壊れていなければ？」

「いゝ先輩は自分のことをよく『不良品』とか『終わつてる』とか言つてたんですよ。あと、他人にもそう言われてました。実際、僕からみても『壊れて』『破綻して』『終わつて』いました。」

．．．．．

なんだよそれ。

意味わかんねえよ。

どうしてお前は世話になつた『いゝ先輩』のことをそんなにいえるんだよ．．．。

「阿良々木先輩は会つたことがないからわからないだけです。いゝ先輩に会つてことは、目の前で交通事故が起こる様な理不尽な不幸なんですよ。」

一度会えばわかります。

彼は『この世全ての不幸』を人型に固めた様な人ですから。

.....。

「.....そんな奴と僕は似ているのか？」

「いや、別にそこまで気にすることじゃないですよ。あくまでこれは僕の主観のは」

そこまで言いかけたところで、突然、五月闇の眼の色が変わった。比喻でなく、物理的に。

日本人特有の黒い瞳が、一瞬濃紺に変化したのだ。

そして僕がその変化に完全に気付く前に・・・

「阿良々木先輩、伏せて！！」

五月闇が僕に覆いかぶさる。

というか、頭を床にたたき付けられた。

「痛つてえ！」

何するんだと言いかけてその言葉を飲み込んだ。

飲み込まざるおえなかった。

いきなり頭上を”あの刀”が通り過ぎたのだ。

「……………ッ!!」

バリッツと窓ガラスが砕ける音が少し遅れて聞こえた。

そのくらいの衝撃だった。

妖刀は僕の頭上を通り過ぎた勢いで僕の部屋の壁に突き刺さる。

「阿良々木先輩、逃げて!!」

五月闇が叫ぶ。

その隙に僕は部屋を出ようとしたけど、そこで思いどどまった。

僕がここから出ていったらあの刀は僕を追ってやって来る。

そうしたら月火ちゃんや火憐ちゃんはどうなる？

……………。

それは駄目だ。

じゃあ、今ここで何とかするしかない。

「阿良々木先輩、何やってるんですか!!」

五月闇が叫ぶ。

「駄目だ!　ここでソイツを追い出す!!」

そういつて僕は、壁に突き刺さった刀を思いつき引き抜いた。

その瞬間、

「ぎい．．．ッ！」

妖刀が喉元に刃を突き付けようと暴れだす。

ただ空中に浮いてるだけだとたかを食ってたけど物凄い力がある。

今の僕は割と吸血鬼性が高いバージョンで、かなり腕力が強化されているはずだけど、それでも単純な力で押し負けてる．．．ッ！

「お前様、少しは後先考えたらどうだ？」

その時、僕の影から忍が飛び出し、妖刀を蹴り飛ばして、また影の中に帰っていった。

忍に蹴られた妖刀はクルクル回転しながら窓の外に吹っ飛ぶ。

僕は妖刀を持っていたから反動で尻餅をついたけど。

そして吹っ飛んだ妖刀は、家の前の道路に転がったが即体制を立て直しこっちに向かってきた。

すると、

「阿良々木先輩、避けて下さい！！！」

五月闇が僕の部屋に在った椅子で向かってきた妖刀を思いっきりぶっ飛ばした。

ベキッ という音と共に壊れる椅子。

そして再度窓の外に叩き出された妖刀。

たぶん、また体制を立て直して来る。

そう思つて身構える。

．．．．．。

あれ？ 来ない？

「あ、阿良々木先輩。もういなくなつたみたいです。」

窓の外を見回して五月闇がそういった。

．．．．．昨日といい今日といいなんか表し抜けだな。

僕を殺そうと襲ってくる割にいつもあつさり引き下がってく感じ。

まるで．．．

「．．．まだ本調子じゃない感じですね」

そうそんな感じ。

例えば、封印が解けたばかりで本来の実力を十分に発揮出来ていない様だ。

「阿良々木先輩、一度外に出て数奇さんに連絡して今後の対応の相談をしてきます。」

そう言つて五月闇は窓ガラスの破片や刀傷や壊れた椅子などでめちやくちやになつた部屋を出ていく。

.....。

なんというか、まさか僕の部屋が戦場になるとは.....。

窓ガラスはともかく、刀傷はどうやって言い訳すればいいんだ？

忍に頼んだら治してくれるだろうか？

「というか、今の状態でも物質創造能力つて使えるのか？」

「お前様は儂を舐めているのかの。この姿になつても物質創造能力程度使えるわ」

「あ、忍いたのか」

いつのまにか忍が僕の影から出てベットのの上に座っていた。

「忍、さっきのは助かったけど五月闇に見つかったらどうするんだよ。　　というか見つかったんじゃないのか？」

さっき、同じ部屋に一般人の五月闇がいるときに出てきた忍。

僕の影から金髪色白の幼女が出て来たらどんな風に見えるか。

「それは大丈夫じゃ。お前様の体に隠れて儂の姿は見えておらん」

「そうか」

「そもそもあの眼鏡、”一般人”ではないかもしれないしの」

「．．．．．やっぱり、お前も気付いたか」

あの眼。

いきなり濃紺に変化して、妖刀の攻撃から僕を守った五月闇の眼。

あの時、僕はドアの前に居て、五月闇は床に座りながら僕の方を真正面から見ていた。

”五月闇は窓に背を向けていた”

それにも関わらずに、窓が見える僕よりも早く妖刀の存在に気付い

た。

「僕も詳しくは解らぬがもしかしたら魔眼と呼ばれるものかもしれないな」

「魔眼か．．．お前が前にやってたのとは違うのか？」

春休みにやってた眼力でモノを破壊するやつ。

「違う。あれは単純な視力じゃ」

「絶対に違うだろ！！」

絶対視力以外の何かしらの力がやどってただる！

「それとあの眼鏡が居ない今のうちにお前様に一つ忠告したいことがある」

「ん、なんだ？」

「眼鏡の雇い主であるあの男を信用するな」

「え、何で？」

確かに裏柳さんは僕の苦手なタイプだけど、”信用するな”っていうのはどういうことだ？

「あやつは、人殺しじゃ」

0
1
0

翌朝。

昨日で振り返り休日が終わったから、当たり前のように今日から平常授業。

そしていつもなら僕は、自転車に野って登校するのだけど、今回

は乗らずに自転車を手で引いて歩いている。

それは何故か。

．．．．．理由は、僕のすぐ隣に。
首を45度曲げて横を見る。

そこにゾンビがいた。

勿論、比喻だけど．．．。

「五月闇、大丈夫か？」

「．．．．．今の僕が大丈夫に見えるのなら、眼科を受診することをお勧めします」

そこには、ゾンビ改め眼の下に濃い隈を作って疲労困憊状態の五月闇命がいた。

「いや、まさかあれから一晩中家の周りを見回ってたとは思わなかった」

「．．．．．僕だけじゃなくて数奇さんと二人ででしたけどね」

昨日、あの妖刀襲撃後から今朝まで五月闇とその雇い主である裏柳数奇が、また妖刀が襲ってこない様に僕の家の中を見回っていた

らしい。

「それにしても阿良々木先輩は全然大丈夫そうですね。あんなことがあった後だったのにぐっすり眠ったんですか？ しめ縄並に凶太い神経ですね」

いや、実のところ僕も一睡もしていない。

いつあの妖刀が来るかも解らない時にグース力寝れるほど僕は達観もしていなければ世捨て人でもない。

幸い、僕はナチュラルな人間じゃないため、一晩くらい起きていても全然大丈夫なだけだ。

．．．．．。

そこでふと、昨夜の忍の話を思い出す。

『．．．．．忍、人殺してどういうことだよ』

『今日あやつとあった時に確信したのじゃが、奴から血の臭いがしての』

『血の臭いってあの人が体のどこかを怪我していたからじゃないのか？』

『そういう意味の”血の臭い”ではない。奴の身体に、服に、魂に夥しい数の血の臭いがこびについているんじゃない』

『．．．．．いや、でも』

『あやつは、真性の人殺しじやの』

『な、』

『それに、お前様と話をしている時に催眠術をかけようとしてもした』

『．．．．．催眠術？』

『それもテレビでホイホイやってる様な生易しいものでなく、かなり上位の術じゃ』

『そんな．．．』

『見たところ、あの眼鏡には何の下心もないようじゃが、用心にこしたことは無かるう』

『．．．．．解った。なるべく気をつけてみる』

忍は裏柳さんが人殺しだと言っていた。

そんな馬鹿な、と思う半面もしかしたら本当にそうなのかもしれないとも思う自分がいた。

夥しい数の血の臭いがすると忍が言っていたということは、彼は夥しい数の人を殺したのか？

殺人鬼の様に．．．。

そういえば、先月京都で連続殺人事件が起こった。

殺人は止まったけれど、確か犯人は今だ捕まっていない。

もしかしたら、その犯人は．．．

「．．．．．阿良々木先輩、聞いてましたか？」

「あ、ごめん。聞いて無かった」

「だから、数奇さんが今日護衛を阿良々木先輩に付けるそうなので、帰りに事務所に寄ってくださいって言ったんですよ」

そうか、確かに今日護衛をつけるって話だったわけ。

そしてそんな話をしている間に直江津高校に到着。

生徒玄関で学年の違う五月闇と別れたところで、

「おはよう、阿良々木くん」

と後ろから挨拶をされた。

振り返ると声の主は、戦場ヶ原ひたぎだった。
クラスメートで毒舌女王で僕の彼女。

「ああ、おはよう戦場ヶ原。」

丁度五月闇と別れたこのタイミングで話し掛けてきたということは、
いいタイミングを計っていたのだろう。

「少し前に阿良々木くんがいるのに気がついて、そのまま話しかけ
ようと思ったけど余りにも驚いてしまって今まで話し掛けられな
かったわ」

どうやら丁度いいタイミングを計っていた訳ではなかったらしい。

じゃあ、何にそんなに驚いたんだ？

「阿良々木くんって、男子ともちゃんとお話できたのね・・・」

「当たり前だろ！！ お前は今まで僕にどんなイメージを持っ
たんだよ！？」

「女子に優しく男子に厳しい阿良々木くん。女子に助けを求められたら優しい笑顔と共に助けてあげるけど、男子に助けを求められたら『あつそ、自分で頑張れば?』と言って見捨てる人」

「どんな最低な奴なんだよ僕は!？」

「ちなみにこれは、クラス全員が思ってることよ」

「なんか最近クラスメートからの視線が痛いと思ったらそれが原因か!」

.....。

ん、までよ?

今、クラス全員って言ったよな?

ということは、まさか羽川にもそう思われているってことなのか!?

だ、だ、だ、大丈夫だ。

は、羽川は僕に対してそんな間違った印象は持ってないはずだ・・・。

僕は、羽川を信じているぞ!

「・・・・・・・・阿良々木くんって男の子ともしっかりお話できたんだね？」

「羽川、お前もか!？」

不覚にも泣きそうになった。

今なら裏切られたブルータスの気持ちがよくわかる。

・・・・・・・・少し違う様な気はするけど。

今は昼休み。

五月闇に呼び出されたすぐあとに、羽川にあってそう言われた。

五月闇は電話で裏柳さんからこつこつという伝言を託されたそうだ。

『事態は急を要する。というか今日、決着をつける。だから学校が
終わり次第、ある場所に来てくれ。命に道案内させるから』

．．．だとさ。

決着をつけるということは何か妖刀を倒す方法がわかったってこと
だよな？

まさか、力押しの破壊工作じゃあ．．．ないと思いたい。

そしてその帰りに羽川に話かけられたんだ。

悲しすぎるだろ。

「．．．．．阿良々木くん、冗談だからね？ そんなに泣かなく
ても．．．」

「羽川、お前イメチェンしてからやっぱ性格悪くなったよな」

あゝ、どれもこれもブラック羽川のせいだ！

「それと阿良々木くん、その傷どうしたの？」

．．．．．ついにきたかこの質問。

今、僕の頬に初めて妖刀に襲われた時の傷がある。

吸血鬼能力のある僕は、基本的に傷つかない。
というか、怪我をしてもすぐに治るから傷ができない。

そんな僕に傷があつたら頭のいい羽川はすぐに何があつたか感づくだろう。

僕の恩人である羽川に出来ることなら、なるべく心配はかけたくない。

だからここは嘘をつく！

「昨日、階段から落ちて怪我しちゃったんだよ」

「．．．．．階段から落ちてそんな傷がつく？」

「ウルトラミス！？」

嘘、三秒で崩壊。

くそ、やはり僕程度の人間が天才羽川に嘘をつき通すことはできなかったということか．．．．．ッ！

「それになんで傷がつくの？ 吸血鬼の能力ですぐに治るんじゃないの？」

「い、いや、たまたま吸血鬼性の薄い時期でさ。高い時期と比べて、す、少し遅いダケダヨ？」

噛んだ。吃った。最後に裏返った。

最悪の返答だ。何か裏があるのバレバレ。

頼む羽川。無理かもしれないけど何とか納得してくれ！

「……………わかった。階段から落ちたのね？」

「わかってくれたのか！」

「渋々」

渋々なのか。

「それと、さっき阿良々木くんと話してたのって一年生の五月闇くんだよな。」

「え？ 羽川、あいつのこと知ってるのか？」

「うん。だって有名人だし」

有名人？？

あのモブキャラDが？

有名人どころかクラスメイトにすらフルネーム覚えて貰えなさそうだけだな？

「五月闇くんは、元ER3だよ」

「い、ER3?!」

ER3って言ったら、世界一の知識が集うとか言っやつだろ？

……………そこまで頭がよかったのか五月闇。

「で、五月闇くんが来たばかりの時、私、五月闇くんに少しお願いしたことがあったんだよ」

「何をお願いしたんだ？」

「ER3でどんな勉強をしたのかを教えて欲しくて。で、あわよくばER3でやったテストを見せて貰いたかったの」

「で、お願いしたらどうだった？」

「快く承諾してくれたよ。テスト問題も貸してくれたし。それでテストを実際にやってみたの」

「へえ、で、どうだった？」

委員長の中の委員長、天才の中の天才である羽川ならきつと楽勝だったに決まってる。

「全然出来なかった」

「え？」

羽川は呆気からんと笑ってそう言った。

「いや、羽川。冗談はよせて。そんなわけがないだろ」

だつてそうだろ？

”あの”羽川が出来ないなんて問題が間違っているとまで言われる程の天才羽川が出来ないなんて・・・。

「問題は全部で100問。一問解くのに最低一分はかかって、中には絶対に解けないような問題もあって、全教科ごちゃ混ぜになっていて制限時間一時間」

うわ、ちょっと聞いただけで嫌になってきた。

「問題もひとつひとつ難しいこともあるけど、テスト自体がすごく意地悪だった」

「何だよ意地悪なテストって？ 引つ掛け問題ばかりなのか？」

一問一問がただでさえ難しいのに、それが引つ掛け問題ばかりだったら恐ろしいな。

「ううん。違うよ阿良々木くん。意地悪なのは問題の配列」

「配列？」

「そう。やってる人が段々調子を崩すように、勢いづかせないように、混乱させるように、”徹底的に計算された”問題配列なの」

「それは・・・」

絶対に最悪のコンディションで試験をすることを義務づけてる様なものじゃないか。

「．．．だから、五月闇くんはすごいよ。あんなテスト出す所に私は、一秒だって居たくないもの」

羽川は笑ってそういった。

うん。これは五月闇にもつてた印象を改める必要があるな。

「なあ羽川。その問題の一番簡単なやつは僕にも解けるか？ 時間制限なしでやった場合」

「んゝ。たしか内容的には中学生の数学の文章題だったけど、絶対に無理だね」

「どうしてだよ？ これでも数学は得意科目だぜ？」

むしろ唯一の得意科目。

僕が過ごした高校生活は、数学に支えられてきたといっても過言でわない。

「問題文がアラビア語」

うん。とてもじゃないけど無理だ。

本日の授業が全て終了し、昼休みに言われた通り生徒玄関で僕は五月闇を待っていた。

そもそも五月闇を待たなきゃいけないのは、『この前の事務所とは違う場所』に行くかららしい。

五月闇曰く、『ここにこんなのがあった』ってレベルの場所らしい。

初めてら案内は必須なそうで、なんだかんだで結構めんどくさい。

.....。

昨夜に忍が言っていたことについて考えてみた。

いろいろ考えてみたけど、裏柳さんが殺人鬼だとは僕は思えない。

謎が多いとはいえ、昨日一日で五月闇が悪い奴じゃないことはわかったし、五月闇が裏柳さんを信用しているみたいだから僕も信じてみようと思ったからだ。

忍の言うことを信用してない訳ではないけど、忍だって勘違いをすることくらいあるだろう。

「阿良々木先輩、すいません。お待たせしました！」

そこまで考えたところで五月闇が漸くやってきた。

「すいません。今日、僕掃除当番でしたので・・・」

「掃除当番？　でもそれにしては遅すぎないか？」

ケータイを取り出して時間を確認してみるとHRが終わってから30分くらいは経過していた。

普通掃除って15分くらいで終わるものだよな？

「机を運ぶのに予想外に手間取ってしまって・・・。クソ、机の中に教科書ギチギチに詰めたまま帰りやがって。あゝ、重かった」

「お前、自分でよくそんなこと言えるな」

昨日、お前も置き勉派だって言ってたじゃねえか。

「ですから反省して、今日から教科書は全部持ち帰ることにしたんですよ。ほら」

と言って僕に鞆を見せる。

．．．．．パンパンに膨らんでいた。

いや、これ明かに限界を超えて詰め込んだだろ？

試しに持ってみると軽く重量８？オーバーだった。

「お前、これ重くないのか？」

「．．．．．めがっさ重いッス」

．．．でも少し妙だな。

教科書だけでこんなに重くなるか普通？

そんなある意味ごく普通の会話をしながら僕たちは校門に向かって歩き出した訳なのだが、ここでまた意外な人物に遭遇する。

「やあ、阿良々木先輩、奇遇だな」

「ああ、久しぶりだな神原」

神原駿河である。

神原は最近ある事情からバスケット部を引退。別にこの時間に下校しても不思議じゃない。けれども、

「お前、普通ならもうとつくに帰ってる時間じゃないのか？」

バスケット部を引退したことで神原はHRが終わると即帰るという生活を送っていたはずだ。

僕も何度かF15並のスピードで走り去る神原の後ろ姿を目撃している。

「いや、今日は掃除当番で、机を運ぶのに予想外に手間取ってしまったて．．．。机の中に教科書ギチギチに詰めたまま帰りやがって」

「お前もかよ」

もと運動部だから力はあると思ってたけど違うのか？

と、そこまで話していて神原は、僕の隣で所在無さげに立っている五月闇を見付けた。

五月闇、僕、五月闇、僕、五月闇、僕、五月闇、僕、五月闇、僕、五月闇、僕と交互に見比べて驚いた様に眼を見開いた。

「阿良々木先輩、私はとても驚いているぞ！」

あゝ、まさかまたお前もか。お前も羽川や戦場ヶ原と同じリアクションをとるのか。

いくら戦場ヶ原と仲がいいとはいえ、同じボケを一日に三回もされるとな〜。

「羽川先輩や戦場ヶ原先輩は反対するだろうけれど、私は応援するぞ！！ 真の愛があれば性別の問題なんて超えられるものだ！！」

「同じボケをしゃがれこの腐女子！！」

そして、結局神原とも別れ、僕達は裏柳さんが指定した『最終決戦場』へ向かう。

『あやつは、人殺しじゃ』

ふと、何故か脳裏を過ぎった忍の言葉が、僕の心に一抹の不安を残した。。。

1
6
·
E
N
D

什麓話 阿良々木の日常（後書き）

あけましておめでとうございます。 烏妣 揺です。

なんか今更な気はします。（・・・；）

本来なら元旦更新の予定の今回。マジで予告してそれが大幅に遅れてしまってもうしわけありません。m（・・）m

で、何気にこの話を区切りに化物語編はクライマックスに突入していきます。

次回からは怒涛の急展開。
お楽しみに

什唧話 相容れないモノ

012

「．．．．．着きました。ここみたいです」

五月闇に僕が連れてこられた場所は、意外や意外、あの廃墟だった。そう、数日前まで忍野が根城にしていたあの廃墟だ。

よく考えてみればどれだけ暴れても周りに気付かれず、被害もでない場所なんてあまりない。

僕は五月闇と共に中へ入っていく。

そして2階部のフロアに到着した時、見知ったひとりと見知らぬひとりがいた。

見知ったひとは、白髪眼帯でこの前の白いスコップを持った男裏柳数奇。

見知らぬひとは、黒髪長身で高そうなダークスーツを着こなした男。

かなりひらけた、広い部屋の中でそのふたりは積み上げられた机に座って何やら言い争いをしていた。

「だから！ 鞘の行方がわかんないってどういうことだよ！！」

「陽埃の報告によると、私が鞘を売った骨董屋は陽埃が行った頃にはもう鞘を売ってしまっていて、その客の情報を骨董屋から引き出して襲撃したがその客も既に鞘を落としてなくしてしまっていたそうだ。」

「……ん？ 気のせいか何か物騒な台詞が聞こえた様な？

「襲撃」ってなんだよ？

「それで紅梅妹が鞘を目下搜索中ってか？」

「その通りだ。」

「ちっ、鞘があれば封印できるっぽかったのに……………」
「ッ！！」

「他に勝算はないのか。」

「……………30%くらいならある」

「ちょっとまってえええ！！」

そこで僕が二人の間にわって入った。

というか、どうしても聞き捨て為らない。

「あ、阿良々木やつと来たのか」

「それより30%ってどういうことだよ!? 確実な勝算があつての『最終決戦』じゃねえのかよ!!」

僕は裏柳さんに思いのたけをぶつける。

万全の準備が整ってないのに何で最終決戦をしようと思ったんだよこの人!?

「いや、もともと90%くらいの勝算はあつただけど、その紅梅のせいで計算狂つちまつたんだよ」

そう言つて裏柳さんは僕の後ろにいる青年を指差す。
話の流れからするとこの人が紅梅だろうか?

「私が、紅梅 月屑だ。よろしく頼む。フララ木君。」

「僕の名前はそんないつまでも定職に就けない様な名前じゃない! 僕の名前は阿良々木だ!!」

「済まない。噛んだ。」

「違う。わざとだ」

「ああ、わざとだ。」

「開き直つた!?!」

っていうかそれは八九寺のネタだ！
いい大人が他人のネタを潰すなよ！！

「うむ。しかし、我々オリジナルキャラクターは、大抵の場合インパクトで原作キャラクターに勝てないのでね。こうやって地道にマネをしてインパクトをださねば生き残れないのだよ。」

「何気にサラッとんでもねえメタ話してんじゃねえよ」

ダメだ。この人は危険だ。

メタ的な意味でもそれ以外の意味でも・・・。

「で、阿良々木。さつさと話を戻してくれないか？」

・・・・・・はッ！

いつの間にか話が大きく脱線していた。

裏柳さんにそう言われてやっと気づく。

敵（？）のペースにすっかり飲み込まれていた様だ。

「コホン。それでどうすんだよ？ 30%で決戦しかけんのか？」

「ああ、出来るなら今日中にこの件を終わらせたい」

何故そこまでこの人は今日にこだわるのか？

その理由はまさか・・・

「まさか、僕の家に来てあの刀が襲って来たことが原因か？」

「ジャスト、それだ」

やっぱりそうか。

「家つてのはある意味一番安全な場所だ。家はそれ自体である意味一つの閉塞した世界であり、他人はむやみに立ち入れない。言い伝えにいう吸血鬼とか幽霊妖怪魑魅魍魎の類も”招かれなければ”家に入れないのはそれが原因だと俺は思う」

「……そういえば、僕を殺そうとしていた神原の怪異も、今回みたいに僕の家に来て襲う様なことはなかった。

ということは……

「……これは相当マズイのか？」

今までの怪異とは全く違う。セオリーからハズレすぎている。

「護衛をつけるにしても本当の本当に四六時中。起床から、食事中、トイレ、風呂、就寝まで一緒つてのは無理だろ？」

確かにそれは無理だ。

『人は一人では生きられない』とはいうけど、一人の時間が全くないという状況でも人は生きられない。

「俺も家は絶対に安全だと思ってたからよかったけれど、安全じゃねえとわかったからにはこの案は却下だ。それに出来るだけ早期に解決しなければ段々悪化するタイプだろこれ？」

．．．．．そうか。

それで今日中なのか。

”これ以上悪化したら手に負えない”からか。

「．．．．．それで、どうやって倒すんだよ？ さっきの話じゃ封印するみたいな感じだったけど」

「封印は無理だ。そのバカが台なしにしちまったからな」

「じゃあどうすんだよ？」

「全身全霊でぶっ壊す！！」

「やっぱり破壊工作かよ！？」

最悪の予想見事的中

「そもそも壊せるのかアレ？」

「とりあえず頑張ればなんとかなるだろ」

．．．．．そういつてのける裏柳さんに対して若干の畏怖を覚えずにはいられない。

頑張れば出来る問題なのかよ！

「と、それとさ。阿良々木、お前に一つ聞きたいことがあるんだが
いいか？」

「？ 何だよ聞きたいこと・・・」

そこまで言って僕は言葉を止める。

不意に後頭部に当たる金属の感覚。

紅梅というあの男が拳銃の銃口を僕に押し付けていた……………。

「……………ッ?！」

そして僕は裏柳さん……………いや、裏柳に視線を送る。

「ど、どういうことだ」

「だから、聞きたいことがあるんだって」

彼はぴくりとも表情を動かさない。

そのことは、この状況を意図的につくった原因は裏柳にあることを
告げていた……………。

「お前、俺に何か隠し事してるだろ？ それもかなり重要なこと」

「……………何だよそれ」

「たとえば、お前が”鬼”だとか．．．．．？」

0
1
3

．．．．．『鬼』。

そのキーワードは、僕にとって重大な意味がある。

それは、春休みに僕が成り、そして今なお僕の身体に影響を及ぼすモノ。

「．．．．．お前を狙っているあの妖刀。名前を《鬼吊》と言って、鬼を殺す刀だそうだ．．．．．そう、”鬼だけを殺す”

妖刀だな」

「．．．．．あの妖刀の名前、は鬼吊と言っらしい。

「そしてそんなモノがお前を何故襲う？　．．．．．答えは単純明快。お前が”鬼”だからだ」

「それだけの理由であんたはそう決め付けるのか？」

「．．．．．確かに、僕はこの人達に”このこと”を話していない。

それは、話すことによって春休みの．．．ひいてはキスショット・アセロラオリオン・ハートアンダーブレードとの出来事を話さなければならなくなるからだ。

春休みの出来事は、悪戯に言い触らしてはいけないものであり、僕自身、二度とこの出来事を他人に話したくはない。

「ん？　いや、その他諸々のいろんな推察はあるけど説明するのが面倒だから省略。」

「そんな適当な．．．。

銃を突き付けられるこっちの身にもなってくれよ。

「ま、証拠云々はこれで十分だろ？　紅梅、ヤレ」
「バンッ！という銃声とともに紅梅月屑の持っていた拳銃で右手を撃たれた。」

「いッ．．．．．!!」

いくら再生能力があるからと言っても痛みが無い訳がない。

焼け付く様な激痛が右手に走る。

．．．．．そして

「．．．．．凄いな。まさかとは思ったが本当だとはな。」

後ろで紅梅月屑がそんなことを呟くのが聞こえた。

そっ、僕の右手は即座に再生を始めたのだ。

今日の僕は吸血鬼性がやや高い。

更に幸か不幸か弾丸は貫通していた為、再生速度は意外な程高い。

．．．．．40秒もしない内に右手の傷は跡形もなく塞がった。

「．．．．．お前は一体何者だ？」

「僕は．．．．．」

裏柳の問い掛けに僕は答えようとするが、その答えが見つからない。

．．．．いや、違うな。

答えはもう見つかったている。それを今、この人に向かって答えればいいだけだ。

「僕は．．．．人間だッ！」

「．．．．お前、この状況でよくそんなことが言えたな」

「僕の身体には、少し吸血鬼性が残っているけど、僕は間違いなく人間だ！」

．．．そうだ。

あの時、忍野は僕にこう言った。

『人間であろうという者は、人間だよ』

だから、今の僕は誰が何と言おうと人間なんだ。

「．．．．なるほど、吸血鬼か。そういえば、三ヶ月くらい前にそんな噂が流行ってたっけ？」

「さあな？　僕にはわからないよ？」

もはやコイツに春休みの出来事を懇切丁寧に語る必要はない。

そして、ここからは僕のターンだ。

「むしろ、鬼はお前じゃないのか」

「は？ 阿良々木、お前何いつてるんだ？ 俺がお前みたいな一人不思議人間万国ビックリショーな訳がないじゃないか？」

「”殺人鬼”じゃないのか？」

「・・・・・・・・・・よくわかったな吸血鬼」

「な！？」

まさか、認めたのか！？

こっちは少し鎌をかけるつもりだけのはずだったのにあっさり肯定しやがったのか？！

「お、おい否定しないのかよ・・・」

「否定？ 本当のことなのか？ まさかお前当て推量で言ったのか？」

「・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・図星かよ」

本当にこの人は殺人鬼なのか？

じゃあ先月京都であつた通り魔の犯人は・・・

「一応言っておくが、先月の『京都通り魔連続殺人事件』の犯人は俺じゃなくて弟だ」

「お、弟・・・」

「血は繋がってないがな」

「・・・ちよつとまで、じゃあコイツは自分の弟が犯人なのを知つて警察に通報もしなければ、その弟を止めなかつたってことなのか？」

いや、きっと違う。

もしかしてこの人がその弟を止めたから事件は止まつたんじゃないのか？

「ちなみにいうが、俺は弟を一切止めていないぞ」

「な、なんでだよ！ 人が、人が沢山死んだんだぞ！！」

「それがどうした？」

その言葉が、全てを物語っていた。

「そもそも殺人鬼ってのはそういうもんだろ？」

その一言で僕は完全にわかった。

「．．．．．まあ、世間一般にあれだけ知れ渡るってのは殺人鬼としては致命的だよな。」

．．．．．わかってしまった。

「俺がもしやるとしたら、もう少し隠れてばれない様に手際よく解体すけどな」

この人は．．．

「．．．．．お前、本気で言っているのか？」

僕とは．．．

「当たり前だろ？」

絶対に解り合えない。

そして、僕は目の前の殺人鬼を殴った。

．．．．．ある意味初めての経験だった。

今まで様々なことがあった。

春休みは、キスショットやバンパイヤハンター達と死に物狂いで戦った。

GWは、羽川を助けたくてブラック羽川に無謀な戦いを挑んだ。

戦場ヶ原や八九寺、神原と出会って千石と再会して、色んなことに首を突っ込んで、要らないお節介を焼きまくって、その度に何かと戦ったりもした。

けれど、こんな気持ちで拳を振るうことは一度もなかった。

．．．．．そう、こんなに頭にきて、怒り任せに人を殴ることなんて一度もなかったッ！！

「．．．．．そうか。阿良々木、お前は”そういう奴か”」

怒りに任せて加減もせず顔面を殴ったにもかかわらず、殺人鬼はびくともしなかった。

まるで、砂鉄を詰めたサンドバックを殴った様だ。

そして顔面に拳を減り込ませたまま、僕を睨みつけた。

ゾクッ

背筋に寒いものを感じて距離をとる。

何だ、今の感覚。

まるで脊髄に直接液体窒素を流し込まれた様な、鮮烈で強烈な感覚。「自分の中から沸き起こる感情によって突き動かされ行動をし、それが周りに『正義』と認識される様な、”そういう奴”。」そして自分よりも他人を優先し、いつも自分の為じゃなく、誰かの為に戦う。「俗にいう『ヒーロー』的な奴だよお前は。」

そんな台詞を、殺人鬼はゆっくりと噛み締める様に、確認するように吐く。

「そしてお前はどんな相手にも臆せずこう言える奴だろ『人殺しは、どんなことがあってもしてはいけないことだ』ってな」

..... ああ、確かに僕は言えるだろうな。

子供でも大人でも身内でも他人でも言えるだろうな。

「だから、俺はお前とは絶対に相容れない……………」

怒りの様な激しい感情を胸の内に押さえ込んだ様な、押し殺した様な声色で殺人鬼は言った。

「ああ、そうだな。そのことに関しては僕も同意見だ。お前とは絶対に相容れないな」

「そうだな。それでどうする。今ここでお前が俺を止めなかったら、俺はこれから人を殺すぞ？ お前が『罪のない人達』とかいう人間達を……………」

「なら僕が止める。それこそ足を引ちぎってでも」

そうだ。確かに妖刀のことも今は大事だけど、それよりもこの人を止めなければならないみたいだ。

そもそも、妖刀が狙っているのは僕だ。なら、ひとりでもどうにかしてやる。

「……………やっぱり、阿良々木、お前には解らせてやらなければならないみたいだな。お前の言葉が、生き方が、どれだけ残酷なのかを……………」

その時、裏柳から見えない位置の僕の影から忍が出て来ようとした。

しかし、僕はそれを手で制して止める。

これは僕がやらなければならない。

人じゃない忍ではなく、同じ人間の僕が止めなくては意味がない。

「阿良々木、お前に教えてやるよ。俺の本名は『零崎 宗識』だ。覚えておけ」

そういつて裏柳．．．．いや零崎宗識は、身を屈め見るからに臨戦体勢の様なものを整える。

そして、決戦の前の血戦が始まる。

「『零崎一賊』がひとり『終死不幸』零崎宗識。 ” 吸血鬼 ” 阿良々木暦に対し、零崎を開始する」

1
7
·
E
N
D

什聊話 相容れないモノ（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回は前回に比べ量は約半分何ですが、投稿にかかった日数は同じくらいになってしまいました。

そして運悪く(?) 学年末テストが近い(- - ;)。

そのため、最近更新が遅れがちな私が更に遅くなることを前もって言って起きます。

下手したら今月中は無理かも . . . (;)

という訳で、今回はまさかの対戦カード『零崎VS阿良々木』！

というわけで次回もお楽しみに！

．．．．．そういえば、今回命の台詞一言だけだったな。

一応主人公なのに．．．。

什捌話 吸血鬼と殺人鬼

何気に僕こと五月闇命は、阿良々木先輩を廃墟に送り届けることが第一の仕事であり、先輩を送り届けた後、すぐさま宗識さんに事前に指示されていた第二の仕事にうつった。そんでもって廃墟に阿良々木先輩を送ってから30分後の今現在・・・

僕は、”ヤ”のつく自由業の敵ついにいちゃん達と緊迫した時を過ごしていた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

キツイ視線と無言の圧力の嵐。

おい坊主、舐めた態度とってんじゃねえぞゴラア。
東京湾と瀬戸内海、どっちがいい？ 死に場所ぐれえ選ばせてやん

よ。

．．．．．みたいなこと言いたそうな顔で手元で拳銃をちらつかせたり、ガンつけたりしてるんですけど．．．f^| ^;

ああ、どうしてこうなったんだよ（涙）

きっかけは、遡ること二十数分前

阿良々木先輩を宗識さんのもとに届けたあと、宗識さんと一言も話さずすぐさま廃墟を出た。

理由は単純。 最初からそういう指示だったからだ。

おそらく、僕にきかれちゃいけない話があるからか、それとも戦闘の役に立たないとおもわれたのか．．？

どちらにしろ僕には関わる意味はないのだろうから。

そして僕は僕なりに、やるべきことを全うしようと思う。

数時間前に宗識さんから来たメール。その内容は．．．

『阿良々木にある廃墟に連れて来い。連れて来たら、直ぐさま妖刀の鞘を探しに行け』

．．．という端的なものであった。

いや、昨晚に妖刀のことについて多少のレクチャーをうけたからあの程度は事情を理解することが出来るけど、探す当てもないものをどうやって探せといつてんだよ？

こういうのは聞き込みをすればいいのかな？

しかし、どこで聞き込みをすればいいんだよ？

ヤミクモにやっただって見付かりっこないのに。

「お？　おお、ミコトくん発見　「ヤッホー、元気」」

．．．．．無視しよう。

今、この変態にかまってる時間はない。

というか、時間があつたとしても構う気はさらさらないが。

「ちょ、ちょ、ちょっとまてや！　毎度無視せんといってくれへんか！？」

無視無視無視無視。

「．．．．．ほ、そないな態度とり続けるならワイにも考えがあんでえ！」　ちよつとそこら辺にいるデッサン帽子被った大人しめで可愛い女子中学生に憑依して発情してミコトくん相手に目茶苦茶ヨガってやんよオオ！！」

「やめろオオオオオ！！」　そうポンポン他人を巻き込むんじゃないやねえよ！！」

即座に例の女子中学生に向かっていこうとする坂巻唯を羽交い締め

にして止める。

流石にこれ以上無視することは出来なかった。
人間として、無理だった。

というか良心が許さなかった。

・
・
・

今更こんなこというのもアレだが、僕が出会ったのは変態関西弁幽霊 坂巻唯だった。

「で、ミコトくんは一体何しにこちら辺にきたん？ いつつこの時間帯にはこの辺にいないじゃん？」

「あゝ、それはだな。ちょっとバイトで捜し物を・・・」

すると唯はクスクスと笑いながらこういった。

「大変やなゝ、何でも屋のバイトも」

唯には、僕がしているバイトを『何でも屋』と言っている。『請負人』ってのは本来土木関係の用語だから『何でも屋』といった方が正しいニュアンスが伝わるからだ。

「何なら、そのバイトワイが手伝おうか？」

・・・ふむ。

幽霊である唯の方がこういうことに長けているのだろうか？

「・・・じゃあ、こちら辺に日本刀の鞘がなかったか？」

「あつたで」

「即答!？」

何ともまたザツクリと答えたな。

それにしても本当に知っていたのかよ？

「マジやって!　んな日常で良く使われへんモノを大事そうに抱えていた大人がいたのを、ワイはこの目でしか見たんや!」

「で、ソイツは何処に行った？」

「あそこ」

といい唯が指差した場所に、僕は走って向かう。

するとそこにあつたのは・・・

『樋口組総本部』

と書かれた表札の雑居ビル。

うつわ、It's a YAKUZA

・・・マジかよ?!

「・・・なあ、唯？」

「何や、ミコトくん？」

「……………諦めようかな、何もかも」

宗識さんとならともかく一人でヤクザ様のお宅に入る自信が無いよ・
・。

せめて、それ相応の実力者が一緒じゃないと……。

「う、うえ、ひっ、えっく、ふええ、あえ、うう、ひっく」

……………あれ、何か聞き覚えのある声が？

「ひっく、ふえ、ひ、ひどい、いよ、う、わ、わたしにばかりい、
む、むりなあんだい、お、おしつけ、うう、おしつけてえええええ
えええ」

「あ、陽埃さん！」

「ふええ、み、ミコト……くん？」

そこで泣きじゃくっていたのは、紅梅月屑さんの妹 紅梅陽埃さん
だった。

「どうしたんですか？」

「……………うん。実は、兄さんにちょっとヨウトウの鞘とかい
うのを探せっていわれて追い出されちゃって。最初は首尾よくいつ

ただけど．．．うぐ、と、途中から全然う、うま、上手いか、
なくてえ、ひぐう、ど、ど、どうしよう」

そついつて陽埃さんはまた泣き出した。

．．．．．戦つてるときは男前でカッコイイのに、どうして普段
はこうなのだろうか？

目茶苦茶美人で凛々しい顔立ちなのに、こうしていると僕より年下
にしか見えない。

ちなみに僕は１５歳で陽埃さんは１９歳。

そして奇遇にも、いや、良く考えてみると全然奇遇ですらないから、
正確には必然的にも陽埃さんは僕と同じ目的をもっている様だった。

しかし、これで新たな選択肢を選ぶことができる。

「あの陽埃さん、実は僕も宗識さんから同じ指示を受けているん
です。」

「ふえ、そうなの？」

とか言いながらキョトンと可愛らしく小首を傾げる陽埃さん。

．．．．．やばい、スゲー可愛い。

元が美人だということ、そして戦闘時の”アレ”とのギャップもあ
りかなり萌える。

「．．．．．ミコトくん？ ミコトくんにはワイというものが
ありながら浮気ですか？」

いやいや、浮気じゃねえし唯とそんな関係になったことなんてねえよ……といおうと思ったが、何故か唯から発せられる凄まじいオーラに黙らざる負えなくなつた。

な、何だこれはッ……！

これは怨念なのか？！

まさか浮遊霊の唯が怨霊になってしまったのだろうか！？

「いやいや、人の顔を見ながら怨霊はないんちゃうか？」

顔は笑ってるが眼は笑ってない。

今この瞬間写真を撮つたのなら100%怨念ドロドロの心靈写真が撮れるだろう。

無論、僕はそんなの欲しくはないが。

「と、とニカく、陽埃さん、僕が聞き込みしたところあそここの雑居ビルに鞘を持った人がいるらしいので、い、行きましょう！是非一緒に――！」

「え、そうなの！ やつたあ、いこいこ」

最初ちょっと声が裏返つたが、陽埃さんには気付かれなかった様だ。

性格に若干以上に問題があるけど、陽埃さんは一応殺し名。

もしも、危ない状況に陥つてもヤクザ相手には十分過ぎる戦力だろう。

という訳で、殺し屋一名高校生一名浮遊霊一名という異色パーティ

―でヤクザの事務所に乗り込んで行っただけであつた。

く以上回送終了。

あゝ、うん。僕は明かに舐めていた。

ここ数ヶ月で殺人鬼やら殺し屋やら幽霊やらと仲良くなったりドンパチャったりしたから、日本のヤクザの恐さを侮っていた。

それにこの数ヶ月で変わったのは僕の身の周りの環境であり、僕自身が強くなつた訳ではない。

だからぶつちやけた話、目茶苦茶怖いんだけど・・・。

それに人選も、今更ながら悪かつたと思う。

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・。」

殺し屋であるところの陽埃さんも僕と同じく、いや、僕以上に怯えていたのだ。

そもそも、僕の隣で空気にとけきっている幽霊に今何かを望むことは出来ないし。

どんずまりだ。

「・・・・・・・・・・それであんたらは、儂の持つてるこの鞘が欲しいと言っているのかい？」

と、目の前にいるヤクザの親分（雰囲気で仮定）がドスの効いた声で僕達に話し掛ける。

「はい。出来れば譲っていただきたいと・・・。」

ちなみに、今いるこのメンバーの中で親分と率先して交渉しているのは僕だ。

上記の理由で陽埃さんは役立たず、唯にいたっては存在すら気付かれていないからだ。

．．．．．そもそもな話、何故この人が頑なにこの鞘を渡そうとしないのかがわからない。

普通刀とワンセットとなるはずの鞘だけをどうして欲したのか？

鞘に綺麗な絵が彫ってあるもあるが、この鞘は何もないどころかかなりボロボロだ。

それなのに先程からの交渉が何の意味も成していない。

．．．．．どういうことだ？

ここは一回引いて何か策を考えて来た方がいいか？

「．．．．．わかりました。それでは今回は諦めます。」

「まあ、待て」

席を立ててこの事務所を出ようと僕達が背を向けた時、親分が僕を呼び止めた。

そして振り向いた僕に突き付けられたピストル。

トカレフＴＴ－３３。ソ連陸軍が制式採用していたオートマチックタイプの拳銃だ。現在、中国がコピー生産していて結構な安価で日

本に輸入されたりしている。．．．．．だっ たっ けか？

そのトカレフが僕の眉間を狙っていた。

「．．．．．どういっつもりですか？」

僕は比較的冷静な声色でトカレフを向ける親分に質問する。

「こちらとしても無用な殺しはしたくないんだが．．．」

じゃあ、しないでくれ。

「．．．生憎、”黒柰榴”様からの御命令で消さなきゃならないんだよ。黒柰榴様から、これからもあのヤクを回して欲しいんだ。悪いな、あの世で存分に怨んでくれ」

そしてニヤリと外道のごとき笑顔を浮かべた親分が、引き金を引こうとした時。

ベキリという音と共に親分の腕がへし折られる。

「な、があああああ！？」

「．．．．．おい、ミコト。コイツら、やっちゃって構わねえんだよな？」

無論、犯人はスイッチの入った陽埃さんである。

「ええ、やっちゃって下さい」

．．その後、詳細な描写をする隙も無く所要時間僅か3．6秒でヤクザの皆さんは壊滅した。

「かつ、狭いところだから得物は使んなかったけど、コイツら弱かったな」

「．．．．貴女が強すぎるんですよ」

とうかこの人達、救急車呼ばないと死ぬよな。

仕方ないから後で呼ぼう。

「．．．．なあ、ミコトくん。ワイもワイで対外やけどあの二重人格さんも対外やな。とうか人外や。」

陽埃さんは浮遊霊のお前に人外なんて言われたくないだろうよ。

「ほらよ。コレを持ってさっさと兄貴のところに走ろう。ミコト、場所しってんなら案内しろ」

戦闘用の人格になった陽埃さんは、例の鞆をボロ雑巾に成り果てた親分（かつてそう呼ばれていたもの）からぶんどり、僕に向かって放り投げる。

僕はそれをキャッチし、事務所の出口へ向かう。

「ミコトくん危ない！！」

「．．．え？」

突然唯が叫ぶ。驚いて振り返るとそこには・・・歯。

「・・・っ!」

先程陽埃さんが再起不能にした暴力団組員その一が起き上がり、噛み付いてきた。

唯が知らせてくれたおかげで間一髪のところを避けることに成功した。

「・・・・・・・・ちよつとまてよ。何だよこれは」

その組員その一は、明かに異常をきたしていた。

両足を骨折しているから本来は立つことができないはずなのに、立っている。これは骨折が治ったから立つてるのではなく、”骨折をしているのに”立っているのだ。

折れた部分からは骨が肉を刺して飛び出していて、想像を絶する痛みがあるはずなのに彼は何事も言わず立っている。

そして眼も異常だった。

死人の眼。白濁した様に濁り、虚で焦点の合っていない眼は、正しく死人の眼だった。

そしてそんなのが、いつの間にかあちこちで立ち上がっていた。

明かに重体とわかる身体が次々と起き上がるその光景は、とても悍^{オソマ}ましい。

「何ですかこれは・・・」

「多分想操術だろう。何故かしらねえが、どこぞの時宮の仕業か・・・」

。じゃあ仕方ねえから殺すぞ」

そう言つて陽埃さんはどこからともなく鉛色の大槌を取り出す。

それで組員その一の下半身を、達磨落しの様に吹っ飛ばした。

壮絶な音をして、ボタツと彼の残つた上半身が床に落ちる。

．．．．．だが、彼はまだ”動いていた”。

両手を使い這う様に動き、僕達を食い殺さんとばかりに口を開ける。

「．．．．．なんだよこれ。想操術じゃないな。」

基本、想操術とは催眠術の一種で死んだ相手には使えない。

じゃあ、目の前の男は何故動く。

これじゃまるでゾンビだ。

それなら、阿良々木先輩が遭遇していたりする『怪異』なのか？

「．．．．．違つよミコトくん。」

そこまで考えたところで、唯の言葉が僕の思考を止める。

「……………この人達は怪異じゃない。ワイが言うんもなんかと
思っけど、ワイ達みたいな世界に在るモノやない。」

「これはもつと忌避される可きモノや……………」

……………じゃあ一体何なんだよコイツらは!!

そして、怪異でもなければ想操術で操られた『空操人形』でもない
”奴ら”は、僕達に向かって襲い掛かる。

無論、『黒柘榴』と言う名の重要性を、愚かにも当時の僕は知る良
しもなかったのである……………。

「うおおおおお!!」

僕は早速先制攻撃を繰り出した。

今の僕は吸血鬼性が高い状態だ。だから腕力だって普通よりかなり強い。

先程その力で殴ったにもかかわらず目立ったダメージが与えられなかった。

だから今度は勢いを乗せて、渾身の力で鳩尾を殴りかかる。

しかし、その拳は空を切り、その伸びきった腕に殺人鬼 零崎宗識は自身の腕を蛇の様に絡み付け、そして・・・。

バキッ

「あッ・・・!!」

絡み付いた状態で過度の圧力を掛けられ、僕の腕がへし折られる。多分今のは中国拳法の形じゃなかっただろうか？

前に見た漫画で、確か登場人物の一人が使っていたと思う。

折られた腕を無理矢理引っ張り拘束を抜け、距離を取る。

「はあ、はあ、はあ」

「阿良々木、お前素人丸出しだぞ。拳に回転も加えて無いし、腕も伸びきる。また腕をへし折られたく無ければ、殴る時腕は半端に伸

ばしてすぐに引き戻せ。あと脇をしめろ」

「……………御忠告どうも」

今の相手には僕の行動を良く観察し、その欠点を僕に教える程余裕があるらしい。

……………けど、どうする。

もはや実力差は目に見えている。これを覆すにはまず先制攻撃を成功させ、勢いをつける必要があったのにそれが失敗した。

いや、策が無いなら無いなりにやるべきことがあるだろ。

「うおおおおお！！！」

がむしゃらに突っ走る。

そして……………回し蹴り。

しかし、それすらバックステップで回避される。

……………ここまでは予想通りだ。

殺人鬼が少し崩した、いや、実際は体勢が崩れたとも言わないような蟻の巣穴の様に小さい隙。そこに僕は全力で付け入ろう！！

回し蹴りを避けた直後の零崎宗識に、さっきアイツが折ったばかりの右腕で殴りかかる。

相手は殺人鬼。

おそらく、僕よりかなり場数を踏んでいるだろう。ならば、これは通じるはずだ。

沢山戦った故に、『一度折った方の腕で殴られるはずがない』というセオリーがあるはずだ。

いくら事前に知識として僕の再生能力を知っていたとしても、ソレは無意識のうちの認識として、長年で培った経験として頭に刷り込まれているはず。

なら、当たるッ！

「……………」

零崎宗識は少し驚いた様に眼を細めた。

僕の拳が殺人鬼に届く寸前。

……………頭が真っ白になった。

いきなり左側に僕の身体が吹き飛ばされる。

ビルの柱に激突しバウンドして床に叩き付けられる。

肺が正常に機能せず、息が出来ない。柱に激突した際に肺の中の空気を全部吐き出してしまったらしく息を吸うことが出来ずとても苦しい。

そしてここにきて僕は蹴られたということを理解した。

くそ、マズイ。体勢を立て直さないと…………

「そろそろ本気でいくぞ、阿良々木」

零崎宗識が僕に向かってそういった。

その瞬間、僕の身体が動かなくなる。

それ程までに強い殺意。

まるで、向けられただけで全身から血が噴き出す様に鋭く冷たく硬く研ぎ澄まされた殺意。

「ひっ」

僕はそれだけで情けない声を上げて腰抜かしてしまった。

ザッザッという音を発てて殺人鬼が近づいてくる。

僕は後ずさる余裕もない。

「阿良々木。殺人鬼は人殺しをしなければ生きていけない。そういう生き物だ」

そんな訳がない。そんな訳があつて堪るか！

「俺達にはどうしようもない『殺人衝撃』があつてそれを晴らす為に定期的に殺人を犯す。いわゆる呼吸と同じだ。」

なんだよそれ・・・。

「呼吸をしないと人は死ぬだろ？ 殺人鬼も人殺しをしなければパニックしてしまう」

「・・・だからってそんなに簡単に人殺しをして言い訳では

無いだろ。」

「簡単じゃねえよ」「人殺しに苦悩する殺人鬼だって存在する。うつかり人を殺し、それに何の罪悪感も抱けない自分を恐怖し、自己嫌悪し、苦しむんだよ!!」「それでも人殺しをやめることが出来ず、
．．．．．気がついたら周りには誰もいない。」

ここで殺人鬼はすつと息を吸い込み、呼吸を整えた。

「俺達は娯楽で殺人をしているんじゃない。俺が俺で在るために、生きる為に殺人を犯している。」

彼はいつの間にか僕の目の前にいた。

「お前はそんな奴にも言えるのかよ」「人殺しはいけないことです。
つてよ」

．．．．．僕は、確かに言った。
食べる為に、生きる為に人殺しを行ったキスショットに同じことを
言ったんだ．．．。
彼の言っていることはキスショットの事とは違う。しかし、全然違
う訳じゃない。

要するに、少し似ている。

「．．．．．ああ、そうだ。僕は誰にだってそう言っし、独りよがりな独善でソイツを止めようとするだろうな」

それに現に止めた。

それもとて中途半端に。

誰も望まない結末で。

「だからお前の話を聞いても何とも思わない。同情すら感じない。」

彼等を許すことは、彼等と似たキスショットを肯定することになる。

だけど今更そんなことをするのは、あの日のキスショットに対しても、今の忍に対しても、あの方法を提示した忍野に対しても失礼というものだ。

だから否定する。

「・・・・・・・・けれど」

けれど、

僕はもう知ってしまったのだ。

生きる為に殺人を犯すモノを。

だから。

「僕はお前の存在を認める」

否定もする。

拒否もする。

許しもない。
許容もない。

しかし、認める。

キスショットを認めた様に、忍を認めた様に。

彼等と彼女を同列として捉えることは間違いなのだろうけれど、今の僕はそう判断する。

「……………ああ、そうか。別にお前に許しを請う訳ではなかったから、『認める』だけで十分だ。双識の兄貴風に言えば『合格』だ」

そう言った零崎宗識から殺意が霧散して消えてゆく。

その様子に少し頭にきた。

「お前、まさか僕を試したのか？」

「ん？……………あ、うん。結果的にそうなったな？」

コイツ、無自覚にやりやがった！？

「いや、少なくとも俺の忠告をしつかり聞いてくれる状態なのかどうか確かめて置きたかったからさ」

「何だよ忠告って？」

そういえば最新に、僕の生き方がどれだけ残酷なのかわかせてやるって言うってたな？

「その前に、一つ質問するぞ」

ああ、何でも質問しろよ。

「阿良々木。お前、自分のことどうでもいいと思っているだろう？」

．．．．．え？

「自分なんてどうでもいい。興味なんて無い。成るように為れ。．．
．．とか思っているだろう？」

な、何だよそれ。

それじゃ僕は投げやりに生きているみたいじゃないか！

「事実、そうじゃないのか？ 俺は、お前のことなんざサッパリ解らなかつたさ。だって一昨日からの付き合いだからな。」「そのあつさゝい付き合いの俺から見ても、お前は、自分に興味が無さ過ぎる」

「何でお前にそんなことが解るんだよ！」

「一昨日から、お前にはやる気が全く無い。俺達がお前の身を守る為に色んな案を出したけど、お前は全てに乗り気じゃなかった」

「そ、それは・・・」

そこまで言って、僕は続けて言う言葉が無いことに気付いた。

理屈を言えるだけの語句が頭の中に無く、嘘すら思い浮かばず、僕はまるで記憶喪失にあつたかの様に、或は失語症に陥つたかの様に、もしくはただ産まれたばかりの赤ん坊の様に、言葉を喋ることが出来なくなっていた。

「例えば、お前がこの事件の当事者じゃなくて第三者で、お前じゃない奴が当事者だった場合、お前は俺達の出した案をどう思った？」

もし、そうだとしたら？

仮に、羽川が戦場ヶ原が当事者で、第三者たる僕に意見を求めているら？

- 護衛を付けよう。

そうだな。付けた方が安全だ。

- 危ないから余り出歩くな。

確かに。それが一番安心出来る。

そんなことを言って、心から賛成したのだろう。

しかし、実際の当事者である僕はどう思った？

- 護衛を付けよう。

大袈裟だな。要らないよそんなの。

- 危ないから余り出歩くな。

煩いな。別にいいだろ。

．．．．．そんなことを思った。

さっき、零崎宗識と戦う時も僕はなんて思って戦おうとした？

- - そもそも、妖刀が狙っているのは僕だ。

なら、ひとりでもどうにかしてやる。 - -

出来るのか？

一番最初に、ひとりどころか忍と一緒に居ても殺され欠けて、あの二人に助けられたのに？

「お前は、今まで怪異絡みの事件にいくつかわつたらしいが、その内”自分の為に”行動したりしたのは何回中何回だ？」

．．．．．一回。

春休みだけ。

全六回中一回だけ。

猫も蟹も蝸牛も猿も蛇も、羽川の為で戦場ヶ原の為で八九寺の為で神原の為で千石の為だった。

「・・・・・・・・・・そして何回死にかけた？」

全部。

・・とはいかないものの、殆ど全部で死にかけ、トータルの蘇生回数は数えられない。

「そしてその中に、進んで死に行つたのは何回ある？」

・・・・・・・・・・数えたくもなかった。

「・・・・・・・・・・。」「

一秒、二秒、三秒と空白の時間が過ぎる。

「・・・・・・・・最悪だな、お前。自分に死ぬ気がないだけ、下手な自殺志願者よりタチが悪い。「なんせ死ぬ気がないのに、結果的に死に行く様なことになるんだからな」

何も言い返すことが出来ない。

全てが全て、反論の余地が微塵もない。

彼は特大サイズの苦虫を噛み潰したかの様に、またはインスタントの元が飽和しまくったブラックコーヒーを飲み干した様に顔をしかめた。

「阿良々木。お前は、誰かの為に何かをしてきたんだよね？」何故、自分を蔑ろにしてまで誰かに尽くす？」

．．．．．その理由は解っていた。

自分のことは何一つ解らなかったけれど、それは、それだけは最初から解りきっていた！

「大切な人を助けたいから」

命の恩人である羽川は勿論。当時はただのクラスメイトだった戦場ヶ原も、たまたま出会った八九寺も、ストーカー後輩の神原も、妹の友達の千石も、そして忍も僕にとっては大切な人達なんだ。

皆、最初は僕との関わりが薄かった。だけど、どれだけ薄かったとしても大切だったんだ。

大切な人を助けたいから。

大切な人を救いたいから。

大切な人を守りたいから。

だから、危険でも死にかけても関わり続けた。

．．．．．悲しむ顔が見たくないから。

「なら、阿良々木。もう無理してひとりで誰かを救おうとするな。
「お前が傷つけば悲しむ奴が大勢いるんだぜ？」「お前が誰かを大切に思っているならそれと同じ数、誰かから大切に思われている」

だから、と零崎宗識は言葉を続ける。

「そういう奴らを巻き込むことを恐れるな！やばいと思ったら誰かを頼れ！」「お前のその生き方は酷く残酷だ。」「誰も悲しませたくないければ、お前自身も傷付くな！」

その言葉は何故か凄く心に響いた。

．．．．．殺人鬼の殺人鬼らしからぬ重みをもった思い。

まさか、殺人鬼にこんなことを悟させられるとは思わなかったな。

僕は少し苦笑した。

ああ、僕の負けだ。

以上説教終了。

まさか殺人鬼の俺なんかが、こうして説教する嵌めになるとはおもわなかったな。

．．．．．一番最初にあつた時から感じていた違和感。
自分自身が怪異に命を狙われているのに、まるで感心のない様に振る舞う姿。

そして、自分より他人を優先する姿。

それは、『彼女』の様だった。

いつも誰かを気遣っていた『彼女』。
問題をひとりで解決しようとした『彼女』。

そして、壊されてしまった『彼女』。

一番側にいたはずの俺が気付くべきだった。

だけど、俺は自分のことで精一杯で『彼女』を知ることが出来なかった。

一番側にいたから、全てを知った気になっていた。驕っていた。それが直接的な原因だった。

だけど、

だけど、

だけど!!

.....俺を頼って欲しかった。

全部抱え込まずに、俺を巻き込んで欲しかった。

だから、柄にもなくこんなことをした。

阿良々木に『彼女』の二の舞になって欲しくなかったから。

阿良々木を大切に思っている奴らに、俺の様な後悔をして欲しくなかったから。

.....しかしこれで、阿良々木が直ぐさま変わるとは思っていない。

阿良々木のアレは最早癖だ。
癖は中々治らないだろう。
だけど阿良々木も少しは意識する。

それだけでも今は十分だと俺は思いたい。

「……………宗識。そろそろだ。」

今まで黙って静観していた紅梅が口を開く。

「……………来るのか？」

「気配がし始めた。」

紅梅はもたれ掛かっていた廃墟の壁から離れ、フロア中心に進む。

俺と話している間も、視線を外から一切外さない。

そして俺にも漸くわかってきた。

外から向けられる殺人鬼をも超えた殺気が。

そして殺意の塊がこちらに向かってくる。

「宗識、準備は出来ているな。」

紅梅は、得物の二丁拳銃を取り出しそうだった。

「当たり前だ」

俺はそういつて床から『バットエンド最終決定』を拾い上げる。

「さあ、決戦の始まりだ！」

そして、漸く吸血鬼と殺人鬼の勝負は終わり、妖刀と殺人鬼 & a m
p・殺し屋コンビの決戦が始まろうとしていた。

18・END

什捌話 吸血鬼と殺人鬼（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回は約一ヶ月ぶりの投稿になりました。

本来の予定では後一週間程早く投稿するはずでしたが、私にとって初のスランプに陥り、いろいろ書き直していました。

さて、今回の話は今までで一番難しい話でした。

特に、化物語主人公・阿良々木暦と本作主人公・零崎宗識の対決（もしくは対話）がとても悩み所だったのです。

もし、この部分が皆様のご期待に添えていたのなら幸いです。

什狗話 刃物語（前書き）

東北地方太平洋沖地震の被害に遭われた皆様。
災害からの早期復興と皆様の安全を祈っています。

什狗話 刃物語

遂に目の前に現れた妖刀《鬼吊》は、逢いも変わらず俺達一般 People には見向きもせず、吸血鬼モドキの阿良々木を狙った。

全体面積の半分が割れたガラス窓をぶち抜いて登場した妖刀はそのトップスピードを維持したまま、柱の側で腰をぬかしていた阿良々木を串刺しにしようと向かってゆく。

．．．．．ああ、なんて読みやすい攻撃なのだろう。

阿良々木と妖刀の丁度真ん中にいた俺は純白のスコップ『最終決定』バットエンドを振りかざし、向かってくる妖刀をぶん殴る。

ストレートの剛速球をバットで打ち返す姿を想像してくれ。あんな感じだ。

カッキーン！という快音は聞こえないものの、綺麗な軌道に乗ってクルクルと回転しながら妖刀が上に弾き飛ばされる。

「紅梅、今だ！」

「解っている。」

俺が合図するとすかさず紅梅がオートマチックで妖刀の刃の腹に向

かつて鉛弾を連射する。

こんなときに言うのも何だが、刀と銃は相性が悪い。最悪といっても過言ではない。

某名作アニメに斬鉄剣という刀を振り回して弾丸を切り伏せるシーンがある。

ぶっちゃけ、ありえねえだろと笑ってしまう人が殆どだろうが、実際のところ、武器の性能面で考えれば不可能ではない。

60万円程度で売られている刀ですら、鉄を斬る『斬鉄』は可能なのだ。自動車のドアだって斬れる（並の人物がやったら、斬れたとしても鞘に納まらなく成るほどに曲がってしまうが）。

そんな刀が、いくら回転と高速射出の恩恵を受けようが鉄よりも柔らかい鉛で出来た銃弾を斬れないはずがない。

だから、銃弾を当てるのなら斬れてダメージの残らない刃よりその側面。

物理的強度の弱い部分に連続して当てさえすれば、あわよくば・・・折れる！

・・・はずだった。

カンッ、カンッ、カンッ、という音と共に全弾はじかれた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

- 紅梅、てめえマジで役に立たねえな！

とアイコンタクト：俺 紅梅

- 違う。私は役立たずではない。ならばその証拠を見せてやろう。

とアイコンタクト：俺 紅梅

その直後、今度は右手のリボルバーを、ついさっき空中飛行が終了し、リノリウムの床に刺さったばかりの妖刀に向け、弾丸を三発発射した。

リボルバーに入っているのは罪口製特殊弾。

おそらく今使ったのは、この前俺の事務所をボロボロにしゃがった対妹用もとい対物用兵器の衝撃弾。貫通力を全て犠牲にした代わりに、着弾時に常軌を逸した衝撃波を叩き込むアレである。

コンクリの壁をぶち壊す程の威力があるんだ。
そりゃ壊れるだろうな。

しかし、妖刀《鬼吊》も伊達じゃあなかった。

弾が放たれた瞬間、スッと床から抜けて、前述した斬鉄剣をもったあの人の様な動きで全ての弾を一刀両断。

あれ、一応斬る時に弾に接触したんだから刃が欠けても良さそうなんだけど・・・・？

そう思ったら斬られた弾（3X2＝6個）が床に着弾。そして、轟音と共に床に向かって衝撃波。床のタイルに使われているリノリウムが大量に舞い上がる。

．．．．．用は、触れられた感覚すら感じられない程の切れ味だということですか！

．．結局、全然駄目じゃねえか！

アイコンタクト：俺 紅梅

．．．．．

アイコンタクト：俺 紅梅

．．いや、アイコンタクトで黙るなよ！？

アイコンタクト：俺 紅梅

．．わかった。とりあえず、最後の挽回のチャンスをくれ。

アイコンタクト：俺 紅梅

．．．．．ラストチャンスだ。これで失敗したらお前は『役立たず』の称号を得るからな。

アイコンタクト：俺 紅梅

「じゃあ、時間を稼いでくれ。五秒・・・いや三秒。」

アイコンタクト：俺 紅梅

「おい、ちよつ・・・」

俺の制止も聞かずに一時戦線離脱する紅梅。

紅梅を呼び止め様とするが、俺に妖刀が襲い掛かり、それに阻まれて中断する。

やはり、俺の後ろにいる阿良々木を襲おうとして、目の前の障害物（俺）が邪魔で襲い掛かったのだろう。

「ガア」 あああアアあああ！

妖刀が細かで鋭い刺突を繰り返し、それに対して俺は『最終決定』を短槍の様に構え同じ刺突で相殺する。

ガガガガガガ、とぶつかり合うというより削り合う様な音が響き渡る。

「・・・マズイ。どう考えたってこの突きはありえないッ！残像すら見えるスピードと手数で、一撃一撃に必殺の威力を込められていて、非常にマズイ！」

やはり怪異。人間相手にしてるのとは格が違う！

こちらとしての強みは、『最終決定』は槍じゃなくてスコップな為、普通の槍や刀より刃の幅が広いため、一回の突きで二撃分の範囲を相殺しているところだけ、相殺する度に剣戟の衝撃が腕に伝わりダメージが蓄積するのがよくわかる。

そもそも今俺は槍術を使つて応戦しているが、これは正確には俺の技術ではない。

俺は、『真似』が非常に得意な殺人鬼だ。

他人の動きを目で見て真似て自分のモノにすることが出来る。

一見便利そうに見えるが、これには欠点がある。

．．．．．それは『極められない』ということだ。

真似は出来るけど、真似をするオリジナルの技術にはどうしても及ばない。近付けたとしてもオリジナルの七割程度が限界だ。

何故なら、彼等はその技術の基礎からノウハウ等真似るだけでは手に入れない部分もあつてのその実力だからだ。

そして残念ながら、俺に一つ事を極める才能は皆無だ。

．．．．．まあ、居合だけは零崎に成る前から苔の一念で頑張つたからそれを除けばなんだけどさ。

そういう訳で、俺の槍術は飽くまで昔戦つたプロプレイヤーの真似であり、俺が一から学んだモノじゃない。

だから、初歩中の初歩たる『衝撃の逃がし方』やらは全く解らない。だからどんなダメージは溜まるし、刺突精度もガンガン下がってく．．．。

要するに、一見拮抗してる様に見えるけど、実際はジワジワ押されていると言っわけだ。

ザクッ という音が聞こえ、左肩が薄く切られた。

やばい、そろそろ相殺が追い付かなくなってきたッ！
腕が重いッ、畜生！

「宗識、もういい。」

「助かった！」

漸く紅梅の準備が整った様だ。

バックステップで剣戟を回避し、横に跳んで距離をとる。

そしてそこにヘッドフォンをした紅梅が……………。

……………ヘッドフォン？

紅梅はヘッドフォンをして、普段は片手で扱うリボルバーを両手で構えている。

ヘッドフォン＋リボルバー両手持ち〃で導き出される攻撃は一つ！

「阿良々木！ 急いで耳塞げ！！」

「え！？」

俺も急いで耳を塞ぐ。

それと同時に紅梅が妖刀に向けて引き金を引く。

ツ
- ツツッ！！！！！！！！

最早、音と言うのもおこがましい文学的表現を超えた轟音と共に、彼の銃口が文字通り”火を噴いた”・・・・・・。

「!!!!!!!!!!ッガア!!!!!!!!!!ッア!!!!!!!!!!」

阿良々木が余りの衝撃に耳（というか頭）を押さえてのたうちまわる。

どうやら阿良々木は間に合わなかった様だった。

俺も耳を塞ぐのが間に合わなかったらああなっていただろう。

耳を塞いで鼓膜が破けるのは防いだものの、頭の中にガンガン響いて目眩がする。

そんな中、俺は視線を阿良々木から外し目の前を、さっきまで妖刀《鬼吊》があつた場所を見る。

そこは黒と橙色の地獄があつた・・・。

高温で熱せられて溶岩の様に溶けたコンクリートと、爆風で削られた壁に付いた黒い焦げ痕。

一体何をどうしたらこんなことになるのだろうか？

答えは、紅梅が《E》のイニシャルが入った罪口製特殊弾を使用したからだ。

《E》とは《Explosion》の略。
通称”爆”弾。

弾と言っているけど、実際はちよつと違う。

これは、正確にいうと銃弾の形に超圧縮された火薬の塊だ。
しかもただの火薬じゃなく、数百種類の様々な危険物（噂じゃ核燃料も入ってるらしい）をお互いがお互いを相乗効果で高め合うよう調合したベストブレンドの特別製なんだと。
それを銃の中で着火。

中で起きた凄まじい威力の爆発は、本来周囲に撒き散らされるはずだが、狭い中で爆発するため一つの方に集束され放たれるのだ。
本来、そんなことをしたら銃もろとも使用者も木っ端みじんだけれど、徹底した耐熱処理と非常識なまでの強度、そして有り得ない程高度な衝撃を逃がす機能がついた紅梅のリボルバーだからこそ出来る攻撃だ。

当然のことながら、現在紅梅の所有している特殊弾の中でも一際強力なモノである。

「……………紅梅、殺つたのか？」

「……………。」

俺の問い掛けに紅梅は答えない。

そして目の前の地獄からのそりと何かが起き上がった。

それは鐔も柄も焦げ付き燃えて、刃は朱く煮えていた。

しかし、それは紛れも無く妖刀《鬼吊》だった。

「……………嘘だろ？」

紅梅の特殊弾は、アレを使った直後だからあと一時間は使えない。

俺も直接対決では勝ち目がない。

アレで決まらなかったら後がないというのに…………。

ここで俺達は怪異を相手にすることの恐ろしさを再認識する。

人間を相手にするならば、首を撥ねれば、眉間に風穴を空ければ、心臓を破壊すれば殺せるという単純明解で簡単な真理があるのだけれど、怪異は違う。

まず、何をどうすれば勝ちなのか、どこをどうすれば殺せるのかが解らない。

勝利条件の解らない戦いほど苦しいものはないのだ。

……………万事休すか？

俺達がそこで半ば戦意喪失したのが原因だろう。

咄嗟に、朱く輝く灼熱の刃が阿良々木へ向かうのを止められなかったのは・・・。

0
1
5

戦慄。

僕が鼓膜が破壊された痛みとダメージから回復した時、一番最初にしたのがその感情だ。

ゴールデンウィークのブラック羽川やこの前のレイニーデビルの時とは別次元の戦い。キスショットとの戦いには流石に及ばないものの、その時の僕は吸血鬼フツウシヤナカッタから比較するのは少しおかしい。そもそも、彼等は人間だ。

しかし、零崎宗識や紅梅月屑が春休みの頃、バンパイアハンターとして僕の前に立ちあがっていたとしたら、あっさりと死んでいた。そして、そんな彼等ですら妖刀を止められなかった。

アレを止めるには破壊するしかないっていたのにも関わらず。

目の前を焼け野原にしても妖刀《鬼吊》は止まらない。

朱く煮えた刃が僕に向かって飛んでくるのが見えた。

もう全て諦めなくなった。

彼等が勝てなかった妖刀に僕がはたして勝てるのだろうか？
そんなわけがない。

「おい、お前様！ 勝手に色々諦めるでない！！ お前様の命はお前様だけのものじゃと思ったら大間違いじゃぞ！！！！！！」

「し、忍！？」

気が付いたら目の前に忍がいた。

忍が焼け爛れた妖刀の刃を幼い手で握り、僕に刃が届くのを防いで

いた。

ジューという音を発てて忍の手が焼ける。

「や、止める忍!!」

忍を止めようとするけど忍は決してやめない。

そして忍は妖刀を力任せにぶん投げる。

手の平が焼けて刃にくっついていてのを無理矢理投げたものだから皮だけじゃなくて手の肉までもが剥がれる。

その傷は、妖刀《鬼吊》によって付けられた傷だから再生しない・・。

「忍!!」

更に忍は何故か走って僕から離れる。

そこにまたしても妖刀が迫りくる。

僕じゃなくて忍めざして・・。

「・・・・・・・・・・ッ!」

そうか、そういうことか！！

妖刀《鬼吊》は『鬼』を殺す妖刀。

僕を狙っていたのも、僕が吸血鬼モドキだからだ。

何故今まで忍が襲われなかった理由は僕の影の中にいたからというだけ。

でも、忍が出てきてしまったらどうなる？

吸血鬼モドキの人間である僕と、人間モドキの吸血鬼の忍が同時にいたら、『鬼』を殺す《鬼吊》はどちらを優先して狙う？

．．．．．忍だ。

やはり、その場合吸血鬼性の高い忍が優先的に狙われる。

もし、忍が妖刀に殺されてしまったら？

忍が殺されたなら”僕は人間に戻る”ッ！

そして真人間に戻った僕は”妖刀の殺害対象じゃない”！！

「駄目だ！忍ッ！！」

忍一人が犠牲になればこの事件は終わる。

けど、それは絶対に嫌だ。

そんな時、

「宗識さん、頼まれていたもの、持ってきました!!!!!!」

希望の光が差し込んだ・・・。

0
1
6

「五月闇!」

僕達がいる廃墟の階段を息を切らして駆け登ってきたのは、いつの間にか姿を消していた五月闇命だった。

余りにも身体を酷使してここまでできたのか、零崎宗識にそういつてからふらふらと床に倒れこみそうになるのを、僕が近付いて支える。そんな五月闇の手に握られている古い棒状の物。

それは、鞘だった。

「五月闇、まさかこれは」

「え、ええ、妖刀《鬼吊》の鞘です」

やはりそうか。

なら、戦況は逆転する！

封印というワイルドカードがあれば、勝てるかもしれない！

「五月闇、それ貸してくれ！」

「え、ちょ、阿良々木先輩！？」

五月闇から鞘をぶん取り、妖刀の方を見る。

妖刀は忍だけを狙っていた。

そして僕は忍のもとへ駆け寄り、タイミング良く飛び回る妖刀を鞘

でたたき落とす。

「忍、手伝ってくれ！」

「お前様よ、いきなり何を言い出すんじゃない？　まさかそれで封印でもするのか？」

「ああ、そうだ。ちよつと難しいかもしれないから手伝ってくれ」

「ふん、そんなことせずとも儂が……」
「言っていおくけど、お前を犠牲になんて出来る訳ないだろ!!」
「……。」

黙り込む忍。

そうして何も喋らない忍に鞘を渡す。

「構えていてくれ。僕が妖刀をその中に入れるから」

そうやって僕は足元の妖刀を拾い上げる。

刃の熱はもう冷めているから触れた手が焼けることはなかった。

だけどその代わり、手に持った瞬間、忍を殺そうと動き出す。

[illegible]

許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺
許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺許憎殺

目眩がする。吐き気がする。気持ちが悪い。脳みそがジワジワ汚染されていく様な錯覚を得る。

だけど、ギシリと妖刀を握りしめ、忍を斬り殺そうとする衝動を押し込める。

忍が黙って鞘の鯉口を僕の方へ向け、そこに妖刀を差し込む。

妖刀から発せられる強い力を押さえつけている性で、剣先が震える。それでも、妖刀を強引に差し込む。

そして長い刀身が全て納まり、封印が完了し、手を離す。

その瞬間、鞆が真つ二つに切り裂かれた。

「「なッ！」」

僕と忍は驚愕の声を上げる。

本来ならこれで封印が完了されたはずなのに！？

「．．．．．まさか、贗物？」

五月闇が愕然と呟く。

更に事態は暗転する。

何故なら、妖刀の切っ先ほぼ零距离に忍がいるのだから．．．。

「しん．．．」

声を出すのも間に合わない。そんな距離。

避けることなど不可能な状況で、妖刀は容赦のない剣戟を忍に．．．。

ガキン 金属同時がぶつかり合う音。

突如阿良々木の影の中から出て来た謎の少女を、『最終決定』を使い妖刀の剣戟から守る。

そして、

「この野郎！！」

靴『終死不幸（アンラッキー&デッド）』を履いた右足で妖刀を蹴り飛ばす。

あの鞘を見た時何か妙な胸騒ぎを感じ、阿良々木と少女が妖刀を封印しにかかるの瞬間にもしものことを考えて走り出していてよかった。

間一髪で守ることが出来た。

ガンという情けない音を発てて妖刀は柱に激突し床に転がる。

そこに急いで駆け寄り、また飛ばない様に踏み付けて抑える。

「．．．．．抑えようとしてんだけど、何だコイツめちやくちや暴れて上手く抑えられない。」

「おい、その金髪女子！ お前が何であるかはこの際どうでもいい！ だからちよつとコイツを抑え付けンの手伝え！！」

「．．．．．この儂に命令とは何処までも偉そうな鬼畜じゃな」

この時、俺は初めて近くでこの少女を見た。

金系の様なきめ細かい美しい金髪。陶器の様に白い肌。あと十年もしたら絶世の美女になるだろう可能性を感じる顔立ち。

おいおい阿良々木、こんな少女に何『鬼畜』だなんて歳不相応な語彙教えてるんだよてめえ！

「．．．．．という冗談はさておき、そもそもこの少女を一般の定義じゃ計れないのだからそんなこと言うのは無駄だと思うが。」

「鬼畜で結構！ とにかく手伝いやがれ！！」

「．．．．．ふう、仕方ないのう」

そういつて少女は、ガンと妖刀の俺と反対側の方を踏み付ける。

少女が妖刀を踏み締めた時、ビリビリと妖刀を伝わって冗談みたいな衝撃が伝わってきた。

ちよ、この子どんだけ力あるんだよ・・・。

両端を踏み付け妖刀の動きを封じる。

「おい、紅梅！　いつまでボケツとしてんだ！　早くこい！」

「あ、ああ。」

ボケツと突っ立ったまま硬直していた紅梅を呼ぶ。

「衝撃弾、何発持ってる？」

「3、4発ある。」

「じゃ、これの上に置け」

そう言っただけで踏み付けてる妖刀を指す。

「・・・何をやる気だ。」

「それを使うに決まってるんだろ？」

そう言われて、紅梅は妖刀の刀身の上に衝撃弾を置く。

その置かれた衝撃弾を、『最終決定』の刃先で突く。

するとその衝撃に反応して衝撃弾から衝撃波が刀身に発せられる。

ガキン。

さつき衝撃弾をコイツに使ったけど、全然効かなかった。

それは、コイツに衝撃弾がサクツと斬られて、ちゃんと作用しなかったからで、まるっきり効かないというわけじゃないと思う。

しっかり当てれば多分折れる。

本来なら衝撃弾を接射出来れば一番良いんだけど、紅梅のリボルバーは”爆”弾を使ったからしばらく使えない。

だから、『最終決定』で衝撃弾を突くことで接射には及ばないものの、相当量の衝撃波を放つことができるからそれで代用する。

「次」

二つ目をセット。

ガキン。

衝撃波の一部が俺達の足にも伝わり、骨が軋む様な痛みが走り、歯を食いしばる。

それでも・・・

「次！」

三つ目。

ピシッ。

妖刀《鬼吊》の刀身に亀裂が入った。

ガタガタと今までにない程の力で妖刀が抵抗する様に震える。

だが、更に俺達は抑えつける力を強める。

「あと少し!!」

四つ目ッ！

奥歯を噛み締め衝撃に備える。

渾身の力で『最終決定』を刃の真ん中、亀裂が入った部分に置かれた衝撃弾に振り下ろす！

……これが、数百年前から存在し続けた妖刀《鬼吊》の最期だった。

1
9
·
E
N
D

什狗話 刃物語（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回、紅梅月屑の使用した『爆弾』は、狂咲繰理様のアイデアです。

『罪口製特殊弾アイデア募集』に参加してくれてありがとうございました！

狂咲繰理様。いや、このアイデアを投稿してくれたのが去年の十月で、かれこれ六ヶ月も本編へ出せず申し訳ありませんでした。

さて、『罪口製特殊弾アイデア募集』は今なお継続して募集しています（今なら採用率99%！）。

コメディーパートに使えるものから、シリアスな場面に使えるものまで何でもオツケーです！

何とぞよろしくお願いします（o^_^）b

次回、化物語編最終回！

第廿話 後日談（前書き）

化物語編 完結。

第廿話 後日談

017

後日談。というか、今回のオチ。

妖刀《鬼吊》を破壊した後、僕達は『裏柳請負人事務所』に向かった。

零崎宗識曰く、

「本来なら病院に行きたいんだけど、その娘普通じゃなさそうだし、行けないだろ？」

．．．だそうだ。

忍の怪我は、両手の火傷だけだったけど、かなり重症。

普通の人間だったらショック死してもおかしくないレベルだった。

妖刀を破壊しても、忍の傷はすぐさま再生しなかったけど、とても本来の再生能力には及ばないものの徐々に癒えて来ている様だった。

でも一応重症である忍は、五月間から簡単な治療（傷口の洗浄と消毒だけだから治療とも言えないかもしれない）をつけ、現在、両手を包帯でぐるぐる巻にされている。

それはもう、コミカルなまでにぐるぐる巻だ。

危うく吹き出しそうになるのを堪えたけど、忍にはそれが伝わったらしく、さっきから昔の様にブスツと不機嫌に黙り込んでしまっている。

その幼稚な姿に、

「ぶつ、くくくつ！」

と零崎宗識は盛大に吹き出していたが。

「というか、これで依頼完了ですよね？」

「ああ、本当は欲しかったけどな」

五月闇の問い掛けに、宗識は悔し混じりに嘆息する。

結局のところ、妖刀《鬼吊》を破壊してしまい、元々妖刀が欲しくてこの事件に首を突っ込んだ零崎宗識や、そのとばかりで参加した五月闇にとってはあまり芳しくない結果だった。

．．．．．彼らにとっては不幸だったかもしれないけど、僕にとつてはこの上ない幸運だった。

彼らがいなければ、僕は多分死んでいたと思う。

ちなみに、今この事務所に先程まで一緒に戦っていた紅梅月屑の姿はない。

彼は途中で合流してきた自分の妹と共に何処かに行方をくらましたからだ。

その後しばらくして五月闇のケータイに『このまま帰る』という内容のメールがきたそうだ。

そんな訳で、この事務所の中には影の中に入ってしまった忍を除くと、僕と五月闇と零崎宗識の三人だけしかない。

そして、お目当ての品が手に入らなかった落胆とか、一仕事終わった達成感とか、命の危機が回避された安堵感などが入り混じってこの事務所内は居心地のいい沈黙に包まれていた。

そのせいか、めちゃくちゃ眠い。

そんな空気の中で、零崎宗識がぽつりとかう呟いた。

「……………今回の事件を振り返ると、偶然の積み重ねの結果こうなっちまったんだよな」

「偶然の積み重ね……………ですか？」

「“偶然” 紅梅が妖刀を盗んで、“偶然” この町に吸血鬼の阿良々木がいて、“偶然” 襲われている所を俺達が発見して助け、“偶然” 利害一致したからこそなんだよ」

「……………そんなこと言ったら世の中全部偶然の積み重ねですよ」

確かに、そんなことを言ったら日常は全て”偶然の積み重ね”だろうけれど、今回に限っては妙に違う気がする。

偶然、というには出来すぎている。

むしろ、ただの偶然が重なり、一つの方向性を持った、しかも怪異絡みの事件に発展するものなのか？

今まで僕が関わった事件は、全て誰か人の意思が有って起こったものだった。

猫なら羽川。

蟹なら戦場ヶ原。

蝸牛なら八九寺。

猿なら神原。

蛇なら千石の友達と千石に振られた少年。

吸血鬼なら……僕なのだろう。

全ては確たる人間の意思があったからこそ、何か願いがあったからこそだ。

羽川は、猫に『ストレス』を発散させ様としたから、

戦場ヶ原は、蟹に『重さ』を押し付けたから、

八九寺は、生き別れの母に『会いたかった』から、

神原は、『憎しみ』を叶えて欲しかったから、

千石の友達は、千石に『不幸』になって欲しかったから、そうだったのだ。

誰かの『そうなってほしい』という願いが、叶ったにしろ叶わなかったにしろ、”そっちのベクトル”に願ったからこそ成ったのだ。

だが、今回は違う。

妖刀を盗んで、うつかり落としてしまった紅梅月屑も、殺されかけた僕自身も、

進んで首を突っ込んだ零崎宗識も、それに釣られて関わった五月闇も、誰ひとりとして願っていない。

いや、厳密には、

紅梅月屑は、金儲けの為に、

零崎宗識は、コレクシヨンの為に、
という行動目的。『願い』に近いものを抱いていたけど、これは絶対的に今までのパターンとは違う。

八九寺の場合を除き、怪異というのはすべからず、人から押し付けられた事柄を遂行している。

そのことを考えれば、この違いは明らかだろう。
明確な行動目的を持った二人は、怪異に頼らず、”自力で行動目的を果たそうとした”のだ。

だから、妙だ。

いくら偶然が積み重なったからでも、今回の怪異がとても特殊なケースだとしても、誰も願わない事を怪異が行うのか？

妖刀が、昔の刀鍛冶の願いを今なお実践していたのなら何の問題もない。

けど、その当時の『鬼』ははたして”吸血鬼と同じタイプ”なのだろうか？

日本の鬼と西洋の鬼では、全くといっていいほど共通点がない。

西洋の鬼は、ゴブリンをはじめとして様々な種類があり、中には人を助けるものもあるが、

それに対して日本の鬼は、『鬼』たった一種だけである。”鬼”の漢字をもった妖怪は多いもののその多くは『姿が鬼に似ている』という理由で付いているのだ。更に外見的特徴として、西洋の鬼には”角が無い”。そして文化面を見るのなら、日本の鬼は、人の”負”の感情の塊と表現されていたり描かれていたりするのに対し、西洋の鬼は、それ自体が独立した生き物の様な描かれ方をしている。

『鬼』を殺す妖刀《鬼吊》は、”吸血鬼”を本当に自分が狙う『鬼』と見なすのだろうか？

そして、もし。

もしも、これが、千石の時の様に第三者の意思が関わっていたとしたら。

何処をどう考えても『偶然の積み重ね』にしか見えないように、自身の存在を完璧に隠蔽した”悪意ある第三者”。

そんな人物がいたとしたら・・・？

「……この考えは誰にも言っていない。」

おそらく、零崎宗識は気付かないし、思い付かないのだろう。多くの怪異と関わったからこそたどり付いたものだと思う。

この予感が気のせいであることを僕は祈る。

「悪いけど僕はもう帰るよ。」

「あ、もう帰るんですか？」

「……………出来るなら、余りここには居たくないんだ」

「……………。」

五月闇には申し訳ないかもしれないけれど、余りこの場所には居たくない。

いくら命の恩人だとしても、

例え、根はいい奴だったとしても、

やっぱり殺人鬼は、どうしても殺人鬼でしかなくて、僕は許すことが出来ないし、友達になることも、尊敬することも、この先、どんなことがあつたとしても親しくなることは絶対に有り得ない。

僕の一言で五月闇は全てを察した様で、少し寂しい表情をして

「そうですね。それでは、さようなら。また明日」

．．．．．と言った。

零崎宗識はともかく、五月闇は、これからも僕の後輩で関係は続いていく。

五月闇も裏柳数奇は殺人鬼『零崎宗識』だと知っているのだろう。

それでも、彼の元にいるということは、五月闇自身も何かしらの秘密を抱えているということなのか？

「ああ、また明日」

僕もそう言って事務所の外へ続く扉のドアノブを掴む。

その時、

「なあ、阿良々木。『人間』の定義って何だと思う？」

零崎宗識がそう問い掛けてきた。

首だけで振り返る。

「．．．．．どういう意味だ？」

「いや、難しく考えなくていいんだ。『人間』であるべき条件はお

前は何だと思う？

そして”お前は何だ？”」

「・・・・・・・・何でそんなことを？」

「・・・・・・・・俺が、五年前から考え続けていることだ。実は、請負人を始めたのもこの答が知りたかったというのが理由の一つだったりする。」

・・・・・・・・じゃあ、僕は出来るだけ誠意を持って答えよう。

この再確認の様な事を。

「僕は『人間』だ。そして、『人間』でありたいと思えばそれは『人間』だ！」

・・・・・・・・これが僕の答えだ。

人間で在りたいと思い続ければそれは『人間』なんだ。

「・・・・・・・・そうか。ありがとう」

殺人鬼は、僕に礼を言った。

そして僕は、彼にさよならも言わずに事務所を出ていく。

・・・・・・・・おそらく、もう彼に会うことは二度と無いだろう。
僕とは、生きる世界が違いすぎる。

今回助けられたのは、僕達が出会ったのは、偶然お互いの道筋が重なっただけ。

所謂ゲスト出演だ。

ブラック・ジャックの背景の中にアトムが入り込んでいた様に、ドラえもんに出ていたアイドルが実はパー子だったりした様な、運命のちよつとした遊び心なのかもしれない。

だからこの先、こんなラッキーは無い。

これから先も、忍と共にいる限り、吸血鬼モドキの人間と人間モドキの吸血鬼のコンビでいる限り、またこんなことがあるだろう。

でも、諦めずに進んでいこう。

例え、解決すべき問題が山積みで、解決なんてできなくて問題を先送りにしても進んでいこう。

どうせ、僕も忍も普通より死にくいんだ。時間はまだまだある。

だから、進もう。

今からは、忍と手を取り合いながら……。

20・END

「兄さん。何で口止めなんてするんですか？ しかも私だけじゃない五月闇君にまで！？」

「……………そうする必要があったからだ。」

「あのゾンビもどき、結構厄介だったんだよ！ 咄嗟に、五月闇君

ひとりを逃がすことで精一杯だった」

「知っている。私も昔、似たようなのを始末した。」

「なら、どれだけ危険かわかっているなら、キチンと零崎さんに報告しなくちゃいけないわよ！ 正式なものじゃないし、お金も入らないけど、今回は私達が零崎さんから依頼を受けた様なものだから！！」

「優先順位の問題だ。」

「依頼主に誠実であること以上に大切な、優先することってないわよ?!」

「……………」『彼』の遺志だ。」

「……………ッ！」

「『絶対に宗識を』アレ」に遇わせるな！情報を流すな！」と。

「アレ」って何？ そして何でそこまでして遇わせたくないの？」

「アレ」の名前は『黒柘榴』。遇わせたくない理由は知らない。
……………だが、陽埃良く聞け。そしていつも心の角にこのことを置いておけ。」

「零崎宗識の闇は、境界線の外も内も想像を超え深く、私達を腐ら

せてしまう程に”満ちている”のだと・・・。

）

第廿話 後日談（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回で化物語編、完結でございます。

完結って言っても、なぐんか釈然としないモノが沢山ありますが、それは、この物語が進行するに連れ明らかになって行きますので少々お待ちを。

化物語編が終わったからと言って、怪異や化物語キャラが出て来なくなる訳じゃなく、以降も時たま出て来ますのでご安心を・・・。

そして次回は、以前の様なコメディー濃度100%（飽和状態）でお送りします。

ちなみに、個性的な新キャラが当時しますよ

廿巻話 オールグリーン（前書き）

ちなみに『廿』一文字で『にじゅう』と読みます。

廿巻話 オールグリーン

『デートしようぜー!』

「・・・・・・・・・・・・・・・・はい？」

それは恐怖の電話だった・・・。

その日は、ちょうど阿良々木の事件が解決した翌日だった。

その日、俺は右足に違和感を覚え病院に行った。

で、診断を受けるとどうやら右足の骨に少しヒビがはいっていた。

・・・・・・・・多分、衝撃弾を使った時に妖刀に行ったダメージの何割かは踏み付けていた右足にも来たのだろう。

別にギブスするほどの怪我じゃないが、激しい運動は控えた方がいいそうだ。

そんな診断結果を貰ってトボトボ事務所に帰る途中、いきなりケー

タイが鳴り響く。

）

しかもメールじゃなくて通話だった。

ケータイを取り出し、画面を見て相手を確認しようとする。

．．．．．うん。知らない番号だ。

ピッ

「はい、もしもし」

『久しぶり、元気だった？』

こッ、この声はもしやッ！

「あの、どちら様でしょうか？」

『おいおい、あたしの声を忘れたとは言わせねえぜ？』

．．．．．ええ、忘れた訳ないじゃないですよ。

ただ、少し現実から目を反らしたかっただけですよ！

「．．．．．ッ（苦悩する音）．．．．．アア（葛藤する音）．．．

．．．クッ（電話を切ろうとする親指を必死に抑える音）．．．．．

『デートしようぜー!』

「……………はい?」

『明日、午前10時に駅前で。』

「え? いや、あ、ちょっと!」

『じゃ!』

ガチャツ。ツゝ、ツゝ、ツゝ。

この時の俺の心情は、余りにも複雑化していたので詳細に説明することは出来ない。

しかし、あえて一言で表現するとしたらこうだ。

『取り合えず、自分に掛かってる生命保険の金額を確認しておこう。』

そんなことがあった二時間後、俺は山歩きをしていた。

場所は、最寄り駅から下り線の電車に乗って一時間半ほどののかな田舎町。その近くのただの山だ。秋になれば熊が獲物を求めて徘徊したり、冬になれば猟師が猟銃持つて鹿狩りにくる様な山。

．．．．．別に哀川さんから逃げる為に登っている訳でもないし、トチ狂って意味不明な行動に走った訳でも無い。

実は、この山に住んでる知人がいるのだ。

凸凹した獣道をズカズカ進んで行くと、小さな山小屋が見えてくる。

それはもう粗末で貧相でボロツちい山小屋だ。

屋根は、ホームセンターで安く買える様な木の板を張り付けただけ、壁は一見レンガの見えるが良く見るとトタン板の上にレンガ模様のビニールを被せただけ、入口のドアに使われている木材は腐ってる。

．．．．．そんな子供が作った即席秘密基地並の山小屋は、実は核の直撃を受けても大丈夫だと言うことは誰も知らない。

その山小屋のドアの前に立ち、ノックする。

「おい、俺だ。入っていいか？」

そして中にこう呼び掛ける。

すると・・・

『声紋認証確認デキマシタ。』

ぴゅ、かしんがちゃぎエヤガタンツピー。

『ドウゾオ入り下サイ。』

大仰な解錠音と無機質な案内メッセージが鳴り、ドアが開いた。

相変わらずのシステムに嘆息する。

山小屋の中に入るとそこには家具も生活用品も無く、とにかく『道具』が何ひとつ無かった。

山小屋の中にあるのは、地下へ続く階段だけ。

その階段を下る。

カツカツカツ、と狭い階段通路の中に俺の足音だけが響く・・・。

・・・・・・・・・・毎度、この階段を下りる度に思う。

階段長ッ・・・・・・・・！！

どんだけ長いんだよ！

高尾山並じゃねえか！

年寄りが通るならコンドロイチン必須だぜ！？

そんな悪態を附きつつ、階段をどんどん下りる。

かなり進むと、漸く出口が見えてきた。

そして出口を抜けると・・・

そこには、異様に散らかった部屋があった。

「き、汚ッ！あと臭え！」

毎度のことだが、得体のしれない金属片と機具が角の方にごちゃつと押し込められ、かつ鼻を突く機械油と熱せられた鉄の匂い。

そんでもって、そのとんでもカオスルームに佇む奇っ怪な少女。

腰まで届く緑に染められた髪。前髪を上げるライトグリーンのネコミミカチューシャ。

黄緑色のＴシャツの上に派手な緑色の革ジャン。

ブリッツスカートはダークグリーンに染められてあちこちに銀色のチェーンやボタンで改造されている。履いている靴は、オーダーメイドの高級スニーカー（緑）。

更に腰にはカチューシャと同色の尻尾。

頭から爪先まで文字通り緑一色の少女は、俺の姿を見つけると愛らしい（他の奴にはそう見えるらしい）笑顔でこういった。

「やア、3ヶ月18日5時24分45・195秒ぶり」。元気だッ

たゝ？」

「ああ、前回会った時間を秒単位で覚えているなんて、相変わらずキモいな？」

彼女の名前は、罪口 ツミグチツミ 津積。

武器職人だ。

「津積、これを直して欲しい。」

そう言って『バットエンド最終決定』を津積に差し出す。

「……………はは〜ん。刃のところが少し曲がってるね？」

『最終決定』をじっくり観察し、刃が少し曲がってることを指摘された。

「ん〜。もしかしてさ、『最終決定』の刃で衝撃弾でも突ツついた？」

「！ 良くわかったな？」

「キミ、ボクを誰だと思ってるんだい？」

少女はそう言つてニヤリと笑う。

……………確かに馬鹿な質問だったな。

彼女は『罪口』。

『呪い名』の序列第二位『罪口商会』。

平たく言つと武器職人集団だ。

N A S A もビックリの最新兵器から時代錯誤な石槍まで、顧客が望めばどんな武器も作ってくれる職人達。

その性質上、常に多くの武器や道具が必要な『墓森』と相性が良かったりする。

そんな武器の専門家に依頼するのは『最終決定』の修理。
スペシャリスト

あの哀川潤にサシであわなきゃならないというからには、どんな事件や面倒事に関わらなきゃならなくなるかわかったもんじゃない。

だから、早急に『最終決定』を修理してもらつて万全の状態で会わなきゃな。

ちなみに俺の靴『終死不幸（アンラッキー&デッド）』と
紅梅兄妹の武器は彼女のお手製だ。

『最終決定』は津積の作ったものじゃ無いけれど、武器のことで彼
女の右に出る者はいないだろうからメンテナンスや修復を度々お願
いしている。

無論、今回も。

「直してくれ」

「……いいけど。」

そこで一旦言葉を区切り、

「でもこれも結構ガタが来てるよ？」

と、忠告してきた。

「これ、何度も何度も曲がッては直し、壊れては直し、てな感じで
もう相当キてるよ？ これ直すより新しいの作った方がいいと思う」

武器職人としてのコイツの見立てはおそらく正しい。

「今ならもツと良いの作ッてあげれるよ。カーボン素材でより堅
くより軽くすることも出来るし、刃を超低振動させて切断力を底
上げしたり、小型のガトリングだッてつけられる」

「いや、”そんなん”じゃねえから。とにかく頼む」

「・・・・・・・・ちエッ、つまんないの」

津積はクルリと回転し、作業機に向かう。

カンカンカンと三回金属音がして、

「直ッたよ」

「早っ！」

もう直った。

しかもただ直っただけじゃなくてピッカピカに磨き上げられてた。

・・・・・・・・たった三秒で一体どうやったんだ？

「んま、そこは企業秘密ということで」

「勝手に心を読むな！」

「取り合えず、依頼完了。じゃ早速”報酬”のお・は・な・し・よ」

「・・・・・・・・この前見たいなのは勘弁な？」

『罪口商会』は金を欲しない。

どんな仕事を請け負っても一銭足りとも貰わないのだ。

・・・・・・・・ということは、必然的に”金以外の何かを要求する”

ということだ。

問題なのは、その要求は殆どの場合、試作兵器の試し切りなんかだということだ。

ある者は、目玉を引き抜かれたり、脳に直接電気を流しこまれたり、脊髄にマイクロチップを埋め込まれたりしたらしい。

そんな中でも、罪口津積のソレは一線画する。

今回は、南アフリカの紛争地帯に一週間強制滞在させられた。

前々回は、危うく改造人間よりにもよってバッタのにされそうになった。

前々々回は、大量の蟬の抜け殻を集めさせられた。しかも秋に！

……上記の様に、津積の要求する事柄の難易度が異様に高い。そして凄まじく意味不明！

ちなみに紅梅兄妹は、自身の武器を作って貰う際に『二人でひとりの仮面 イダー』に変身させられたらしい。

ある意味この要求が怖い。

試し切りされてもいい。だからせめて、直ぐに終わるものにして欲しい。

「大丈夫だっ〜」

津積が今回要求するのは・・・

「ボクの試作品と戦ってもらっただけだから」

・・・試作品？

・・・戦う？

先程までいた津積の工房のさらに地下。

そこは実験場だった。

俺は実験場の真ん中にたつて周りを見回す。

嘘の様に高い天井。

高校の体育館三個分の広さ。

壁は鋼鉄製で天井一杯に設置された大量のライトが、この馬鹿でかい地下空間を真昼の様な明るさに照らしている。

『あゝ、あゝ、テストス、聞こえてますか？』

そこに響く津積の声。

周囲に反響しあって音源が何処か定かではないが、多分どっかの壁の中にスピーカーが埋め込まれているのだろう。

「充分聞こえる」

『あッそ』

直してもらったばかりの『最終決定』を肩に担ぎ、津積に質問すり。

「なあ、工房からモニターごしに見るよりこっち下りてきた方がデータ取りやすいんじゃないのか？」

今回の目的は、『新兵器の実戦データ収集』という実に『罪口』らしい、そして津積らしくない真面目なものだった。

そんなのなら、モニター越しにより肉眼の方がいいと思う。

危険度はこちらの方が高いが、どんな攻撃も防ぎきる防具的なものを持つて津積からしてみれば、やっぱり下りてきた方がメリットが大きい選択じゃないのか？

『やだよ、死にたくないもん』

「ちよつとまで。お前、どんなやつを俺にぶつける気だ？」

．．．．．何か、妙な胸騒ぎがしてきた。

『それでは、ボクの（現時点では）最高傑作の登場！』

津積がそうだった瞬間、俺の三？先の地面に正方形の穴が空き、その中から舞台装置の奈落の様に”例の新兵器”が登場した。

．．．．．新兵器は、人型ロボだった。

『これが、ボクの最新作”アンドロイド試作0367式”だ！』

全長185？ 総重量289？．．．．．だとかイロイロな説明を津積はダラダラと喋り続けたが、そんなのは全く頭に入って来なかった。

俺がそのロボの外見に凄まじい衝撃を受けたからだ。

「…………津積、ひとつ質問していいか？」

『はいはい何でもきいて』

何で、何で、何で、

「こいつ、どう見たって俺じゃねえかツツツ！！！！」

白くて細い針金で出来た髪。青っぽい黒のカメラアイ。右手に持った白スコップ……………Et cetera。

明らかに俺を意識したっていうか、身長体重は違うがほぼまんま俺だった！

『うん。キミをモデルに作ったからさ。』

「何故に！」

『ほら、この前紛争地帯にキミ行つたじゃん?』

うん。前回の報酬要求で紛争地帯で一週間滞在した。

流れ弾だけに気をつけてればいいかな……って思ってたなら、何故か両軍から命を狙われて地獄の様な日々を過ごしたのは記憶に新しい。

『あの時にこつそりキミの戦闘データをとったの。そのデータを元にして完成させたのが、それ!』

「外見にせる意味はないよな?」

『あるよ?』

「マジで?」

『ボクの趣味』

やばい。殺意湧いた。

『ま、ときかく戦ってみて?個人的には殺し名と対等に戦えるレベルの戦闘力が欲しいんだよ。だから思う存分本気で殺ツチャツて!』

いやさ、津積さんよ?

お前、全然わかってないっしょ?

自分と同じ顔をした奴を殺せるかって!!

無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理無理ツ！
！！！！

俺は別にナルシストじゃねえけど、自分のこと喜々としてぶん殴れる奴なんていないって！？

『レディ、ファイト！』

「ちょ、勝手に始めんな！？」

津積の掛け声と共に、ロボットがウィーンと起動した。

「！！」

流石に叩き潰すのには抵抗があるが、攻撃をかわせなかったらマズイ。

だから、目の前の敵の様子を観察する。

幸い、このロボットは俺の戦闘データから出来たらしいから攻撃パターンは俺と似ていると思う。

なら、攻撃の回避は楽だ。

俺そっくりのロボットは、ウィーンとゆっくりとした動きでスコップを構える。

．．．．．そして、

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・てへ』

「てめえ、マジぶつ殺す!!」

それにあいつ持つてるスコップ意味ねえし!

そんなことを思った瞬間。

ガシャンガシャンと言う感じで歩いて迫ってきたロボットは、俺の隠れている遮蔽物の前に立つと・・・

スコップのエッジを変形させ筒状にし、そこから火炎を噴射した!

「火炎放射機!?!」

前言撤回!

スコップ持つてる意味あった!

てか、火炎放射機をわざわざスコップの形にする意味は無いような気はするが。

そんでもって、火炎放射機の威力は常軌を逸していた。

何故なら、遮蔽物ごと俺を吹っ飛ばしたからだ!

「嘘オ!?!」

吹っ飛ばされ、錐揉み落下するとき、ふとロボットと目が合った。

キューン という不吉な音がしたかと思って気の性だといいな
と心の中で強く願ったその時。

目からビーム！

「ギヤアアアアアアアア！！！！」

．．．．．今回ののは、想像以上に過酷になりそうだ。

30分経過．．．

「ハア、ハア、ハア、ハア」

一向にロボットを倒せる気がしない。

ガトリング、火炎放射機、ビーム、ファンネル、ミサイル、波動砲と冗談みたいな高火力を見せ付けられ、俺の戦意は消されかけていた。

更に、右足。

もともと、ちょっと違和感程度だったのが今や痛みを感じるまでに悪化していた。

途中から、右足を庇いながら戦っていたが、体力的にも精神的にも限界がジワジワ近づいてきている。

……だが、内心焦っているのは俺だけじゃなかった様で。

『あー、何か埒があかないね！』

「そりゃどうも。もともとはエネルギー切れを狙っていたもんでね？」

製作者の津積も相当焦っていた。

多分、ロボットの活動限界。つまるところの燃料切れが近づいていたのだらう。

『と、いうわけで最終兵器投入！モードチェンジ”beast”！』

「は？」

俺が疑問符を挟む間もなく、津積の掛け声と共にロボットの間接部からプシュ〜と蒸気が噴き出す。

ガチャンガシンバキバキビキッカシャンツ！

．．．．．突然ですが皆様は、トビー・プーハー監督の『ポルターガイスト』という洋画をご存知でしょうか？

ストーリーを大雑把に説明すると、ある一家にとり憑いた悪霊とそれを祓おうとするエクソシストの戦い．．．．．って感じのホラー映画。

その中で、少女が悪霊に憑依されて、白目でブリッジしながらズザザザ〜と迫って来る有名なシーンがある。

目の前で変形したロボットの第一印象がまさしくそれだった。

「．．．．．キモい」

全身の間接を逆方向に曲げ、首をグルリと不自然に捩曲げ、『キシヤ〜、キシヤ〜』と謎の鳴き声を上げる、かつて俺そっくりだったモノ．．．。

ズザザザザ〜！

先程までの緩慢な動きが嘘の様にゴキブリの様な凄まじいスピードでロボットが迫ってくる。

俺そっくりだったロボットがここまでグロテスクに変形するとは。
．．．．．明らかな悪意を感じる。

だがしかし、ここまで変わったなら．．．

「思う存分叩き壊しても罪悪感がわかねえな!!」

右足に負担をかけない様に左足に重心を置き、ジャンプする。

そしてロボットの真上から繰り出すのは『断頭台』とも呼ばれた必殺技（自称）。

「潰れる!!」

『終死不幸』の中でも最も固い部位である踵カカトに全体重を乗せて叩きつける踵落し！

そしてそれをロボットの顔面に．．．

ベキヨッ

音を立ててロボットの顔が潰れる。

『NO～!!～!!』

津積の悲鳴。

「もう一丁!」

頭を叩き壊しつつ地面に着地。更に両手を床につき、カポエラの要領でロボットの腹に一撃。

バコン!

『いやゝ!!!』

津積の絶叫。

「これで最後だ!!」

腹に当てた一撃の反動を利用し、身体を捻って同じ所にもう一撃ッ!

ズシャッ!

胴・体・貫・通!

『嘘オゝ!!!!!』

津積のシャウト。

もはやガラクタと成り果てたロボットから左足を引き抜く。

そして・・・

バンッ!

爆発した。

『・・・・・・・・・・・・・・・・・・。』

津積の絶句。

爆発したロボットの破片や機械油なんかは血肉の様に床にこびにっ
いている。

上の工房から駆け付けた津積は、その亡きがらに歩み寄り、涙なが
らにこう言った。

「何で！ 酷い！ どうしてここまで出来るの!？」

「いや、壊していいって言ってたじゃん？」

「言葉の綾だよ！ 本気じゃないよ！」

そしてガラクタにしがみついて泣き崩れた。

・・・・・・・・・・。

よし。帰ろう。

コイツの望み通りに戦ったんだし、もう帰ろう。

若干津積に対して罪悪感はあるが・・・多分、俺は悪くない！

そう自分に言い聞かせて帰ろうと一步を踏み出す。

突然、視界がズレた。

前を見ていたはずなのに、天井が見える。

そして落ちていく様な感覚。

あ、俺、転ぶんだ。

機械油まみれの床の上を歩こうとしたんだ。当たり前か。

．．．．．そんなことをゼロコンマ何秒で思った俺は、そのまま
床に激突しないように咄嗟にバランスをとろうとした。

それで、変な力を変な方向に掛けてしまった様で．．．。

しかも右足に。

今回やバ気だから必死に庇ってきた右足に。

ポキッ

予想外に軽い音がした。
痛みと共に．．．。

「いッだああアああああああああああアアア！！！！！！」

右足骨折。全治三週間。が確定した瞬間であった。

2
1
'E
ND

廿巻話 オールグリーン（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

今回久々の純コメディー。楽しんで頂けたでしょうか？

そして新キャラ『罪口津積』初登場

ネコミミネコしっぱで全身真緑の僕っ娘武器職人。

月屑の罪口製特殊弾も特製二丁拳銃も彼女がつくったものでした。

今後の活躍をこうご期待！

そして次の話は、デート・・・じゃなくて別の話です。

ちなみに、今までとは少し趣の違う話にしようかと考案中・・・。

廿荷話 お兄ちゃん

私が目覚めると、ポツポツという音が窓ガラスから聞こえた。

今日は、雨の様だった。

小さい頃は雨の日は嫌いだった。

近所の公園で遊ぶのが大好きな子供だった私は、公園へ行けなくなる雨のが大嫌いだったのだ。

だけど今、雨の日は私の一番好きな天気になっている。

コンコンと扉を叩く音が聞こえた。

「どつぞ」

「．．．．．ミウ。元気だった？」

「うん。元気だよ、お兄ちゃん」

だって、雨の日はお兄ちゃんが会いに来てくれるから．．．。

私と違ってお兄ちゃんは高校へ通っていて、バイトもしていて凄く忙しいって言ってた。

バイトが忙しくて、普段は余り会いに来られないけど、雨の日はバ

イト先の店長さんが行っていていって言ってくれたんだって。

お兄ちゃんが来てくれたということは、今は夕方かな？

「ひよつとして寝てた？・・・邪魔しちゃったかな？」

「ううん。大丈夫、ちょうど今起きたところだから」

「それなら、よかった」

それからしばらく、私はお兄ちゃんとお話をした。

今日も、お兄ちゃんが会いに来てくれた。

二日も続けて来てくれるなんて初めてだ。

私はその理由を尋ねると、お兄ちゃんはこう言った。

「・・・いや、所長の友達が事務所の中で暴れ回ってさ、当分休みなんだ」

どうして暴れ回ったから休みになるのかわからなかった。
その人達がどんな人なのかわからないけど、暴れ回ったくらいで通常営業が出来なくなるとは思えなかった。
建物が崩壊するほど暴れた訳じゃないだろうし・・・？

でも、心の中で少しその人達に感謝する。

何故なら、もうしばらくのあいだ、毎日お兄ちゃんに会えるのだから。

「……………はあ、どうしよう」

「だ、大丈夫、お兄ちゃん？」

今日、お兄ちゃんはとてもゲツソリしている様だった。
声から苦勞と不安が滲み出ていた。

「どうしたの？」

「……………今日、文化祭だったって言ってたよね？」

「うん。」

今日、お兄ちゃんの高校で文化祭があったらしい。
それはこの前お兄ちゃんが言ってたのを聞いてたから知っていた。

本当なら私も行きたかったけど、”こんな状態”だから行けなかった。

すごく残念。

「執事服姿でアニソンを熱唱させられた・・・」

「執事服!？」

そ、それは見たかった!

「はあ、最悪」

お兄ちゃんは羞恥に悶えていた。

・・・ちょっと可愛い。

お兄ちゃんは私に優しくしてくれる。

この部屋から出ることの出来ない私に外の話聞かせてくれる。

いつも笑いかけてくれる。

・・・だけどね、私は知っているんだよ?

お兄ちゃんが私に嘘をついてることを。

優しい嘘を、ついでにすることを。

だから、私も嘘をついてるの。

私、気付いてるんだよ？

お兄ちゃんが……………

「何だ、来たのか。来なくても良いっていったのに？」

「いいじゃないですか。……別に。」

「……………塩、いるか？」

「いいません。ありますから。」

そういつて自分に小袋に入った塩を撒く。

そして開けたままにしていたドアから事務所に入り、ドカッとソファーに座り込む。

．．．．．今日は、日坂美羽ちゃんのお葬式だった。
ヒサカミウ

「．．．．．大丈夫か？」

「．．．．．大丈夫なわけありませんよ」

美羽ちゃんはある病に身体を蝕まれていた。

必死に病気に打ち勝とうと美羽ちゃんも医師も努力したが、とうとう勝てず末期症状として視力を失ってしまった。

もう、どうすることも出来ない。．．．なら、残り短い余生だけは彼女の思つままに．．．。

と、今まで面会謝絶となっていた両親と久々の再会を果たした美羽ちゃんはこう言った。

『お兄ちゃんに会いたい』

だが、美羽ちゃんの慕っていた兄はその頃、交通事故で亡くなってしまっていた。

両親はこんな辛い現実を知らせるのは酷だと思い、どうにかしてしまかそうとした。

そこで『裏柳請負人事務所』に依頼に来たのだ。

そこには偶然、その兄と似た声質を持つ僕がいたのだ。

だから、僕はこの一ヶ月間、美羽ちゃんの『お兄ちゃん』を演じ続けた。

目の見えない美羽ちゃんを騙すことは簡単だったが、少しの罪悪感が芽生えた。

そして、今日。

葬式だったのだ。

「・・・・・・・・ッ」

心が痛い。

いくら嘘の兄妹関係だったからだと言っても、悲しくないなんて、心が痛まないなんて、嘘だ。

痛い。

苦しい。

悲しい。

結局、僕は最期まで美羽ちゃんを欺き通してしまっただんな。。。

「ん。お前が持ってるそれは何だ？」

宗識さんは僕が手に持ってるUSBメモリーを指差す。

「美羽ちゃんのご両親から貰ったんです。」

宗識さんはふと何かを思い付いた様な表情で、こう提案する。

「中身みて見ようぜ?」

そう言つてノートパソコンを差し出す。

僕はノートパソコンを受け取り、起動する。

そこに貰ったメモリーを差し込み、中を開く。

「……………ん、音声ファイルか?」

「そつみたいですね。開いてみます」

音声ファイルを開く。

『……………え〜と、もう入ってるんだよね?うん。お兄ちゃんへ』

「……………!」

この声は、美羽ちゃんのものだ!!
と、いうことはこれは遺書?

でも、僕は本当のお兄ちゃんじゃないから、これは僕に宛てるべきじゃない。

それなのにどうしてこれをわたしたんだ？

『．．．ちょっとベタなセリフになっちゃうけど、お兄ちゃんがこれを聞いてるということは、私は死んだのだと思います。要するに、遺書．．．の様なものです。生憎、私は目が見えないので、字が書けませんから音声になっちゃいました。』

申し訳なさそうにそう言った。

これが遺書だと解った途端、宗識さんはそつと事務所から出て行った。

これは自分が聞くべきじゃないと思ったんだろう。

『．．．ここでまず、勘違いをしているお兄ちゃんの誤解を解きたいと思います。』

勘違い？ 誤解？

『お兄ちゃんは、私の本当のお兄ちゃんではありませんね？』

！！？！

ば、ばれていたのか！？

．．．．．良く考えてみればそうだな。

例えば目が見えなくても大切な人の声が解らなくなるはずがないもんな？

いくら声が似ていても騙し通せるはずがなかったのか。

『ですから、これは本当のお兄ちゃんではなく、ちょっと言い方が悪くなっちゃいますが偽物のお兄ちゃんに宛ててのメッセージです。』

『ありがとう。』

．．．．．え？

『私は今まで、ひとりぼっちの闘病生活をおくって来ました。両親やお兄ちゃんとは面会謝絶で、とても心ぼそかった。』

そして漸くあえた両親は何でか、お兄ちゃんに関する話は避けているみたいでした。

．．．．．何故かわからないけど、お兄ちゃんは私に会えない事情があつたんだと思います。

私はお兄ちゃんが大好きでした。

小さい頃から、共働きで忙しい両親の代わりにお兄ちゃんは良く私と遊んでくれて．．．。

そんな大好きなお兄ちゃんがあいにきてくれなくて、寂しかった。そんな時に来てくれたのが、あなたです。

あなた・・・お兄ちゃんが本物じゃないことは、割とすぐにわかりました。

けれど、お兄ちゃんは楽しそうに私に話し掛けてくれました。私が経験することの出来ない話を沢山聞かせてくれて楽しかった。本当のお兄ちゃんみたいに接してくれて嬉しかった。」

途中、ところどころ泣き声が混じってる。

『お兄ちゃんと会えて、本当によかった。』

『ありがとう!』

・・・・・・ここで、音声ファイルのデータは終わっていた。

ループに入るのをファイルを閉じて止める。

ふう〜

息を吸い込み、吐き出す。

宗識さんは煙草も酒もやらないからか、事務所の中は意外なほど空気が綺麗だったりする。

・・・・・・美羽ちゃんはああ言ってたけど、本当は少し違うと思う。

美羽ちゃんは、多分本当の兄が死んだのだと気付いていた。

何故なら、美羽ちゃんは意外な程頭が良い。

大した理由じゃなければ、直接会いにこななくても、両親に兄のことを聞けば一発でわかることなのだから。

多分、両親が吃ったり露骨に話を変えたりしたのだろう。

そうした場合、余程のことがあったのだろうと察したとしてもおかしくない。

更に替え玉まで用意してしまったのだから、尋常ではないことがわかってしまっただろう。

ここまでしたということは、兄はもう「いない」という考えに行き着いてしまったのかもしれない。

もしかしたら、美羽ちゃんは好きだった兄の死を知って、辛い現実に向き合って、乗り越えて僕と……偽物の兄と今まで会っていたのか。

……美羽ちゃんは強かったんだな。

今ならそう思える。

僕なんかとは、全然違う。

僕は、いつか美羽ちゃんみたいに強くなれるのだろうか？

美羽ちゃんのようにしっかりと家族と向き合えるのか？

家族と・・・。

「・・・・・・・・出来るのかな」

いつか、きっと・・・。

事務所の窓を開ける。

別に換気の必要はなかったけど、・・・何と無く夜風に当たりたかった。

ヒュルリ と夜の涼やかな風が頬を撫でる。

田舎だからか、それともたまたまなのか今日は夜空が澄み切っていて星空が見えていた。

「・・・・・・・・美羽ちゃん、あつちでお兄ちゃんと会えるといいね
・・・・・・・・。」

綺麗な空を見上げ、涙を乾かそうとしたが後から後からとめどなく込み上げてきて、

・・・・・・・・出来なかった。

2
2
·
E
N
D

廿荷話 お兄ちゃん（後書き）

おはよう。こんにちは。こんにちは。烏妣 揺です。

すいません。遅くなりました！！

．．．．．も、リアルというか現実が忙しくて全然執筆活動が
なかなか出来なかったんですよ！

そんなこんなで今回、かなり（私的に）冒険した話でした。

こんな感じの話も書けんのかな～と思ってチャレンジした結果です。

．．．どうでしたか？

さて、次回予告。

新章突入！

戯言シリーズからあの子とあの男が登場しちやったりする新シリーズが始まります！

こっご期待！！

廿讀話 拾うべきじゃ・・・(前書き)

新章スタート！

廿讀話 拾うべきじゃ・・・

・・・さて、どうしようか？

朝からぐずついて安定しなかった空が、とうとう決壊して降り出した雨。

哀川さんのデートから生きて生還してきた俺こと零崎宗識だが、半ば自宅と化している事務所の入ったビルの前に不審物を発見してしまった・・・。

不審物・・・というか、不審なナマモノを……………。

『拾ってください』と書かれた段ボールの中で体育座りをしている少女を…………。

いや、いやいや、何だよこれ？

濡れて短い髪が顔に張り付き、顔は良く見えないが細い輪郭からして命とそう変わらないくらいの歳の少女だろうと思う。

そんな少女が『拾ってください』と無造作に書かれた段ボールの中に入って体育座りしてんだぜ？

何だこりゃ？

捨て犬のコスプレか？

．．．．．いや違うか。

着てるの普通のジャージだし。

あゝ、何だろ。

非常に嫌な予感がする。

ただでさえ、哀川さん関係での『トンデモ』があつた直後にこれは．．．。

．．．．．

俺の脳内裁判所による最高裁での判決。

『無視』

あんなのは無視だ。

俺は、濡れそぼつた少女を見なかった。し、そんなのはいなかった。

うん、これで行こう。

一般人からみれば、「この人で無し〜！」とか叫ばれる所業だろう

が、生憎俺は殺人鬼。

実際に人で無しなんだから大丈夫っしょ？

その少女と一切眼を合わせずに前を通り過ぎる。

カツカツと音を起てて階段を上がり、事務所の扉をあけ、傘を傘立てに刺して、ドカリとソファーに座り込む。

ふう、と一息ついてから、哀川さんから貰った”おみやげ”のA4サイズの茶封筒の封を切る。

．．．．．要は、別なことを考えてさっきのアレを早く忘れたかっただけなんですよ。

あの、どっからどうみてもトラブルの塊を助けるなんて所業、俺には無理。

アレを助ける奴は、多分よっぽどの馬鹿か、凄まじいお人柄、もしくは何かヤバ気のクスリ使ってイッちゃってる奴だけだろうな．．．。

”おみやげ”の資料を片っ端から読み始める。

．．．．．気が付くと、どこかどかと大きな音を起てて、誰かが階段を上って来ているみたいだった。

時計を見てみると、資料を読みはじめてから約40分。命が仕事に来る時間帯だった。

じゃあ、この足音は命か。

だが、少々足音が大きすぎるのではないか？

パンツ、と事務所のドアが勢いよく開く。

「宗識さん！ 何か外で捨てられてる女の子が居たので連れて来ました！！」

「元の所へ捨ててこい！」

「この、人で無し！！」

「……………で、お前は何故ソイツを連れて来たんだコノヤロウ？」

拾ってきた少女がバスルームで着替えている隙に、俺は命に詰問する。

「……普通の人は、『拾ってください』って書いた段ボールの中にマジな顔して入らないでしょ？ そんな異常なことを進んでやる訳がないですから、何か困っていることがあると思っんです。なら、助けなくちゃいけませんよね？」

「ふっ、青いな少年。」

「何達観してんですか」

「……………命よ、『そんな異常なことを進んでやる訳がない』だっって？」

お前はまだ知らないんだな。

この世界には、そんな輩が星の数ほどいるんだぜ？

「長年の経験で言わせてもらおう！ アレは、変人の部類だ！！」

まあ、長年つつたってこっちの世界に入ってまだ五年しか経っていないだけどさ。

『まったくもってしつれいですねあなたは。わたくしはぜんぜんへ

んじんではありませんのに？」

と書かれたスケッチブックが、突然命と俺の間に出現。

「「！！」」

そこには、いつの間にかスケッチブックを持った例の少女がいた。

「い、いつの間に！」

殺気を初め、様々な気配に敏感な『零崎一賊』の俺すら気付かないなんて、……………コイツただ者じゃないんじゃないのか？

かきかきかき

『たつたいます』

と、書いたスケッチブックを見せる。

……………そもそもそのスケッチブックはどこから出した？
まさかお前も『紅梅流暗器術』を習得してるとかいわねえよな？

「……………とりあえず、君の名前は？」

若干混乱している風だが、命はそう少女に聞いた。

かきかきかき

『わたくしのなまえは”るい”です』

そついつてペコリとお辞儀をする少女改めて”るい”。

髪型はボブカット。

身長は女子にしてはやや高め。多分155?程。

体格は割と華奢。

顔は人形のように整っているが、少し幼い感じがする。

ちなみに、ずぶ濡れになったジャージの代わりに俺の服（これまたジャージ）を着ている。
無論、ぶかぶかだばだばだが。

「で、お前は何故にあんなことをしてたんだ？」

”あんなこと”とは勿論”『拾ってください』と書いた段ボールの
中に座ってた”ことだ。

．．．．．。
．．．．．。
．．．．．。
．．．．．。

あれ？

．．．無反応だ。

じゃあ、もう一度。

「で、お前は何故にあんなことをしてたんだ？」

．．．．．。
．．．．．。
．．．．．。

「るいちゃん、君は何であんなことをしてたのかな？」

今度は命が問い掛ける。

ふっ 無駄だぜ。

多分コイツは俺達に言えない理由でやってたんだ。

かきかきかき

『それは、あなたをためすためでした』

．．．．． あれ？

何故、命にはあつさり答えるんだコイツ？

まあ、それは置いといて、『試す為』だと？

「一体何故、何を試していたんだ？」

．．．．．。
．．．．．。
．．．．．。

もう一度。

「一体何故、何を試していたんだ？」

．．．．．。

．．．．．。

．．．．．。

「．．．．．何を、どうして試してたの？」

今度は命。

かきかきかき

『あなたに”しかく”が、あるかどうかをたしかめていたのです』

．．．．．はい、決定。

コイツは俺を無視してます。

現代風^{イマ}に言うなら『シカト』してます。

ガン無視だぜ、ガン無視。

．．．．．少し殺意が．．．。

命にアイコンタクト。

”どうせ俺が聞いても答えねえだろうから、お前が聞け。”

”．．．．．了解しました。”

「何の資格があるかどうか確かめたかったの？」

かきかきかき

『ずばり、わたくしの”ごしゅじんさま”になるしかくです!!』

ズビシィッ、という効果音が聞こえてきそうな勢いで、命を指差する。

しかもキメ顔だった。

「・・・・・・・・・・命、ちょっとこい」

命の襟首を掴んで引っ張り、事務所の角へ異動。

「（ほら見ろ、普通じゃねえだろ?）」

「（・・・・・・・・・・ですね。）」

こうして俺達は、否応なしに新たな面倒事を拾ってしまったのだ。た。。。

きー、きゅっ。ガシャン、カチン。かちや。

効果音を文字で表してみると、意外とわかりにくかった自転車を停める音。

現在時刻は、だいたい午後4時頃。

さて、文化祭が終わり、いよいよ夏休みを眼前に控えた僕こと阿良々木暦は、どこにも寄り道をせず、自宅へ到着した。

テストや文化祭等の行事から解放されてハイになっても、あっちこっちに寄り道しなかった。

それは何故かと聞かれると、理由は二つある。

一つは、大学に行くために勉強をしなければならなかったから。今の今まで大学進学を完全に諦めていた僕だけでも、戦場ヶ原や羽川に感化され、おそばせながら大学を目指すことにしたからであり、今までサボってた分の勉強をする為に遊びの時間を切り崩して勉強する為だ。

そしてもう一つ。

天気の問題である。

先程から、朝から調子が悪く、厚い雲に覆われていた空からとうとう雨が降り出したのだ。

自転車通学の僕は、勿論傘なんて持ってなくて、雨が本降りになる前に是非とも帰らなければならなかったのだ。

．．．．．と、そんな訳で玄関の扉を開けて無事帰宅。

「ただいま」

多分まだ誰も帰って来ていないけど、一応習慣として、独り言の様に呟く。

すると

「お帰り」

予想外の返事が返ってきた。

パタパタと走りながらやってきたのは．．．

月火ちゃんだった。

「あ、帰ってきてたのか？」

「そ、そんなことより大変なんだよ！」

何故か月火ちゃんはめちゃくちゃテンパリまくっていた。

「おいおい、一体どうしたんだよ？　いつも冷静な月火ちゃんらしくないぜ？」

っていつてみたものの、月火ちゃんはどっちかといういつも冷静じゃなくてヒステリックだった気がする。

「大変なんだよ！　火憐ちゃんが”拾って”来ちゃったんだよ！！」

「……………またか」

うちの妹、火憐ちゃんと月火ちゃんは『ファイヤーシスターズ』というコンビ名で”正義の味方”ごっこをしている。

その関係で、火憐ちゃんは時々、捨てられた動物を拾って来てしまったりする。

『だって、人間の勝手な都合で捨てられて可哀相じゃんか！！』

といって、家じゃ飼うことも出来ないのに…………。

だから、そういう場合、僕や両親が近所を駆けずり回り飼ってくれそうな人を探し回るのだ。

「ああ、もう面倒くさいな！　今度は何を拾って来たんだよ！　犬か？猫か？」

少しイライラしながら、月火ちゃんと一緒にリビングに行く。

ドアを思いつ切り開ける。

そこには火憐ちゃんがいて、

ソファアの上にマント姿の少女が倒れていた。

犬じゃなく、

猫でもなく、

．．．人だった。

「火憐ちゃん」

自分の声がギクシャクと音を立てている。

ギクシャク！

ギクシャクギクシャク！

「おう、お帰り兄ちゃん！　どうかした？」

「コノ女ノ子ハ一体誰デシヨウカ？」

喋り方、宇宙人っぽくなった。

「うん？ ああ、それはあとでゆっくり説明するからさ。 そんなことより、麦茶飲む？」

「よくねえよ！ 全身全霊でよくねえよ！！ よもや僕の全存在をかけてよくねえよ！！！！！」

何がどうなってるんだよ！

誰だよコイツ！！

真っ黒いマントに包まれた女の子は小柄で、何故かわからないけど、眠っている様だ。

耳を澄ませば寝息が聞こえて来るからだ。

一目で分かる程サラサラで長い黒髪。

緑色のフレームの眼鏡。

可愛らしい顔つき。

多分、年下。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

要するに、未成年。

「・・・・・・・・火憐ちゃん、とりあえず、そこに座れ。」

「もう座ってるけど？」

「正座」

「・・・・・・・・はい」

「えー、ゴホン。・・・・・・・・説明しろ、なんだこれは？ 何故いつの間に僕の妹は誘拐犯になったんだ？」

自称”正義の味方”が何してくれとんじゃ！

「い、いや、兄ちゃん、これには事情があるんだって！ その娘、行き倒れてたから拾って来たんだよ！」

「行き倒れ・・・・・・・・拾って・・・・・・・・？」

「おう」

聞き返した僕に平然と頷く火憐ちゃん。

アタシは当然のことをしました的な表情で、胸を張る我が妹^{バカ}。

おい、お前の常識はどこに不法投棄してきた？

「何考えてんだよ！！」

「なッ、兄ちゃんは何を言っただよ！それとも兄ちゃんは行き倒れている人を見ても平然と無視して通り過ぎんのか？ 可哀相な女の子を見て見ぬふりして助けないなんてひでえじゃなか！！」

「・・・・・・・・・・ぐう」

何故だ、間違ってるはずなのに急に正しく思えてきたぞ？？

「．．．いや、だとしてもこれは警察につれて行くべきだろ！警察警察、即断即決即座に即刻即効警察に連絡しろよ！僕達は今、猛烈に警察を必要としてるだろ！？」

ちやうど都合のいいことに、両親が正しくそれだし。

「チツチツ、兄ちゃんそんなんじゃないぜ？」

「お前、やっぱり面白い半分だったんだな！」

「これを見て見ろよ？」

そう言つて、ファンシーな動物キャラ（多分なんかのアニメの）が原色でバカっぽく書かれたビニール製の、Theお子様向けと言わんばかりの財布を、火憐ちゃんはどこから取り出し、チャックを開け、中から一枚の紙を取り出す。それは、名刺だった。

その名刺にはこう書いてある。

名探偵

匂宮理澄

NEONOMIYA RHYTHM

&住所、電話番号、メールアドレス（固定・FAX・携帯）。

「．．．．．。」「

バアアアアアアーンツ、という効果音が聞こえた。．．．．．
様な気がした。

「な？ 兄ちゃん、凄いだろ！」

．．．．．めっちゃ目をキラキラさせた我が妹がそこにいた。

まるで、憧れのヒーローを見た純粋な子供の様な瞳。

いや、でも、確かにこれは．．．

「すげえ．．．．．」

”名探偵”

超天然記念物級。

ヒマラヤのイエティよりレア。

UFOなんか目じゃねえよ。

幽霊の招待みたり奴良リクオ（百鬼夜行の主）！！

「凄いよな？ 凄いよな！」

しかも美少女名探偵とは、凄すぎるだろ．．．。

とりあえず、この子の名前は．．．

「ねおのみや りずむ？」

「…………お兄ちゃん、それローマ字じゃなくて多分英語表記
だと思うけど?」

「……………」
近くで、今までのやり取りを傍観していた月火ちゃんに注意された。
。

何気にショックがデカイ。

「…………じゃ”におうのみや りずむ”か」

匂宮 理澄。

変な名前だった。

「あ、そうだ。兄ちゃん、マントの下めくってみるよ! もっと凄
いぜ?」

「ん? マントの下?」

めくってみた。

ピラッ

匂宮 理澄は拘束衣を着ていた。

それはもう、凶悪犯御用達のガチ拘束衣。

体格にあつてないからか、裾が長い。

そんな拘束衣をまるでワンピースの様に着こなしている・・・。

ぎりぎり、ぎりぎりぎりぎり頑張ればサイズのでかいパーカーに・

・・・見えなかった。

やっぱり無理だった。

絶望的に無理だった。

・・・僕はマントを戻した。

今まで”名探偵”ってフレーズで上がりまくってたテンションが、
一気に暴落した。

心の中は世界恐慌。

これ以上関わりたくなかった零崎宗識の事務所に今すぐ行きたくな
った。

・・・行って全部押し付けたかった。

「なあなあ、兄ちゃん。今こんなファッションが流行ってんのかな
?」

「ちなみに言うが、お前がこんな格好で町を歩いたら、兄弟の縁切
るからな!!」

こんな風に、眠っている横で騒ぎまくってたのが原因か。

その時、匂宮理澄が目を覚ました。

「．．．．．むにゃ？」

むくり、と身体を起こす。

寝起きでまだトロンとした目付きで周りを見回す。

そして、僕、火憐ちゃん、月火ちゃんを順番に見る。

そして、段々目の焦点が合っていき、．．．．．そして。

「「「「．．．．．」」」」

気まずい硬直。

そして、

「きゃあああああ！！！！！」

悲鳴が響き渡った。

こうして僕は、否応なしに新たな面倒事を拾ってしまったのだ．．．。

2
3
·
E
N
D

廿讀話 拾うべきじゃ・・・（後書き）

おはよう。こんにちは。こんばんは。烏妣 揺です。

あゝ、やっと書き終わった。

イロイロリアルが忙しいから、相変わらず中々執筆が進まないです。

そして今回から新章突入ということで、新たに二人が登場しましたね？

謎の美少女 るい！

名探偵 匂宮 理澄！

彼女らの活躍にこうご期待！！

阿良々木暦も再び登場して、さてさて今回はどういふ事件が巻き起こるのか？

詳しい方向性は、次の次当たりで明らかになりますので楽しみに

それでは、また！

廿示話 学校の怪談（前書き）

ヒ、約一ヶ月ぶりだ。

（ハ　ハ　；

戦々恐々とした命が言う。

「……はは、ん、成る程。要するにコイツは、自分が関わりたくないんだな。」

だが残念だったな。

「寧ろ、お前の活躍が必須の仕事だ」

サッと命の顔から血の気が引く。

「何てったって、直江津高校に關係する依頼なんだからな。」

そうやって宗識さんは、つい先程あったらしい哀川さんとの会合を話し始めた・・・。

以下宗識さんの回想

「で、いきなり呼び出した理由はなんなんですか？」

「ん？ いやただのデートだよ」

「嘘だ！」

「・・・・・・・・それがどうした？」

「開き直った!？」

ここは駅前の喫茶店。

俺、こと零崎宗識は、人類最強の請負人・哀川潤と向かい合っている。

哀川さんが、何故俺を呼び出したのかはわからないが、とりあえずいつでもすぐに逃げられる用におこつて。

「まあ、ぶつちやけた話、お前に仕事を回してあげようかと思ったのさ」

「…………え、ま、マジですか!？」

『哀川さんから仕事を任される』。

それは即ち、『哀川さんに認められた』ということだ！

「やります！ やらせてください!!」

先日は、俺のこと「商売敵」だの「パクリ」だの宣^{ノタマ}っていたけど、俺が請負人になったことを認めてくれた。

やばい。

めちやくちや嬉しい！

「じゃ、ほれ」

A4サイズの茶封筒をテーブルの上におく。

「詳しいことは、あとでその資料読んどけ」

そこでふと真顔になって問う。

「で、具体的な内容は？」

「あゝうん。ザックリした説明をすると、今回の仕事は『調査』だ」
請負人が行つ依頼は大きく分けて三種類ある。

物事を調べる『調査』。
事件を解決する『解決』。
誰かの代わりをする『代行』。

．．．．．たしか、哀川さんは、バトル展開にならない『調査』
が大嫌いって言ってなかったっけ？

まさか、嫌な仕事押し付けられたとか？

．．．．．まさか、だよな？

まあ、とりあえず頭を切り替えよう。

「で、何を調査するんですか？」

「学校の怪談」

「はい？」

学校の怪談って．．．。

いや、今ベストシーズンだけでもさ。

「冗談．．．」

「に、聞こえるか？」

「・・・ですよね。」

マジか〜！

というか学校の怪談を調査するって、哀川さんに依頼することなのかよ！

「ざっくり言うと、お前んとこの命くんの学校、・・・・・・・・あれなんつったっけ？」

「直江津高校ですか？」

「そうそう、それ！ その直江津高校の校長からの依頼でさ〜」

ん？

直江津高校の校長からコレを依頼されたということは・・・・。

「まさか、直江津高校の学校の怪談を調べんですか？」

「当たり前じゃん」

何処が当たり前だよ！

今時、学校の怪談っていうレトロホラーを探すってこと自体可笑しいっていうのに、よりもよって校長が、高校の怪談を調査って！

冗談にしか聞こえねえだろ！

「まさか、初めて哀k・・・潤さんから回された依頼がこんなおふざけだったなんて・・・」

．．．．．涙でてきそう。

「ハッ、全然違うぜ？」

「え？」

「むしろドシリアスだ。」

．．．ドシリアス？

「最近、直江津高校で何故か学校の怪談が流行り出したってことは知ってるよな？」

「いや全然」

「命くんは何にも言ってるねえのかよ！」

あゝ、命はそういう噂とかに疎いからな。

そういうのに耳聡い友達がいるらしいけど、半分以上聞き流してるっぽいから。

「ともかく、流行ってるらしいんだわ」「それで、そんなのが流行ると、十中八九悪乗りして肝試しに行く輩がいるだろ？」

いるよな、そんな奴。

クラスに一人か二人。

でもさ、直江津って進学校なんだよな？

そんなところ行ってる優等生達って、そんな下らないことすんのかな？

．．．．．わからん。

「で、肝試ししにいった生徒3名が失踪した」

「は？」

．．．おい。

「その3名は、家庭環境や成績、友人関係にも取り立てて問題は無く、家出する理由が無く、警察は事件・事故に巻き込まれた可能性を視野に入れて搜索中。」

．．．おい、おい。

「ちなみに驚くところは、その3名が”友達同士じゃなかった”ってとこだ。様は、彼らは別々の日に一人で肝試しに向かったのさ。そして学年クラス部活委員会出身中等等、どんなに身辺を洗っても一切の共通点が無かった。たった一つ．．．」

「．．．．．肝試しに行ったこと以外は」

「そうだ」

．．．おい、おい、おい。

それってよ、

「．．．．．それってかなりヤバいんじゃないのか？」

『肝試し』を原因に三人もの生徒が行方不明。
学校としては、大変な問題だ。

．．．．ただ、それだけじゃない。

俺や、哀川さんだからこそ感じてることがある。

．．．．何か、きな臭い。

ただヤバいんじゃない。

．．．臭う。

明らかにこれは普通の事件じゃない。

「『呪い名』が絡んでいそくだよな？」

「同感です。」

『呪い名』が絡んでいる。．．．．様な予感がする。
いや、それとも『怪異』が絡んでいるのか？

．．．．わからない。

明らかに、あからさまに、奇妙。

おかしいのは、わかっているのに、何処がおかしいかがサッパリわからない。

そんな奇妙、奇怪さ。

「．．．．わかりました。この依頼、全力で遣らせて貰います。」

「おう、助かった。．．いや、本当はあたしがやるはずだったんだけどよ、急に外せない用が出来ちゃってさ」

「成る程、嫌いな依頼を押し付ける為じゃなかったんですね．．」

「何言つてんだよ、あたしがそんなことするわけねえだろ？」

「えっ？」

「えっ？」

「．．．．．」

「．．．．．」

．．．．．。

「必殺パンチ」

「げふ、オれウラー!!」

哀川さんの必殺パンチを受け、俺は錐揉み回転しながら吹っ飛んだ。

以上回想終了。

「．．．．．と、言うわけだ。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

僕は、沈黙せざるをえなかった。

いや、まさか僕が通ってる直江津高校で、こんなことが起こっていたなんて……。

サッパリ知らなかった。

……………あ、いや、まで。確か、委員長がそんなことを言っ
てなかったっけ？

……………駄目だ。思い出せない。

いつも適当に聞き流していたからか。

……………明日、もう一度ちゃんと聞いて見よう。

それにしても…………

「『呪い名』ですか…………」

『呪い名』

それは、暴力の世界に君臨する『殺し名』の対極に位置する存在。

『殺し名』が、圧倒的な戦闘能力で君臨するのだとしたら、『呪い
名』は圧倒的な”非戦闘能力”で君臨する存在。…………らしい。

らしい、というのは、僕が直接会ったことのある『呪い名』は時列
さんだけだからというものだ。

しかも、その能力を使っているところはまだ見てない。

だから、イマイチその恐ろしさに実感が持てないのだ。

だけど、その強さが、その恐ろしさがわからないからこそ、怖い。
得体の知れない恐怖を感じざるおえない……。

「いや、あくまでも勘だからさ。確実に『呪い名』だとは限らねえし。それにまだ『怪異』である可能性もあるし」

”学校の怪談”なんだし？

まあ、まだ『怪異』の方がマシかな。

………ん？

何故だろう。ここでバイト始めてから、恐怖の基準がズレ始めてるような……？

「『怪異』の可能性も捨て難いから、一応『怪異』に詳しい奴を巻き込……ゲフン、ゲフン。詳しい奴に協力を仰ぐとして……」

『怪異』に詳しい奴……と聞いて、某先輩の顔が一瞬頭を過ぎったが、まさかと思い首を振ってその考えを打ち消す。

「ま、そういう訳で、命、お前の情報が頼りだからな」

「いや、宗識さんも手伝ってくださいよ？」

「ん？ 多分それ無理。」

「何ですか！」

「いや、学校って閉鎖的な組織だからさ。内部情報が外に漏れにくいんだわ」

「あ、」

そういえばそうか。

「でも、依頼は校長からなんですよね？じゃあ、ある程度の情報は聞けるんじゃない？」

「老いぼれジジイが、生徒の噂を熟知してる訳ねえじゃん」

「ですよねー・・・」

じゃあ、本格的に情報は僕頼みなのか・・・

「せめて、宗識さんも生徒として潜入出来ればいいんですけどね？」

「ただ、宗識さんは今年で21歳。

残念ながら、どこをどう見ても十代には見えない。」

「・・・ん、あ、そっか」

宗識さんが何かに閃いた様に手を叩く。

「裏技見つけたぜ！」

ニヤリと笑う宗識さんの顔を見て、何故だかそこしれぬ悪寒がした。

火憐ちゃんが、自称名探偵・匂宮理澄を拾って来た翌日。

僕の場合は、さしずめいきなり捕獲され、沖縄に連れてこられたヒマラヤの雪男のようだ。

単刀直入な言い方をすると、めちゃくちゃまいていた。

匂宮理澄ちゃんは、あのあと何故か火憐ちゃんや月火ちゃんと意気投合し、何故かちゃっかり一緒に夕食を食べ、何故か家に泊まり込んでしまったりしていた。

なんともまあ、図々しい名探偵だ。

たけど、理澄ちゃん自身は（かなり）変わっているがとてもいい娘だったから困る。

もしも、図々しい理澄ちゃんが神原の様な性格なら、罪悪感もなにもなく外に放り捨てるのだけれど。

．．．残念ながら、本当にいい娘なのだ。

笑うと笑顔が燦然と光り輝く様な。

『この世って素晴らしい！みんな大好き！』とでもいうような。

明らかに光属性が付属してそうな笑顔。

正直、かなり苦手なタイプだ。

そもそも、闇属性の吸血鬼である僕とは、相性が悪いんだ。

僕達のやり取りを見ていた忍も、苦手そうにしていたし。

さて、そんな状態で教室に着いてみると、教室全体が騒がしかった。

いつもなら、進学校の受験生諸君らしく、HR前から席に着席して予習してる様な優等生達が、騒いでいた。

「なんでそんなに騒いでるんだよ。何かあったのか？」

と、その騒いでる奴らに話欠けることの出来ない僕は、その騒ぎを
一歩引いた立場から傍観している羽川に、事情を聞いてみ様とする。
しかし、無情にも羽川に話掛ける前にHRの時刻を知らせるチャイ
ムとなる。

騒いでいたクラスメイト達も話をやめて席へ着席。

（・・・まあ、後で聞けばいいか。）

そう思つて僕も着席する。

しばらくすると、何故か担任の保科先生ではなく学年主任が教室に
入ってきた。

スネ夫見たいな髪型の学年主任は、神経質そうな高い声色で、

「えゝ、昨日、キミ達の担任の保科先生は、駅の階段で足を滑らせ
て転び、両足を骨折するという大怪我をおつてしまいました」

と、言った。

あゝ、そういうことか。

納得。

「そのため、しばらくの間、代わりに非常勤教師に来て頂きました。
先生、お入り下さい」

そういつて廊下にいる人影に促す学年主任。

あれ？ あれだけじゃなかったんだ？

そうして、カツカツと音を立てて非常勤教師が入ってくる。

．．．その時、僕はふと疑問に思った。

昨日の今日で直ぐに非常勤教師がくるものなのか？

しかしその疑問は、その非常勤教師の顔を見ただけで吹っ飛んだ。

．．．以前と違う、きちんとしたスーツを着ていても、

．．．派手についてた寝癖を綺麗に直していても、

．．．白い髪を黒く染めてはいても、

．．．あの目立つ眼帯をつけていなくても、

顔を見た瞬間、一発で誰かわかった。

「あ、ああ」

口から嗚咽がもれた。

何で、何でお前がここにいるんだよ！

「皆さん、どうも始めまして。」

「裏柳数奇です。短い期間ですがよろしく願います。」

零崎宗識！！

24・END

廿示話 学校の怪談（後書き）

おはよウナギ。こんにちワン。こんばんワニ。

魔法の言葉で～

た～のし～な～かま～が、ポポポポ～ン

．．．．．どうも、烏妣 揺です。

．．．．．すいません、冒頭からふざけました。

．．．．．すいません、更新めちゃくちゃ遅くなりました（＾－

＾；

いや、やつば受験生ですので忙しかったんです！

すいません。多分今年中は、かなり更新ペース落ちます。

と、まあ、それは置いといて、前話から始まった新章のタイトルを
発表したいと思います。

ずばり、『学校の怪談編』です。

真夜中の直江津高校を舞台に、命と宗識と阿良々木君と”るい”が
七不思議を巡って駆けずり回ります！

ちなみに今回、こんなところで終わっちゃってナンですが、次回は『
学校の怪談編』とは関係ない番外編をやります。

．．．．だつて、次回は『零崎宗識の人間考察』連載一周年で
すから！！

そりゃもうスペシャルでグレイトウなヤツを、気合い入れて書き
ますので楽しみに！！

7月18日（月・祝）更新です。

一周年記念コラボ番外編

『零崎宗識の人間考察』

×

『零崎冬識の人間模様』

『零崎宗識の人間考察』

&

『零崎冬識の人間模様』

祝！ 連載一周年！！

「……………そんなじゃ、カンパ―イ」

「乾杯！」

そういつて僕達は、熱いお茶の入った湯呑みを鳴らす。

「あゝ、首尾よく依頼が終わってよかったですね」

「ああ、全くだ」

「それにしても、少なくとも僕が来て初めてじゃないですか、県外からの依頼って？」

「確かに。昔は割とあつたんだが、お前が来てからは初めてだな。

……………ま、仕事じゃなきゃこんなところには来ねえけどな」

「……………宗識さん、そんなに池袋嫌いなんですか？」

……………そう。

僕達は事務所のある町を離れ、
今現在、池袋にいるのだ！

ちなみに更に詳しく言えば、池袋サンシャイン通りに面した『露西

亜寿司』という寿司屋にいる。

ロシア王朝の宮殿の様な内装に、純和風の寿司カウンターがあると
いうとんでもなく胡散臭い店だ。

『露西亞寿司』という名のとおり、板前に立っているのは外国人（
おそらくロシア人）で、店の前で客引きしているのも外国人（明か
にロシア人ではない。というか黒人）だ。

しかし、そんな見た目とは裏腹に運ばれてきた寿司は意外な程美味
しそうだった。

「ああ、大ッ嫌いだな池袋。ホントにあんな依頼が無かったら絶対
に来ねえ！」

「そもそも、どうしてそんなに池袋が嫌いなんですか？」

「ん？ 何故かって、そりゃあ”曖昧だから”だ」僕の質問に対し、
宗識さんは寿司を一口に放り込みつつそう言った。

「曖昧？」

「ここは”境界線”が曖昧なんだよな」

宗識さんは、懐から一本の四色ボールペンを取り出し、カウンター
に備え付けてあった紙ナプキンに、

「普通の世界」

と言ひ黒い線を

「財力の世界」

と言ひ青い線を

「政治力の世界」

と言ひ緑の線を

「そして暴力の世界」

と言ひ赤い線を紙ナプキンに引く。

『線を引く』と言つたものの、その線は直線ではなく、それぞれの線がバラバラな加減に蛇の様に曲がっている。

「どの世界も、俺の価値観としては、境界線があるんだよ。で、場所や空間によつて各世界の境界線は近付いたり遠ざかったりする」

そついつて宗識さんは四本の横線の一部に縦の直線を引く。

その部分は、黒い線は青緑赤の線とは離れたところにあつた。

……成る程、要するにこの縦線の場所は普通の世界とその他の世界の境界線が遠いということか。

僕も寿司を食べながら、更に宗識さんの講義を聞く。

「……. だけど、稀にこんな場所がある。」

宗識さんが指差すのは、線の端。

その端は、統一性なく書かれた四本の線が、ほぼ重なっていた。

「．．．．．偶然なのか、たまたまなのか、もしくはそうじゃないのか。時々、こんなふうに全ての世界の境界線が隣接し、交じり、混在する場所がある。．．．．．それが、ここ池袋だ」

ここまで話して喉が渴いたのか、宗識さんはアガリを啜る。

「．．．．．その境界線が曖昧だと、どんなことが起こるんですか？」

少し恐る恐る聞いてみる。

「普通の世界にいる一般人が、ふとした瞬間に、意図せず裏の世界に堕ちる」

ゾクリ、と背筋に冷たいものが走る。

表の世界の住民が、裏の世界に堕ちる。

それは、とても恐ろしいことだ。

そのことを僕はよく知っている。

一度堕ちた僕は．．．。

もしも、一番最初にであった住民が宗識さんでなければ、今僕は死

んでいるのだから。

「逆に、”明らかに”表にいてはいけない奴もいたりすんだ。．．．
．．．だから池袋って嫌いなんだよな」

宗識さんは大袈裟に溜息をつき、最後の寿司を食い終わる。

「．．．．．この街は、面倒事も多ければ異常者も多過ぎる」

そして宗識さんは席を立つ。

「あ、ちょっと待って下さいよ」

まだ、まだ全然食べ終わってない！！

急いで寿司を食べるが、お構いなしに宗識さんはレジに向かう。

「むぐう、むぐッ！」

何とか口いっぱいに詰め込み、アガリのお茶で流し込む。

うげ、苦しい！

「む、宗識さん！ 酷いじゃないですか！」

僕がやっと追いついた時、最早宗識さんは会計を済ませて店を出るところだった。

なに置いてこうしてんだこの人！！

「いや、ちょっと意地悪しようかと思ってさ」

ニヤニヤ笑いやがって、絶対反省してないな！

「……………ん、あれ？ それどうしたんですか？」

そこで、宗識さんが持っているものに気が付いた。

『露西亞寿司』の特上寿司（テイクアウト用）。

おそらく、僕を置いて先に行った時に買ったのだろう。

何ともまあ、手際がいいものだ。

「それ、何ですか？」

ちなみにこの質問は、『その寿司をどういう用に買ったのか』という意図だ。

「お土産用」

「……………誰用ですか？」

地元にいる月屑さんの為にこの人が買うはずがないし、陽埃さんの為でもない。

時列さんにもそんな気遣いなんてしないし…………？

誰用のお土産なんだろうか？

そして、宗識さんはまたニヤリと嫌な笑顔でこういった。

「この七面倒くさい街に住む、何ともまあ、酔狂な我が弟の為の手土産だよ」

哀川さんから貰った地図を頼りに夕暮れの池袋を進む。

「・・・・・・・・こっちか」

つい最近まで京都にいたのに、いつの間にか池袋に引っ越してたなんてな・・・。

全く、一言いってくれりゃあよかったのによ。

やたらと人の多い大通りを歩き、交差点に差し掛かった時、突如、奇妙な音が聞こえた。

それは、時代錯誤な馬の嘶きに聞こえた。

「あれ？ 今、馬の鳴き声が聞こえ．．．ましたか？」
「お前も聞いたのか？」

と、いうことは俺の空耳じゃねえな。

周囲を見回すと、一部の通行人がざわめいている。

そしてもう一度、馬の嘶きが響く。

．．．．．時代錯誤な馬の嘶きが。

「おい、どこから聞こえてるんだ！」

「宗識さん、あれ！」

命が交差点を指差す。

そこを過ぎるのは、

漆黒の影。

全てを真っ黒に染め上げたバイクに跨がる漆黒のライダースーツ。
特殊な形状（．．．猫耳？）の黄色いヘルメットが目立つ。

明かに不審なライダーが駆け抜けていった．．．。

「……………なんだありや？」

「今のが噂の『首無しライダー』ですかね」

『首無しライダー』？

いつの時代の都市伝説だよ？

俺の記憶が正しければ、1990年代頃の都市伝説だよな？

それにあのライダー、首ちゃんとのつてたたる？

「噂じゃ、しつかりと無いらしいですね」

「眉唾ものだな」

「眉唾ものですね」

まあ、あれも池袋独特の”異常者”なのだろう。

こんな、いろんな意味で魑魅魍魎揃いなとこに住もうなんて、冬識も変な奴だよな。

何故かアイツのまわりには変な奴が集まるから、案外あの黒バイクも冬識の友達だったりしてな！

あはははははは

「……………まさかな？」

「なに笑ってんですか？」

不審そうな命の視線。

.....。

「よし、急ぐぞ！」

命のイタい視線に耐えられなかった俺は、やや小走りに交差点をあとにする。

照れ隠しに急いぐ俺は、途中裏道に足を踏み入れる。

哀川さんから貰った地図から推察して、近道だと思ったからだ。

裏道を2、3回程曲がったとき、奇妙な感覚がした。

しいて言っなら、懐かしい感覚だ。

.....しかし、懐かしいが好ましく無い感覚だな。

この感覚を具体的な表現でするならば。

ベタつく様な独特の湿気。

鼻をつく鉄の臭い。

「.....ッ！」

目の前に死体があった。

唐突に、目の前に血まみれの死体があったのだ。

場所は、裏道をかなり進んだ所にある路地裏。

薄暗く、人の目につかない場所だ。

「……………おいおい、勘弁してくれよな」

「宗識さんどうかしたんでs……………うわ」

遅れて来た命も、死体を発見し、嫌な顔をする。

「……………命、この死体から何かわかるか？」

残念ながら殺すこと専門の俺は、死体を分析することが不得意だ。だから、ここはER3の授業で検死を経験した命に頼んでみる。

「……………え」と

命は、ゆっくりと死体に近づいて簡単な検死をはじめた。

「性別は男性。

職種は白衣を着ているため、何かしらの研究職と推測出来ます。

死因は腹部を……………銃で撃たれたことによる失血死ですね。」

命は脇腹を指差して言う。

「更に言えば、この人はここで殺されたのではなくて、何処か別な場所で撃たれてここまで逃げてきたというのが僕の推測です。」

ここまで逃げて力尽きたのか。

「そういつことだと思います。．．．．．あれ？」

そこで命が何かに気が付いた。

「この人、右手に何か握ってますね」

「ん？ どれどれ．．．」

ががんで、だらんとした右手を見る。

右手で何かをきつく握りしめていた。

．．．．．これってあれだろ？

握ってるの、犯人の重要な手掛かりとかだろ。

手を思いつ切り剥がしてみた。

「え！？ ちょ、な、な、な、何すんですか！！」

「何慌ててるんだよ？」

命は何故か慌てるが、残念ながらもう遅い。
もう剥がし終わった。

この人が握っていたのは．．．。

「．．．．．USBメモリ．．．．．？？」

鈍く黒光りする謎のUSBメモリだった。

「こいつが、自分の職場から盗んできたのか？」

だとすると、中身は何かしらの機密事項か？

とりあえずポケットに入れとく。

それにしても。

あゝ、あれだな。

「命、どうする？」

「……僕としては、警察に通報することをオススメしますが」

「それは無理だよな」

「無理ですね」

警察に通報したら、何かしらの事情聴取を受けなきゃならないけれど。

俺は殺人鬼だし、零崎になったときに元々の俺は死んだことになってるから戸籍がない。

命は（詳しくは知らないが）実家に問題があるらしく、余り詮索されたくないそうだ。

……ん、でも

「匿名で通報ならいいんじゃないか？」

「無理ですよ」

命に即否定された。

「だって宗識さん触っちゃったじゃないですか。素手で。死体に。しつかり。がつつり。」

「あ」

だからさっき慌ててたのか！

「あゝ、じゃあ見なかったことにするって方向でOK？」

「……罪悪感を感じますが」

よし。

俺達は何も見なかった。

これでいこう。

池袋で他殺死体発見なんて冗談じゃねえ。

トラブル全般お断りだこのやろう！

こうして、俺達はこのことを忘れた降りしてこの場を後にした。

……俺は、あのUSBをポケットに入れていたことなんてすっかり忘れてたけど。

あの遺体のことを忘れようと努力しながら歩き、たどり着いたのは、古臭いアパートだった。

今にも倒れそう。

現代の建築基準満たしてないだろ。ちよつとした台風で全壊する。

ある意味文化遺産。

．．．．．なんて言うほどのレベルではないけれども。

『池袋』Ⅱ『都会』というイメージからは、かなり逸脱した物件だと思う。

その分、家賃は安そうではあるが。

宗識さん曰く、零崎以外の『殺し名』『呪い名』は、それ自体が職業なのに対し、零崎は職業じゃなくて”生き様”らしいので金銭調達は各自で努力するしかないらしい。

．．．．．なんというか、せちがらいな〜と思う。

こんな安さだけが取り柄の様なアパートに住んでるのも、金銭面で
そういう事情があるからなのかもしれない。

（ちなみに、月屑さん達兄妹は高級マンションの最上階に住んでる
らしい。．．．．．なんだこの差は！）

そんなことをツラツラ考えてるうちに、宗識さんは階段を上ってア
パートの一室の前で立ち止まる。

どうやらこの部屋らしい。

チャイムを押した。

ピンポン

と間の抜けた音がする。

そしてドアの向こう側で何かが動く気配。

ガチャリ

とドアが開く。

ドアチェーン掛けてない！

田舎と違って物騒なんだから掛けなきゃダメだ．．．．．とか一
瞬思ったが、殺人鬼をわざわざ襲いにくる不審者なんていないから、
ま、いいのか。

そしてドア隙間からとうとう顔が見えた。

．．．．．そこにいたのは、僕と余り変わらないくらいの歳の少年だった。

あれ？

なんか、少し拍子抜けしてしまった。

殺人鬼の弟で殺人鬼、というからかなりアレな人かと思ってたら意外と普通だ。

宗識さんは白髪眼帯だし、人識さんは斑に染めた髪に顔面入れ墨だったし、その二人の格好からしてアレだったからてつきりまた変な格好しているもんだと思ってたら．．．。

割と普通。

格好も雰囲気も。

髪の色こそ人識さんを真似た感じになっているが、そんなに奇抜ではない。

ハッ、と人目を引く容姿ではあるが、人に不信感を与える様なものでもない。

どちらかと言えば、草食系に見える。

身長は僕より低く、阿良々木先輩より高い。

総合評価でいうと

．．．．．全然殺人鬼っぽくない。

あれ？

もしかして部屋間違った？

．．．．．だけど。

その少年の視線は、僕を『どちら様？』と叫びたげな色で見た後、すぐに隣の宗識さんを見る。

すると、少し驚いた様にこう言った。

「．．．．．宗兄？」

ハッキリそういった。

そしてその瞬間、僕は正式に認識する。

「よう、冬識。元気だったか？」

彼の名前は、零崎 フユシキ 冬識。

宗識さんの弟の、殺人鬼だ。

「えっと、どうも初めまして。お兄さんのところで働かせて頂いてます五月闇命です。」

「こちらこそ、どうも。宗兄の弟の零崎冬識です。」

冬識くんの部屋に失礼し、お互いに挨拶を交わす。

彼は、僕と同じ年のようなので勝手に『冬識くん』と呼ぶことにした。

「はい、これお土産」

「はあ、ありがとうございます・・・」

宗識さんはお土産を冬識くんに渡した。

何で露西亞寿司・・・と冬識くんは呟き、若干混乱気味だ。

「どうして宗兄が僕の家知ってるんですか？」

「哀川さんに聞いた」

「哀川さん口軽っ！簡単に情報漏洩した！？」

成る程。

冬識くんはどうやら誰にも家の場所を教えずに、ひっそり暮らしてたわけか。

そこをいきなり兄が押しかけてきたなんてことになったら、確かに驚くね。

「お前もさ、何故こんなところに引越したんだよ？」

「それは……池袋に憧れていたからサ！」

前歯がキラーン

「嘘だな」

「嘘ですけど」

「嘘なのかい！」

嘘だった様だ。

「そもそも、どうして宗兄が池袋にいるんですか？ 確か一昨年『池袋なんて大嫌いだ！』って一賊の新年会で酔って叫んでましたよね？」

「零崎一賊って新年会やるの?!」

これは僕が驚いた。

「嘘だな」

「嘘ですけど」

「嘘なのかい!!」

またしても嘘だった。

「本当は、去年の新年会で悪酔いした宗兄が僕に絡んできた時に言っただよ」

今度こそダウトだ!

「嘘ですよ?嘘だよ?嘘だと思うし、きっと嘘だ!!」

「あ、これは本当」

「今度のは本当」

本当だったああああああ!!

あるのかよ新年会!

『ドキッ 殺人鬼だらけの新年会』

.....絶対に行きたく無い!!

「・・・・・・・・まあ、冗談はさておき本当に何で来たんですか？」

「依頼があつたからだよ」

「依頼？・・・・・・・・ああ、そういえば宗兄は請負人稼業を始めた
んでしたっけ？」

「ああ、この業界じゃあまだ若手だけだな」

「哀川さんがこの前『新しい商売敵が出来た』って喜び勇んでいま
したね。・・・・・・・・宗兄度胸あるね？そのうち哀川さんがボコリ
に行くよ？」

「・・・・・・・・大丈夫。もうボコられたから」

「・・・・・・・・ご愁傷様」

宗識さんは、手を合わせて合掌された。

「それにしても、いくら依頼でもあんなに毛嫌いしてた池袋に来る
なんて・・・・・・・・どんな依頼だったんですか？」

「依頼料がよかったからな」

「へー。・・・・・・・・ちなみにいくらですか？」

キラーン

と今度は宗識さんの目が光る。

「ふふふふ。これだああ!!」

ややキモい笑いの後、勢いをつけてある紙を冬識くんの目の前に叩き付ける。

その紙は小切手。

よく大金の取引に使われるやつだ。

冬識くんはそれを見て、桁を数える。

「一、十、百、千、万、十万、百万、千万、おく……………一億!？」

……………そう、一億円だ。

一億円なのだ!!

初めは僕も疑ったけど、正真正銘一億円だ。

「……………『使うとシアワセになれる白い粉』とか運んでませんよね?」

「違う。そんな怪しげな依頼じゃねえよ!」

「……………いえ、宗識さん。十分怪しかったですよ?」

「おいおい、ちゃんとした企業からの依頼なんだから大丈夫だって！」

「企業？」

「冬識知らない？ 『デネブ』 って企業」

「違います。 『デネブ』 じゃなくて 『ネブラ』 です」

「そう、それ！」

デネブって、夏の第三三角形じゃないんですから。

『ネブラ』

確かアメリカの大企業で、最近池袋に進行してきたのだけ？
現在、世界規模で勢力を拡大させつつあり、最近、財力の世界の『四神一鏡』や政治力の世界の『玖渚機関』が敵視し始めたらしい。

ER3にも一枚噛んでるらしいから、侮れない組織だと思う。

それに、今回依頼を受けるにあたって会った『ネブラ』の重役と名乗るガスマスクに白衣の中年は、どこをどう見たって怪しいでしょ。

「……………一体なにをしたんですか？」

何故か、冬識くんの顔が引き攣っている。

「いや、法に触れる様なことは何も」

確かに、法には触れなかったけど……………。

．．．．．かなり怪しかったな。

いや、詳しい事を言うのは避けるけどさ。

そのところは、ご想像にお任せします。

「．．．．．それなんですか？」

冬識くんが何かに気付き、床を指差す。

「「．．．．．ん？」」

そこに落ちてるのは。

黒光りするUSBメモリ

「「．．．．．」」
．．．．．
．．．．．
（汗）「」

さっきの遺体が握ってたUSBメモリだ！

何でここに！？

「はっ！」

まさか宗識さんが間違って持ってきてしまって、小切手出す時に落ちた．．．とか？

サッ（僕が宗識さんに視線を向ける音）

サッ（宗識さんが僕から目を逸らす音）

「図星かよ！」

はあ、せっかく忘れ掛けてたのに・・・。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・。

「もうこうなったら、見ましょう。中身」

「・・・・・・・・マジか命？」

「もう気になって仕方ないんですよ！ もう見ちゃいましょうよ！」
「なんかもうモヤモヤするし！」

「冬識くん、パソコンある？」

「ありますけど、ネットしか繋がってませんよ？」

僕はニツコリ笑ってこう答える。

「十分です」

黒いUSBを差し込み、冬識くんのパソコンを操作し、ファイルを
発見。

「・・・・・・・・・・いきますよ」

「やれ、命！」

僕の背後から宗識さんが身を乗り出して言う。

冬識くんも静観する中、僕は、

「いきます！」

ファイルをダブルクリック！

そして中に入っていたのは・・・・・・・・。。

「・・・・・・・・・・なんじゃこりゃ？」

それが俺の正直な感想だった。

あのUSBの中身、それは、数字の羅列だった。

「宗兄、これ何かわかる？」

「いや、全然？」

もしかして文字化けか？
それとも壊れてたのか？

「・・・・・・・・・・いいえ、これは暗号ですよ。」

俺と冬識が顔を見合わせると、ひとり命だけは冷静にしていた。

「・・・・・・・・・・暗号？」「」

「ちょっと待ってて下さい。すぐに見られる様にしますので・・・」

言っや否や、目付きを鋭くした命は、物凄い勢いとスピードでキーボードを叩き始めた。

目まぐるしいスピードで画面が変化していく。

「・・・・・・・・まるで、某血の月曜に出て来る天才ハッカーですね？」

「冬識、それは違うぜ？」

そう、少し違う。

「・・・・・・・・」まるで”じゃなくて”まさに”命は天才なんだよ”

普段が普通過ぎるから、忘れがちだけどさ。

命は、世界最高の頭脳が集結し、次世代の後継者を育てるER3システムに去年まで在席していた正真正銘の天才だ。

以前命が言ってた話によると、ER3ではかなりハイレベルな教育を受けてたらしく、PCの技術はそのへんのハッカーには絶対に負けない自信があるそうだ。

「・・・・・・・・出来ました。」

「早いな・・・」

実質10秒しかかからなかったぞ。

「じゃ、いきます」

命は、16桁のパスワードを入力し、Enterキーを押した。

すると画面を覆い尽くしていた数字が、だんだんと姿を変えていく。
。。。

そして、現れたのは。。。

「。。。。設計図ですね」

そう、設計図だった。

しかも結構ヤバ気。

「宗兄、これ多分兵器の設計図ですよ。。。。。しかも大量殺戮兵器。」

「おまけに最新型ですね。」

「。。。。ヤバいよな」

『NT-X/E』

『大都市殲滅型対人戦略破壊兵器』

もう名前見ただけでヤバさがわかるよ。。。

普段、罪口津積と交流があるからか設計図を見るだけでどんなもんかザッとわかる。

この兵器は例えるとあれだ。

紅梅のリボルバーを戦車化して、射出する特殊弾の口径を300m

mにした感じだ。

「……………これ一台で、東京を殲滅出来るぜ？」

「……………これは、表に出す訳にはいかないな」

「……………同感。」

よし、ならやることは一つだ。

「……………命、それ貸せ」

命からUSBを受けとった俺は……………

「ふんッ！……！」

思いつ切り畳の床に叩き付けた。

「どりゃ！……！」

更にそのUSBの上に『最終決定』を振り下ろす。

そして『最終決定』でガンガン攻撃する。

「ツうえ！ な、何してんですか宗識さん……！」

「止めてください、近所迷惑ですって……！」

「何、って、こ、れを、ぶっ、壊、すた、めにき、まっ、てるだ、ろ！！」

多分、あの死体の人は組織からあのデータを盗んだのだろう。
きつと正義の為に！

なら、これをしっかりとぶち壊さないと！

．．．．．なのに。

「全ッ然壊れねえ！！」

なんだこりゃ、傷ひとつつかねえぞ！

「．．．．．宗識さん、このUSB、鋼鉄性です。更に炭素繊維でカッチカチにコーティングしてありますよ？」

「何！？」

要するにあれか！

強度はダイヤモンドクラス！？

「じゃあ、あれだ！ 水に沈める！」

「．．．．．しっかり乾かせば、大抵のデータは復旧しますよ？」

「．．．．．じゃあどうしろと？」

うーん。

命と二人、頭を抱えて考えこむ。

「こほん。宗兄、五月闇くん、お二人と僕に残念なお知らせがあります」

「なんだよ冬識？」

「USBがなんかおかしいですよ」

「「え？」」

俺達はUSBを見る。

．．．．．なんか、隅っこに付いた青い小さなLED的なものが点滅してる。

ピコピコ鳴りながら．．．。

何か電波的なもの出しながら．．．。

「多分、さっき宗兄がガンガン叩きまくったせいで、今まで故障していた内蔵型発信機が復活したってところじゃないかと」

「．．．．．マジ？」

「ちなみに、敵意満天な謎の一団がここに向かってきてる」

冬識は、零崎一賊の中でも気配の察知がとてつもなく上手い。

街のひとつ分くらいの範囲がカバー出来るし。

「……………流石、人間レーダー」

じゃあ、どうする。

選択肢

- 1 ・戦う。
- 2 ・逃げる。
- 3 ・諦める。

「……………よし、逃げるぞ!!」

「はい、逃げましょう!」

と命。

「じゃ、いつてらっしゃい」

と冬識。

……………うて

「お前も逃げろよ!」

「あ、いや、だって僕無関係ですし」

「もう十分関係者だよお前!」

「僕、これから友達の家パーティーに行かなきゃ」

「嘘だろ！」

「嘘ですけど」

「何故逃げようとしない！？」

「だって、発信機付きのUSBを持って宗兄達が逃げれば、僕はここにいても大丈夫ですよな？」

ここで俺は頭を抱える。

「おい、発信機が復活したのはこの部屋だよな？」

「ええ」

「この部屋で復活したのなら、この部屋にこのUSBがあったことは相手側に知れてるよな？」

「はい」

「．．．．．ソイツらが、この部屋の住人であるお前を無関係だと思っか？」

「逃げましょう！今すぐ！全力で！」

ようやく冬識も現状が理解できたらしいな。

「よし！ 逃げるぞ！」

こうして俺達は、走り出した。

「はあ、まさかこんなことになるなんて・・・」

「冬識くん、そんなに落ち込まないでください。こんなの、よくあることですから」

「こんなのが、よくある？・・・宗兄？」

「そうそう、よくあるよくある！」

「（もしかして宗兄に関わったからこんなことに・・・？）」

「あ、宗識さん！あれ、追っ手じゃないですか？」

「え？・・・げ、マジだ！」

「ちょ、あつちはワンボックス乗ってるし！」

「と、とりあえず大通りに出ましょう！ そうすれば、追っ手の人達も身動きが取りにくいはずですよ！」

「グッドアイディアだ命！・・・くそう、やっぱり池袋なんて大ッ嫌いだ！！」

「宗兄、そういえば何がきっかけで池袋を嫌いになったんですか？」

「．．．．．昔、池袋を拠点にしてた時があつてさ。その時にいた『折原イザヤ』って情報屋がいて．．．．．」

「あ、宗兄もういいです。大体想像できました」

「あ、そう？」

こうしてこの三人は、奇妙な偶然でこの事件に関わった。

この裏では、情報屋折原イザヤが人知れず暗躍していたのを彼等は知らず、

そして翌朝、池袋に潜伏していたテロリストチームが壊滅したというニュースが池袋を駆け抜けることになるとはツユ知らず、

彼等は、走り出した。

様々な思惑や陰謀、そして一夜かぎりのバツカーノ（馬鹿騒ぎ）の予感を孕みつつ、池袋の夜はふけていった．．．。

S
p
e
c
i
a
l

s
t
o
r
y
·
E
N
D

一周年記念コラボ番外編 『零崎宗識の人間考察』 × 『零崎冬識の人間模様』

おはよう！

こんにちは！

こんばんは！

そしてありがとう！！

烏妣 揺です

まず最初に・・・。

『零崎冬識の人間模様』

連載開始一周年、おめでとう！

本日、2011年7月18日に四季織様の『零崎冬識の人間模様』と私の『零崎宗識の人間考察』が連載開始一周年を迎えました！

『零崎冬識の人間模様』は有名ですので、作品の説明は不要だと思いますが、一応、ザックリとした説明をしますと。

デュラララ！！の世界を舞台に、主人公零崎冬識くんが活躍する！

という感じです。

これで説明不十分だという人は、実際に見て下さい。

絶対に面白いから！！

と、まあ、その『零崎冬識の人間模様』と連載開始日が偶然同じだったからという縁で、今回コラボさせていただきました！

皆さん、大変驚いたんじゃないですか？

ちなみに、本日更新の『零崎冬識の人間模様』にも宗識やミコトくんが登場しますのでよろしく願いします！

さて、ここで。

四季織様、今回の不躰なコラボの提案。受けていただきありがとうございます。ございました。

一読者として『零崎冬識の人間模様』はとても面白く好きな作品です。

そして、『零崎宗識の人間考察』のファンの皆様。

一年もの長い間、この作品を支え、愛読してくださり、ありがとうございます。ございました。

ワタクシ、烏妣 揺は、これからもより良い作品を提供出来る様に頑張りますので、二年目もどうぞよろしく願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6216m/>

零崎宗識の人間考察

2011年7月26日17時42分発行